

「持続可能な社会の創り手」を育む ESD (SDGs 教育)



福山市立福山中・高等学校

ESD 実践 9 年間のまとめ (2016～2024 版)

2016 (平成 28 年) サステイナブルスクール (文科省委託、ACCU 指定)

2018 (平成 30 年) ユネスコスクール (ユネスコ指定)

2019 (令和 元年) ハッピースクール (ユネスコ指定)

ESD 大賞 (文部科学大臣賞) 受賞

2020 (令和 2 年) 個別最適化実証事業 (県教委) ・ WWL (広島大学)

2021 (令和 3 年) 同上 ・ 文科省「ESD 推進の手引」本校事例掲載



2025 年 (令和 7 年) 3 月 10 日

(広島県) 福山市立福山中・高等学校



〒720-0843 広島県福山市赤坂町赤坂910番地
TEL (084) 951-5978 FAX (084) 951-6518

第1章 はじめに

巻頭言

本校のESD実践について

本校は、明治32年に創立され、平成16年に福山中学校を開校しました。それ以来20年間、併設型中高一貫校としての着実な歩みを進めてきました。令和4年に改定した教育方針（第Ⅴ期ビジョン）では、教育理念を「ESD（持続可能な開発のための教育）を通じて、生徒一人一人が持つ潜在的な独創性を引き出し、溢れる知性とチャレンジ精神をエネルギーに、グローバルに活躍する人間を育成する」と設定し、すぐれた教育実践を創造・発信する使命のもと、教育活動を積み重ねています。



福山市立福山中・高等学校長
脇谷 靖伸

本校第Ⅴ期ビジョンの策定に先立って、福山市教育委員会は平成28年1月、『福山100NEN教育』宣言として、福山に愛着と誇りを持ち、変化の激しい社会をたくましく生きる子どもたちを育てることを謳いました。自ら考え学ぶ授業、そして市民一丸となった教育活動に、「ESDの2観点」（人格の発達や人間性を育む観点、及び「関わり」「つながり」を尊重できる個人を育む観点）を持って取り組むことで、21世紀型スキルと倫理観を持った子どもたちを育てることを示しました。

福山市教育委員会が示した『福山100NEN教育』の方向性に則り、本校がそれまで実践してきた教育内容を整理・構造化するとともに、「次代に求められる資質・能力」を育む教育内容の創造に向けた研究・実践を継続してきました。ESD（持続可能な開発のための教育）の実施による研究の推進、ユネスコスクール申請、及び（財）ユネスコ・アジア文化センター（ACCU）「ESD重点校形成事業」（平成30年度は「ESDの深化による地域のSDGs推進事業」）サステナブルスクールに応募し、認定され、平成28年度～30年度の間、研究を推進してきました。

サステナブルスクールとしての研究・実践を進めた結果、本校は平成30年7月27日、ユネスコ本部からユネスコスクール加盟を承認され、令和元年11月には、第10回ESD大賞の最高賞である文部科学大臣賞の受賞にも至りました。

令和元年度には、ユネスコ・バンコクが主催する国際的な「ハッピースクール事業」（Happy Schools Project）に参加し、バンコクでのカンファレンスで取組を発表するなど、ユネスコスクールとしてのレベルアップを図ってきました。

また本校では、総合的な探究の時間の一環として、地元地域の12の企業からお示しいただいた課題の解決策を、企業に提案するという取組も行っております。この取組は、「Hi-Hi ふくやま2024」として冊子にまとめ、市内の学校や関係機関に配付しています（PDFデータを学校HPに掲載）。ご覧いただくことにより、本校の実践をより理解していただけるのではないかと考えております。

地域課題解決プロジェクト・国際課題解決プロジェクトを進めるにあたり、多くの関係者のご賛同・ご協力を賜りました。特に、福山市企画政策課・産業振興課様、福山市教育委員会様、福山市立大学様、福山商工会議所様、各事業所様等、地元地域の皆様のご支援により、生徒たちが「次代に求められる資質・能力」を身に付けることに資する教育内容の創造・実践が叶っております。また、ESDの推進にあたり、ユネスコ・アジア文化センター（ACCU）教育協力部様には多大なるご支援をいただきました。この場をお借りして、皆様に心より感謝申し上げます。

令和7年3月7日

目次

■第1章 はじめに

(1) 巻頭言	2
(2) 目次	3

■第2章 グローカル人材育成事業概要（サステナブルスクール・ユネスコスクール・ハッピースクール）

(1) 全体研究構想図	5
(2) 学校グラウンドデザイン（令和3年度／2021年度作成）	6
(3) 福山中高 ESD 要点マップ（令和3年度／2021年度作成）	7
(4) ホールスクールアプローチ・デザインシート（本校 ESD 取組一覧）	8
(5) 本校 ESD の概要（令和元年度）	11
(6) ESD 事業計画書の例（平成30年度）	13
(7) 研究実践に当たっての ESD 共通理解項目（ミニマム・エッセンシャルズ）	14
(8) カリキュラムマップ（全体計画・年間指導計画一覧表／6つの資質・能力とSDGs付き）	15
(9) 生徒に付けたい資質・能力ループリック（①②）	16
(10) 資質・能力の自己評価（振り返りシート） *中学校	19
(11) 事業の成果と課題（ループリック結果のまとめ）	20
(12) ハッピースクール・プロジェクト	41
(13) ESD 大賞（文部科学大臣賞）	46
(14) 生徒はどのようなSDGs活動に取り組んでいるのか（令和6年度・高3）	46
(15) 自己・社会性意識調査（令和4年～6年の3年間の追跡調査）	50
(16) 本校の取組概要（新聞取材記事） 『大学新聞』掲載	53

■第3章 事業報告（実践レポート）

I 地域課題解決プロジェクト

(1) 福山のよさ再発見（中1、総合学習）	55
(2) 誰もが暮らしやすい福山の街づくりプロジェクト（中1、総合学習）	57
(3) グローカル人材育成事業（高1、総合的な学習の時間）①（平成29年度）	59
(4) グローカル人材育成事業（高1、総合的な探究の時間）②（令和元年度）	61
(5) グローカル人材育成事業（高1、総合的な探究の時間）③（令和4年度）	63
(6) グローカル人材育成事業（高1、総合的な探究の時間）④（令和6年度）	65
(7) 夢チャレ「福山市立大学との高大連携事業」（高2）①「福山駅前再生計画」（平成29年度）	69
(8) 夢チャレ「福山市立大学との高大連携事業」（高2）②「郊外団地のまちづくり」（平成30年度）	71
(9) 夢チャレ「福山市立大学との高大連携事業」（高2）③「地域公共交通のありかた」（令和元年度）	73
(10) 夢プロジェクト「福山市立大学との高大連携事業」（高2）④「山野町の魅力発見・地域活性化」（令和2年度）	75
(11) もふお（羊）	77
(12) 地域の課題解決に取り組む卒業生から学ぶ（令和5年度、講演）	79

II 国際課題解決プロジェクト

(1) 姉妹校との国際交流（希望者、課外活動）	
①（オーストラリア）ダウンランズ高校①（平成29年度）	81
②（オーストラリア）ダウンランズ高校②（令和6年度）	83
③（アメリカ）マウイ（平成29年度）	87
④（韓国）ポハン①（平成29年度）	89
⑤（韓国）ポハン②（令和元年度）	93
⑥（マレーシア）メガリア高校とのディスカッション①（平成29年度）	95
⑦（マレーシア）メガリア高校と大学生とのディスカッション②（平成30年度）	97
⑧（マレーシア）セリララン高校と大学生とのディスカッション③（令和元年度）	99
(2) 海外ボランティア活動（SYD、課外活動）	101
(3) 模擬国連（ICC等有志、特別活動）	103
(4) 全国高等学校観光選手権大会（観光甲子園、ICC有志）	105
(5) 岡山イノベーションコンテスト2019（天保プロジェクト）	107
(6) 外国にルーツを持つ児童・生徒への学習ボランティア（部活動）	109
(7) コロナ禍におけるリモートでの国際交流（部活動）	111

III 在り方生き方探究プロジェクト

(1) 自分発見学習（中1、総合学習）	113
(2) 夢チャレ（高2、課外活動）①（平成29年度）	115

(3) 夢チャレ (高2、課外活動) ② (令和元年度)	119
(4) 夢プロ (高2、総合的な探究の時間) ③ (令和2年度)	121
(5) 夢プロ (高2、総合的な探究の時間) ④ (令和5年度)	123
(6) (SDGsの観点を取り入れた) 課題研究 (高3、総合学習) ① (平成30年度)	125
(7) 課題研究 (高3、総合的な探究の時間) ② (令和3年度)	129
(7) 課題研究 (高3、総合的な探究の時間) ② (令和6年度)	131
(8) 個別最適な学び実証研究1年目 (令和2年度、全学年総合)	133
(9) 個別最適な学び実証研究2年目 (令和3年度、全学年総合)	135

IV 他校との実践交流・協働プロジェクト

(1) 名古屋国際中：サステイナブルスクール認定校① (平成29年度)	137
(2) 名古屋国際中高：サステイナブルスクール認定校② (令和元年度)	139
(3) WWL (ワールド・ワイド・ラーニング) 1年目 (高2、課外活動) ① (令和2年度)	141
(4) WWL (ワールド・ワイド・ラーニング) 2年目 (高2、課外活動) ② (令和3年度)	143
(5) WWL (ワールド・ワイド・ラーニング) 5年目 (高2、課外活動) ③ (令和6年度)	145
(6) みろくの里日本語学校との交流事業 (高1・2、令和3年度)	147
(7) Happy Schools 関係でシンガポールから先生が来校 (令和5年度)	149

■第4章 関係資料

(1) サステイナブルスクール／ユネスコスクール認定証／ハッピースクール／ESD大賞	151
(2) 各取組の新聞掲載記事	153
(3) ユネスコスクール申請資料 (和文)	187
(4) ユネスコスクール申請資料 (英文)	192
(5) ESD大賞受賞報告書	197
(6) 文科省「ESD推進の手引」における本校事例の紹介 (令和3年度)	202



(3) 福山中高 ESD 要点マップ (令和5年度/2023 年度作成)

本校 ESD の取組の要点を 10 の観点から A3・1 枚に記載したもの。職員研修などにも活用。

持続可能な社会の創り手を育む

福山市立福山中・高等学校 ESD (SDGs教育) 要点マップ (ホールスクールアプローチ実践校)

1. 学校概要

① 公立の中高一貫校 (広島県福山市香取町香取10)

② 生徒: 中高約 1000 名 (中学: 360 名 / 高校: 640 名)

③ 教育理念: 「ESD (持続可能な社会のための教育) を通じて、生徒一人一人が持つ潜在的な可能性を引き出し、溢れる知性・才能・志をふるまうに、持続可能な社会を創るために、21 世紀に必要とする人間を育成する」

④ 教育目標

地産な「探究心」、豊かな「創造力」、柔軟な「思考力」を育み、「課題の解決」に受け「粘り強く挑戦」する生徒を育成する。

⑤ ESD の観点で教育内容をづくり

- 2016 - サステイナブルスクール by AECU (文科省委託) 24 校
- 2018 - ユネスコスクール by UNESCO 世界 11,000 校
- 2019 - ハッピースクール by UNICEF (国連児童基金) 141 校
- 2019 ESD 大賞 (文科省大賞) 受賞
- 2020 - WWW 連携校 by 文科省 (広島中学校連携校が中心)
- 2022 - 文科省「持続可能な社会のための教育 (ESD) 推進の手引き」中核事例掲載

2. 本校 ESD 実践の特徴・概要

① ホールスクールアプローチ

→ 学校全体の取組 (ESD と国際文化を学校の特色に)

② 無理なく過度の負担なく実践

→ 取組も無理なく持続可能なものに

③ 3P で「資質・能力」向上

→ 地域課題解決・国際課題解決・在り方まで探究 Project

④ 結論 ESD 実践により

①「持続可能な社会づくり」②「生徒の資質・能力の向上」③「学校の教育の質の向上」に

3. 学校全体で「特に育成したい資質・能力」

① 創造力 ② 思考力 ③ コミュニケーション力

④ 探究心 ⑤ 意欲 ⑥ チャレンジ精神

※ 令和 3 年度 (令和 4 年度) 調査 ※ 学校評価に ESD 関連事項 (令和 3 年度評価)

4. 外部機関・地域との連携

① 市役所 (産業振興課)、自工会

② 福山市立大学 都市経営学部

③ 旭光企業 (オゾン・フロン・タンパク質企業等)

④ アジア・ユネスコ文化センター (AECU)

⑤ エネスコ (ハッピースクールプロジェクト)

⑥ 文科省「ESD 推進の手引き」(事例集)

⑦ 市教委・県教委

⑧ コーディネーター・外部講師

5. なぜ ESD? (必要性や必要性、導入の経緯)

(1) 学習指導要領の趣旨 (社会に関わった教育課程)

① 教育で大切なのは、「よりよい学校教育を通じてよりよい社会を創ること」

② 学校教育の理念は、「持続可能な社会の創り手」の育成 (ESD)

※ 学習指導要領の前文・趣旨 ※ SDG4「質の高い教育をみんなに」(持続可能な開発のための教育)

※ 本校文科大賞「持続可能な社会の創り手」の育成を行う ESD は授業の標準化について (教育) (2021.11.27)

③ その 3 方策

① 「よりよい学校教育を通じてよりよい社会を創る」(目標)を学校と社会で共有する

② 学校と社会で育む時代を担う生徒に必要な資質・能力を明確にする

(知識・技能 / 思考力・判断力・表現力 / 主体性・多様性・協働性、等)

③ 学校教育を学校内に閉じずに、地域や社会の方と連携・協働して目標を実現する

(2) 本校 (中高一貫校) の開校以来の教育の方向性 (教育目標・資質・能力等)

(福山 IOGNEN 教育): ESD2 観点 (人間性・社会性・責任感) 21 世紀型スキルと倫理観

6. ホールスクールアプローチで取組開始 (10 ステップ)

① 目指す姿は? (どんな姿・セクションを目指すか)

② 本校で育てたい力は? (具体的な資質・能力の検討)

③ 取組もどう構造化? (共通目標は持続可能な社会づくり)

④ 評価はどうする? (ルーブリック作成、達成度の検討)

⑤ 実践のまじめは? (取組の持続性や共有に不可欠)

⑥ 3P プロジェクトの実践 (各プロジェクトの推進)

⑦ 学校と地域・学校と地域・ESD を基軸 (取組が持続的に)

⑧ 保護者にも周知 (PTA 組合、学校からの発行等)

⑨ 授業と ESD の関係 (ESD カレンダー、カリキュラムマップ)

⑩ 教科での ESD 実践 (探究、特色だけでなく各教科でも)

7. 探究内での ESD

(1) 地域課題解決プロジェクト

① 環境体験学習 (2 年)

② 地元企業探究 (4 年)

(2) 国際課題解決プロジェクト

③ 姉妹校との国際交流 (全学年有志)

④ 海外修学旅行での地元高校との SDG ディスカッション (5 年)

(3) 在り方生き方探究プロジェクト

⑤ My 探究 (1~3 年) ⑥ 夢プロ (5 年) ⑦ 課題研究 (6 年)

8. 教科・探究・特別活動・部活動・生徒会での ESD

(教科・ESD)・内容 (SDGs)・資質・能力・学習者」を基軸で実践

→ 探究・部活動・生徒会・在り方生き方探究・夢プロ・課題研究

① 目的 → 「持続可能な社会の創り手」育成

② 内容 → 内容と SDGs の関連付け

(ゴールを参照すると具体的に)

③ 資質・能力 → 批判的 (代替案) の思考力、分析能力、コミュニケーション力、課題発見・解決力等

④ 学習法 → 参加型学習、探究型学習に実践的に、多様な人と協働、唯一正解がない問い

9. Happy Schools Project (ユネスコ・ハッピースクール)

① 幸福は世界の政策課題のトップ (国際幸福デー、国際幸福経緯)

② 校内外の Unhappy な要素を減らし、Happy な要素を増やす取組

→ SDG4 (教育の質の向上) と関連: 生徒・教員の幸福向上につながる

③ 取組: 10 周年合唱PJ、生徒とスナック作り、進士のひびき「もふふ」

他にも「人間関係」「育ちや育る」「協働」「自由」「創造性」「友情的」「自善」等

10. SDG ESD 実践のためのポイント

を教員の学習は問のため?

100% 国際理解 (利用) のポイント

ESD の目指す姿

ESD の実践するポイント

ESD の実践するポイント (2)

ESD の実践するポイント (3)

ESD の実践するポイント (4)

ESD の実践するポイント (5)

ESD の実践するポイント (6)

ESD の実践するポイント (7)

ESD の実践するポイント (8)

ESD の実践するポイント (9)

ESD の実践するポイント (10)

ACCU 提出資料より (本校作成)





＊（注）

以下の記述は、ACCU『これからのユネスコスクールを考えよう ひろがり つながり ふかまる ESD 推進拠点 Whole School Approach』のお二人の講演録（p.1～95）と岡山宣言からポイントをまとめたものです。

- アン・フィンレイソンさん（持続可能性と環境教育 SEEd 事務局長）
- 永田佳之先生（聖心女子大学教授）
- ユネスコスクール岡山宣言（2014 年 11 月に岡山大学で開催されたユネスコスクール全国大会で採択）

（１）ユネスコスクール岡山宣言のポイント（ESD 推進のためのユネスコスクール宣言、2014 年 11 月採択）

- ①持続可能な社会の構築や ESD 推進の観点、学習指導要領や教育振興基本計画などに盛り込まれている。
- ②ESD のビジョンを取り入れると、学びと自己につながりが生まれる（地球、自然、他者、未来・・・）。
つながりの中で学びは深まり、心に宿り、持続可能な未来を創造する力となる。（行動と協働、問い続け
学び続ける力）
- ③各学校では、平和や環境などを入り口として、課題を体験的、探究的に発見し解決するプロジェクトが
開発。地域の特徴を生かした ESD を通じて、地域の良さと課題を知り、変革すべき事を考え行動に移す
ことを学ぶ。地域の課題は世界の課題とつながり、協働により持続可能な未来をつくれるという認識が
共有されつつある。
- ④持続可能な未来のために、身近な地域に貢献するとともに、グローバルな視点に立って行動する次世代
を育む。
- ⑤学びの入り口は何であれ、その先に世界の「平和」と「持続可能性」を見据える。
（多くの人と協働して、つながりを意識した教育を実践する。）
- ⑥ESD の魅力を伝えるため、生徒の変容、教師の変容、学校・地域の変容を明確に示す。
- ⑦教師や生徒の主体的なアイデアを尊重し、創造的、教科横断的、探究的に学校全体で ESD を進める。

（２）ユネスコスクール・ESD とは何か？

- ユネスコスクールは、ユネスコの理念を実現する学校であり、世界に広がるネットワークである。
（英語名は ASPnet で、ユネスコスクールはそのネットワークに加盟している学校の日本での呼称。）
- ユネスコとは、国連教育科学文化機関のことで、「世界平和・安全保障」が目的である。そのために教
育、科学、文化を通して英知を集め、国内外の連帯を促進して平和に寄与することを目的としている。
- ユネスコスクールは、「持続可能な開発のための教育（ESD）の推進拠点」である。
- ユネスコスクールの質的向上のヒントは、生徒の変容、教師の変容、学校・地域の変容の明確化にあ
る。

（３）ESD を達成するためになぜホースクールアプローチが必要か？

- ①変容的教育—新しいスキル、新しい考え方（ESD では 1 つの教科や活動でなく、持続可能な将来に向け
スキルや強靱性をもち、変容しうる制度を構築し、イノベーションやウェルビーイング（幸福）をもた
らす人づくり。）
- ②学校全体で活動を継続（一人のリーダー先生に依存するのではなく、学校全体が動いて取り組むもの。）
- ③たくさんの活動から、全生徒向けの計画に順序あるカリキュラムへ（ホースクールアプローチは、活
動だけでなく、活動を計画し、論理的に研究し、カリキュラム、プロセス、全体を通じて役立つもので
ある。）
- ④持続可能性の全体像を見る—環境、社会、経済、文化（サステナビリティは規模の大きな概念であり、
社会、経済、文化的側面の全てを網羅する。1 つか 2 つに対応すればいいのではなく、全てに対応する。）
- ⑤自分の行動—何が効果的かを研究し学ぶ（学校そのものが学ぶ組織になる必要あり。どう持続可能な形
で生活や仕事をすべきかの教科書はまだ存在していない。OECD の PISA 調査では、自ら行動をとって研
究し、学ぶ先生がいる学校の生徒のスタンダードはさらに高まる。）

(4) ホールスクールアプローチを実践している学校に見られる特徴は？（どう見分けるか）

ホールスクールアプローチは、学校全体で活用される枠組みであり、校長室に掲げてあるものではない。

- ①全教室・どの科目でも ESD の教育アプローチが取られている。
- ②全学年のカリキュラムに、持続可能性の前進が見て取れる。
- ③学校のビジョンや使命感にフレームワーク・コアな概念が学校を構成するすべての要素に見て取れる。
（イギリスなら自分、他者、環境に対する「ケア」（気遣い）例）シリアやアフリカの見知らぬ他者に対しても。）
- ④生徒が学校の ESD 活動について説明できる。
- ⑤生徒が地域や学校の活動に参加している（「問い」から始まるやり方で挑むのが一番うまくいく）。

【永田先生コメント】

- * ホールスクールアプローチは、ESD に関するグローバル・アクション・プログラムの 5 つの「優先行動領域」の 1 つであり、どこの国でもなかなか定着しなかった世界的な課題であり、重要なチャレンジである。
- * 学校全体計画や年間計画があるからホールスクールアプローチではない。学校の方針や授業の方法、内容、教材、校舎の素材、校庭、食べ物、交通手段など、あらゆる側面を変容させる。教科を超えて ESD に挑む、地域でプロジェクトを超えて ESD に取り組む、「どこを切っても ESD」「学校・地域丸ごと ESD」と言える状態。
- * 教師も ESD を語り、サステナビリティを学び続けて実践する。一人一人が自己変容、社会変容を考える。

(5) ESD をどう評価するか？

- 成果物を評価することが大切（計画、やり方、実践）。
- 単に良い気分では事足りない。自分たちがよくやったと思っても、それだけでは評価とは言えない。
- どのような変革を自分がもたらしたか、現在持続可能ではない形で生活している現状から、どうすれば将来、持続可能な形で暮らせるようになるのか、研究を成果物にまとめる。

(6) 持続可能な学校の 5 つの「効果」とは？

- ①「学校の改善」（若者の学習や福祉の向上）
- ②若者の学習体験を「結びつける」（全ての教科も人間や環境のシステムの中で理解する）
- ③若者の「参加」を促す（学校だけでなく自らの人生に参加）
- ④学校の活動、考え方、計画に「貢献する」
- ⑤持続可能な行動・考え方・計画の模範・モデルをつくる（完璧な学校はない、持続可能のために学ぶ場）

(7) 学校を「ホールスクールアプローチ化」するポイント

- ①どこからでも始められる（トピックのドア・入り口は様々。3 つか、5 つか、または SDGs の 17 かもしれない。）
- ②すでに実施していることを確認する
- ③ホールスクールアプローチを発展させる
- ④各生徒の持続可能体験のための計画を立てる
- ⑤計り、計り続ける
- ⑥つながり（学びと社会をどうつなげるか）、「もしも・・・だったらどうなるか」（明るい社会ならどうか）
- ⑦生徒が完全に参加するよう促す
- ⑧ESD をビジュアル化して共有しよう（保護者や地域社会と）
- ⑨変化を理解し、見守る
- ⑩先生をサポートする

(5) 本校 ESD の概要（令和元年度作成）

1 本校について

(1) 沿革・ESD の推進

- 明治 32 年創立（来年 120 周年）、平成 16 年福山中学校併設、併設型中高一貫教育校（15 年目）
- 平成 28 年サステイナブル・スクール（全国 24 校の 1 校）・平成 30 年ユネスコ・スクール認定

(2) 学校教育目標

- 「創造的な知性と豊かな心の調和的な発達を図り、国際社会に貢献できる人間を育成する」

(3) 生徒規模

- 中学校：40 人×3 クラス（120 人）
- 高等学校：約 30 人×6 クラス（約 200 人）

(4) 第Ⅳ期ビジョン（2018 年度（平成 30 年度）～2020 年度）

- ①中高の系統的な学習活動を通して、キャリア形成に向け、主体的に歩む生徒を育てる。
- ②中高の学校生活の中で共に成長する経験を通して、自他を尊重し、他者と協働できる生徒を育てる。
- ③国際理解・地域課題について探究し、持続可能な社会の担い手となる生徒を育てる。

(5) 本校教育の特色：グローバルな社会・地域社会で活躍する資質・生徒の育成

- 「国際交流」（オーストラリア、韓国等）と「ESD」を中心に「地域や国際課題解決」等に取り組む。

2 ESD の推進・目標

(1) ねらい

総合的な学習の時間を中心に他教科や特別活動と関連づけながら 3 つのプロジェクトを通して（①「地域課題解決プロジェクト」、②「国際課題解決プロジェクト」、③「在り方生き方探究プロジェクト」）、グローバルな社会・地域社会で活躍する資質・能力をもった生徒を育成する。

(2) 本校で育みたい 6 つの資質・能力（6 観点目を含むカリキュラムマップを作成し全教科で推進）。

能力（スキル）			資質（気質・特性・情意）		
知識・技能／思考力・判断力・表現力等			学びに向かう力、人間性等		
①情報整理力	②表現力	③課題解決力	④協働	⑤自他の尊重	⑥チャレンジ精神
課題解決や新しい価値を創造するために必要なデータや情報を分析・整理することができる。	課題解決のために必要な基礎的な知識や技能を創造的・探究的に活用・表現することができる。	様々な場面で課題を発見し、最適解により近い解決方法を見つることができる。	価値観の多様な他者と協働して、集団や社会に貢献し解決しようとしている。	個人的・社会的責任を重んじ、価値観の多様な他者を尊重するとともに自己肯定感を高めようとしている。	高い志を持ち、様々な場面で課題解決のために新しいことや困難なことに自ら挑戦している。

(3) ルーブリック作成

- 本校で育みたい資質・能力をルーブリック（5 段階）にして、全学年で年に 3 度測定する。

(4) 実践の積み上げ（毎年度の実践は実践集として「使える形」で集約）

- 1 年目（平成 28 年度） ESD カレンダーの作成、目指す資質・能力の整理、3 プロジェクトの行動計画
- 2 年目（平成 29 年度） サステイナブルスクール 2 年目の研究紀要作成、公開研究会
- 3 年目（平成 30 年度） SDGs 授業実践集、サステイナブルスクール 3 年間の取組と成果（まとめ）作成
- 4 年目（令和元年度） 課題発見・解決学習 実践集、ハッピースクール事業、4 年間のまとめ作成
- 5 年目（令和 2 年度） 個別最適化実証研究事業、WWL（ワールド・ワイド・ラーニング）
- 6 年目（令和 3 年度） 個別最適化実証研究事業最終年、WWL（ワールド・ワイド・ラーニング）2 年目

3 本校 ESD3 主要プロジェクトの主な取組

(1) 地域課題解決プロジェクト

実地見聞を伴う体験的な学習を通して、地域を知り、課題解決に取り組む力を育成する。

- ② 1 学年「ふるさと学習」(地元福山について歴史や資源等について理解を深める)
- ② 1 学年「誰もが暮らしやすい福山の街づくり」(出身地域の課題について調査・研究・提案する)
- ③ 4 学年「グローバル人材育成事業」(福山市の企業を研究し、冊子「Hi-Hi ふくやま」を発行する)
- ④ 5 学年「夢プロ」(各自が夢の実現に資するプロジェクトを実施し、学びをまとめ発表する)
- ⑤ 5 学年「福山高校×福山市立大学 高大連携事業」(大学生と協働しまちづくりについて調査・研究・提案する)

(2) 国際課題解決プロジェクト

海外修学旅行先や姉妹校と国際交流・調査・発表を行う。思考・解決・提案型の交流活動を行う。

- ① 3 学年、5 学年「国際理解」(各自がテーマを設定し、調査結果を発表する)
- ② 5 学年「海外修学旅行」(マレーシアの高校生と地球環境問題 SDGs について発表・討論する)
- ③ ICC「模擬国連」(部活を中心に模擬国連に取組み、研修会・全国大会に出場)
- ④ 姉妹校等との「国際交流・語学研修・留学生受け入れ」(韓国、オーストラリア、マウイ)
- ⑤ 5 学年「夢プロ」(夢の実現に向けた活動に挑戦し、学びを発表する、フィリピン支援、観光甲子園等)

(3) 在り方生き方探究プロジェクト

自他の長所や魅力を発見し自尊心を高め、ライフプランを設定し、よりよい「在り方生き方」を考える。

- ① 1 学年「自分発見学習」(小学校の活動〔賞状、認定書等〕から自身の魅力を発見する)
- ② 2 学年「職場体験学習」(マナー学習を行ったうえで5日間体験を行う)
- ③ 3 学年「東京修学旅行、企業・官公庁訪問研修」(研修テーマを設け生徒が運営する)
- ④ 4 学年「ライフプラン」(講演会やインタビューを通して夢や目標を設定する)
- ⑤ 5 学年「夢プロ」(各自が夢の実現に資するプロジェクトに挑戦し、学びをまとめ発表する)
- ⑥ 6 学年「課題研究」(進路に関連した課題を SDGs に基づいて設定し、調査・研究を行い発表する)

4 主な変容と今後の課題(学校・教員・生徒) *詳細は p.15~参照

(1) 学校の変容

- ①「開校以来積み上げてきた実践を、ESD の観点で整理し構造化する」ことと、「本校で育みたい資質・能力を明確化し、教育内容を6観点で整理する」ことができた。
- ② 今後は、カリキュラムマップの質を「本当に使える」、「見てわかる」ものにさらに精度を高める。
- ③ ルーブリック評価の追跡を長期的に行い、本校で育みたい資質・能力を身に着ける教育内容にする。

(2) 教員の変容

- ① 研修等を通じて、各教員に ESD の考えが浸透。過去の取組の多くが ESD の方向性にあることを認識。
- ② 各教科の中で SDGs に関連した取組を実施する(平成 30 年の研究テーマ)。

(3) 生徒の変容

- ① 校長のリーダーシップ(講話等を含む)や諸活動を通して、主体的な活動に取組始めている。
(観光甲子園最優秀賞、全日本高校模擬国連大会4年連続5度目の出場、フィリピン国際ボランティア参加など)
- ② 資質・能力評価ルーブリック(5段階)を分析すると、次のような成果が見られる。
 - 資質・能力は、第1回(春)から第3回(冬)でどの学年も上昇(生徒が自己の成長を実感)。
 - 資質・能力の「学校平均」は、第1回(春)は5段階中2.0、第3回(冬)は2.8(平均0.8上昇)。
 - 資質・能力の伸びは、2年間実施学年では0.9上昇、1年間では0.7上昇(長い方が伸びる、初年度急上昇)。
- ③ 今後は、教員・生徒とルーブリックの内容や意義をさらに共有し、全方面での主体的な実践を促す。

(6) ESD 事業計画書の例（平成 30 年度のもの）

（例）ACCU に提出した【事業計画書】

ESD の深化による地域の SDGs 推進事業 事業計画書

学校情報			
学校名	福山市立福山中・高等学校		印
校長名	向井 勝也（当時）		
担当者名	上山 晋平	役職	総合・ESD 担当主事
電話	084-951-5978	FAX	084-951-6518
E-mail	kou-ichifuku-t11@edu.city.fukuyama.hiroshima.jp		

1. 計画の概要とねらい

総合的な学習の時間を中心に教科や特別活動と関連づけながら、(1)「地域課題解決プロジェクト」、(2)「国際課題解決プロジェクト」および(3)「在り方生き方探究プロジェクト」の3つのプロジェクトを実施し、身近な地域社会の持続可能性の向上に取り組むとともに、地球的諸課題の解決を図ることで、個人としての在り方生き方を含めた資質・能力の向上に取り組む。

2. 年間スケジュール

	活動内容 (対象者（学年・人数等）、教科等の情報含む)	備考
4 月	自分発見学習（中 1、120 名） 総合	自分の長所や魅力の発見
5 月	国際理解（中 3、120 名） 総合	国調査とポスターセッション
6 月	SDGs を含めた課題研究（高 3、200 名） 総合	地元企業ガイドブック作成
7 月	ふるさと学習（中 1、120 名） 総合	福山の歴史や資源学習
8 月	職場体験学習（中 2、120 名） 総合	体験を踏まえレポート作成
9 月	進路探究（高 3、200 名） 総合	進路や学問分野で調査研究
10 月	海外修学旅行（高 2、200 名） 総合	研究レポートを現地検証
11 月	誰もが暮らしやすい街づくり（中 1、120 名）	地域の長所と問題解決策提案
12 月	グローバル人材育成事業（高 1、200 名） SDGs 教科実践レポート作成（全教職員）	福山市の企業を研究し冊子化 授業実践集作成
1 月	「夢チャレ」発表会（高 2、200 名）	学校外課題活動の成果発表会
2 月	サステナブルスクール発表会	SDGs の取組発表会（教科も）

上記の授業としての活動に加え、年間を通じて以下のような課外活動を随時行う。

- ☐ 「国際交流」（姉妹校への語学研修、協議、ホームステイや学校訪問の受け入れ）
- ☐ 「夢チャレ」（高 2 が各自の夢の実現に関する活動に挑戦し、レポートをまとめ発表）

3. 協力者、協力機関（名前、連絡先）

- 福山市役所（企画政策課・産業振興課・青少年課・市民相談課）、市民参画センター
- 福山市立大学 都市経営学部
- 福山商工会議所、福山青年会議所、みつぎ総合病院、中国銀行、他地域の 18 社

4. その他コメント、追記事項

上記 3 つのプロジェクトによって、「持続可能な社会の担い手」として生徒に付けさせたいと本校が考えている資質・能力は、以下の 6 つである。

- （能力面）情報整理力 / 表現力 / 課題解決力
- （資質面）協働 / 自他の尊重 / チャレンジ精神

(7) 研究実践に当たっての ESD 共通理解項目 (ミニマム・エッセンシャルズ)

年度当初校内研修資料より

(1) ESD とは「持続発展教育」のこと

- Education for Sustainable Development の略 (「持続可能な開発のための教育」)
- この言葉の普及促進のために、日本ユネスコ国内委員会はより簡単な「持続発展教育」を使用

(2) 「持続可能な開発のための教育」とは？

- 将来の世代のニーズを満たす能力を損なうことなく
- 現在の世代のニーズを満たすような社会づくり

(出典)「持続可能な開発のための教育 (ESD)」『平成 27 年度広島県教育資料』p. 233

* (要するに) 現在の「経済発展」と将来の「環境保全」をどう両立させるか

(3) ESD を説明すると (概念整理に役立つ)

現代の世界には、貧困、人権、平和といった様々な問題があり、これらを自らの問題として捉え、身近なところから取り組む (think globally, act locally) ことにより、それらの課題の解決につながる新たな価値観や行動を生み出すこと、そしてそれによって持続可能な社会を創造していくことを目指す学習や活動が「持続可能な開発のための教育」である。ESD は持続可能な社会づくりの担い手を育む教育である。

(4) ESD の基本的な考え方は？ (出典) 同上

- ① ESD は、持続可能な社会づくりのための担い手づくりである。実施には、特に次の 2 つの観点が必要となる。
 - 人格の発達や、自立心、判断力、責任感などの人間性を育むこと。
 - 他人との関係性、社会との関係性、事前環境との関係性を認識し、「関わり」、「つながり」を尊重できる個人を育むこと。
- ② 環境教育、国際理解教育等の持続可能な発展に関わる諸問題に対応する個別の分野の取組にとどまらず、

(出典)『ユネスコ・スクールと持続発展教育 (ESD) について』(日本ユネスコ国内委員会、2008 年 6 月)

* ①「ESD 2 観点」は、福山 100NEN 教育でも「すべての教育課程に位置づける重要な役割」とされている。

(5) ESD 実践のポイント

- ① 何か新しい取組を始めるものではない。
- ② これまでの取組を ESD の観点から見直して、
- ③ 各取組に共通した「持続社会の構築」という共通目的を与えるもの

(6) 本校の研究テーマ

- ① ユネスコ・スクールの研究テーマ 4 つ：
 - 地球規模の問題に対する国連システムの理解
 - 人権、民主主義の理解と促進
 - 国際理解教育
 - 環境教育
- ② 本校 ESD は、各学年の取組を次の 3 つのプロジェクトで整理している。
 - 地域課題解決プロジェクト
 - 国際課題解決プロジェクト
 - 在り方生き方探究プロジェクト

(7) ESD の実践とレポートについて

- ① 年間指導計画に基づき、教育研究部 (学年) が、実践及び実践記録の担当者を確定する。
- ③ 担当者は、ESD に該当する実践を終了後すぐにレポートを作成する (1 枚、様式は例を参照のこと)。
- ④ 11 月 14 日の公開研究会や各種 ESD 発表会などでの発表の事例集として活用する。(次年度の参考とする。)

(8) ESD サステナブルスクール 3 年間の流れ

- ① 2016 年度 (平成 28 年度) : 1 年目
実践を ESD カレンダーに整理し、各活動が育む「資質・能力」を整理する。3 プロジェクトの展開計画を立てる。
海外の学校と相互に思考・探究する場を創る。次年度に始める「高校版ふるさと学習」の計画策定をする。
- ② 2017 年度 (平成 29 年度) : 2 年目
新規プログラムを試行・評価し、30 年度以降のシラバス及び評価計画を作成する。公開研究会で指導助言を受ける。
- ③ 2018 年度 (平成 30 年度) : 3 年目
新シラバスで実践を行う。中学校 1 年・高等学校 1 年は新シラバスで、他学年は移行できるものから実践する。

(8)カリキュラムマップ(全体計画・年間指導計画一覧表／6つの資質・能力とSDGs付き)

■中3のカリキュラムマップ（全体計画・年間指導計画一覧表）＊6つの資質・能力と関連SDGsシール付き（教科会で貼付）

Figure 1: A detailed Gantt chart showing the project schedule for the development of a new software system. The chart is organized into columns representing time intervals (e.g., 10:00-11:00, 11:00-12:00, etc.) and rows representing different tasks or activities. Each task is represented by a colored bar indicating its duration. The tasks are color-coded: blue for development, red for testing, green for deployment, and yellow for other activities. The chart shows a complex sequence of tasks, with many tasks overlapping or occurring in parallel. The tasks are labeled with their names in Japanese, such as 'システム開発' (System Development), 'テスト' (Testing), and 'デプロイ' (Deployment). The chart is a visual representation of the project schedule, showing the timing and duration of each task.

①【～令和４年度】 「福山中高で育みたい資質・能力」ルーブリック（高校版）

この父一上は3年間使います



「1」表中の①～⑥は、皆さんが「21世紀の社会で活躍する」ために、学校内外の授業や活動を通して特に身につけてほしいと考えられている資質・能力です。

①～④の各項目は〈まよの能力とまよの質問〉について、レベルごとの説明文を参照にして、あなたが現在到達していると考えられるレベルの□に大きな✓をつけてください。

その後、下記の「レーベル入庫」にそれぞれ別のレーベルを世帯で書き込んでください。（どれにも当てはまらないと思う場合は「1」をマークしてください）●書に内容の説明があります。

		【能力（スキル）】						【資質（素質・特性・情態・態度）】					
		①情報整理力		②表現力		③課題解決力		④協働		⑤自他の尊重		⑥チャレンジ精神	
能力と 「3つの 質問」	●課題解決や新しい価値を生み出すために必要なスキルや能力を分析・整理することができ、 □チームで話し合うためのリーダーシップや傾聴能力が理解できる。 □チームの目標やビジョンを共有し、メンバーのモチベーションを高め、目標達成に貢献できる。 □チームのメンバーの強みや得意分野を把握し、メンバーの得意分野を最大限に活用し、チームの目標達成に貢献できる。 □チームのメンバーの得意分野を把握し、メンバーの得意分野を最大限に活用し、チームの目標達成に貢献できる。	●課題解決のために必要な創造的・探究的な知識や技能を創造的・探究的に活用・表現することができ、 □自分やチームの得意分野を把握し、自分やチームの得意分野を最大限に活用し、チームの目標達成に貢献できる。	●様々な場面での課題を発見し、創造的に解決するための方法を考えることができる。 □自分やチームの得意分野を把握し、自分やチームの得意分野を最大限に活用し、チームの目標達成に貢献できる。	●課題解決の多様な場面と協働し、創造的に解決するための方法を考えることができる。 □自分やチームの得意分野を把握し、自分やチームの得意分野を最大限に活用し、チームの目標達成に貢献できる。	●個人やチームの得意分野を把握し、個人やチームの得意分野を最大限に活用し、チームの目標達成に貢献できる。 □自分やチームの得意分野を把握し、自分やチームの得意分野を最大限に活用し、チームの目標達成に貢献できる。	●高い志を持ち、様々な場面で課題解決のために新しいことや挑戦的なことに自ら挑戦している。 □自分やチームの得意分野を把握し、自分やチームの得意分野を最大限に活用し、チームの目標達成に貢献できる。	●課題解決の多様な場面と協働し、創造的に解決するための方法を考えることができる。 □自分やチームの得意分野を把握し、自分やチームの得意分野を最大限に活用し、チームの目標達成に貢献できる。	●課題解決の多様な場面と協働し、創造的に解決するための方法を考えることができる。 □自分やチームの得意分野を把握し、自分やチームの得意分野を最大限に活用し、チームの目標達成に貢献できる。	●課題解決の多様な場面と協働し、創造的に解決するための方法を考えることができる。 □自分やチームの得意分野を把握し、自分やチームの得意分野を最大限に活用し、チームの目標達成に貢献できる。	●課題解決の多様な場面と協働し、創造的に解決するための方法を考えることができる。 □自分やチームの得意分野を把握し、自分やチームの得意分野を最大限に活用し、チームの目標達成に貢献できる。	●課題解決の多様な場面と協働し、創造的に解決するための方法を考えることができる。 □自分やチームの得意分野を把握し、自分やチームの得意分野を最大限に活用し、チームの目標達成に貢献できる。	●課題解決の多様な場面と協働し、創造的に解決するための方法を考えることができる。 □自分やチームの得意分野を把握し、自分やチームの得意分野を最大限に活用し、チームの目標達成に貢献できる。	●課題解決の多様な場面と協働し、創造的に解決するための方法を考えることができる。 □自分やチームの得意分野を把握し、自分やチームの得意分野を最大限に活用し、チームの目標達成に貢献できる。
レベル 1													
レベル 2													
レベル 3													
レベル 4													
レベル 5													
レベル 記入欄													
(2) 評価													
本人	4年	5年	6年	1年	2年	3年	4年	5年	6年	7年	8年	9年	10年

(2) 評価レベル「4」「5」を選んだ人は、その項目の能力や態度を特に伸ばしたと考えられる活動や場面を「(2)項目」欄に「具体的に」記述してください(5欄ほどで結構です)。

明：●我華中概念學綱（活動或取態）●國內外的歷史研究 馮樹勳（譯）●王季文、沈君博、傅學則行等 ●主與血運動 ●新活動 ●定調子中的“P”-“Q”之天下 ●羅德、試驗 ●留學海

【参考】＊本ルーブリック作成に当たっては以下を参考にさせていただきました。

●岡山県立倉敷南高等学校「21世紀型能力」ルーブリック

●三宅なほみ（監訳）ほか（2014）『21世紀型スキル：学びと評価の新たなかたち』（北大路書房）

②【新版（令和5年度～）】 「福山中高で育みたい資質・能力」ルーブリック

このシートは3年間使います		「福山中・高等学校で育みたい資質・能力」ルーブリック（目標達成度の評価表）									
ルーブリックの目的 このシートは福山中高で、特に育みたい資質・能力です。これらを伸ばすことは、みなさんが卒業後の大学生活・社会生活を豊かに過ごすために大切な力となります。得意なものとともに伸ばし、苦手なものは意識して、学校生活を過ごしてみましょう。 ルーブリックの使い方 ①各学年に1回評価する。②右側の空欄に○をつける。③特に印象的なことは下欄に記述する（成長を記録しよう）											
5つのレベル ▶1:見る ▶2:見つける ▶3:考える ▶4:表現する ▶5:実践する											
本校で育みたい「3つの能力」と「3つの資質」	内容	レベル	4年	5年	6年						
【能力（スキル）】	①創造力 （新たなアイデアや計画の創造）  ●自分の発想にとらわれず、試行錯誤し、新しい解決方法を考える。	①自分なりの独創的なアイデアを基礎として考えたことも、 社会的に価値あるアイデアや計画を創造 することができる。	5:実践する								
		② 独創的なアイデアや計画を創造 し、更に発展させる意図を持ち、 新しいアイデアを生み出す ことができる。	4:表現する								
		③自分の発想に対して、これまでに得た知識や技術を駆使しながら、 自分なりのアイデアを考える ことができる。	3:考える								
		④他人の発想を適切に受け止め、 自分なりのアイデアを見つける ことができる。	2:見つける								
		⑤自分の発想に対して、 あるべき姿（理想）と現状との差（課題点）を把握 している。	1:見る								
		②問題力 （問題の解決に向けて）  ●自分の周りで課題を発見し、様々な立場の対応方法を検討・実践できる。	①課題について、興味して決定した 対応方法を実践 することができる。	5:実践する							
	②課題について、対応方法に 長所・メリット・デメリットを比較し実践 することができる。		4:表現する								
	③課題について理解し、 複数の立場から、対応方法のメリット・デメリットが分かる 。		3:考える								
	④課題を見つければ、 複数の立場から、相手の対応方法（課題解決策）を探 ることができる。		2:見つける								
	⑤自分の周りの事情に対して興味を持ち、 課題を見つけよう としている。		1:見る								
	③コミュニケーション力 （対人関係の構築）  ●相手の意見を尊重しながら、自分の意見や思いを伝えることができる。		①相手の意見を尊重して聞き、十分に理解し、 周囲の共感を求められるように考えながら自分の意見を目的・場面・状況に応じて伝え 合意形成を図ることができる。	5:実践する							
		②相手の意見を尊重して聞き、十分に理解し、相手のことを考えながら自分の意見を 目的・場面・状況に応じて適切に伝える ことができる。	4:表現する								
③相手の意見を尊重し、 相手のことを考えながら自分の意見を伝える ことができる。		3:考える									
④相手の意見を理解し、 自分の意見を伝える ことができる。		2:見つける									
⑤相手の意見を 理解 しようとしている。		1:見る									
【資質（態度・情意・価値観・規範）】		①探究心 （探究活動を通して）  ●好奇心や物事をもって情報を整理・分析し、本質を明らかにする。	①好奇心と熱意をもって、物事の本質を理解し、課題について 発見性のある探究活動 を行っている。	5:実践する							
	②熱意をもって既存のデータや情報と自分の調べたものを整理・分析して問題を正確に理解し、 物事の本質を理解 しようとしている。		4:表現する								
	③物事に關して与えられた情報に即応し、既存のデータや情報を調査やネット等で 探究心をもって調べ 、課題について考えている。		3:考える								
	④与えられたデータや情報の 要点を正確に理解 し、課題も見つけようとしている。		2:見つける								
	⑤与えられたデータや情報を おおむね理解 している。		1:見る								
	②社会性 （社会生活の中で）  ●価値観の多様な社会と向き合い、道徳・倫理・社会に貢献しようとしている。		①考えの違う他人の意見や存在を、課題解決のための 重要なものと考える受け入れ 、周囲のやる気を高め、 道徳・倫理・社会に貢献 している。	5:実践する							
		② 考えの違う他人 に対して、世帯との違いを尊重しながら、 周囲の一員として仲好 に接している。	4:表現する								
		③他日や他人の考えを 認め 、思いやりを持って行動している。	3:考える								
		④他日や他人の中で、 相手の立場や考えを捉えよう としている。	2:見つける								
		⑤他日や他人の中で、 他者を尊重 している。	1:見る								
		③チャレンジ精神 （困難に立ち向かい）  ●課題解決のために、困難に負けず取り組んでいる。	①高い志を持ち、様々な困難で課題解決のために新しいことや困難なことに立ち向かい、 失敗から学び、粘り強く挑戦 している。	5:実践する							
	②志を持ち、 課題解決のために自ら新しいことや困難なことに挑戦 している。		4:表現する								
③人から指示されなくても、（自分がすべきことに即応して） 新しいことや困難なことに挑戦 している。	3:考える										
④人から指示されなくても、 自発的に行動・学習・実践 している。	2:見つける										
⑤人から 指示されたこと はやりようとしている。	1:見る										
探究活動の中で印象的なものについて、SWFで意識して記録してください。（表文の後ろに学年・学期を記載すること）											
4年生徒番号() 5年生徒番号() 6年生徒番号() 氏名()											

このシートは1年間使います

3プロジェクト	「地域課題解決（力）」	「国際課題解決（力）」	3在の力生き方実践（力）
プロジェクトの 概要説明	◆実地見聞を伴う体験的な学習を通して、地域を知り、各種の課題を解決する力を伸ばす。	◆調査・発表を行い、海外修学旅行先や姉妹校と国際交流を行う。思考・解決・調整型の交流活動を行い、国際問題を解決する力を伸ばす。	◆自分の長所や魅力を発見し、自尊心を高め、各種講演や活動等からの学びを活かし、自分のライフプランを設計し、よりよい「在り方生き方」を考える。
レベル1 《見つける》	□「地域」の良さや課題を見つづけることができる。	□「日本と外国」に関する良さや課題を見つづけることができる。	□「自分」の長所や課題を見つづけることができる。
レベル2 《考える》	□「地域」の良さや課題を見つづけることができる。また、それに対する自分の意見を持つことができる。	□「日本と外国」に関する良さや課題を見つづけることができる。また、それに対する自分の意見を持つことができる。	□「自分」の長所や課題を見つづけることができる。また、これまでの学習や活動を通して、自分のライフプラン（人生設計）や進路に対する考えを持つことができる。
レベル3 《調整する》	□「地域」の良さや課題を見つづけることができる。また、その良さや課題を将来の「地域」にどのように活かせば良いかを提案することができる。	□「日本と外国」の良さや課題を考えることができる。また、その良さや課題を将来の「日本と海外」にどのように活かせば良いかを提案することができる。	□「自分」の長所や魅力を見つづける自己実現に結びつける（自分の長所や魅力を活かし、自分の将来にどのような活躍をするかを提案することができる（長期）を基としたライフプランを設計して発表できる）。
レベル4 《行動する》	□よりよい「地域の姿」を様々な立場や観点から考えることができる。また、その姿を実現させるために、自分（たち）ができることを考え、提案し、実行する（実行してもらう）ことができる。	□よりよい「日本と外国の姿」を様々な立場や観点から考えることができる。また、その姿を実現させるために、自分（たち）ができることを考え、提案し、実行する（実行してもらう）ことができる。	□「自分」が設定した将来の夢や目標に向けて、「自分」の長所や魅力を活かし、進捗と同時に、自分の課題を見つづける。それを様々な方法を使って解決するために行動することができる。
レベル5 《人を感動させる》	□よりよい「地域の姿」を様々な立場や観点から考え、その姿を実現させるために、自分（たち）ができることを考え、提案し実行する（実行してもらう）ことができる。他者を巻き込んで課題解決を進めることができる。	□よりよい「日本と外国の姿」を様々な立場や観点から考え、その姿を実現させるために、自分（たち）ができることを考え、提案し実行する（実行してもらう）ことができる。他者を巻き込んで課題解決を進めることができる。	□「自分」が設定した将来の夢や目標可能なより良い未来（社会、世界）の实现に向けて、「自分」の長所や魅力を活かし、仲間と共に課題を解決するために行動することなどに「持続可能なより良い未来（社会、世界）の实现に向けて行動すること」。

	4年	5年	6年	7年	8年	9年	10年
しへん記入額							
(2) 項目							
原価4や5の活動							
本人	4年 組	5年 組	6年 組	7年 組	8年 組	9年 組	10年 組

※【主な活動】1年（自分の良さ、地域調べ、進路学習、海外交流）
2年（職業調べ、職業体験学習、進路学習、海外交流）
3年（外国調べ、海外旅行、進路学習、海外交流）
4年（グローバルキャリア事業・地元企業研攻、ライフプラン）
5年（国際問題解決プロジェクト、夢チャレ、英語習得）
6年（課題研究、進路研究、他、国際問題、各種活動・開発）

(10) 資質・能力の自己評価（振り返りシート） *中学校

生徒は、自分のプロジェクトの区切りに、下の「プロジェクト管理表（振り返りシート）」を記入する。
育みたい資質・能力に関わるコンピテンシーについて自己評価するもの。全部を振り返る必要はなく、
生徒が自分で伸びたと思うコンピテンシーについて振り返る。振り返りの欄には、行ったタスクを書く。

■プロジェクト管理表（振り返りシート）			年 月 日
プロジェクト名		学年・クラス・担任	
学校教育目標		創造的な知性と豊かな心の調和的発展を図り、国際社会に貢献できる人間を育成する	
山の中で育みたい 資質・能力	日常的に意識するコンピテンシー (All Grow)		振り返り (コンピテンシーを基盤として記載)
情報整理力	論理的思考	道徳や科道に即って物事を深く考えることができ、複雑なことでも分かりやすく説明できる能力	
	疑う力	他者の意見をそのまま鵜呑みにすることなく、必要に応じて建設的な反論をすることのできる能力	
表現力	創造性	自分ならではの独自性に加えて、表現可能な生産性を持ったアイデアを出すことのできる能力	
	表現力	自分の考えや思いはもちろん、どんなことでも相手が理解しやすいように伝えることのできる能力	
課題解決力	課題設定	状況を的確に把握しながら「何をすべきか」「どうやって成し遂げるか」を自ら考え出せる能力	
	決断力	自分の考えと客観的な事実とを照らし合わせながら判断し、物事を決めることのできる能力	
協働	個人的実行力	自らの意思によって行動を起こして計画を進め、何事にも自ら進んで取り組むことのできる能力	
	柔軟性	変化への対応力とともに、その場その場で機転を利かして行動を適宜修正することのできる能力	
自他への尊重	影響力の行使	他者に対して自分の考えや目的を伝えながら、ともに協働して物事を進めることのできる能力	
	共感・傾聴力	相手の話を真実に聴き、相手の深いレベルで理解し、相手の気持ちを尊重することのできる能力	
チャレンジ精神	寛容	自分とは考えや意見の異なる相手に対しても理解を示し、それを許容する態度が持てる能力	
	地球市民	自分が住む地域や日本のことはもちろん、世界の一員として何ができるか考えられる能力	
自己効力	ビジョン	将来、自分がどのように成長していきたいかなど、未来の目標を明確に持つことのできる能力	
	自己効力	何らかの課題に直面しても、「自分ならできる」と自信を持って物事を進めることのできる能力	
自己効力	自己効力	困難な状況であっても、自分で決めたことは最後までしっかりとやり抜くことのできる能力	
	耐性		

(11) 事業の成果と課題（ループリック結果のまとめ）

1 令和6年度（2024年度）ループリック評価（まとめ）

年次	項目1		本校で育みたい資質・能力						全体	項目2		ESD3プロジェクト			全体
			能力			資質（気質・特性・情意・態度）						① 地域課題 解決（力）	② 国際課題 解決（力）	方③ 探究（力） 生き方・在り	
			① 創造力	② 思考力	③ コミュニケーション力	④ 探究心	⑤ 協働	⑥ チャレンジ精神							
高校3年生 第1回（4月） 第2回（9月）	3年第2回（181名）	平均値	3.4	3.5	3.7	3.4	3.6	3.3	3.5	3年第2回（181名）	平均値	3.0	2.8	3.1	3.0
	3年第1回（191名）	平均値	3.0	2.9	3.4	2.9	3.4	2.9	3.1	3年第1回（177名）	平均値	2.9	2.7	3.0	2.9
	変化量（2回-1回）	平均値	0.4	0.6	0.3	0.5	0.2	0.4	0.4	変化量（2回-1回）	平均値	0.1	0.1	0.1	0.1
	2年第3回（192名）	平均値	3.2	3.2	3.5	3.1	3.4	3.0	3.2	2年第3回（192名）	平均値	2.8	2.7	2.9	2.8
	2年第2回（191名）	平均値	3.0	2.9	3.4	2.9	3.4	2.9	3.1	2年第2回（189名）	平均値	2.7	2.6	2.8	2.7
	2年第1回（184名）	平均値	2.8	2.7	3.3	2.7	3.2	2.7	2.9	2年第1回（188名）	平均値	2.6	2.4	2.5	2.5
	変化量（3回-1回）	平均値	0.4	0.4	0.2	0.4	0.2	0.3	0.3	変化量（3回-1回）	平均値	0.2	0.3	0.4	0.3
	1年第3回（195名）	平均値					2.9	2.6	2.8	1年第3回（195名）	平均値	2.8	2.5	2.5	2.6
	1年第2回（197名）	平均値					2.7	2.4	2.6	1年第2回（195名）	平均値	2.5	2.3	2.3	2.4
	1年第1回（200名）	平均値					2.4	2.1	2.3	1年第1回（196名）	平均値	2.1	2.0	2.0	2.0
	変化量（3回-1回）	平均値					0.5	0.5	0.5	変化量（3回-1回）	平均値	0.7	0.5	0.5	0.6
高校2年生 第1回（4月） 第2回（9月） 第3回（2月）	2年第3回（159名）	平均値	3.6	3.7	3.8	3.6	3.7	3.5	3.7	2年第3回（171名）	平均値	2.9	2.8	3.1	2.9
	2年第2回（188名）	平均値	3.4	3.5	3.6	3.3	3.6	3.2	3.4	2年第2回（188名）	平均値	2.8	2.7	2.9	2.8
	2年第1回（195名）	平均値	3.1	3.2	3.4	2.9	3.4	2.9	3.2	2年第1回（195名）	平均値	2.5	2.4	2.6	2.5
	変化量（3回-1回）	平均値	0.5	0.5	0.4	0.7	0.3	0.6	0.5	変化量（3回-1回）	平均値	0.4	0.4	0.5	0.4
	1年第3回（141名）	平均値	3.4	3.4	3.5	3.5	3.5	3.1	3.4	1年第3回（142名）	平均値	3.0	3.0	3.0	3.0
	1年第2回（195名）	平均値	2.9	2.7	3.3	2.5	3.3	2.5	2.9	1年第2回（195名）	平均値	2.3	2.0	2.4	2.2
	1年第1回（199名）	平均値	3.0	3.0	2.0	3.0	3.0	3.0	2.8	1年第1回（199名）	平均値	2.0	2.0	1.5	1.8
	変化量（3回-1回）	平均値	0.4	0.4	1.5	0.5	0.5	0.1	0.6	変化量（3回-1回）	平均値	1	1	0.5	0.8
高校1年生 第1回（4月） 第2回（9月） 第3回（2月）	1年第3回（165名）	平均値	3.4	3.4	3.6	3.2	3.6	3.4	3.4	1年第3回（162名）	平均値	3.0	3.0	3.0	3.0
	1年第2回（170名）	平均値	2.9	3.0	3.3	2.8	3.3	2.9	3.0	1年第2回（170名）	平均値	2.4	2.4	2.5	2.4
	1年第1回（185名）	平均値	2.5	2.6	2.9	2.4	3.0	2.5	2.7	1年第1回（185名）	平均値	2.1	2.0	2.1	2.1
	変化量（3回-1回）	平均値	0.9	0.8	0.7	0.8	0.6	0.9	0.8	変化量（3回-1回）	平均値	0.9	1	0.9	0.9
中学3年生 第1回（4月） 第2回（9月） 第3回（2月）	3年第2回（118名）	平均値	3.8	3.9	4.1	3.7	3.9	3.8	3.9	3年第2回（118名）	平均値	3.0	2.8	3.2	3.0
	3年第1回（120名）	平均値	3.4	3.5	3.9	3.3	3.7	3.5	3.6	3年第1回（119名）	平均値	2.7	2.6	3.0	2.8
	変化量（2回-1回）	平均値	0.4	0.4	0.2	0.4	0.2	0.3	0.3	変化量（2回-1回）	平均値	0.3	0.2	0.2	0.2
	2年第3回（117名）	平均値	3.4	3.5	3.8	3.3	3.7	3.4	3.5	2年第3回（109名）	平均値	2.7	2.6	3.0	2.8
	2年第2回（117名）	平均値	3.3	3.3	3.6	3.2	3.5	3.2	3.4	2年第2回（117名）	平均値	2.7	2.5	2.8	2.7
	2年第1回（116名）	平均値	3.0	2.9	3.4	2.9	3.4	2.9	3.1	2年第1回（114名）	平均値	2.5	2.3	2.6	2.5
	変化量（3回-1回）	平均値	0.4	0.6	0.4	0.4	0.3	0.5	0.4	変化量（3回-1回）	平均値	0.2	0.3	0.4	0.3
	1年第3回（名）	平均値							#####	1年第3回（名）	平均値				#####
	1年第2回（119名）	平均値					2.7	2.6	2.7	1年第2回（116名）	平均値	2.3	2.2	2.3	2.3
	1年第1回（118名）	平均値					2.3	2.2	2.3	1年第1回（117名）	平均値	2.1	1.9	2.0	2.0
変化量（2回-1回）	平均値					0.4	0.4	0.4	変化量（2回-1回）	平均値	0.2	0.3	0.3	0.3	
中学2年生 第1回（4月） 第2回（9月） 第3回（2月）	2年第3回（119名）	平均値	3.5	3.7	3.9	3.6	3.8	3.7	3.7	2年第3回（118名）	平均値	2.8	2.7	3.0	2.8
	2年第2回（120名）	平均値	3.4	3.6	3.8	3.5	3.7	3.5	3.6	2年第2回（119名）	平均値	2.7	2.6	2.9	2.7
	2年第1回（120名）	平均値	3.2	3.4	3.5	3.3	3.5	3.3	3.4	2年第1回（118名）	平均値	2.6	2.5	2.7	2.6
	変化量（3回-1回）	平均値	0.3	0.3	0.4	0.3	0.3	0.4	0.3	変化量（3回-1回）	平均値	0.2	0.3	0.4	0.3
	1年第3回（名）	平均値							#####	1年第3回（名）	平均値				#####
	1年第2回（84名）	平均値	3.4	3.5	3.6	3.4	3.6	3.4	3.5	1年第2回（80名）	平均値	2.9	2.7	3.0	2.9
	1年第1回（83名）	平均値	2.9	2.9	3.1	2.7	3.2	2.7	2.9	1年第1回（79名）	平均値	2.6	2.4	2.5	2.5
変化量（2回-1回）	平均値	0.5	0.6	0.5	0.7	0.4	0.7	0.6	変化量（2回-1回）	平均値	0.3	0.3	0.5	0.4	
中学1年生 第1回（4月） 第2回（9月） 第3回（2月）	1年第3回（117名）	平均値	3.4	3.4	3.6	3.5	3.4	3.2	3.4	1年第3回（116名）	平均値	2.7	2.6	2.8	2.7
	1年第2回（118名）	平均値	3.2	3.2	3.4	3.2	3.2	3.0	3.2	1年第2回（117名）	平均値	2.6	2.5	2.6	2.6
	1年第1回（119名）	平均値	2.6	2.6	3.0	2.4	2.9	2.7	2.7	1年第1回（118名）	平均値	2.4	2.1	2.3	2.3
	変化量（3回-1回）	平均値	0.8	0.8	0.6	1.1	0.5	0.5	0.7	変化量（3回-1回）	平均値	0.3	0.5	0.5	0.4

※空欄はループリックの内容を変更したため

※黄色は未実施

2 事業の成果 【令和7年3月1日現在での分析結果】

(1) (6つの) 資質・能力の向上について

以下は、本校設定6つの資質・能力ルーブリック（5段階評価）の全6学年平均をまとめたものである。

学校平均 6つの	本校で育みたい資質・能力						G
	能力			資質(気質・特性・情意・態度)			平均
	造創①	考思②	ミコ③	究探④	働協⑤	ヤチ⑥	
A 各学年の第3回の平均数値(学年末・除6年)	3.5	3.6	3.7	3.5	3.6	3.5	3.6
B 各学年の第1回平均数値(開始当初)	3.0	3.0	3.4	2.9	3.3	3.0	3.1
C調査開始時からの伸び(3年間実施学年)	0.7	0.9	0.6	0.8	1.1	1.1	0.9
D 調査開始時からの伸び(2年間実施学年)	0.6	0.7	1.3	0.7	0.6	0.7	0.8
E調査開始時からの伸び(1年間実施学年)	0.85	0.8	0.65	0.95	0.55	0.7	0.8
F 調査開始時からの伸び(1～3年間平均)	0.7	0.8	0.8	0.8	0.7	0.8	0.8

*中3・高3の最終評価は第2回（2学期）とする。

3 分析

- ①AとBを見ると、資質・能力の「学年平均」（中1～高3までの6学年）は、第1回調査（春）から第3回（冬）にかけて6つの資質・能力の数値は開始当初よりも増加し、生徒が自己の成長を感じていることが分かる。
- ②G（表右端）の資質・能力の「学校平均」を見ると、第1回（春：B欄右端）の平均は3.1で、第3回（冬：A欄右端）は3.6となり、学校全体では0.5伸びており、学校（中高）全体で成長していることが分かる。
- ③C、D、Eで資質・能力の伸びをESD実施学年で検討すると、3年間実施した学年（中3、高3）ではルーブリック平均値の伸びが0.9、2年間実施した学年（高2）では0.8上昇、1年間実施した学年（中1、高1）では0.8上昇している。過去2年間で平均すると、実施年数が長い方が評価の上昇率が高くなると言える。また、令和4年度より3年間の伸び率を比較すると概ね上昇していることが分かる。

	3年間実施	2年間実施	1年間実施
令和6年度	0.9	0.8	0.8
令和5年度	1.3	1.2	0.6
令和4年度	1.0	1.0	0.3

- ④Fにより、どの学年も6つの資質・能力の自己評価の数値が開始当初から平均で0.8程度上昇しており、自己の確実な成長を生徒が認識していることが分かる。
- ⑤1年間を通して資質・能力が向上した生徒の割合（中2～高3）は、学校全体の平均上昇率は、34.3%である。中3・高3は第2回（秋）を最終評価としている。中1第3回未実施のため第2回のデータとなる。

	①～⑥の合計数が上昇した生徒割合		①～⑥の合計数が上昇した生徒割合
1年	33.3%	4年	57%
2年	21%	5年	38.2%
3年	18.7%	6年	37.5%

4 課題

中学1年生と高校1年生がそれぞれ3学年のなかでは上昇率が高く、入学に期待をもって学校生活に取り組んでいることが分かる。しかし、学年が上がるにつれて目標数値に到達している場合は上昇率に反映されにくい。

そのため、生徒に対して外発的な指導だけではなく、生徒自身が主体的に取り組める内発的な働きかけを教職員が意識して仕掛ける工夫が必要である。本校の持ち味を活かした教育環境（行事・部活・学級経営・生徒相互・施設設備・保護者の協力）を整備し、資質能力の向上や進路保障に向け、全教職員で日々授業改善を積極的に捉え、生徒実態に合わせた研修内容を充実させ取り組むことが必要である。

3-⑤ 教育効果等の分析サマリー（福山中学校）

実証研究概要	学校重点目標	創造的な知性と豊かな心の調和的発展を図り、国際社会に貢献できる人間を育成
	育成したい資質・能力	情報整理力、表現力、課題解決力、協働、自他の尊重、チャレンジ精神
	実証手法 （自己決定場面）	興味関心に応じたMy探究 - 各自の興味関心に基づいて探究テーマを決定（個別の問いや課題の設定） - 活動内容・方法・場所・時間・ペースなど全て自分で企画し、実行・振り返り・改善を繰り返す
	測定コンピテンシー	課題設定、論理的思考、創造性、実行力、自己効力、決断力、表現力、柔軟性など（AiGrow活用：R3.2）
	学力テスト	算数、国語、英語（ベネッセ：学力推移調査 R3.11）

①	資質・能力 の相関	➤ 自己決定するほど実行力や自己効力が高まり、実行するほど自己効力が高まる傾向あり。 ➤ その他、実行力と課題設定・論理的思考・耐性・柔軟性にも相関が見られた。		
		区 分	内 容	割合
		決断力－実行力	決断力が伸びた生徒(52%)のうち、実行力も伸びた生徒	73%
		決断力－自己効力	決断力が伸びた生徒(52%)のうち、自己効力も伸びた生徒	74%
		実行力－自己効力	実行力が伸びた生徒(52%)のうち、自己効力も伸びた生徒	77%

②	資質・能力 の変容	＜各コンピテンシーが向上した生徒割合＞
		・自分がやりたいことについて自分で目標を設定し、達成に向けて工夫しながら取り組むことで、6割近い生徒の「創造性」「ヴィジョン」「柔軟性」などが伸びた。 ・自分のプロジェクトを進めるために、いつ、どこで、何をすべきか、全て自己決定し、試行錯誤しながら粘り強く実行・改善を繰り返すことで過半数の生徒の「決断力」「実行力」「自己効力」「耐性」などが伸びた。

(2) 過去の記録

8年目(令和5年度・2023年度)

各学年の回ごとのルーブリック平均値

*令和5年度（第3回・冬）ルーブリック評価（まとめ） *中3、高3の最終評価は第2回（2学期）。

*表の空欄…ルーブリックの内容を学校ビジョンに合わせて今年度より変更したため該当項目なし。

*表の黄色…未実施。

年次	項目1		本校で育みたい資質・能力						全体	項目2		ESD3プロジェクト			全体
			能力		資質(気質・特性・情意・態度)							①地域課題解決(力)	②国際課題解決(力)	③生き方・在り方探究(力)	
			①創造力	②思考力	③コミュニケーション力	④探究心	⑤協働	⑥チャレンジ精神							
高校3年生	3年第2回(132名)	平均値	3.5	3.6	3.6	3.6	3.6	3.4	3.6	3年第2回(132名)	平均値	3.1	2.9	3.2	3.1
	3年第1回(160名)	平均値	3.1	3.3	3.3	3.2	3.4	3.2	3.3	3年第1回(160名)	平均値	3.0	3.0	3.0	3.0
	変化量(2回-1回)	平均値	0.4	0.3	0.3	0.4	0.2	0.2	0.3	変化量(2回-1回)	平均値	0.1	-0.1	0.2	0.1
	2年第3回(186名)	平均値					3.0	2.9	3.0	2年第3回(186名)	平均値	2.8	2.6	2.8	2.7
	2年第2回(186名)	平均値					2.8	2.8	2.8	2年第2回(186名)	平均値	2.7	2.4	2.7	2.6
	2年第1回(190名)	平均値					2.5	2.5	2.5	2年第1回(190名)	平均値	2.4	2.2	2.4	2.3
	変化量(3回-1回)	平均値					0.5	0.4	0.5	変化量(3回-1回)	平均値	0.4	0.4	0.4	0.4
	1年第3回(183名)	平均値					2.6	2.5	2.6	1年第3回(183名)	平均値	2.6	2.3	2.5	2.5
	1年第2回(193名)	平均値					2.3	2.3	2.3	1年第2回(193名)	平均値	2.3	2.1	2.2	2.2
	1年第1回(193名)	平均値					2.0	2.1	2.1	1年第1回(193名)	平均値	1.8	1.8	1.8	1.8
高校2年生	2年第3回(192名)	平均値	3.2	3.2	3.5	3.1	3.4	3.0	3.2	2年第3回(192名)	平均値	2.8	2.7	2.9	2.8
	2年第2回(191名)	平均値	3.0	2.9	3.4	2.9	3.4	2.9	3.1	2年第2回(189名)	平均値	2.7	2.6	2.8	2.7
	2年第1回(184名)	平均値	2.8	2.7	3.3	2.7	3.2	2.7	2.9	2年第1回(188名)	平均値	2.6	2.4	2.5	2.5
	変化量(3回-1回)	平均値	0.4	0.4	0.2	0.4	0.2	0.3	0.3	変化量(3回-1回)	平均値	0.2	0.3	0.4	0.3
	1年第3回(195名)	平均値					2.9	2.6	2.8	1年第3回(195名)	平均値	2.8	2.5	2.5	2.6
	1年第2回(197名)	平均値					2.7	2.4	2.6	1年第2回(195名)	平均値	2.5	2.3	2.3	2.4
	1年第1回(200名)	平均値					2.4	2.1	2.3	1年第1回(196名)	平均値	2.1	2.0	2.0	2.0
	変化量(3回-1回)	平均値					0.5	0.5	0.5	変化量(3回-1回)	平均値	0.7	0.5	0.5	0.6
	1年第3回(141名)	平均値	3.4	3.4	3.5	3.5	3.5	3.1	3.4	1年第3回(142名)	平均値	3.0	3.0	3.0	3.0
	1年第2回(195名)	平均値	2.9	2.7	3.3	2.5	3.3	2.5	2.9	1年第2回(195名)	平均値	2.3	2.0	2.4	2.2
高校1年生	1年第1回(199名)	平均値	3.0	3.0	2.0	3.0	3.0	3.0	2.8	1年第1回(199名)	平均値	2.0	2.0	1.5	1.8
	変化量(3回-1回)	平均値	0.4	0.4	1.5	0.5	0.5	0.1	0.6	変化量(3回-1回)	平均値	1	1	0.5	0.8
	3年第2回(106名)	平均値	3.0	3.2	3.4	2.9	3.4	3.0	3.2	3年第2回(134名)	平均値	2.4	2.4	2.5	2.4
	3年第1回(111名)	平均値	2.7	2.7	3.0	2.5	3.1	2.5	2.8	3年第1回(109名)	平均値	2.3	2.2	2.2	2.2
	変化量(2回-1回)	平均値	0.3	0.5	0.4	0.4	0.3	0.5	0.4	変化量(2回-1回)	平均値	0.1	0.2	0.3	0.2
	2年第3回(112名)	平均値					3.2	3.0	3.1	2年第3回(113名)	平均値	2.8	2.7	2.7	2.7
	2年第2回(109名)	平均値					3.2	3.0	3.1	2年第2回(110名)	平均値	2.6	2.6	2.6	2.6
	2年第1回(120名)	平均値					2.9	2.6	2.8	2年第1回(120名)	平均値	2.6	2.5	2.4	2.5
	変化量(3回-1回)	平均値					0.3	0.4	0.4	変化量(3回-1回)	平均値	0.1	0.1	0.1	0.1
	1年第3回(113名)	平均値					2.8	2.6	2.7	1年第3回(114名)	平均値	2.5	2.3	2.4	2.4
中学3年生	1年第2回(114名)	平均値					2.5	2.3	2.4	1年第2回(115名)	平均値	2.3	2.1	2.2	2.2
	1年第1回(120名)	平均値					2.2	2.1	2.2	1年第1回(120名)	平均値	2.1	1.9	1.8	1.9
	変化量(3回-1回)	平均値					0.6	0.5	0.6	変化量(3回-1回)	平均値	0.2	0.2	0.3	0.2
	2年第3回(117名)	平均値	3.4	3.5	3.8	3.3	3.7	3.4	3.5	2年第3回(109名)	平均値	2.7	2.6	3.0	2.8
	2年第2回(117名)	平均値	3.3	3.3	3.6	3.2	3.5	3.2	3.4	2年第2回(117名)	平均値	2.7	2.5	2.8	2.7
	2年第1回(116名)	平均値	3.0	2.9	3.4	2.9	3.4	2.9	3.1	2年第1回(114名)	平均値	2.5	2.3	2.6	2.5
	変化量(3回-1回)	平均値	0.4	0.6	0.4	0.4	0.3	0.5	0.4	変化量(3回-1回)	平均値	0.2	0.3	0.4	0.3
	1年第3回(名)	平均値							#####	1年第3回(名)	平均値				#####
	1年第2回(119名)	平均値					2.7	2.6	2.7	1年第2回(116名)	平均値	2.3	2.2	2.3	2.3
	1年第1回(118名)	平均値					2.3	2.2	2.3	1年第1回(117名)	平均値	2.1	1.9	2.0	2.0
中学2年生	変化量(2回-1回)	平均値					0.4	0.4	0.4	変化量(2回-1回)	平均値	0.2	0.3	0.3	0.3
	1年第3回(名)	平均値							#####	1年第3回(名)	平均値				#####
	1年第2回(84名)	平均値	3.4	3.5	3.6	3.4	3.6	3.4	3.5	1年第2回(80名)	平均値	2.9	2.7	3.0	2.9
	1年第1回(83名)	平均値	2.9	2.9	3.1	2.7	3.2	2.7	2.9	1年第1回(79名)	平均値	2.6	2.4	2.5	2.5
	変化量(2回-1回)	平均値	0.5	0.6	0.5	0.7	0.4	0.7	0.6	変化量(2回-1回)	平均値	0.3	0.3	0.5	0.4
	1年第3回(名)	平均値							#####	1年第3回(名)	平均値				#####
	1年第2回(84名)	平均値	3.4	3.5	3.6	3.4	3.6	3.4	3.5	1年第2回(80名)	平均値	2.9	2.7	3.0	2.9
	1年第1回(83名)	平均値	2.9	2.9	3.1	2.7	3.2	2.7	2.9	1年第1回(79名)	平均値	2.6	2.4	2.5	2.5
	変化量(2回-1回)	平均値	0.5	0.6	0.5	0.7	0.4	0.7	0.6	変化量(2回-1回)	平均値	0.3	0.3	0.5	0.4
	1年第3回(名)	平均値							#####	1年第3回(名)	平均値				#####

1 事業の成果 【令和6年3月1日現在での分析結果】

(1) (6つの) 資質・能力の向上について

以下は、本校設定6つの資質・能力ルーブリック（5段階評価）の全6学年平均をまとめたものである。

学校平均 6つの	本校で育みたい資質・能力						G
	能力			資質(気質・特性・情意・態度)			平均
	造創①	考思②	ミコ③	究探④	働協⑤	ヤチ⑥	
A 各学年の第3回の平均数値(学年末・除6年)	3.3	3.4	3.6	3.3	3.5	3.2	3.4
B 各学年の第1回平均数値(開始当初)	2.9	2.9	3.0	2.8	3.2	2.8	2.9
C 調査開始時からの伸び(3年間実施学年)					1.4	1.1	1.3
D 調査開始時からの伸び(2年間実施学年)					1.2	1.1	1.2
E 調査開始時からの伸び(1年間実施学年)	0.45	0.5	1	0.6	0.45	0.4	0.6
F 調査開始時からの伸び(1～3年間平均)	0.5	0.5	1.0	0.6	1.0	1	0.8

*中3・高3の最終評価は第2回（2学期）とする。*空欄は今年度よりルーブリック項目変更のため。

	3年間実施	2年間実施	1年間実施
令和5年度	1.3	1.2	0.6
令和4年度	1.0	1.0	0.3
令和3年度	0.9	0.7	0.3

	①～⑥の合計数が上昇した生徒割合		①～⑥の合計数が上昇した生徒割合
1年	22.3%	4年	49.7%
2年	28%	5年	39%
3年	21.8%	6年	18.8%

7年目(令和4年度・2022年度)

年次	項目1		本校で育みたい資質・能力						全体	項目2		ESD3プロジェクト			全体
			① 情報 整理 力	② 表 現 力	③ 課 題 解 決 力	④ 協 働	⑤ 自 他 の 尊 重	⑥ チ ャ レ ン ジ 精 神				① 地 域 課 題 解 決 (力)	② 国 際 課 題 解 決 (力)	③ 生 き 方 (在 り 方 探 究 (力))	
高校3年生	3年第2回 (180名)	平均値	3.3	3.2	3.2	3.2	3.2	3.1	3.2	3年第2回 (178名)	平均値	2.9	2.6	2.9	2.8
	3年第1回 (187名)	平均値	3.1	2.9	2.9	3.0	2.9	2.8	2.9	3年第1回 (113名)	平均値	2.8	2.6	2.8	2.7
	変化量 (2回-1回)	平均値	0.2	0.3	0.3	0.2	0.3	0.3	0.3	変化量 (2回-1回)	平均値	0.1	0	0.1	0.1
	2年第3回 (159名)	平均値	3.2	3.0	2.9	3.0	3.0	2.8	3.0	2年第3回 (158名)	平均値	3.0	2.6	2.8	2.8
	2年第2回 (159名)	平均値	3.0	2.8	3.2	2.9	2.9	2.7	2.9	2年第2回 (159名)	平均値	2.8	2.5	2.7	2.7
	2年第1回 (158名)	平均値	2.7	2.7	2.5	2.8	2.7	2.6	2.7	2年第1回 (160名)	平均値	2.6	2.3	2.5	2.5
	変化量 (3回-1回)	平均値	0.3	0.2	0.2	0.1	0.3	0.1	0.2	変化量 (3回-1回)	平均値	0.2	0.2	0.2	0.2
	1年第3回 (189名)	平均値	2.9	2.8	2.6	3.0	2.8	2.7	2.8	1年第3回 (190名)	平均値	2.7	2.4	2.5	2.5
	1年第2回 (190名)	平均値	2.8	2.6	2.5	2.7	2.7	2.5	2.6	1年第2回 (186名)	平均値	2.5	2.3	2.3	2.4
	1年第1回 (197名)	平均値	2.3	2.2	2.2	2.3	2.4	2.2	2.3	1年第1回 (197名)	平均値	2.2	2.1	2.0	2.1
高校2年生	変化量 (3回-1回)	平均値	0.3	0.3	0.2	0.4	0.2	0.3	0.3	変化量 (3回-1回)	平均値	0.3	0.2	0.3	0.3
	2年第3回 (186名)	平均値	3.1	2.9	2.9	3.0	2.9	2.9	3.0	2年第3回 (186名)	平均値	2.8	2.6	2.8	2.7
	2年第2回 (186名)	平均値	2.9	2.7	2.7	2.8	2.8	2.8	2.8	2年第2回 (186名)	平均値	2.7	2.4	2.7	2.6
	2年第1回 (190名)	平均値	2.7	2.4	2.4	2.5	2.6	2.5	2.5	2年第1回 (190名)	平均値	2.4	2.2	2.4	2.3
	変化量 (3回-1回)	平均値	0.2	0.2	0.2	0.2	0.1	0.2	0.2	変化量 (3回-1回)	平均値	0.2	0.2	0.2	0.2
	1年第3回 (183名)	平均値	2.7	2.6	2.5	2.6	2.7	2.5	2.6	1年第3回 (185名)	平均値	2.6	2.3	2.5	2.5
	1年第2回 (193名)	平均値	2.4	2.2	2.2	2.3	2.4	2.3	2.3	1年第2回 (195名)	平均値	2.3	2.1	2.2	2.2
	1年第1回 (193名)	平均値	1.9	1.9	1.8	2.0	2.1	2.1	2.0	1年第1回 (195名)	平均値	1.8	1.8	1.8	1.8
	変化量 (3回-1回)	平均値	0.4	0.4	0.4	0.3	0.3	0.2	0.3	変化量 (3回-1回)	平均値	0.4	0.3	0.4	0.4
	1年第3回 (195名)	平均値	2.8	2.7	2.6	2.9	2.9	2.6	2.8	1年第3回 (195名)	平均値	2.8	2.5	2.5	2.6
高校1年生	1年第2回 (197名)	平均値	2.5	2.5	2.3	2.7	2.7	2.4	2.5	1年第2回 (195名)	平均値	2.5	2.3	2.3	2.4
	1年第1回 (200名)	平均値	2.3	2.1	2.1	2.4	2.4	2.1	2.2	1年第1回 (196名)	平均値	2.1	2.0	2.0	2.0
	変化量 (3回-1回)	平均値	0.3	0.3	0.3	0.2	0.2	0.2	0.3	変化量 (3回-1回)	平均値	0.3	0.2	0.2	0.2
	3年第2回 (113名)	平均値	3.2	3.0	3.0	3.1	3.0	3.2	3.1	3年第2回 (113名)	平均値	2.6	2.6	2.8	2.7
	3年第1回 (116名)	平均値	3.0	2.9	2.7	3.0	2.8	3.0	2.9	3年第1回 (116名)	平均値	2.4	2.5	2.6	2.5
	変化量 (2回-1回)	平均値	0.1	0.1	0.2	0.1	0.1	0.1	0.1	変化量 (2回-1回)	平均値	0.1	0.1	0.1	0.1
	2年第3回 (77名)	平均値	2.9	2.8	2.7	2.9	2.8	2.8	2.8	2年第3回 (77名)	平均値	2.4	2.5	2.5	2.5
	2年第2回 (77名)	平均値	2.7	2.6	2.5	2.6	2.7	2.6	2.6	2年第2回 (77名)	平均値	2.2	2.3	2.3	2.3
	2年第1回 (80名)	平均値	2.1	2.0	2.0	2.2	2.0	2.0	2.1	2年第1回 (80名)	平均値	1.8	1.8	1.7	1.8
	変化量 (3回-1回)	平均値	0.4	0.4	0.4	0.4	0.4	0.4	0.4	変化量 (3回-1回)	平均値	0.3	0.4	0.4	0.4
中学3年生	1年第3回 (名)	平均値								1年第3回 (名)	平均値				
	1年第2回 (名)	平均値								1年第2回 (名)	平均値				
	1年第1回 (名)	平均値								1年第1回 (名)	平均値				
	変化量 (3回-1回)	平均値								変化量 (3回-1回)	平均値				
	2年第3回 (112名)	平均値	3.4	3.0	2.7	3.2	3.0	3.0	3.1	2年第3回 (113名)	平均値	2.8	2.7	2.7	2.7
	2年第2回 (109名)	平均値	3.2	3.0	2.7	3.2	2.9	3.0	3.0	2年第2回 (110名)	平均値	2.6	2.6	2.6	2.6
	2年第1回 (120名)	平均値	3.0	2.7	2.5	2.9	2.7	2.6	2.7	2年第1回 (120名)	平均値	2.6	2.5	2.4	2.5
	変化量 (3回-1回)	平均値	0.2	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	変化量 (3回-1回)	平均値	0.1	0.1	0.1	0.1
	1年第3回 (113名)	平均値	2.9	2.6	2.4	2.8	2.6	2.6	2.7	1年第3回 (114名)	平均値	2.5	2.3	2.4	2.4
	1年第2回 (114名)	平均値	2.6	2.4	2.2	2.5	2.4	2.3	2.4	1年第2回 (115名)	平均値	2.3	2.1	2.2	2.2
中学2年生	1年第1回 (120名)	平均値	2.1	2.1	1.9	2.2	2.2	2.1	2.1	1年第1回 (120名)	平均値	2.1	1.9	1.8	1.9
	変化量 (3回-1回)	平均値	0.4	0.3	0.3	0.3	0.2	0.3	0.3	変化量 (3回-1回)	平均値	0.2	0.2	0.3	0.2
	1年第3回 (名)	平均値							#####	1年第3回 (名)	平均値				#####
	1年第2回 (119名)	平均値	2.8	2.5	2.3	2.7	2.6	2.6	2.6	1年第2回 (116名)	平均値	2.3	2.2	2.3	2.3
	1年第1回 (118名)	平均値	2.1	2.0	1.9	2.3	2.3	2.2	2.1	1年第1回 (117名)	平均値	2.1	1.9	2.0	2.0
	変化量 (3回-1回)	平均値	0.4	0.3	0.2	0.2	0.2	0.2	0.3	変化量 (3回-1回)	平均値	0.1	0.2	0.2	0.2
	1年第3回 (名)	平均値							#####	1年第3回 (名)	平均値				#####
	1年第2回 (119名)	平均値	2.8	2.5	2.3	2.7	2.6	2.6	2.6	1年第2回 (116名)	平均値	2.3	2.2	2.3	2.3
	1年第1回 (118名)	平均値	2.1	2.0	1.9	2.3	2.3	2.2	2.1	1年第1回 (117名)	平均値	2.1	1.9	2.0	2.0
	変化量 (3回-1回)	平均値	0.4	0.3	0.2	0.2	0.2	0.2	0.3	変化量 (3回-1回)	平均値	0.1	0.2	0.2	0.2
	1年第3回 (名)	平均値							#####	1年第3回 (名)	平均値				#####

1 事業の成果 【令和5年3月1日現在での分析結果】

(1) (6つの) 資質・能力の向上について【令和6年3月1日現在での分析結果】

以下は、本校設定6つの資質・能力ルーブリック（5段階評価）の全6学年平均をまとめたものである。

学校平均 6つの資質・能力		本校で育みたい資質・能力						G 平均	
		能力			資質（気質・特性・情意・態度）				
		① 情報 整理 力	② 表現 力	③ 課題 解決 力	④ 協働	⑤ 自他 の尊 重	⑥ チャ レン ジ精 神		
A	各学年の第3回	の平均数値（学年末・除3、6年）	3.1	2.9	2.7	3.0	2.9	2.8	2.9
B	各学年の第1回	平均数値（開始当初）	2.7	2.5	2.4	2.7	2.6	2.5	2.6
C	調査開始時から	の伸び（3年間実施学年）	1.1	1.0	1.0	0.9	0.9	1.1	1.0
D	調査開始時から	の伸び（2年間実施学年）	1.3	0.9	1.0	1.0	0.8	0.9	1.0
E	調査開始時から	の伸び（1年間実施学年）	0.4	0.3	0.3	0.2	0.2	0.2	0.3
F	調査開始時から	の伸び（1～3年間平均）	0.9	1.0	0.7	0.7	0.6	0.7	0.7

*中3・高3の最終評価は第2回（2学期）とする。

	3年間実施	2年間実施	1年間実施
令和4年度	1.0	1.0	0.3
令和3年度	0.9	0.7	0.3

	①～⑥の合計数が上昇した生徒割合		①～⑥の合計数が上昇した生徒割合
1年	28.7%	4年	73.8%
2年	49.2%	5年	66.8%
3年	15.0%	6年	21.0%

6年目(令和3年度・2021年度)

年次	項目1	本校で育みたい資質・能力							全体	項目2	ESD3プロジェクト				全体
		① 情報 整理 力	能力 ②表 現 力	③ 課題 解決 力	資質(気質・特性・情意・態度)						① 地域 課題 解決 (力)	② 国際 課題 解決 (力)	③ 生き方・ 存続(探究) (力)		
					④ 協働	⑤ 自他の 尊重	⑥ チャレ ンジ 精神								
高校3年生	3年第2回 (183名)	平均値	3.5	3.2	3.1	3.2	3.2	3.2	3.2	3年第2回 (183名)	平均値	3.1	2.8	3.0	3.0
	3年第1回 (185名)	平均値	3.2	2.9	2.9	3.1	3.0	3.0	3.0	3年第1回 (186名)	平均値	2.8	2.6	2.8	2.7
	変化量 (2回-1回)	平均値	0.2	0.2	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	変化量 (2回-1回)	平均値	0.2	0.1	0.2	0.2
	2年第3回 (180名)	平均値	3.3	3.1	3.0	3.1	3.0	3.0	3.1	2年第3回 (180名)	平均値	3.0	2.6	2.9	2.8
	2年第2回 (176名)	平均値	3.2	3.0	2.9	3.1	2.9	2.9	3.0	2年第2回 (175名)	平均値	3.0	2.5	2.7	2.7
	2年第1回 (187名)	平均値	2.8	2.6	2.5	2.8	2.7	2.6	2.7	2年第1回 (187名)	平均値	2.6	2.3	2.4	2.4
	変化量 (3回-1回)	平均値	0.3	0.3	0.3	0.2	0.2	0.2	0.3	変化量 (3回-1回)	平均値	0.2	0.2	0.3	0.2
	1年第3回 (192名)	平均値	2.9	2.7	2.6	2.9	2.9	2.7	2.8	1年第3回 (176名)	平均値	2.8	2.4	2.5	2.6
	1年第2回 (191名)	平均値	2.7	2.7	2.5	2.9	2.6	2.6	2.7	1年第2回 (181名)	平均値	2.6	2.2	2.3	2.4
	1年第1回 (192名)	平均値	2.3	2.2	2.1	2.5	2.3	2.2	2.3	1年第1回 (189名)	平均値	2.0	1.9	2.0	2.0
高校2年生	変化量 (3回-1回)	平均値	0.3	0.3	0.3	0.2	0.2	0.3	0.3	変化量 (3回-1回)	平均値	0.4	0.3	0.3	0.3
	2年第3回 (158名)	平均値	3.2	3.0	2.9	3.0	3.0	2.8	3.0	2年第3回 (158名)	平均値	3.0	2.6	2.8	2.8
	2年第2回 (159名)	平均値	3.0	2.8	3.2	2.9	2.9	2.7	2.9	2年第2回 (159名)	平均値	2.8	2.5	2.7	2.7
	2年第1回 (158名)	平均値	2.7	2.7	2.5	2.8	2.7	2.6	2.7	2年第1回 (160名)	平均値	2.6	2.3	2.5	2.5
	変化量 (3回-1回)	平均値	0.3	0.2	0.2	0.1	0.3	0.1	0.2	変化量 (3回-1回)	平均値	0.2	0.2	0.2	0.2
	1年第3回 (189名)	平均値	2.9	2.8	2.6	3.0	2.8	2.7	2.8	1年第3回 (190名)	平均値	2.7	2.4	2.5	2.5
	1年第2回 (190名)	平均値	2.8	2.6	2.5	2.7	2.7	2.5	2.6	1年第2回 (186名)	平均値	2.5	2.3	2.3	2.4
	1年第1回 (197名)	平均値	2.3	2.2	2.2	2.3	2.4	2.2	2.3	1年第1回 (197名)	平均値	2.2	2.1	2.0	2.1
	変化量 (3回-1回)	平均値	0.3	0.3	0.2	0.4	0.2	0.3	0.3	変化量 (3回-1回)	平均値	0.3	0.2	0.3	0.3
	1年第3回 (183名)	平均値	2.7	2.6	2.5	2.6	2.7	2.5	2.6	1年第3回 (185名)	平均値	2.6	2.3	2.5	2.5
高校1年生	1年第2回 (193名)	平均値	2.4	2.2	2.2	2.3	2.4	2.3	2.3	1年第2回 (195名)	平均値	2.3	2.1	2.2	2.2
	1年第1回 (193名)	平均値	1.9	1.9	1.8	2.0	2.1	2.1	2.0	1年第1回 (195名)	平均値	1.8	1.8	1.8	1.8
	変化量 (3回-1回)	平均値	0.4	0.4	0.4	0.3	0.3	0.2	0.3	変化量 (3回-1回)	平均値	0.4	0.3	0.4	0.4
		平均値							#####		平均値				#####
	3年第2回 (111名)	平均値	3.4	3.3	3.0	3.4	3.2	3.3	3.3	3年第2回 (113名)	平均値	3.2	3.0	3.2	3.1
中学3年生	3年第1回 (114名)	平均値	3.1	2.9	2.7	3.1	2.9	3.0	3.0	3年第1回 (113名)	平均値	3.0	2.7	2.9	2.9
	変化量 (2回-1回)	平均値	0.2	0.2	0.2	0.2	0.2	0.2	0.2	変化量 (2回-1回)	平均値	0.1	0.2	0.2	0.2
	2年第3回 (111名)	平均値	3.4	3.2	3.0	3.3	3.3	3.3	3.3	2年第3回 (名)	平均値	3.0	2.9	3.1	3.0
	2年第2回 (114名)	平均値	3.3	3.0	2.9	3.3	3.2	3.1	3.1	2年第2回 (名)	平均値	2.9	2.8	2.9	2.9
	2年第1回 (117名)	平均値	3.3	2.8	2.7	3.2	3.1	2.9	3.0	2年第1回 (名)	平均値	2.8	2.5	2.8	2.7
	変化量 (3回-1回)	平均値	0.1	0.2	0.2	0.1	0.2	0.2	0.2	変化量 (3回-1回)	平均値	0.1	0.2	0.2	0.2
	1年第3回 (114名)	平均値	3.3	3.0	2.9	3.3	3.2	3.1	3.1	1年第3回 (114名)	平均値	3.1	2.6	2.8	2.8
	1年第2回 (115名)	平均値	3.1	2.9	2.6	3.2	3	2.9	3.0	1年第2回 (115名)	平均値	2.8	2.6	2.7	2.7
	1年第1回 (119名)	平均値	2.7	2.5	2.3	2.8	2.7	2.6	2.6	1年第1回 (119名)	平均値	2.6	2.4	2.3	2.4
	変化量 (3回-1回)	平均値	0.3	0.3	0.3	0.3	0.3	0.3	0.3	変化量 (3回-1回)	平均値	0.3	0.1	0.3	0.2
中学2年生	2年第3回 (77名)	平均値	2.9	2.8	2.7	2.9	2.8	2.8	2.8	2年第3回 (77名)	平均値	2.4	2.5	2.5	2.5
	2年第2回 (77名)	平均値	2.7	2.6	2.5	2.6	2.7	2.6	2.6	2年第2回 (77名)	平均値	2.2	2.3	2.3	2.3
	2年第1回 (80名)	平均値	2.1	2.0	2.0	2.2	2.0	2.0	2.1	2年第1回 (80名)	平均値	1.8	1.8	1.7	1.8
	変化量 (3回-1回)	平均値	0.4	0.4	0.4	0.4	0.4	0.4	0.4	変化量 (3回-1回)	平均値	0.3	0.4	0.4	0.4
	1年第3回 (名)	平均値								1年第3回 (名)	平均値				
	1年第2回 (名)	平均値								1年第2回 (名)	平均値				
	1年第1回 (名)	平均値								1年第1回 (名)	平均値				
	変化量 (3回-1回)	平均値								変化量 (3回-1回)	平均値				
中学1年生	1年第3回 (113名)	平均値	2.9	2.6	2.4	2.8	2.6	2.6	2.7	1年第3回 (114名)	平均値	2.5	2.3	2.4	2.4
	1年第2回 (114名)	平均値	2.6	2.4	2.2	2.5	2.4	2.3	2.4	1年第2回 (115名)	平均値	2.3	2.1	2.2	2.2
	1年第1回 (120名)	平均値	2.1	2.1	1.9	2.2	2.2	2.1	2.1	1年第1回 (120名)	平均値	2.1	1.9	1.8	1.9
	変化量 (3回-1回)	平均値	0.4	0.3	0.3	0.3	0.2	0.3	0.3	変化量 (3回-1回)	平均値	0.2	0.2	0.3	0.2

1 事業の成果 【令和4年3月1日現在での分析結果】

(1) (6つの) 資質・能力の向上について

以下は、本校設定6つの資質・能力ルーブリック（5段階評価）の全6学年平均をまとめたものである。

学校平均 6つの資質・能力		本校で育みたい資質・能力						G 平均
		能力			資質（気質・特性・情意・態度）			
		① 情報 整理 力	② 表現 力	③ 課題 解決 力	④ 協 働	⑤ 自他 の尊 重	⑥ チャ レン ジ 精 神	
A 各学年の第3回	の平均数値（学年末・除3、6年）	3.1	2.9	2.7	2.9	2.9	2.8	2.9
B 各学年の第1回	平均数値（開始当初）	2.3	2.2	2.1	2.4	2.3	2.2	2.2
C 調査開始時から	の伸び（3年間実施学年）	1.5	0.9	0.9	0.7	0.7	0.9	0.9
D 調査開始時から	の伸び（2年間実施学年）	0.9	0.8	0.7	0.7	0.6	0.6	0.7
E 調査開始時から	の伸び（1年間実施学年）	0.4	0.35	0.35	0.3	0.25	0.25	0.3
F 調査開始時から	の伸び（1～3年間平均）	0.9	0.68	0.6	0.55	0.5	0.57	0.6

5年目(令和2年度・2020年度)

①令和2年度(第3回・冬)ルーブリック評価(まとめ)

＊中3、高3の最終評価は第2回(2学期)とする。

年次	項目1		本校で育みたい資質・能力							全体	項目2		ESD3プロジェクト			全体
			① 情報 整理 力	② 表 現 力	③ 課 題 解 決 力	資質(気質・特性・情意・態度)							① 地 域 課 題 解 決 (力)	② 国 際 課 題 解 決 (力)	③ 生 き 方 ・ 在 り 方 探 究 (力)	
						④ 協 働	⑤ 自 他 の 尊 重	⑥ チ ャ レ ン ジ 精 神								
高校3年生	第1回 (4月) 第2回 (9月) 第3回 (3月)	3年第2回 (117名)	平均値	2.9	2.8	2.7	2.9	2.8	2.8	2.8	3年第2回 (144名)	平均値	2.4	2.5	2.5	2.5
		3年第1回 (185名)	平均値	2.8	2.7	2.6	2.8	2.7	2.6	2.7	3年第1回 (179名)	平均値	2.5	2.6	2.6	2.6
		変化量 (2回-1回)	平均値	0.2	0.1	0.1	0.1	0.2	0.2	0.2	変化量 (2回-1回)	平均値	0.2	0.1	0.2	0.2
		2年第3回 (195名)	平均値	2.7	2.7	2.6	2.8	2.8	2.7	2.7	2年第3回 (192名)	平均値	2.5	2.5	2.6	2.5
		2年第2回 (191名)	平均値	2.6	2.5	2.4	2.6	2.6	2.4	2.5	2年第2回 (189名)	平均値	2.3	2.3	2.3	2.3
		2年第1回 (195名)	平均値	2.4	2.4	2.3	2.5	2.5	2.3	2.4	2年第1回 (195名)	平均値	2.2	2.2	2.2	2.2
		変化量 (3回-1回)	平均値	0.3	0.3	0.3	0.3	0.3	0.4	0.3	変化量 (3回-1回)	平均値	0.3	0.3	0.3	0.3
		1年第3回 (198名)	平均値	2.6	2.6	2.3	2.7	2.6	2.4	2.5	1年第3回 (196名)	平均値	2.4	2.3	2.4	2.4
		1年第2回 (195名)	平均値	2.3	2.3	2.2	2.5	2.4	2.2	2.3	1年第2回 (195名)	平均値	2.1	2.1	2.2	2.1
		1年第1回 (198名)	平均値	2	2	1.9	2.2	2.2	1.9	2.0	1年第1回 (198名)	平均値	1.8	1.9	2	1.9
		変化量 (3回-1回)	平均値	0.6	0.6	0.4	0.5	0.4	0.5	0.5	変化量 (3回-1回)	平均値	0.6	0.4	0.4	0.5
高校2年生	第1回 (4月) 第2回 (9月) 第3回 (3月)	2年第3回 (180名)	平均値	3.3	3.1	3.0	3.1	3.0	3.0	3.1	2年第3回 (180名)	平均値	3.0	2.6	2.9	2.8
		2年第2回 (176名)	平均値	3.2	3.0	2.9	3.1	2.9	2.9	3.0	2年第2回 (175名)	平均値	3.0	2.5	2.7	2.7
		2年第1回 (187名)	平均値	2.8	2.6	2.5	2.8	2.7	2.6	2.7	2年第1回 (187名)	平均値	2.6	2.3	2.4	2.4
		変化量 (3回-1回)	平均値	0.3	0.3	0.3	0.3	0.3	0.4	0.3	変化量 (3回-1回)	平均値	0.3	0.3	0.3	0.3
		1年第3回 (192名)	平均値	2.9	2.7	2.6	2.9	2.9	2.7	2.8	1年第3回 (176名)	平均値	2.8	2.4	2.5	2.6
		1年第2回 (191名)	平均値	2.7	2.7	2.5	2.9	2.6	2.6	2.7	1年第2回 (181名)	平均値	2.6	2.2	2.3	2.4
		1年第1回 (192名)	平均値	2.3	2.2	2.1	2.5	2.3	2.2	2.3	1年第1回 (189名)	平均値	2.0	1.9	2.0	2.0
		変化量 (3回-1回)	平均値	0.6	0.6	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	変化量 (3回-1回)	平均値	0.6	0.5	0.5	0.5
		1年第3回 (189名)	平均値	2.9	2.8	2.6	3.0	2.8	2.7	2.8	1年第3回 (190名)	平均値	2.7	2.4	2.5	2.5
		1年第2回 (190名)	平均値	2.8	2.6	2.5	2.7	2.7	2.5	2.6	1年第2回 (186名)	平均値	2.5	2.3	2.3	2.4
		1年第1回 (197名)	平均値	2.3	2.2	2.2	2.3	2.4	2.2	2.3	1年第1回 (197名)	平均値	2.2	2.1	2.0	2.1
変化量 (3回-1回)	平均値	0.6	0.6	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	変化量 (3回-1回)	平均値	0.6	0.5	0.5	0.5		
高校1年生	第1回 (4月) 第2回 (9月) 第3回 (3月)	1年第3回 (189名)	平均値	2.9	2.8	2.6	3.0	2.8	2.7	2.8	1年第3回 (190名)	平均値	2.7	2.4	2.5	2.5
		1年第2回 (190名)	平均値	2.8	2.6	2.5	2.7	2.7	2.5	2.6	1年第2回 (186名)	平均値	2.5	2.3	2.3	2.4
		1年第1回 (197名)	平均値	2.3	2.2	2.2	2.3	2.4	2.2	2.3	1年第1回 (197名)	平均値	2.2	2.1	2.0	2.1
		変化量 (3回-1回)	平均値	0.6	0.6	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	変化量 (3回-1回)	平均値	0.6	0.5	0.5	0.5
		3年第3回 (名)	平均値							#####	3年第3回 (名)	平均値				#####
		3年第2回 (名)	平均値							#####	3年第2回 (名)	平均値				#####
		3年第1回 (112名)	平均値	3.2	3.0	3.0	3.2	3.1	3.1	3.1	3年第1回 (112名)	平均値	2.9	2.8	2.9	2.9
		変化量 (3回-1回)	平均値							#####	変化量 (3回-1回)	平均値				#####
		2年第3回 (112名)	平均値	3.3	3.1	3.0	3.3	3.1	3.2	3.2	2年第3回 (110名)	平均値	3.0	2.8	3.0	2.9
		2年第2回 (103名)	平均値	3.3	3.0	2.9	3.2	3.0	3.1	3.1	2年第2回 (114名)	平均値	3.0	2.7	2.9	2.9
		2年第1回 (113名)	平均値	3.0	2.8	2.7	3.0	2.9	3.0	2.9	2年第1回 (116名)	平均値	2.9	2.6	2.7	2.7
変化量 (3回-1回)	平均値	0.3	0.3	0.3	0.3	0.2	0.2	0.3	変化量 (3回-1回)	平均値	0.2	0.4	0.3	0.3		
中学3年生	第1回 (4月) 第2回 (9月) 第3回 (3月)	1年第3回 (112名)	平均値	2.9	2.8	2.7	3.2	2.8	2.9	2.9	1年第3回 (112名)	平均値	3.1	2.4	2.7	2.7
		1年第2回 (116名)	平均値	2.7	2.6	2.3	3.1	2.7	2.7	2.7	1年第2回 (115名)	平均値	2.7	2.3	2.6	2.5
		1年第1回 (107名)	平均値	1.9	1.9	1.8	2.2	2.1	1.9	2.0	1年第1回 (109名)	平均値	2	1.6	1.8	1.8
		変化量 (3回-1回)	平均値	1	0.9	0.9	1	0.7	1	0.9	変化量 (3回-1回)	平均値	1.1	0.8	0.9	0.9
		2年第3回 (111名)	平均値	3.4	3.2	3.0	3.3	3.3	3.3	3.3	2年第3回 (名)	平均値	3.0	2.9	3.1	3.0
		2年第2回 (114名)	平均値	3.3	3.0	2.9	3.3	3.2	3.1	3.1	2年第2回 (名)	平均値	2.9	2.8	2.9	2.9
		2年第1回 (117名)	平均値	3.3	2.8	2.7	3.2	3.1	2.9	3.0	2年第1回 (名)	平均値	2.8	2.5	2.8	2.7
		変化量 (3回-1回)	平均値	0.3	0.3	0.3	0.3	0.2	0.2	0.3	変化量 (3回-1回)	平均値	0.2	0.4	0.3	0.3
		1年第3回 (114名)	平均値	3.3	3.0	2.9	3.3	3.2	3.1	3.1	1年第3回 (114名)	平均値	3.1	2.6	2.8	2.8
		1年第2回 (115名)	平均値	3.1	2.9	2.6	3.2	3	2.9	3.0	1年第2回 (115名)	平均値	2.8	2.6	2.7	2.7
		1年第1回 (119名)	平均値	2.7	2.5	2.3	2.8	2.7	2.6	2.6	1年第1回 (119名)	平均値	2.6	2.4	2.3	2.4
変化量 (3回-1回)	平均値	0.6	0.5	0.6	0.5	0.5	0.5	0.5	変化量 (3回-1回)	平均値	0.5	0.2	0.5	0.4		
中学1年生	第1回 (4月) 第2回 (9月) 第3回 (3月)	1年第3回 (名)	平均値						#####	1年第3回 (名)	平均値				#####	
		1年第2回 (名)	平均値							#####	1年第2回 (名)	平均値				#####
		1年第1回 (名)	平均値							#####	1年第1回 (名)	平均値				#####
		変化量 (3回-1回)	平均値							#####	変化量 (3回-1回)	平均値				#####

1 事業の成果 【令和3年3月1日現在での分析結果】

②（6つの）資質・能力の向上について

以下は、本校設定6つの資質・能力ルーブリック（5段階評価）の全6学年平均をまとめたものである。

学校平均
--

*高3の最終評価は第2回（2学期）とする。

4年目(令和元年度・2019年度)

①各学年の回ごとのルーブリック平均値 *令和元年度(第3回・冬)ルーブリック評価(まとめ)
*中3、高3の最終評価は第2回(2学期)とする。

年次	項目1	本校で育みたい資質・能力							項目2	ESD3プロジェクト				全体		
		①情報処理能力	②思考力	③課題解決力	④基礎学力(学力)			⑤基礎学力(学力)		⑥基礎学力(学力)	⑦基礎学力(学力)	⑧基礎学力(学力)				
					基礎学力	基礎学力	基礎学力									
高校3年生	第1回(4月)	3年 第1回(187名)	平均値	2.9	2.7	2.6	2.8	2.8	2.8	2.8	3年 第1回(184名)	平均値	2.7	2.6	2.8	2.7
	第2回(9月)	3年 第1回(190名)	平均値	2.7	2.6	2.5	2.7	2.6	2.6	2.6	3年 第1回(186名)	平均値	2.5	2.5	2.6	2.5
	第3回(3月)	3年 第2回(187名)	平均値	0.2	0.1	0.1	0.1	0.2	0.2	0.2	3年 第2回(183名)	平均値	0.2	0.1	0.2	0.2
		3年 第3回(190名)	平均値	2.7	2.5	2.5	2.7	2.6	2.6	2.6	3年 第3回(184名)	平均値	2.4	2.4	2.5	2.4
		3年 第4回(190名)	平均値	2.6	2.4	2.3	2.6	2.5	2.4	2.5	3年 第4回(187名)	平均値	2.4	2.3	2.5	2.4
		3年 第5回(185名)	平均値	2.4	2.2	2.2	2.5	2.4	2.3	2.3	3年 第5回(182名)	平均値	2.3	2.2	2.3	2.3
		3年 第6回(185名)	平均値	0.3	0.2	0.3	0.2	0.2	0.3	0.3	3年 第6回(182名)	平均値	0.1	0.2	0.2	0.2
		3年 第7回(174名)	平均値	2.4	2.3	2.2	2.4	2.3	2.2	2.3	3年 第7回(180名)	平均値	2.2	2.2	2.3	2.2
		3年 第8回(169名)	平均値	2.2	2.1	2.1	2.1	2.3	2.2	2.2	3年 第8回(166名)	平均値	2.1	2.1	2.2	2.2
		3年 第9回(180名)	平均値	1.9	1.8	1.8	2.1	2	1.8	1.9	3年 第9回(180名)	平均値	1.9	1.8	1.9	1.9
		3年 第10回(180名)	平均値	0.5	0.5	0.4	0.3	0.3	0.4	0.4	3年 第10回(180名)	平均値	0.3	0.4	0.4	0.4
		3年 第11回(180名)	平均値	2.7	2.7	2.6	2.8	2.8	2.7	2.7	3年 第11回(182名)	平均値	2.5	2.5	2.6	2.5
高校2年生	第1回(4月)	2年 第1回(195名)	平均値	2.6	2.5	2.4	2.6	2.6	2.4	2.5	2年 第1回(192名)	平均値	2.3	2.3	2.3	2.3
	第2回(9月)	2年 第2回(191名)	平均値	2.4	2.4	2.3	2.5	2.5	2.3	2.4	2年 第2回(186名)	平均値	2.2	2.2	2.2	2.2
	第3回(3月)	2年 第3回(195名)	平均値	0.3	0.3	0.3	0.3	0.3	0.4	0.3	2年 第3回(185名)	平均値	0.3	0.3	0.3	0.3
		2年 第4回(190名)	平均値	2.6	2.6	2.3	2.7	2.6	2.4	2.5	2年 第4回(186名)	平均値	2.4	2.3	2.4	2.4
		2年 第5回(195名)	平均値	2.3	2.3	2.2	2.5	2.4	2.2	2.3	2年 第5回(195名)	平均値	2.1	2.1	2.2	2.1
		2年 第6回(195名)	平均値	2	2	1.9	2.2	2.2	1.9	2.0	2年 第6回(188名)	平均値	1.8	1.9	2	1.9
		2年 第7回(195名)	平均値	0.6	0.6	0.4	0.5	0.4	0.5	0.5	2年 第7回(180名)	平均値	0.6	0.4	0.4	0.5
		2年 第8回(192名)	平均値	2.9	2.8	2.6	3.0	2.8	2.7	2.8	2年 第8回(176名)	平均値	2.8	2.4	2.5	2.6
		2年 第9回(192名)	平均値	2.7	2.7	2.5	2.9	2.6	2.6	2.7	2年 第9回(181名)	平均値	2.6	2.2	2.3	2.4
		2年 第10回(192名)	平均値	2.3	2.2	2.1	2.5	2.3	2.2	2.3	2年 第10回(184名)	平均値	2.0	1.9	2.0	2.0
		2年 第11回(192名)	平均値	0.6	0.6	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	2年 第11回(184名)	平均値	0.6	0.5	0.5	0.5
		2年 第12回(192名)	平均値	3.5	3.4	3.1	3.5	3.3	3.3	3.3	2年 第12回(111名)	平均値	3.3	3.1	3.3	3.2
中学3年生	第1回(4月)	3年 第1回(111名)	平均値	3.4	3.3	3.0	3.4	3.2	3.3	3.3	3年 第1回(110名)	平均値	3.2	3.0	3.2	3.1
	第2回(9月)	3年 第2回(110名)	平均値	3.1	2.9	2.7	3.1	2.9	3.0	3.0	3年 第2回(110名)	平均値	3.0	2.7	2.9	2.9
	第3回(3月)	3年 第3回(102名)	平均値	0.4	0.5	0.4	0.4	0.4	0.3	0.4	3年 第3回(109名)	平均値	0.3	0.4	0.4	0.4
		3年 第4回(112名)	平均値	3.1	2.9	2.7	3.1	2.8	2.8	2.9	3年 第4回(112名)	平均値	3.1	2.6	2.8	2.8
		3年 第5回(110名)	平均値	2.7	2.6	2.5	2.8	2.5	2.4	2.6	3年 第5回(108名)	平均値	2.9	2.4	2.5	2.6
		3年 第6回(115名)	平均値	2.4	2.4	2.2	2.4	2.2	2.3	2.3	3年 第6回(112名)	平均値	2.6	2.2	2.3	2.4
		3年 第7回(115名)	平均値	0.7	0.5	0.5	0.7	0.6	0.5	0.6	3年 第7回(112名)	平均値	0.5	0.4	0.5	0.5
		3年 第8回(115名)	平均値	2.2	2.1	2	2.1	2	2	2.1	3年 第8回(120名)	平均値	2.4	2.2	2	2.2
		3年 第9回(120名)	平均値	1.5	1.4	1.4	1.5	1.4	1.4	1.4	3年 第9回(120名)	平均値	1.9	1.6	1.6	1.7
		3年 第10回(120名)	平均値	0.7	0.7	0.6	0.6	0.6	0.6	0.6	3年 第10回(120名)	平均値	0.5	0.6	0.4	0.5
		3年 第11回(111名)	平均値	3.3	3.1	3.0	3.3	3.1	3.2	3.2	3年 第11回(113名)	平均値	3.0	2.9	3.1	3.0
		3年 第12回(103名)	平均値	3.3	3.0	2.9	3.2	3.0	3.1	3.1	3年 第12回(104名)	平均値	2.9	2.6	2.9	2.9
中学2年生	第1回(4月)	2年 第1回(113名)	平均値	3.0	2.8	2.7	3.0	2.9	3.0	2.9	2年 第1回(114名)	平均値	2.8	2.5	2.8	2.7
	第2回(9月)	2年 第2回(112名)	平均値	0.3	0.3	0.3	0.3	0.2	0.2	0.3	2年 第2回(112名)	平均値	0.2	0.4	0.3	0.3
	第3回(3月)	2年 第3回(112名)	平均値	2.9	2.8	2.7	3.2	2.8	2.9	2.9	2年 第3回(112名)	平均値	3.1	2.4	2.7	2.7
		2年 第4回(112名)	平均値	2.7	2.6	2.3	3.1	2.7	2.7	2.7	2年 第4回(115名)	平均値	2.7	2.3	2.6	2.5
		2年 第5回(107名)	平均値	1.9	1.9	1.8	2.2	2.1	1.9	2.0	2年 第5回(109名)	平均値	2	1.6	1.8	1.8
		2年 第6回(107名)	平均値	1	0.9	0.9	1	0.7	1	0.8	2年 第6回(109名)	平均値	1.1	0.8	0.9	0.9
		2年 第7回(114名)	平均値	3.3	3.0	2.9	3.3	3.2	3.1	3.1	2年 第7回(114名)	平均値	3.1	2.6	2.8	2.8
		2年 第8回(115名)	平均値	3.1	2.9	2.6	3.2	3	2.9	3.0	2年 第8回(115名)	平均値	2.8	2.6	2.7	2.7
		2年 第9回(119名)	平均値	2.7	2.5	2.3	2.8	2.7	2.6	2.6	2年 第9回(119名)	平均値	2.6	2.4	2.3	2.4
		2年 第10回(119名)	平均値	0.6	0.5	0.6	0.5	0.5	0.5	0.5	2年 第10回(119名)	平均値	0.5	0.2	0.5	0.4
		2年 第11回(119名)	平均値	3.3	3.0	2.9	3.3	3.2	3.1	3.1	2年 第11回(114名)	平均値	3.1	2.6	2.8	2.8
		2年 第12回(115名)	平均値	3.1	2.9	2.6	3.2	3	2.9	3.0	2年 第12回(115名)	平均値	2.8	2.6	2.7	2.7

② 6つの資質・能力ルーブリック（5段階評価）の全6学年平均（まとめ）

学校平均 6つの資質・能力	本校で育みたい資質・能力						G 平均
	能力			資質(気質・特性・情意・態度)			
	① 情報 整理力	② 表現 力	③ 課題 解決力	④ 協働	⑤ 自他 の尊重	⑥ チャ レン ジ精神	
A 各学年の第3回の平均数値(学年末・除6年)	3.2	3.0	2.8	3.2	3.0	3.0	3.0
B 各学年の第1回平均数値(開始当初)	2.7	2.6	2.4	2.8	2.7	2.6	2.6
C 調査開始時からの伸び(3年間実施学年)	1.5	1.5	1.3	1.4	1.4	1.5	1.4
D 調査開始時からの伸び(2年間実施学年)	1.1	1.0	1.0	0.9	0.8	1.1	0.9
E 調査開始時からの伸び(1年間実施学年)	0.6	0.6	0.6	0.5	0.5	0.5	0.6
F 調査開始時からの伸び(1～3年間平均)	1.1	1.0	0.9	0.9	0.9	1.0	1.0

* 高3の最終評価は第2回（2学期）とする。

3年目(平成30年度・2018年度)

①各学年の回ごとのルーブリック平均値 *平成30年度(第3回・冬)ルーブリック評価(まとめ)

年次	項目1	本校で育みたい資質・能力							実科	項目2	SSOプロジェクト				全体
		能力		資質(気質・特性・態度・態度)			1.情報整理力	2.課題解決力	3.協働	4.自己の尊重	5.チャレンジ精神	1.地域課題解決(力)	2.国際理解(力)	3.社会課題(力)	4.総合的な学習の力
		1.情報整理力	2.課題解決力	3.協働	4.自己の尊重	5.チャレンジ精神									
高校3年生	2年3月2回(177名)	平均値	3.0	2.9	2.8	3.0	2.9	3.0	2.9	3年3月2回(181名)	平均値	2.6	2.7	3.1	2.6
	3年3月1回(184名)	平均値	2.8	2.7	2.5	2.9	2.7	2.8	2.7	3年3月1回(184名)	平均値	2.5	2.6	2.8	2.6
	文化祭(230-1回)	平均値	0.2	0.2	0.3	0.1	0.2	0.2	0.2	文化祭(230-1回)	平均値	0.1	0.1	0.3	0.2
	2年3月3回(185名)	平均値	2.9	2.8	2.5	2.9	2.7	2.8	2.8	2年3月3回(184名)	平均値	2.6	2.6	2.8	2.7
	2年3月2回(185名)	平均値	2.5	2.4	2.3	2.6	2.5	2.4	2.5	2年3月2回(187名)	平均値	2.3	2.5	2.5	2.4
	2年3月1回(185名)	平均値	2.1	2.1	1.9	2.3	2.1	2.0	2.1	2年3月1回(182名)	平均値	2.0	2.1	2.2	2.1
	文化祭(230-1回)	平均値	0.8	0.7	0.6	0.6	0.6	0.8	0.7	文化祭(230-1回)	平均値	0.6	0.5	0.6	0.6
	1年3月3回(名)	平均値								1年3月3回(名)	平均値				
	1年3月2回(名)	平均値								1年3月2回(名)	平均値				
	1年3月1回(名)	平均値								1年3月1回(名)	平均値				
	文化祭(230-1回)	平均値								文化祭(230-1回)	平均値				
高校2年生	2年3月3回(182名)	平均値	2.7	2.5	2.5	2.7	2.6	2.6	2.6	2年3月3回(182名)	平均値	2.4	2.4	2.5	2.4
	2年3月2回(182名)	平均値	2.6	2.4	2.3	2.6	2.5	2.4	2.5	2年3月2回(185名)	平均値	2.4	2.3	2.5	2.4
	2年3月1回(182名)	平均値	2.4	2.2	2.2	2.5	2.4	2.3	2.3	2年3月1回(185名)	平均値	2.3	2.2	2.3	2.3
	文化祭(230-1回)	平均値	0.3	0.3	0.3	0.2	0.2	0.3	0.3	文化祭(230-1回)	平均値	0.1	0.1	0.2	0.1
	1年3月3回(174名)	平均値	2.4	2.3	2.2	2.4	2.3	2.2	2.3	1年3月3回(188名)	平均値	2.2	2.2	2.3	2.2
	1年3月2回(181名)	平均値	2.2	2.1	2.1	2.1	2.3	2.2	2.2	1年3月2回(195名)	平均値	2.1	2.1	2.2	2.1
	1年3月1回(181名)	平均値	1.9	1.8	1.8	2.1	2.0	1.8	1.9	1年3月1回(195名)	平均値	1.9	1.8	1.9	1.9
	文化祭(230-1回)	平均値	0.5	0.5	0.4	0.3	0.3	0.4	0.4	文化祭(230-1回)	平均値	0.3	0.4	0.4	0.4
	1年3月3回(196名)	平均値	2.6	2.6	2.3	2.7	2.6	2.4	2.5	1年3月3回(196名)	平均値	2.4	2.3	2.4	2.4
	1年3月2回(196名)	平均値	2.3	2.3	2.2	2.5	2.4	2.2	2.3	1年3月2回(196名)	平均値	2.1	2.1	2.2	2.1
	1年3月1回(196名)	平均値	2.0	2.0	1.9	2.2	2.2	1.9	2.0	1年3月1回(196名)	平均値	1.8	1.9	2.0	1.9
高校1年生	文化祭(230-1回)	平均値	0.6	0.6	0.4	0.5	0.4	0.5	0.5	文化祭(230-1回)	平均値	0.6	0.4	0.4	0.5
	3年3月3回(106名)	平均値	3.2	3.0	2.8	3.3	3.1	3.2	3.1	3年3月3回(106名)	平均値	2.7	3.1	2.8	2.9
	3年3月2回(107名)	平均値	3.2	3.0	2.7	3.3	3.1	3.1	3.1	3年3月2回(107名)	平均値	2.7	3.1	2.8	2.9
	3年3月1回(106名)	平均値	3.1	2.8	2.5	3.2	2.9	2.8	2.9	3年3月1回(116名)	平均値	2.6	2.5	2.7	2.6
	文化祭(230-1回)	平均値	0.1	0.2	0.3	0.1	0.2	0.3	0.2	文化祭(230-1回)	平均値	0.1	0.6	0.1	0.3
	2年3月3回(名)	平均値								2年3月3回(名)	平均値				
	2年3月2回(111名)	平均値	2.9	2.7	2.4	3.1	2.8	2.7	2.7	2年3月2回(112名)	平均値	2.5	2.3	2.5	2.4
	2年3月1回(110名)	平均値	2.8	2.5	2.2	2.9	2.5	2.4	2.6	2年3月1回(118名)	平均値	2.4	2.2	2.4	2.3
	文化祭(230-1回)	平均値	0.1	0.2	0.2	0.2	0.1	0.3	0.2	文化祭(230-1回)	平均値	0.1	0.1	0.1	0.1
	1年3月3回(名)	平均値								1年3月3回(名)	平均値				
中学3年生	1年3月2回(名)	平均値								1年3月2回(名)	平均値				
	1年3月1回(名)	平均値								1年3月1回(名)	平均値				
	文化祭(230-1回)	平均値								文化祭(230-1回)	平均値				
	2年3月3回(115名)	平均値	3.1	2.9	2.7	3.1	2.8	2.8	2.9	2年3月3回(115名)	平均値	3.1	2.6	2.8	2.8
	2年3月2回(110名)	平均値	2.7	2.6	2.5	2.8	2.5	2.6	2.6	2年3月2回(106名)	平均値	2.9	2.4	2.5	2.6
	2年3月1回(116名)	平均値	2.4	2.4	2.2	2.4	2.2	2.3	2.3	2年3月1回(113名)	平均値	2.6	2.2	2.3	2.4
	文化祭(230-1回)	平均値	0.7	0.5	0.5	0.7	0.6	0.5	0.6	文化祭(230-1回)	平均値	0.5	0.4	0.5	0.5
	1年3月3回(名)	平均値								1年3月3回(名)	平均値				
	1年3月2回(120名)	平均値	2.2	2.1	2.0	2.1	2.0	2.0	2.1	1年3月2回(126名)	平均値	2.4	2.2	2.0	2.2
	1年3月1回(120名)	平均値	1.5	1.4	1.4	1.5	1.4	1.4	1.4	1年3月1回(126名)	平均値	1.9	1.6	1.6	1.7
	文化祭(230-1回)	平均値	0.7	0.7	0.6	0.6	0.6	0.6	0.6	文化祭(230-1回)	平均値	0.5	0.6	0.4	0.5
中学2年生	1年3月3回(115名)	平均値	2.9	2.8	2.7	3.2	2.8	2.9	2.9	1年3月3回(115名)	平均値	3.1	2.4	2.7	2.7
	1年3月2回(116名)	平均値	2.7	2.6	2.3	3.1	2.7	2.7	2.7	1年3月2回(115名)	平均値	2.7	2.3	2.6	2.5
	1年3月1回(107名)	平均値	1.9	1.9	1.8	2.2	2.1	1.9	2.0	1年3月1回(108名)	平均値	2.0	1.6	1.8	1.8
	文化祭(230-1回)	平均値	1.0	0.9	0.9	1.0	0.7	1.0	0.9	文化祭(230-1回)	平均値	1.1	0.8	0.9	0.9
	1年3月3回(115名)	平均値	2.9	2.8	2.7	3.2	2.8	2.9	2.9	1年3月3回(115名)	平均値	3.1	2.4	2.7	2.7

② 6つの資質・能力ルーブリック（5段階評価）の全6学年平均（まとめ）

学校平均 (中1～高3)	本校で育みたい資質・能力						F 平均
	能力			資質(気質・特性・情意・態度)			
	① 情報 整理 力	② 表現 力	③ 課題 解決 力	④ 協働	⑤ 自他 の尊 重	⑥ チャ レン ジ精 神	
A 各学年の第3回の平均数値(学年末・除6年)	2.9	2.8	2.6	3.0	2.8	2.8	2.8
B 各学年の第1回平均数値(開始当初)	2.0	2.0	1.8	2.2	2.0	1.9	2.0
C 調査開始時からの伸び(2年間実施学年)	0.9	0.9	0.9	0.8	.09	1.0	0.9
D 調査開始時からの伸び(1年間実施学年)	0.8	0.8	0.7	0.8	0.6	0.8	0.7
E 調査開始時からの伸び(1～2年間平均)	0.9	0.8	0.8	0.8	0.7	0.9	0.8

(3) これまでの取組を通じた変容と課題（学校・教員・生徒）について

■以下は、令和元年度（2020 年度）における総括である（「ESD 大賞実践報告書」より）。

（1）学校全体の成果は、次の 3 点である。

①ESD を中心としたホールスクールアプローチで学校の特色づくりに成功する。

ESD 実践前は、（狭義の）学力重視の地域の進学校が、それに加えて「国際交流」と「ESD」を特色とする学校に変容を遂げた。学校教育目標、学校ビジョン、授業内外の学び、地域・国外連携まで幅広く ESD の視点で教育活動を整理し実践できた（ホールスクールアプローチ）。

②新規事業開発中心でなく、既存の取組を ESD の観点で整理する。

ESD 導入により、育みたい資質・能力と教育活動が構造化できた。新規事業導入で負担を過度に増やさず、現状を活かして特色づくりに成功した意味で、働き方改革に配慮した取組といえる。

③生徒は 6 年間で 3 つのプロジェクトに取組、スパイラルに資質・能力を向上させる。

生徒は中高 6 年間で、上述した 3 プロジェクトに取組、「地球・地域の持続可能性の向上」と「個人としての資質・能力の向上」に励む。

その結果、中高 6 学年の資質・能力の平均（ループリック評価）は、第 1 回（春）2.0 から第 3 回（冬）2.8 と、全学年で成長した。ESD を 2 年間実施した学年の平均は 0.9 伸び、1 年間の学年では 0.7 である。ESD は長期間実施した方が資質・能力が伸びることが明らかになった。

また、ESD 導入で生徒が校外活動に積極的に参加するようになっている。国際プログラム参加者は増加し（2016 年：40 人→2019 年：65 人）、全国規模で活躍する生徒も増えている（観光甲子園グランプリ、全日本高校模擬国連 4 年連続 5 度出場、フィリピン国際ボランティアなど）。

（2）課題と今後の展望は以下の通りである。

①各授業に ESD のアプローチをさらに取り入れる。（課題解決・探究的な学びの推進）

②生徒主体の ESD 活動を一層推進する。（生徒が取組を提案し実践）

③資質・能力ループリック評価追跡を長期的に行う。（資質・能力の育成に資する）

④市や企業と連携し SDGs に関連する地域の課題解決に力を注ぐ。（地域連携型）

⑤他校（国内外）との実践交流を無理なく増やす（学びと刺激の共有）。

■（参考）以下は、平成 30 年度までの総括である。

【学校の変容】

（主な成果）

①「開校以来積み上げてきた実践を、ESD の観点で整理し構造化することと、「本校で育みたい資質・能力を明確化し、教育内容を 6 観点でカリキュラムマップに整理する」ことができた。

②ESD の取組が本校の特色の 1 つとなっている。（もう 1 つはグローバルな取組）

（今後の課題）

①今後は、カリキュラムマップの質を「本当に使える」、「見てわかる」ものにさらに精度を高める。

②どの授業・科目の中でも ESD の教育的アプローチが取られている状態を目指す。（課題解決・探究的）

③ループリック評価の追跡を長期的に行い、本校で育みたい資質・能力を身に着ける教育内容にする。

④「学校丸ごと ESD」「どこを切っても ESD」の状態には至っていない。たとえば、ゴミ、交通手段、紙の資料、校舎の素材など、校内外のあらゆる面で持続可能な状態で暮らすにはどうするかを考える。

【教員の変容】

（主な成果）

①研修等を通じて、各教員に ESD の考えが浸透。過去の実践の多くが ESD の方向性にあることを認識。

②各教科の中で SDGs に関連した取組を実施する（平成 30 年の研究テーマで SDGs 授業実践集作成）。

（今後の課題）

①一人一人がサステナビリティを主体的に学び、校内外で実践できる状態を目指す。

【生徒の変容】

（主な成果）

①校長のリーダーシップ（講話等を含む）や諸活動を通して、主体的な活動に取り組始めている。 （観光甲子園最優秀賞、全日本高校模擬国連大会4年連続5度目の出場、フィリピン国際ボランティア等）今後はさらに、自発的・継続的に校外の活動にも主体的に参加している状態を目指す。
②資質・能力評価ルーブリック（5段階）を分析すると、次のような成果が見られる。 ●資質・能力は、第1回（春）から第2回（秋）でどの学年も上昇（生徒が自己の成長を実感）。 ●資質・能力の「学校平均」は、第1回（春）は5段階中2.0、第2回（秋）は2.3（平均0.3上昇）。 ●資質・能力の伸びは、2年間実施した学年では0.8上昇、1年間では0.5上昇（長い方が伸びる）。
（今後の課題） ①今後は、教員・生徒とルーブリックの内容や意義をさらに共有し、全方面での主体的な実践を促す。 （e-Portfolio との連携も含めて。） ②生徒が本校のESD活動やその意義について説明できるレベルまでを目指す。

（3）（参考）サステナブルスクール 3年間の取組自己評価（基準はACCU作成）

5 かなり満たしている 4 ほとんど満たしている 3 満たしている 2 あまり満たしていない 1 満たしていない
*以下は平成30年度のサステナブルスクールの取組の総括である。

審査項目	審査基準	開始前	3年後	今後の具体的なアクション
ビジョン	□持続可能な未来の実現に向けた目的が明確に示されている。 □活動目的・目標と、活動内容に一貫性がある。	3	4	ビジョンの「持続可能な社会の担い手」を具現化。
継続性	□今後3年以上継続的に活動していく意志が明確にある。 □持続可能な社会を担う次世代を育てる明確な意志がある。	3	5	ユネスコスクール指定を受け、今後も継続できる。
統合	□社会・経済・環境がバランスよく教育活動に反映されている。 □持続可能性に関する内容が明確に教育活動に反映されている。 □教育課程への位置付けが適切になされている。	2	4	授業にSDGsを取り入れる。 教職員全員がSDGsレポートを作成する。
エンパワメント	□学習と実践活動がつながっている。 □学習者・実践者が対話を通して主体的に参画できるカリキュラムを作っている。 □批判的に考える力、未来像を予測して計画を立てる力、多面的、総合的に考える力などを育む教育を行っている。	2	4	生徒が主体的に参加できるよう、ポートフォリオの機能を研究する。
刷新性	□既存の枠にとらわれず、ダイナミックにESD活動を創り上げている又は創り上げようとしている。	2	4	基本の枠はできたので、次はさらに生徒の発案も。
協働	□教師間がチームとして協働し、ESD活動を推進している。または、その環境が整っている。 □多様なステークホルダー（地域、家庭、NGO/NPO、企業）と協働し教育活動を実践している。または、しようと努力している。 □国内や国外であらゆる学校・校種と相互に学びあう活動を展開している。または、しようと努力している。	2	4	姉妹校提携中の海外の学校と取組をしている。今後はユネスコスクールやサステナブルスクール同士の交流を考えたい。
変容	□6.を踏まえ、それを学校に還元し学校も常により変化を求め、柔軟である。 □学校を「社会を変容させる拠点」とであると認識し、学校と社会の相互の学びを積極的に推進している。	3	5	校外活動が増えているので、校外活動の留意点をまとめ、生徒と共有をする。
汎用性（拡張性）	□重点校として、あらゆる学校が活用し実践することができる可能性のある活動を実践する意欲を持っている。 □実践に見出される工夫や方法、理論等を他の学校にも拡大し、協働していく高い意欲がある。	1	4	指定3年目も、紀要を更新して持続的にまとめを作成して普及に努める。

1 資質・能力の向上について

（1）資質・能力ルブリック評価について

- ①中1～高3まで、第1回（春）と第2回（秋）にかけて資質・能力（6項目）は右の表のように上昇している。学校平均の上昇率は74.75%である。
②各学年の詳細は、p.13～14の通りである。

	①～⑥の合計値が 上昇した生徒数	割合	
1年	107	89.2%	【N=120】
2年	69	63.3%	【N=109】
3年	75	73.5%	【N=102】
4年	129	65.8%	【N=196】
5年	135	74.2%	【N=182】
6年	156	82.5%	【N=189】

（2）ESD3大プロジェクト評価について

- ①中1～高3まで、第1回（春）と第2回（秋）にかけて3大プロジェクトに関する値は右の表のように上昇している。
学校平均の上昇率は51.13%である。
②各学年の詳細は、p.13～14の通りである。

	①～③の合計値が 上昇した生徒数	割合	
1年	96	80.0%	【N=120】
2年	40	36.4%	【N=110】
3年	57	52.3%	【N=109】
4年	87	44.6%	【N=195】
5年	101	55.8%	【N=181】
6年	79	37.7%	【N=191】

（2）資質・能力を向上させる行事や課外活動について

資質・能力ルブリックの自己評価で「4」や「5」となるにいたった活動は、次のようになった。
どのような活動が資質・能力を伸ばすのか参考になる。（以下の記述は、5学年のもの）

①情報分析・整理力

模擬国連（でいろんな情報を集め、意見につなげた。）（8） 英語授業でのプレゼン（3） 駅前再生計画 総合学習 未来研究セミナー 演芸大会出場 高校生議会のプレゼン 放送部での番組制作 リーザスを使った資料作り テストまとめノート、宿題レポート作成

②活用・表現力

暗唱 プレ国連 英語での海外ディスカッション 総合での意見発表 英語のリテリング、ビブリオバトル 校内でのSYD紹介 部活動

③課題発見・解決力

模擬国連（2）地域問題解決 夢チャレ SYDにおける活動 福山駅前計画 自ら計画したボランティア活動 自分から行動してはいいけど修学旅行先で英語でディスカッションしたりした

④協働

修学旅行（2）部活動で意見交流・協力（5） 学校行事 高校生議会（2） 修学旅行HAZE チーム 生徒会活動 福島のボランティア 地域問題解決 部活動での団体の練習 2つの意見が分かれた時に新しい意見を出そうと考える。 駅前再生計画（2） 他者への意思表示 部長としてのとりまとめ SYDにおける活動 一樹祭保健展でのリーダー 文化祭実行委員 地域行事に積極的に参加 生徒会活動（いろいろな行事で） 去年の文化祭で自分たちが協力してやるときに相手の意見をしっかり聞いて自分の意見をしっかり言える

⑤自他の尊重

修学旅行HAZE 高校生議会 部活や勉強ささまざまなことで自分と向き合い挑戦しているから 模擬国連で他校、他県の人とアイデアを出し合った SYDにおける活動（2） 校内バディ、ISSP 授業や日々の生活 地域の清掃ボランティア活動 部活動 ネガティブな心をなくす努力

⑥チャレンジ精神

部活動（3）、修学旅行 海外ボランティア参加 FWC（3）、生徒会 勉強するようになった 演芸大会 進路実現のための勉強 たくさんのボランティアに参加しているから 夢チャレでいろんな新しいことに取り組めた 県大会を目標とした部活練習 オーストラリア語学研修（2） バディ 思いついたら即行動 サマースクールボランティアで子どもとふれあうことを経験したいと思い参加 棋部で理想の勝ち方ができるよう行動 悪いことをどうすればよいのか考えよう

(3) 授業実践とのリンク

2017年度（平成29年度）の研究主題は、「グローバルな社会・地域社会で活躍する資質・能力をもった生徒の育成」であり、これはESDや高大接続改革の流れとリンクしたものである。授業改善の一環として2016年度（平成28年度）は全教科で「活用」実践に取組「活用レポート集」を作成した。2017年度（平成29年度）は、「主体的・対話的で深い学び」の「3つの学び」の実現を目指し、「3つの学びレポート」を作成することができた。今後はさらにこれらの取組を、グローバルな社会・地域社会とリンクした活用・探究実践へと進化させていきたい。

2 課題と展望

(1) 資質・能力の向上について

本校では、2016年（平成28年）に「本校で育てたい資質・能力」を策定し、カリキュラム・マップを作成した。その翌年の2017年（平成29年）にp.9にあるルーブリック（資質・能力記述文）を作成した。現在は、カリキュラム・マップとルーブリックの整合性を図るため、授業で「本単元で育む資質・能力」を確認しながら両者の修正をかけているところである。

(2) 国際課題解決プロジェクトについて

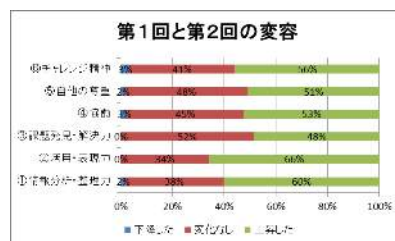
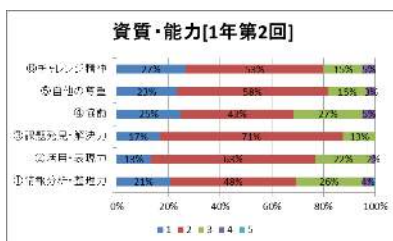
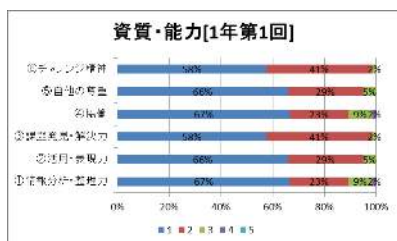
本校ESDの3主要プロジェクトの1つ「国際課題解決プロジェクト」においては、「交流からアクションへ」がキーワードである。5学年の「夢チャレ」におけるマレーシアでのプレゼンテーション&ディスカッションのように、今後も海外の中高生と共通課題について思考し解決策を英語で提案（提言）する「アクション型の交流」と発展させる。

(3) 地域課題解決プロジェクトについて

もう一つの柱である「地域課題解決プロジェクト」をより推進させたい。中学校ではすでに福山市全校で取り組んでいる「ふるさと学習」や本校独自の取組である「誰もが暮らしやすい福山の街づくり」などの実地見聞を伴う体験的な学習を通して、身近な地域を知り、課題解決に取り組む基礎を育成している。高校でも高校1年と2年で、福山市や近隣の大学と連携した「高校版ふるさと学習」をスタートしている。次年度からより一層の「地域課題解決プロジェクト」の充実を図りたい。



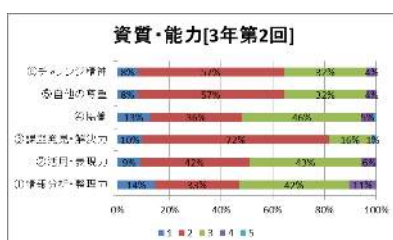
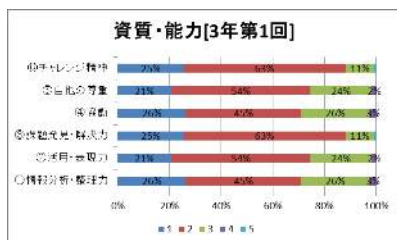
◆ 1 年生の結果



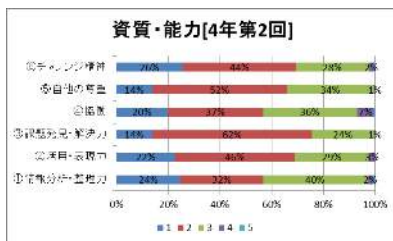
◆ 2 年生の結果



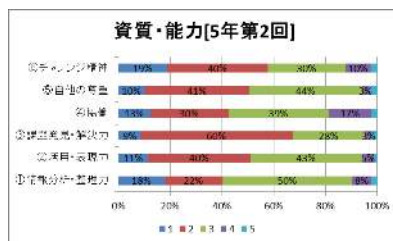
◆ 3 年生の結果



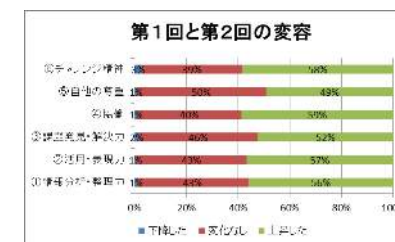
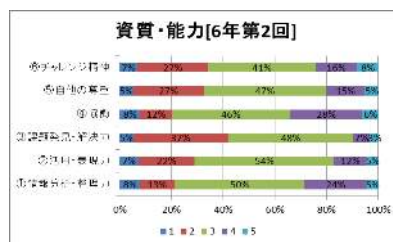
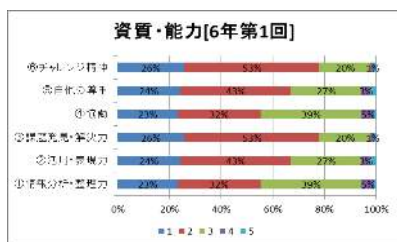
◆ 4 年生の結果



◆ 5 年生の結果

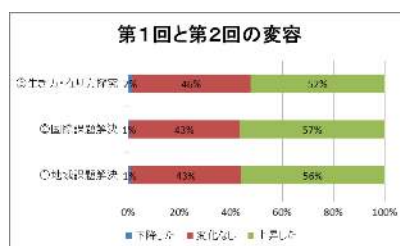
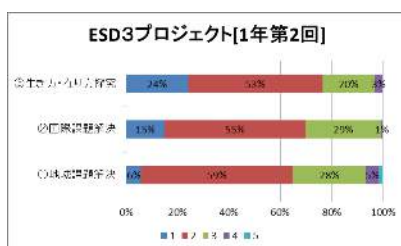
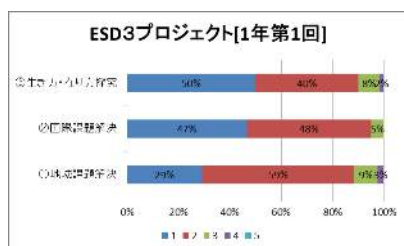


◆ 6 年生の結果

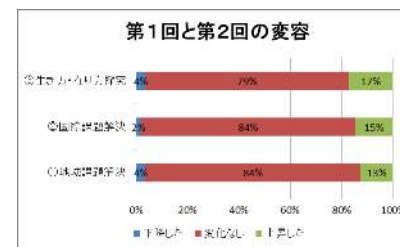
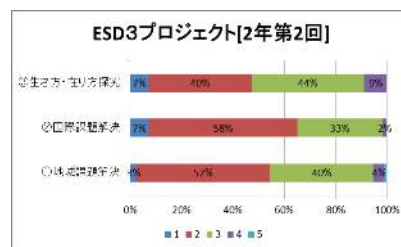
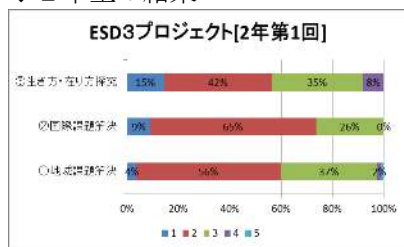


(参考) 平成 29 年度 ESD3 大プロジェクト評価・各学年の結果について

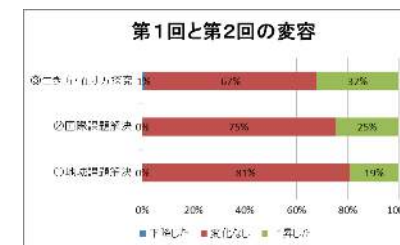
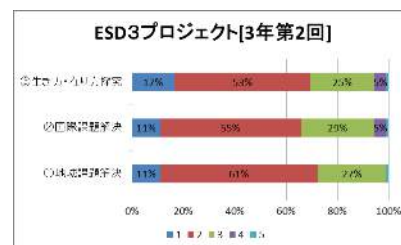
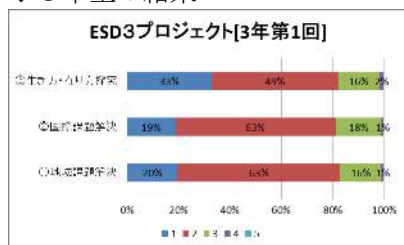
◆ 1 年生の結果 4



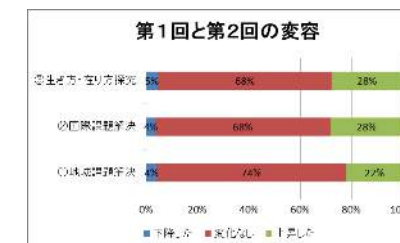
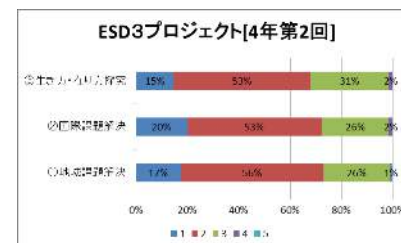
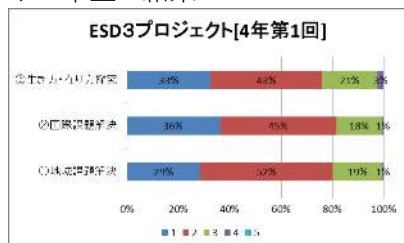
◆ 2 年生の結果



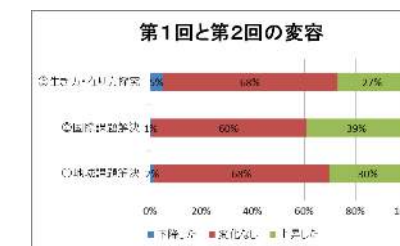
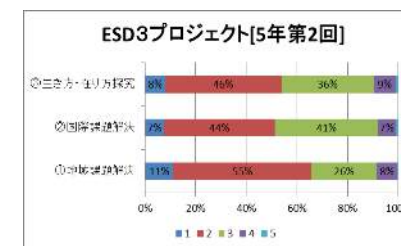
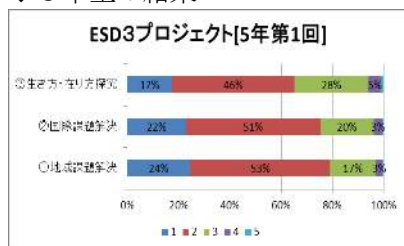
◆ 3 年生の結果



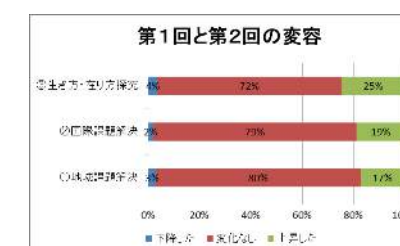
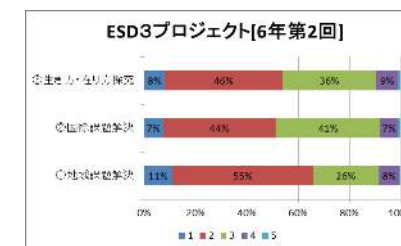
◆ 4 年生の結果



◆ 5 年生の結果



◆ 6 年生の結果



(12) Happy Schools Project とは？(ユネスコ・バンコク指定)

(1) はじめに

2019 年 10 月 21 日～22 日にかけて、タイ（バンコク）で開かれたユネスコセミナーで日本の教育事情についてプレゼンテーションを行う機会を得ました。

参加者は全 45 名（9 か国）で、日本からは在タイ日本大使館 1 名、ACCU（ユネスコ関連団体）2 名、教員 1 名（私）です。テーマは、Happy Schools Project。ユネスコが進めるこの国際的な取組は、教育改革が進む日本の学校で役立つ知見が多くあると思い、ご報告させていただきます。



(2) ユネスコ会議 in バンコクの概要

この会議の主催はユネスコ・バンコク事務所です。ユネスコは国連機関の 1 つで、使命は「教育を通じた平和の促進」とされています。SDGs（Sustainable Development Goals：持続可能な開発目標）の 4 番目にあたる「教育の質の向上」（SDG4）を図る取組を進めています。

今回の会議もその 1 つで、名称は、UNESCO Asia Pacific Regional Learning Seminar (themed) Happy Schools: Learner Well-being and Social Emotional Learning。つまり、ユネスコバンコク事務所が 2014 年からスタートした Happy Schools Project の、パイロット国 3 か国（日本、タイ、ラオス）の取組を他国とシェアし、「ウェルビーイング」と「社会情動的な学習」をどう促進するかを議論しようというものです。（今後の教育のキーワードである「社会情動的な学習」はここでは扱いません。参考文献をご参照ください。）

(3) ユネスコ会議への参加理由

Happy Schools Project とは簡単に言うと、「学校が生徒や教員を含めてもっとハッピーになるにはどうしたらいいのか」について実践的に追求する取組です。概念だけでなく、実践を重視するのがポイントです。

日本国内では福山市立福山中・高等学校を含めて 5 校がハッピースクールの指定校になっています。本校はここ数年、学校づくりの軸としてユネスコの進める ESD(Education for Sustainable Development：持続可能な開発のための教育)に力を入れており、この関係で本校の取組状況を Happy Schools Project の観点で日本の事例として発表させていただいたというわけです。

(4) ハッピースクールとは何か

ハッピースクールの「ハッピー」とは、Well-being の意味で使われています。「ウェルビーイング」とは、身体的、精神的、社会的な良好で満たされ、穏やかな状態の持続を指しています。つまりハッピースクールとは、一時的な幸福状態でなく、持続的なウェルビーイングを目指そうとするものです。ただし、ウェルビーイングという言葉は一般的にはなじみが薄いため、より多くの人に理解されやすい「ハッピー」という用語が使われているようです（研修会での説明より）。

ちなみに、ポジティブ心理学（参考文献参照）によると、「人と比較した幸せ（「地位財」）は長続きしない」と言われています。たとえば、成績やお金や地位などです。それに比べ、「他人と関係なく得られる幸せ（「非地位財」）は長続きする」とされています。これは、自由、自主性、愛情、帰属意識などの「心」や、安全、健康などに当たります。さらには、幸せを感じやすいのは、「親切な人」、「自己肯定感の高い人」や「夢をもっている人」の傾向が高いとされています。

本校ではこのプロジェクトを、「学校内外の Unhappy な要素を減らして、Happy な要素を増やす取組」であり、それにより「教員・生徒のウェルビーイングと学校の質を向上させ、SDG4「教育の質的向上」に寄与する取組」と捉えて取組を行いました。

(5) Unhappy schools とは

それでは、Happy の反対である Unhappy schools とはどのような学校なのでしょう。ユネスコは、ポジティブ心理学などの知見や各種ワークショップ・セミナー、調査などを通して、「不幸せな学校の要件」を次のように5つにまとめています（「日本語版要旨」より）。

- ①いじめを誘発しやすい環境
- ②生徒の勉強の重い負担と試験や成績に起因するストレス
- ③ネガティブな学習環境や学校の雰囲気
- ④教師のネガティブな態度
- ⑤悪い人間関係



「いじめ」や「ネガティブな人間関係」に加え、「過度の勉強量」や「雰囲気・態度」も関係するとされています。Happy Schools を目指すためにはまず、こうした状態を再確認する必要があります。

(6) Happy schools とは

次に Happy schools の要件を考えてみましょう。「ハッピースクールの5つの要件」です。

- ①コミュニティ内での友情と関係性
- ②温かくフレンドリーな学習環境
- ③自由な学習環境、創造性
- ④チームワークと協調精神
- ⑤教師のポジティブな態度

これらは、先ほど見た「不幸せな学校の要件」の反対を表しているものが多いようです。

さらにユネスコは、「ハッピースクールのフレームワーク（枠組み）」をA4・1枚にまとめており、大変役立ちます。

これらは、先ほど見た「不幸せな学校の要件」の反対を表しているものが多いようです。

そこでは、「People 人」「Process 過程」「Place 場所」の3つのカテゴリーごとに、6～9の項目（「基準」と呼ぶ）に分類しています（全部で22基準）。たとえば、「人」のカテゴリーでは、「友情」、「教師のポジティブな態度」、「教師の労働条件」などです。「過程」では、「学習量の適正化」「チームワークと協調精神」「学習内容の実用性」等。「場所」では、「いじめのない安全な環境」「ポジティブな規律」「学校のビジョンとリーダーシップ」等です。

私はこのフレームワークは、日本の学校改革に大変有益だと考えています。この基準を使えば、勤務校の良い点と改善点を発見しやすいからです。

たとえば、他の先生と一緒にフレームワークの22の基準を見ながら、「勤務校でできているものに○、惜しいものに△、まだまだなものに×」印をつけてみると、学校の状態が明らかです。さらに、「これらを参考に本校で取組たいものは？」と問いかけて、考えてみるのもよいでしょう。

実際に本校でやってみると、「幸福を学校ビジョンに入れる」「質問の意義を教える」「補習を選択にする」などの意見が出されました。学校を変えるための手掛かりが得られると思います。



この Happy Schools Project の概説書が以下の QR コードからダウンロードできます（英語版）。
ウェルビーイングの観点で学校づくりが語られる機会が増え、世界中に Happy Schools が増えるきっかけになればと思います。

【参考文献】

- ・OECD・ベネッセ『社会情動的スキル 学びに向かう力』（明石書店）
- ・前野隆司『実践ポジティブ心理学』（PHP 研究所）
- ・UNESCO Bangkok Office “Happy Schools” A framework for learner well-being in the Asia-Pacific



■最終報告会（2020.1） * 文科省担当者出席

	学校紹介①（沿革） ①高校創設120周年（1899～） ②公立中高一貫校15周年（2004～） 全県初の公立中高一貫校：5校 公立中・高：127校（中学：23校、高：104校） ③生徒数1,000名（教員90名、23学級） ④学校の特徴： ●協賛校（NBA等） ●「スポーツキャリア、英語、マレーシア、マフィ・・・」 ●ESD（環境教育・国際理解教育）
学校紹介②（ESDを軸にした学校づくり） ①ユネスコスクール by UNESCO 約1100校（日本）世界11000校 2012～ ②サステナブルスクール by ACQU (Asia Pacific Chapter Center for UNESCO) 24校（日本） 2016～ ③ハッピースクール by UNESCO (Bangkok) パイロット校：広島県、日本（サイエンス） 日本版5校 2018～	学校紹介③（ESD大賞・受賞理由等） ①ESD推進は「持続可能性」に加え、生徒の「逞弱・能力」の向上、学校の「教育改革」推進につなげる ②目的、活動、評価の一体化、SDGs等の取組 ③総合、探究、特色、各授業が密接に連携 ④「逞弱・能力」の向上、表現力、問題解決力、社会、環境、チャレンジ精神」を定めてルーブリックの評価 →生徒、保護者、教員が成長の見える可 る行動変容（ペットボトルを減らす教員等） 含む学びと連携
ガイドについて① ①ガイドは標準 ②日本語版資料（厚い、全81p）→印刷したが不使用 ③日本語版資料（薄い、全13p）→こちらを使用 ②ガイド活用例 【活用】ESD校内研修会（全教職員対象） 【活用】ESDとは「Happy Schools Projectとは」 【活用】①報告を各学級でできる②実践例・感想を盛り込む 【活用】①Happy Schools Projectについて ②Happy Schoolsとは ③「本校の取組とは」	ガイドについて②（続き） ②「本校の取組とは」③「活動の振り返りシート」 例①「フレームワーク（コアコンテナー、2020年度）を定めて本校でできているものに④「嬉しいもの、まだ×」 例②「これらを参考に本校で取り組みたいものは？」 ③「コメント・意見例」 ●学校ビジョンに「幸福」を取り入れる（幸福） ●受け入れる心を育てる（受け入れ） ●国際理解を生活に繋げる（生活性） ●報告を継続的にする（継続性） etc ④「ガイドの改善点（正しい）順で読まれる資料の順番」 ①解説（分析、簡単書き、書く）②実践例（+活動的） ③取組とやり方、活動が明らかになる（実践例）
本校の課題（4月） 4月のワークショップで福山でプロブレマトリーを作成した際に出た課題 【人（People）】 ●4月に2020年度2学期がある。そこで2学期3学期を活動的にしたい。 しかし、卒業式など行事が重なって行事が少い。何とかならないか・・・ 【過程（Process）】 ●2学期の下旬として2学期に力を入れ、3学期の活動は3学期でできた。が、時代は変わる。生徒と教師がチームで考える事も取り入れたい。 【場所（Place）】 ●2学期の活動は場所が決められてきた。が、「スラムダンク」もどき と関係の活動も加える。生徒や保護者も積極的に関わるルールづくりもしたい。	活動（人：People） 「人」においてウェルビーイングを高める力です。 ・他者とのポジティブな関係 （生徒同士、教員、保護者、地域の方を含む） ・ポジティブな価値観を持つ教員・生徒 ・協力的な価値観・実践

活動 (人: People)①

活動名: 120周年記念式典 歴代校長 (3歳) 育明Project

※この1年間で最大の行事
参加費 1600人 (希望を自由)

期 間: 5月～6月 (2ヶ月間)

内 容: 歴代校長3歳を挙げて
通常に活動してほしい
→一休館につなげたい

課 題: 大きな声での校歌斉唱は容易でない
: 時間の抽出 (毎日練習?)

要 旨: 次のスライド参照



・聴衆: 「感動した!」「生徒の可能性を感じた!」
・生徒: やり切った感、満足そう

活動 (人: People)②

活動名: 地域の力を学校に

期 間: 通年

内 容: 行事 (文化祭、体育祭等)
地域課題解決学習
生涯学習講座
(卒業生の講演)

課 題: 保護者の理解
: 必要経費確保 (諸謝等)

要 旨: 学校の状況を知って応援団になってくださる



活動 (人: People)③

活動名: 同年代者活動 (中高生間)

期 間: 通年

内 容: 部活動 (中高生間)

課 題: 場所・時刻の確保
: 部活動指導者の確保

要 旨: 先輩からの伝承
(読書、音楽、スポーツ等の交流)
社会性向上 (人間関係、互換、高きぶかい等)
お礼状が贈り?



活動 (人: People)④

活動名: 動物との活動 (名古屋科高中・西)

※サステナブルスクール創生と交流あり

期 間: 8月1日 (10:00～12:00)

内 容: 学校紹介・自己紹介
校内見学

実践発表 (観光甲子園での地産の企画)
SOGaをテーマとしたディスカッション

課 題: 動物舎 (中・高校)

: 交流が一部の生徒 (中学は生徒会、高校は有志)

要 旨: (生徒) お互いの活動から刺激 (教員) 刺激と「神楽舞」



活動 (人: People)⑤

活動名: 校内研修

期 間: 通年 (授業研究会は年4回)

内 容: 毎年1テーマで実働作業

全員参加、発表式 (1人2分)

2019 課題発見・解決学習

2018 SOGaを取り入れた授業

2017 3つの学び

2016 進路指導

要 旨: 実践の基となる理論編の作成 (4月)

: 全教員への提出呼びかけ

課 題: 毎年1年次授業 (実践) 実践・授業研究ヤ「うち、けつこつ通んやうる校」 (実践編)



活動 (過程: Process) HAPPY SCHOOLS!

「過程」においてウェルビーイングを高める力なり

- ・学習者の幸福感を高める考え方・学び方
- ・適度な学習量
- ・自由に意見を言える環境
- ・学習内容が実用的

※4/27より

活動 (過程: Process)①

活動名: 「生徒と教員がチームで学ぶ」探究学習Project!

①生徒と教員がチームになって学ぶ

②課題発見・解決型の探究的な学習

期 間: 4月～12月 (8ヶ月間)

内 容: ①高校1年探究授業 (グローバル人材育成授業)

②金銭教育で課題発見・解決学習推進 (電子化)

課 題: 探究 (課題発見・解決) とは何? (生徒・教員も)

: 探究する場所は? (授業外?)

要 旨: 生徒も教員も探究 (授業実践が年次末に完成)

課題発見・解決学習 (実践型が年次末に完成)



活動 (過程: Process)②

活動名: 「学習習慣」 (Lessons, More Connections)

①中絶休みの全員補習・学習会開催 (高3も卒業生参加)

②テストの代わりにコンテストを積極的に実施

期 間: 通年

内 容: ①高1、2回休み補習修習は廃止、後者は実働

②コンテストの例 (英語科)

・単語 (英作文) コンテスト

・プレゼンコンテスト

③本校キャラクター「華花ちゃん」

課 題: 気象、分掌会、教師会での連携

要 旨: 生徒も教員にも余裕が生まれる

やらされ感が減り、主体性が育つ



活動 (過程: Process)③

活動名: 「夢チャレンジ」 (読書・読書・読書・読書外でも)

教科外学習に協力的にチャレンジ

「社会情動的な学習」→「読書スキル」

期 間: 通年

内 容: ①読書実践、フラワーアレンジメント

コンテスト、地域の方のための読書会、

高校生によるの学生科学教室→レポート・発表

課 題: 読書に時間がかかる (働き方改革との関連は?)

要 旨: 校外の読書に主体的に参加し全国規模でも読書

(読書甲子園グランプリ、全日本高校読書コンテスト4年

連続5年出場、フィリピン現地ボランティア等)



活動（過程: Process）④

活動名: 「国際交流」

① 姉妹校を訪問・交流・協議する

② 姉妹校から生徒を招く・バディ

期 間: 通年

内 容: (写真) オーストラリア、
韓国、マウイ、マレーシアでは
高2級学級でSDGs協議
(写真、エビの養殖の体験等)

注 意: 交流に主体的な参加者が必要

・時間がかかる (事前準備も必要)

・実 績: 国際的なプログラムに参加者数が増加中

(2017 40人→2018 48人→2019 65人)



活動（過程: Process）④

オーストラリアの生徒とのSDGs合同授業（地理）



活動（過程: Process）



活動（場所: Place）

HAPPY SCHOOLS!

「場所」においてウェルビーイングを高める力づくり

- ・ポジティブでハッピーな環境 / 移居
- ・笑顔や挨拶
- ・いじめ問題の予防
- ・学校運営・リーダーシップ・学校ビジョン

4/27/20

活動（場所: Place）①

活動名: 「ハッピー校務Project」(生徒・保護者・学校で) ルール作り

期 間: 4月～7月 (3ヶ月間)

内 容: ① 生徒会がアンケート (質問紙調査)

(9/20) スクール内の97%、1/5に1/2以上、保護者から賛同94%

② 保護者・教員協議

③ 生徒会・総務委員会作成 (スマホマナー)

④ 学校「スマホマナー」へ (許可制)

・校内では使用しない (道徳的、社会教育)

生徒会に立つルール作りの楽しさ (カバンも袋持ち)

注 意: 協議に時間がかかる

・生徒が関与するルール作り・全員がルール遵守



活動（場所: Place）②

活動名: 学校ビジョンに「ESD」(地球全体の幸福状態の追求)

期 間: 通年

内 容: ① ビジョン検討委員会で学校ビジョンにESDを決定

② PTA総会で学校側から保護者にESDの説明 (保護者の理解・協力)

③ 地域活性化の推進 (ESD)

④ 地域活性化の推進 (ESD)

⑤ ビジョンに入れることでESDの取組が持続的に (教員4名)

新任教員に説明する際にもESDの重要性を伝えやすい (保護者側)

注 意: 管理職との協力が不可欠



活動（場所: Place）③

活動名: 学校訪問 (生徒が対象)

期 間: 通年

内 容: ① FWC(ボランティア部) が学校訪問を企画

② 福山市の市花 (バラ) の見学会など希望者に実施

(講師は地域の方)

注 意: 希望者が学校の文化に主体的に関わる

市の花文化の継承につながる (市唯一の専立校)

期 間: 長期研修中のボランティア部内の調整 (前年など)



活動（場所: Place）④

活動名: 地域の方と地域活動 (地域をより良い状態に)

期 間: 毎年10月

内 容: 地域の方と地域活動 (部活動の申し出)

注 意: 地域の方と協働して地域や学校への貢献up

期 間: 関係などの事後作業調整



ディスカッション

Happy Schools Projectのフレームワークは存在を考へる。

ただし、「表現の自由」などの表現も考慮される。

Happy Schools Projectをどう日本へ広げたいか。

(山田中・高の先生方・校長の先生)

① 学校全体でESDの推進に取り組んでいる状態あり。

② ESDを通して「世界や国をよりよくしよう」という意識が共有。

③ 「ESDの推進で学校全体をよりよくしよう」というのがESDである。

④ 幸福は世界の共通価値でもあり、幸福である (3/20国際幸福デー、プータンのNHK)

⑤ 教育・生徒の幸福向上 (一時的な幸福から持続的な幸福) 知恵の共有

× 人との比較 (金、物、地位) (幸福ではない)

○ 他人と関係なく得られる幸せ (幸福)

心 (四心、自主性、責任、協調性) 社会 (社会、社会がよい)

健康 (健康な人は幸せ) * 自己満足の人や人を幸せにする人

幸福 = 「学校の幸福な環境を通してHappyな環境を作る」

→ 生徒・教員・学校全体のwell-being向上 = 全学校



(13) 本校が ESD 大賞の最高賞である文部科学大臣賞を受賞！

2019 年 11 月 30 日（土）に福山市立大学で、第 11 回 ユネスコスクール全国大会（文科省など主催）が開かれ、全国から約 800 名の方が参加しました。この中で、NPO 法人日本持続発展教育推進フォーラムから、本校が ESD 大賞（後援・文科省等）の最高賞である文部科学大臣賞に選ばれました。



ESD とは、Education for Sustainable Development の略で、「持続可能な開発のための教育」と訳されます。「持続可能な社会の創り手」（新学習指導要領）を育むために、全国（全世界）の学校で進められている取組です。簡単に言うと、「E（ええ）S（世界を）D（どうやって）つくるのかを考えて実践し周りに変容をもたらすことができる人を育む教育のこと」と本校では捉えています。



福山中・高では 4～5 年前から本格的に ESD を軸に学校づくりを進めてきており、中学 1 年生から高校 3 年生までが、教科や総合的な学習（探究）の時間、校外活動などを通して、SDGs（Sustainable Development Goals「持続可能な開発目標」）を意識した取組を進めています（「地域課題解決」「国際課題解決」「在り方生き方探究」プロジェクトなど）。

本校が文部科学大臣賞を受賞した主な理由は、次のとおりとされています（一部要約）。

- ①「グローバルな社会・地域社会で活躍できる資質・能力をどう育成するか」を主題に、ESD の推進は「持続可能性」や「個人の資質・能力の向上」、「学校の教育改革推進」にもつながるとの仮説の下に取り組んでいる。
- ②ESD の視点に立ち、目的、活動、評価の一体化を図る学校運営、さらに ESD を通じての教育活動を SDGs（国連加盟 193 か国の 2020 年までの達成目標）に向けるなど、持続可能な社会の構築につながる取組をしている。
- ③総合（探究）、特活、各授業が密接に連携している。
- ④情報整理力、表現力、課題発見力、協働、自他の尊重、チャレンジ精神などの育成に努め、5 段階のルーブリック評価を実施し、生徒の成長を具体的に捉えている。（ESD の理解と推進に有意義な取組の一つ）
- ⑤福山市や地元企業と連携し、地域の課題に取り組むなど新たな動きも見られている。

また、ESD 全国大会の中のパネルディスカッションでは、本校 4 学年の前田響くんが他の学校の中高生と一緒に登壇し、広島県教委主催の「ワールドピースゲーム」に参加して学んだことを報告しました。ワールドピースゲームとは、参加した一人ひとりが国の代表の役割を担って、地球温暖化や領土などの様々な国際課題の解決に挑み、平和な世界を築くシミュレーションゲームのことです。



本校としては、今後も ESD を軸にした学校づくりを進め、地域社会や国際社会に貢献できる「グローバル人材」の育成につなげていきたいと思ひます。福山市や ACCU（ユネスコ・アジア文化センター）をはじめ、お世話になっている多くの関係機関にも感謝しつつ、引き続き連携ができればと思ひます。

(14) 生徒はどのような SDGs 活動に取り組んでいるのか (R6・高3)

【質問項目】

【3年間の探究の振り返り】本校は学校全体で SDGs を進めているユネスコスクールに加盟しています。あなたは、現在または高校時代に、どのような SDGs に関する活動に取り組んできましたか。高校入学以降で考え方や取組が変わったことなどがあれば、それも書いてください。

令和6年度の高校3年生の生徒に実施した SDGs アンケート結果を分析し、取組の種類ごとに人数の多い順に分類する。

1. 探究活動・授業を通じた SDGs への取組 (29 人、24.2%)

アンケート内で最も多くの生徒が言及していたのは、学校の探究活動を通じた SDGs への取組である。

- 「探究活動はもちろんだが、特に英語では身の回りの問題について考える機会が多く環境、社会、文化など多くの分野で課題解決力を養ってきた。日々いろんな知識を入れたり、いろんな経験をするけどそれらに終始するのではなく、実社会に目を向け課題を見出していくことが必要だと分かった。」
- 「自分はこの3年間何をするかは大きく違っても「よりよいまちづくり」に繋がる活動に取り組んできた。」
- 「4学年と5学年では、SDGs4 について関する活動を、6学年ではオリンピックの経済効果について調べるといふ、SDGs8 について関する活動に取り組んできた。」

2. 健康・福祉に関する取組 (SDG3) (14 人、11.7%)

- 「全ての人に健康と福祉をという課題に一番長く取り組んできた。人がどうしたらより健康でいられるのか考えた。」
- 「『全ての人に健康と福祉を』を主に取り組んできて、将来の夢が医療・保健系だったのでみんなが健康に過ごせる方法についてが多かった。」
- 「5年生と6年生の2年間、SDGs3 番の『すべての人に健康と福祉を』をテーマに取り組んできた。5年では生活習慣について、6年では認知機能について探究した。」

3. ボランティア活動 (14 人、11.7%)

- 「川の清掃ボランティアに参加した。SDGs の陸の豊かさを守ることに関係している。」
- 「ボランティア活動で学校清掃を行なった。」
- 「地域の川の清掃、夏冬休みに外国にルーツを持つ子供たちと勉強や会話をする日本語ボランティア、ふれあいランドの祭りの手伝いなどたくさんのボランティアを行った。」

4. 食品ロス・フードロス対策 (SDG12) (10 人、8.3%)

- 「フードロスのことを考えて、消費期限、賞味期限の早い食材は早めに食べる。そして、宝石ロスの削減を実行した。」
- 「6年の探究で SDGs12 の 2030 年までにお店や消費者のところで捨てられる食料を半分に減らすという目標を元にフードロスを重く受け止めフードロス対策を行った。」
- 「私は5年、6年の探究で食品ロス問題を扱い、食品ロスは地球の二酸化炭素排出につながることを知り、家では食品ロスをしないように毎日意識して取り組んでいた。」

5. 地域活性化・まちづくり (SDG11) (9 人、7.5%)

- 「SDGs11 の住み続けられるまちづくりを達成するために今回の探究で福山市の魅力を周りの人に伝えるたり、中学生の時はほとんどしていなかったゴミ拾いを高校生になってするようになりました。」

- 「尾道市の地域活性化のためにお祭りに参加し、盛り上げた」
- 「市内の映画館の活性化に向けて、具体的な解決を出すことができた。」

6. 教育関連の活動（SDG4）（9人、7.5%）

- 「質の高い教育に取り組んできた。」
- 「高校1年生の時に夏休みにあった外国にルーツのある小中学生のための教室に探しわかりやすい日本語で勉強を教え、SDGs4のために活動した。」
- 「自分の進路につなげるために、SDGs4の質の高い教育を解決するために、探究活動をとおして教育現場の現状を知ったり、提案について考えた。」

7. 環境保全・ゴミ削減活動（SDG14・15）（9人、7.5%）

- 「海洋プラスチック問題の原因であるポイ捨てされたゴミを拾って帰ることなど」
- 「SDGs14、15のように環境を守るためにゴミの分別などを今まで以上に気をつけて生活した」
- 「河手川という川の清掃活動を行い、海にゴミが放たれないようにゴミを集めた。」

8. 平等・不平等への取組（SDG10）（7人、5.8%）

- 「平等や協力に目を向け、5・6年では「日本の日本語教室の教師不足」と「校則の顕在化」についての探究を行った。」
- 「差別を減らすきっかけを作るということを目標に、5年、6年の探究を行ってきた。」
- 「同性婚について調べる活動で、SDGs 10「人や国の不平等を無くそう」の活動に取り組んだ」

9. 経済・産業に関する活動（SDG8）（7人、5.8%）

- 「特にSDGsの8番について多くやったと思います。二酸化炭素の排出を抑えたり、飛行機との比較をしたりして新たな産業への発展に貢献したと思います。」
- 「株の始める方法をまとめた」
- 「SDGs8番に関して、魅力を伝えることで働きがい、これによって増す人口で経済成長を効率的に行おうとした。」

10. 募金・寄付活動（6人、5.0%）

- 「募金活動をした。KAKEHASHIProjectの帰りの空港でたまたま見つけたので貢献した。」
- 「使った鉛筆を本屋で寄付している。」
- 「ユニクロに服を寄付」

以上が、アンケート結果から見られた主な10種類のSDGsへの取組である。生徒は授業やボランティア活動、日常生活の中でさまざまな形でSDGsに関連した活動に取り組んでいることがわかる。

【本校生徒が特に積極的に頑張っている、特に顕著な活動の例】

1. 外国にルーツを持つ子どもたちへの支援活動

- 「5年生のときに外国にルーツのある子供たちに勉強を教えるボランティアに参加した。」
- 「高校1年生の時に夏休みにあった外国にルーツのある小中学生のための教室に探しわかりやすい日本語で勉強を教え、SDGs4のために活動した。」
- 「地域の川の清掃、夏冬休みに外国にルーツを持つ子供たちと勉強や会話をする日本語ボランティア、ふれあいランドの祭りの手伝いなどたくさんのボランティアを行った。」

これらの活動は、授業の一環ではなく、休暇期間を使って行われており、SDG4（質の高い教育）とSDG10（人や国の不平等をなくそう）に直接貢献している。

2. 地域の環境保全活動の継続的な取組

- 「河手川という川の清掃活動を行い、海にゴミが放たれないようにゴミを集めた。」
- 「中学生の時に川の清掃ボランティアに参加した。SDGSの陸の豊かさを守ることに関係している。」

これらの活動は、本校の側に流れている地域の自然環境を直接保全する実践的な取組であり、SDG14（海の豊かさを守ろう）とSDG15（陸の豊かさも守ろう）に貢献している。

3. 企業と連携した具体的な課題解決

- 「広島大学で行われたSDGs中国大会に出て、企業の話聞き、解決策を班で考え、全体に発表した」
- 「企業の取り組むSDGs、その解決策の考案に取り組んだ。」

この活動は学校の枠を超えて外部の大学や企業と連携し、実社会の課題に取り組んでいる点で特に顕著である（World Wide Learning）。

4. 具体的な製品開発による課題解決

- 「四年の時に企業から出たゴミを有効活用してキーホルダーを作った。つかう責任つくる責任にかかわることができた。」
- 「食料廃棄物を減らすために捨てられる果物を使って香水にした。また地球温暖化防止のために自分ができることを考え英語のプレゼンで発表し実行した。」

問題を議論するだけでなく、実際に製品を開発することで課題解決に貢献しようとする実践的な学びである。

5. 地域活性化のための具体的な取組

- 「市内の映画館の活性化に向けて具体的な解決を出すことができた。」
- 「映画館シネマモードに若者を動員するためにすべきことを考える活動、子どもたちに熱中症の危険性と予防方法を伝える活動。」

これらの活動は、地域の特定の場所や施設の活性化に焦点を当て、具体的な解決策を提案・実行している点で顕著である。

これらの取組は、授業内での学習にとどまらず、実社会の課題に直接関わり、具体的な解決策を実践している点で特に優れていると言える。また、継続的な活動や複数のSDGsに同時に貢献している点も評価できるものである。

(15) 自己・社会性意識調査（R4～R6までの3年間の追跡調査）

この「自己・社会性意識調査」（3年間継続）は、日本財団が「18歳意識調査」として行っている「第62回一国や社会に対する意識（6カ国調査）」を参考に3年間継続実施したものである。

本校に入学した高校1年生が、高校3年生になるまで計4回実施することで、本校教育の強みと課題を明確にし、今後の教育活動に活かすことが目的である。

（1）回数と人数

＊高校在籍3年間で計4回実施（高1は入学時と年度末の2回）、各回約170～200名の回答）

- ❶ 高1・4月【N=195】
- ❷ 高1・2月【N=182】
- ❸ 高2・3月【N=175】
- ❹ 高3・7月【N=167】

（2）全国平均を加味した比較

- 本校の教育で大きく伸ばしたもの：「社会貢献意識」「責任感」「将来の希望」
- ▲ 今後の課題：「自立意識」「挑戦する力」「リスクを取る勇氣」
- ★ 今後：「挑戦できる環境」「成長を促す教育」

（3）結果の要約

本校教育には、「社会貢献意識が高く、将来への意欲が強い」という大きな強みがある一方で、「自立意識の低さ」や「安定志向の強さ」が全国平均と比べた際の課題として浮き上がった。今後は、社会との接点を増やし、自立心と挑戦する力を育てる教育を強化することで、さらなる成長が期待できる。

(4) アンケートのまとめ (本校教育の強み・課題)

【本校教育の強み】

【本校教育の課題】

本校教育の強み① 社会貢献意識の向上

① 社会貢献意識の向上

●「社会を変えられると思う」
→ +15.6% (22.1→37.7%)
(全国45.8%より低い(+15))

●「責任ある社会の一員だと思う」
→ +11.5% (72.3→83.8%)
(全国平均61.1%を大幅オーバー)

●「慈善活動に寄付したい」
→ +12.9% (48.2→61.1%)
(全国平均58.4%を超えた)

●「ボランティア活動に参加したい」
→ +10.0% (52.3→62.3%)
(全国60.4%より高い)

★本校教育で社会貢献意識が育った!
社会貢献やリーダーシップ教育でさらに向上。



本校教育の課題① 自立意識が低め

① 自立意識が低め

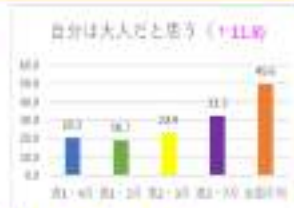
●「自分は大人だと思える」意識が低い
+11.8% 成長したが、

(20.5→32.3%)
全国平均49.6%と大きな差がある(32.3%)

※社会的責任感が高いが、自立意識は低め。
社会に出る準備や自己決定の機会が少ない可能性。

【改善策】

➡主体性や自己決定の機会を増やす
(生徒主体のプロジェクト、リーダーシップ活動、
勤労経験など)



本校教育の強み② 将来への希望が明確に

② 将来への希望が明確に

●「将来の夢を持っている」
→ +12.0% (60.5→72.5%)
(全国平均60.1%より高い)

★進学・就職等の目標設定ができたか。

●「社会の変化が楽しみ」
→ +8.3% (67.7→76.0%)
(全国平均は不明)



【ポイント】

進路・キャリア教育の充実により、将来の展望が明確になり、それに向かって努力する姿勢が育まれている!

本校教育の課題② チャレンジ精神が伸び悩み

② 挑戦意識が伸び悩み

●「高い目標のためにリスクを取る」
→ -0.2% (52.3→52.1%)
(全国平均は不明)

●「新しいことに挑戦したい」
→ +6.8% (62.1→68.9%)
(他の項目より伸びが低い)

【改善策】

➡挑戦する文化(チャレンジ精神)を育む
(失敗を学びに変える機会、クリエイティブな活動、
探究学習の促進)



本校教育の強み③ 勉強の意味の一つに「自己成長」

③ 「勉強の意味」が「就職・進学」+「自己成長」に

順位	高1(4月)	高3(7月)	変化のポイント
1位	よい就職(55.9%)	よい就職(46.1%)	約10%減少 → 就職重視の意識が弱まる
2位	よい進学(44.1%)	開く拡大(40.7%)	「よい進学」より「開く拡大」が2位に上昇!
3位	所得向上(36.9%)	よい進学(35.9%)	「所得向上」は順位変動(7位まで落ちる)

【ポイント】

●「勉強=就職・進学」中心から、「学びの楽しさ」にシフト!

●「よい就職」の割合が10%減少(55.9→46.1%)

●「開く拡大」が2位にランクアップ(33.5%→40.7%)

●「目標発見」が新たにランクイン(35.9%)

★本校の探究や探究学習が「自ら学ぶ姿勢」を育てた可能性!

★本校の進路指導が「単なる学習」ではなく「学びの価値」を伝えた結果!

●「所得向上」よりも「開く拡大」「目標発見」へ!

●「所得向上」は3位から7位へ急落(36.9→22.8%)

★「学び=お金のため」という考えが減り、幅広い視点で勉強。

【今後】

★さらに探究やプロジェクト型学習を進め、学びの楽しさを深める!

★「進学=目的」ではなく、「学びの意味」を意識させるキャリア教育を強化!

本校教育の課題③ 安定志向が根強い

③ 安定志向が根強い

(リスクを取ることに慎重)

●「経済的安定を重視する」
→ +1.6% (ほぼ変化なし)

●「心理的安定を重視する」
→ -2.4% (変化はあるが依然高い)

【改善策】

➡「安定」と「挑戦」のバランスを学ぶ

(キャリア教育、地域貢献活動、社会課題解決型学習(PBL)、
政策提言、インターンシップなど)



(5) 各アンケートの詳細結果



第3章 事業報告（実践レポート）

第3章 事業報告（実践レポート）

I 地域課題解決プロジェクト

(1) 福山のよさ再発見（中1、総合学習）	55
(2) 誰もが暮らしやすい福山の街づくりプロジェクト（中1、総合学習）	57
(3) グローカル人材育成事業（高1、総合的な学習の時間）①（平成29年度）	59
(4) グローカル人材育成事業（高1、総合的な探究の時間）②（令和元年度）	61
(5) グローカル人材育成事業（高1、総合的な探究の時間）③（令和4年度）	63
(6) グローカル人材育成事業（高1、総合的な探究の時間）④（令和6年度）	65
(7) 夢チャレ「福山市立大学との高大連携事業」（高2）①「福山駅前再生計画」（平成29年度）	69
(8) 夢チャレ「福山市立大学との高大連携事業」（高2）②「郊外団地のまちづくり」（平成30年度）	71
(9) 夢チャレ「福山市立大学との高大連携事業」（高2）③「地域公共交通のありかた」（令和元年度）	73
(10) 夢プロ「福山市立大学との高大連携事業」（高2）④「山野町の魅力発見・地域活性化」（令和2年度）	75
(11) もふお（羊）	77
(12) 地域の課題解決に取り組む卒業生から学ぶ（令和5年度、講演）	79

II 国際課題解決プロジェクト

(1) 姉妹校との国際交流（希望者、課外活動）	
①（オーストラリア）ダウンランズ高校①（平成29年度）	81
②（オーストラリア）ダウンランズ高校②（令和6年度）	83
③（アメリカ）マウイ（平成29年度）	87
④（韓国）ポハン①（平成29年度）	89
⑤（韓国）ポハン②（令和元年度）	93
⑥（マレーシア）メガリア高校とのディスカッション①（平成29年度）	95
⑦（マレーシア）メガリア高校と大学生とのディスカッション②（平成30年度）	97
⑧（マレーシア）セリララン高校と大学生とのディスカッション③（令和元年度）	99
(2) 海外ボランティア活動（SYD、課外活動）	101
(3) 模擬国連（ICC等有志、特別活動）	103
(4) 全国高等学校観光選手権大会（観光甲子園、ICC有志）	105
(5) 岡山イノベーションコンテスト2019（天保一プロジェクト）	107
(6) 外国にルーツを持つ児童・生徒への学習ボランティア（部活動）	109
(7) コロナ禍におけるリモートでの国際交流（部活動）	111

III 在り方生き方探究プロジェクト

(1) 自分発見学習（中1、総合学習）	113
(2) 夢チャレ（高2、課外活動）①（平成29年度）	115
(3) 夢チャレ（高2、課外活動）②（令和元年度）	119
(4) 夢プロ（高2、総合的な探究の時間）③（令和2年度）	121
(5) 夢プロ（高2、総合的な探究の時間）④（令和5年度）	123
(6)（SDGsの観点を取り入れた）課題研究（高3、総合学習）①（平成30年度）	125
(7) 課題研究（高3、総合的な探究の時間）②（令和3年度）	129
(7) 課題研究（高3、総合的な探究の時間）②（令和6年度）	131
(8) 個別最適な学び実証研究1年目（令和2年度、全学年総合）	133
(9) 個別最適な学び実証研究2年目（令和3年度、全学年総合）	135

IV 他校との実践交流・協働プロジェクト

(1) 名古屋国際中：サステイナブルスクール認定校①（平成29年度）	137
(2) 名古屋国際中高：サステイナブルスクール認定校②（令和元年度）	139
(3) WWL（ワールド・ワイド・ラーニング）1年目（高2、課外活動）①（令和2年度）	141
(4) WWL（ワールド・ワイド・ラーニング）2年目（高2、課外活動）②（令和3年度）	143
(5) WWL（ワールド・ワイド・ラーニング）5年目（高2、課外活動）③（令和6年度）	145
(6) みろくの里日本語学校との交流事業（高1・2、令和3年度）	147
(7) Happy Schools 関係でシンガポールから先生が来校（令和5年度）	149

■第3章 事業報告（実践レポート）

I 地域課題解決プロジェクト

（1）【事業報告】福山のよさ再発見（中1、総合学習）

文責 矢幡 愛

- | | |
|--------------|--|
| 1 学年・教科等 | 1 年 総合的な学習の時間 「福山のよさ再発見」 |
| 2 日時 | 平成 29 年度 中期（1 学期～2 学期） |
| 3 担当者、招聘講師等 | 1 学年教員（矢幡愛、有本一哉、瀧元美菜子、妹尾進一、山下一朗太） |
| 4 対象生徒等 | 1 学年生徒 120 名 |
| 5 本校 ESD の観点 | ☐ 国際課題解決プロジェクト ☒ 地域課題解決プロジェクト ☐ 在り方生き方探究プロジェクト |

6 テーマ設定の背景・経緯・目的等

本単元は、福山の有名な場所（もの）についての良さを再発見しその良さを発信するという活動の中で、郷土愛を育み、将来地域へ貢献する態度を培うことをねらいとしている。また、次単元の『誰もが暮らしやすい福山のまちづくりプロジェクト』での学習を見据え、福山の有名な場所（もの）についてグループで現地調査したり、調査内容を整理・分析しポスターセッションにむけてポスターや原稿作りをしたりすることを通して、協働して課題を解決する態度を養っていった。

7 単元の流れ

- （1）オリエンテーション：本単元の流れの確認、教員から地元自慢のプレゼン、福山の有名な場所（もの）をクラスごとに数個挙げさせ、挙げたものを3クラスで分担した（1 学年全体）。
- （2）どの福山の有名な場所（もの）を調査するか決定した（グループ）。
- （3）自分が担当になっているものについて、どのくらいの知識があるか挙げさせる（グループ）。
- （4）知っていることをグループ内で交流した（グループ）。
- （5）足りない情報やインターネットでは分からない部分を確認した（グループ）。
- （6）現地調査へむけて、調査内容を決定した。また、調査先の情報を調べ、アポ取りを行った（グループ）。
- （7）夏休みを使って現地調査を行った（グループ）。
- （8）総合係が仕切り、今後の学習計画を立てた（クラス・グループ）。
- （9）集めた調査内容をグループ内で交流し、整理分析した（グループ）。
- （10）整理分析した調査内容を、ポスターや発表原稿にまとめていった（グループ）。
- （11）クラス内発表を行い、相互評価をもとに改善した（クラス・グループ）。
- （12）グループごとにポスターセッションを行った（学年全体で2 時間を使い各グループ1 回ずつ発表）。
- （13）単元のふりかえりを行った（個人）。

8 生徒の評価（感想等）

- グループで協力して調査したり、調査したことをポスターにまとめたりする中で、自分の考えを言ったり、友達の考えを聞いたりすることが活発にできた。
- 福山も他の地域に積極的にアピールしたらよいと思った。
- 他の地域に負けたくないような有名なものがあり、よさを再発見できた。
- もっと知らない人に発表したいと思った。

グループで作成したポスター
（1 人1 枚作成し4 枚をつなぐ）



9 成果と課題

- 小学校のころと同じテーマだった生徒もいたが、調査の仕方や興味の対象が違い、違う面を発見できていた。
- 福山にも全国レベルの有名なものがあり、それを知ることによって地域への愛着が高まった。
- 校外へ調査に行くことを通して、調査することや伝えることへの責任感が出てきた。
- 総合係になりたいと思う生徒が増えてきた。
- ▲ポスターセッションの時に、調査先の人を招待し、聞いてもらう機会があれば良かった。
- ▲次単元につなげるために、まちづくりの機関の人を招き、地域の良さから課題を発見すること等の意見を述べてもらうことがあれば良かった。

ワークシート（一部）

1. 福山代表の有名なものや人

福山の有名なものや人	どこで見かける？

2. なぜ違いがあるのか？？

学校ブログへ掲載した記事と写真

ふるさと福山への愛着と誇りを育てることを目的として、「地域のよさ再発見」と題して、福山の歴史、文化、自然、産業などについてグループ別にフィールドワークを行い、調べたことをポスターにまとめていきました。写真はポスターセッションの様子です。

作成したポスターは廊下に掲示していますので、11月の参観日にぜひ御覧ください。



(2)【事業報告】誰もが暮らしやすい福山の街づくりプロジェクト(中1、総合学習)

文責 矢幡 愛

- 1 学年・教科等 1 年 総合的な学習の時間 「誰もが暮らしやすい福山の街づくりプロジェクト」
- 2 日時 平成 29 年度 後期 (2 学期～3 学期)
- 3 担当者、招聘講師等 1 学年教員 (矢幡愛、有本一哉、瀧元美菜子、妹尾進一、山下一朗太)
- 4 対象生徒等 1 学年生徒 120 名
- 5 本校 ESD の観点 ☐国際課題解決プロジェクト ☒地域課題解決プロジェクト ☐在り方生き方探究プロジェクト

6 テーマ設定の背景・経緯・目的等

本単元は、1 学期総合の集大成として、課題発見から提言までを行う。その過程の中でさまざまな活動を通して未来の福山について考え、福山を離れたとしてもそれぞれが住む場所によりよいまちづくりに参画していく力を培うことをねらいとしている。福山の地域の課題となるものを挙げさせ、課題に対応しているさまざまな機関を訪問し、具体的な課題について聞き取りを行った。そして、その課題を解決するための方法を考えていった。それをスライドにまとめ、訪れた機関を再訪問し自分たちの考えを発表した。そこからアドバイスや意見をもらった。

7 単元の流れ

- (1) オリエンテーション：まちづくりサポートセンターから所長を招聘し、まちづくりの考え方・まちづくりの活動具体例・中学生に期待すること等の話を聞いた (1 学年全体)。テーマの決定をした。
- (2) テーマについて取材内容を話し合った (グループ)。
- (3) 取材先へアポを取った (グループ)。
- (4) 冬休みを使い、各機関へ取材活動を行った (グループ)。
- (5) 取材内容をもとに、グループ内で整理分析を行った (グループ)。
- (6) プレ発表を行い、相互評価を行った (地域別クラス)。
- (7) 取材先に再訪問し、自分たちの考えを発表した (グループ)。
- (8) 本単元のふりかえりをした (個人)。
- (9) 各グループが作成したスライドを、一つの冊子にまとめた (教員)。



生徒が地域へ取材をした時の様子

8 生徒の評価 (感想等)

<誰もが暮らしやすいまちづくりを進めるにあたって、大切なことは何か。>

- 人を思うこと、自分のことばかり考えず、みんなのためになることを考えること。
- みんなが近所の人たちとの交流を深め、いざというときにしっかり協力を得られるようになること。
- 大人しかできないことばかりと思っていたが、自分たちでも工夫を重ねることで少しでも協力できることがある。そうとこころを積極的にやっていくこと。
- なぜその課題が出てしまうのかを考えること。

9 成果と課題

- ふりかえりにおいては、人と関わることの大切さについて書く生徒が多かった。
- 中学生の視点で課題・解決策を考えることで地域がより身近になった。
- オリエンテーションで、まちづくりに関わる人の話を聞いたり、取材先に再訪問し自分たちの考えを発表したりすることによって、現実問題として考えることができた。
- クラスを越えて協働的な活動ができた。
- ▲グループで本単元のふりかえりができると良かった。
- ▲教員が訪問先へ行くことができなかった。
- ▲2 年生の学習へどうつなげていくのか話し合いが十分でなかった。

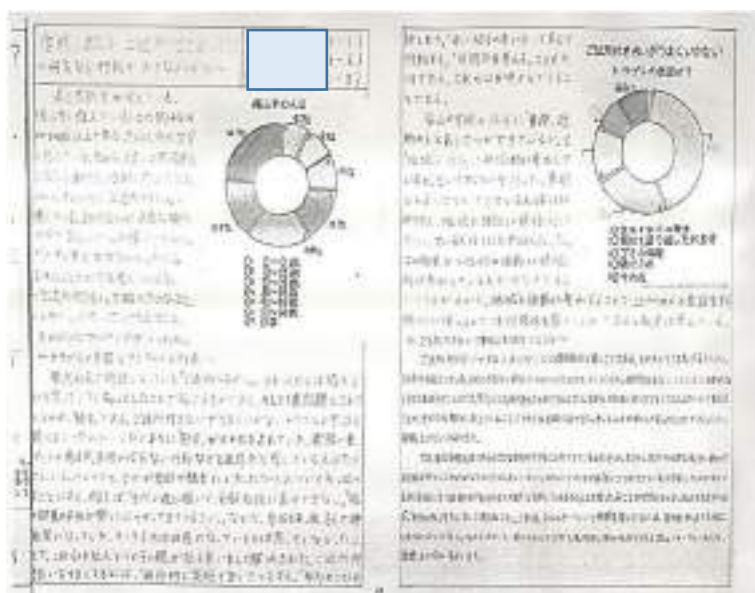
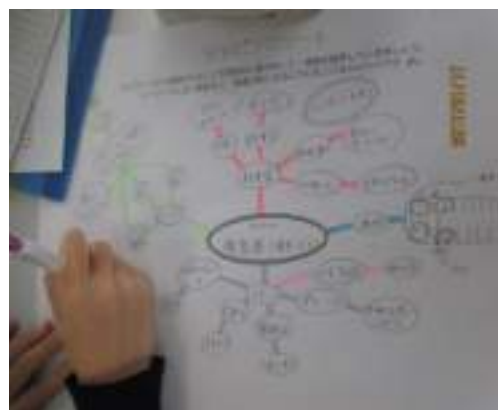
ワークシート

4 取組計画 (13 時間)			
次	月日曜 (予定)	内容	備考
1	12 月 5 日 (火)	「誰もが暮らしやすい福山の街づくり」プロジェクト ⑤講演 ※詳細は5で ⑥テーマの決定、取材等の準備の確認	
	冬休み中	各グループで取材活動	
2	1 月 16 日 (火)	⑤持ち寄った資料をもとに、グループで分析・検討 ⑥同上	
3	1 月 30 日 (火)	⑤ポスターのレイアウトを決める ⑥下書きを行う。	パワポ or ポスター
4	2 月 6 日 (火)	⑤ポスターの作成 ⑥ポスターの作成	
5	2 月 20 日 (火)	⑤発表原稿の作成 ⑥発表練習	
6	3 月 6 日 (火)	⑤プレゼンテーション ⑥同上 ※詳細は5で	大望館使用できる 日に設定
7	3 月 13 日 (火)	⑤学習のまとめ	

生徒の活動の様子



生徒が書いたイメージマップ



（３）【事業報告】グローバル人材育成事業（高１）①（平成 29 年）

文責 西村礼志

- 1 学年・教科等 4 年 総合的な学習の時間 「グローバル人材育成事業」
- 2 日時 2017 年（平成 29 年）4 月～12 月
- 3 担当者 西村礼志（教育研究部）・松村和司（学年主任）
- 4 対象生徒等 生徒 198 名（4 学年全員）と教員 12 名
- 5 本校 ESD の観点 ☐国際課題解決プロジェクト ☒地域課題解決プロジェクト ☒在り方生き方探究プロジェクト

6 テーマ設定の背景・経緯・目的等

（目的）地元企業の特徴や、オンリーワン・グローバル企業における経営・技術力・戦略を学ぶことで、グローバルな視点・資質・能力の育成を行うとともに、将来設計の中に地元企業を意識することができるグローバル（＝グローバル＋ローカル）な人材を育成する。

（目標）高校生が作成した高校生のための福山の企業ガイド「Hi-Hi ふくやま 2017」を作成し、福山市内の高校生に発信する。

7 内容の具体・展開の流れ

4 月 ●研究方法の理解

講義：有限責任監査法人トーマツ 時任奈穂 シニアディレクター

5 月 ●基礎的経営学の学習

講義：福山市立大学都市経営学部 玉井由樹 准教授

6 月 ●福山市の産業構造の理解

講義：福山市産業振興課 前原由幸 次長（産業振興担当）

●経営全般、技術開発の取組、グローバル展開・戦略、仕事のイメージ等を学ぶ
ラーニングカフェ：協力企業 18 社（50 音順）

青山商事株式会社、池田糖化工業株式会社、占部建設工業株式会社、柿原工業株式会社、株式会社栄工社、株式会社エフピコ、株式会社エブリィ、株式会社サンエス、株式会社ププレひまわり、株式会社ベッセル、坂本デニム株式会社、タカオ株式会社、日東製網株式会社、早川ゴム株式会社、広島化成株式会社、ホーコス株式会社、マナック株式会社、有限会社柿原銘板製作所

7 月 ●企業訪問準備、マナー講座

講演：青山商事株式会社 営業部 齋藤賢一 部長代理

8 月 ●企業訪問研修（7 月下旬～8 月上旬）

●アウトプットの方法を学ぶ

演習：有限責任監査法人トーマツ 時任奈穂 シニアディレクター

9 月 ●成果物作成

10 月 ●ポスターセッション（各班が研究内容を発表し、代表班 2 班を選出）

11 月 ●企業ガイド作成、公開研究会で代表 2 班発表

12 月 ●成果発表会（全 18 班）、「Hi-Hi ふくやま 2017」発行、配付



トーマツ 時任シニアディレクターの講義



玉井由樹准教授の講義



ラーニングカフェ



成果発表会

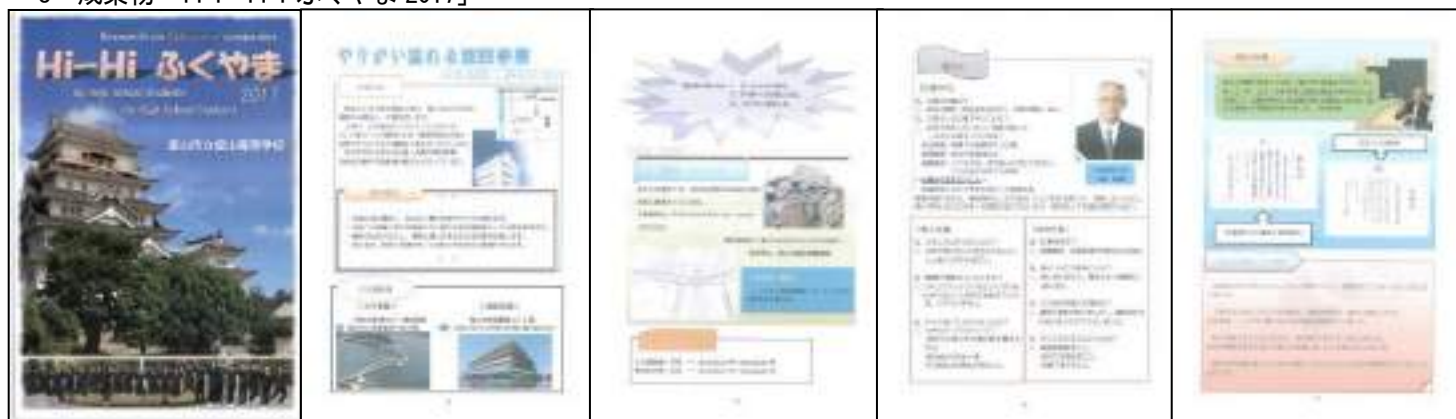


ポスターセッション



企業訪問

8 成果物「Hi-Hiふくやま 2017」



成果物「Hi-Hiふくやま 2017」は、1社あたり4ページで作成し、1000印刷した。成果物は福山地区国公立高校 28校に、各校1学年クラス数分を配付し、各校のキャリア教育・地域学習への活用を依頼した。また、地元商工会議所・商工会を通じて約300冊を、企業に配付し、本事業についての理解と次年度の協力を依頼した。

9 成果と課題

(1) 成果

① ルーブリック評価

資質・能力の向上について自己評価の変容をみるために、1学期と2学期において、ルーブリック評価を行った。ア「福山中高で育みたい資質・能力ルーブリック」については、4学年において上昇した生徒の割合は65.8%。イ「ESD3大プロジェクトルーブリック」については、4学年において上昇した生徒の割合は44.6%。事業完了後の3学期における評価で、事業の効果度を検証したい。

ア

	①～⑥の合計値が 上昇した生徒数	割合	
1年	107	89.2%	【N=120】
2年	69	63.3%	【N=109】
3年	75	73.5%	【N=102】
4年	129	65.8%	【N=196】
5年	135	74.2%	【N=182】
6年	156	82.5%	【N=189】

イ

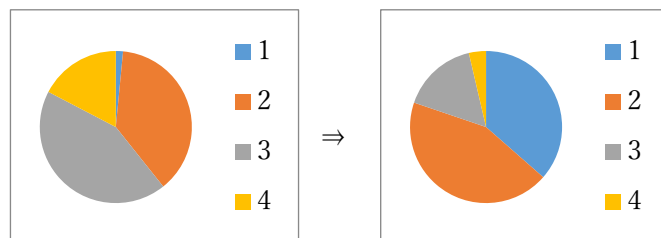
	①～③の合計値が 上昇した生徒数	割合	
1年	96	80.0%	【N=120】
2年	40	36.4%	【N=110】
3年	57	52.3%	【N=109】
4年	87	44.6%	【N=195】
5年	101	55.8%	【N=181】
6年	79	37.7%	【N=191】

② 「福山市の企業」に関する関心度アンケート

事業の事前・事後に同一のアンケートを行った。

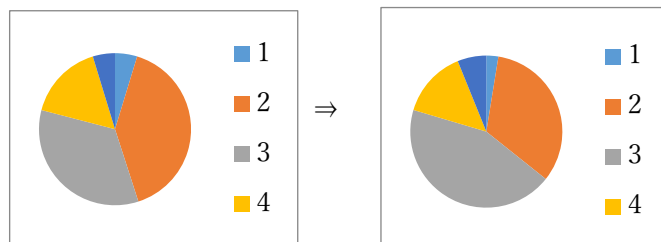
ア あなたは福山市にどんな企業があるか
知っていますか。

- 1 知っている(10社以上)
- 2 少し知っている(3社～9社)
- 3 あまり知らない(1社もしくは2社)
- 4 知らない(0社)



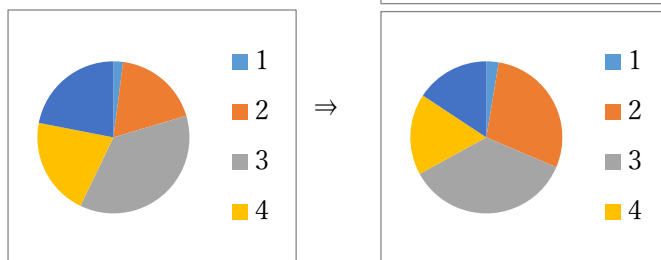
イ あなたは福山市の企業について興味がありますか。

- 1 ある
- 2 少しある
- 3 あまりない
- 4 ない
- 5 わからない



ウ あなたは将来、福山市の企業に就職したいと思いますか。

- 1 思う
- 2 少し思う
- 3 あまり思わない
- 4 思わない
- 5 わからない



(2) 課題

- ・成果物やパワーポイントの内容、プレゼンテーションの方法や表現力に差が見られた。
- ・一部の班では、「協働的な学び・作業をする」という観点が欠けていて、一部の生徒による作業となった。
- ・協力企業からのアンケートを基に、次年度の実施計画を作成する。

(4)【事業報告】グローバル人材育成事業(高1)②(平成31年)

文責 井上 綾

- 1 学年・教科等 4年 総合的な探究の時間 「グローバル人材育成事業」
- 2 日時 2019年(平成31年)4月～2020年(令和2年)2月
- 3 担当者 井上 綾、上山 晋平、西田 知佳(教育研究部)
- 4 対象生徒等 生徒191名(4学年全員)と教員12名
- 5 本校ESDの観点 ☐国際課題解決プロジェクト ☒地域課題解決プロジェクト ☒在り方生き方探究プロジェクト
- 6 テーマ設定の背景・経緯・目的等

① 地元企業研究

ナンバーワン・オンリーワン企業の良さ・工夫点を知り、グローバルな資質・能力を身に付ける。

② 課題解決

探究に主体的・協働的・創造的に取り組むことを通して、他者と課題解決を図る。

③ 探究サイクル

上記①②を通して「課題の設定→情報の収集→整理・分析→まとめ・表現」を身に付ける。

(目標) 高校生が作成した高校生のための福山の企業ガイド「Hi-Hi ふくやま 2019」を作成し、福山市内の高校生に発信する。

7 内容の具体・展開の流れ

4月 ●事前学習

合宿にて「総合的な探究の時間」ガイダンス

5月 ●基礎的経営学の学習

講義：福山市立大学都市経営学部 玉井由樹 教授

6月 ●福山市の産業構造の理解

講義：福山市産業振興課 前原由幸 次長(産業振興担当)

●経営全般、技術開発の取組、グローバル展開・戦略、仕事のイメージ等を学ぶ

ラーニングカフェ：協力企業17社(50音順)

- | | | |
|---------------|----------------|-----------------------|
| ①アサヒグループ食品(株) | ②アシード(株) | ③(株)アスコン |
| ④アマノ企業(株) | ⑤(株)北川鉄工所 | ⑥(株)キャステム |
| ⑦(株)心石工芸 | ⑧(株)ジーベック | ⑨ツネイシCバリューズ(株) |
| ⑩ツネイシLR(株) | ⑪(株)ニチマン | ⑫ヒロボー(株) |
| ⑬福山青果(株) | ⑭(株)福山臨床検査センター | ⑮(株)メディアテック心/ホテルいんのしま |
| ⑯(株)ユーホー | ⑰リョービ(株) | |

7月 ●企業訪問準備、マナー講座

講演：青山商事株式会社 営業部 齋藤賢一 部長代理

8月 ●企業訪問研修(7月下旬～8月上旬)

9月 ●情報の整理

10月 ●ポスター掲示によるギャラリーウォーク

11月 ●校内発表会(全17班)

12月 ●成果発表会(各企業ごと・全17班)、

3月 ●「Hi-Hi ふくやま 2019」発行、配付



ラーニングカフェ



成果発表会(企業にて)

8 成果物「Hi-Hiふくやま 2019」（例：リョービ(株)）



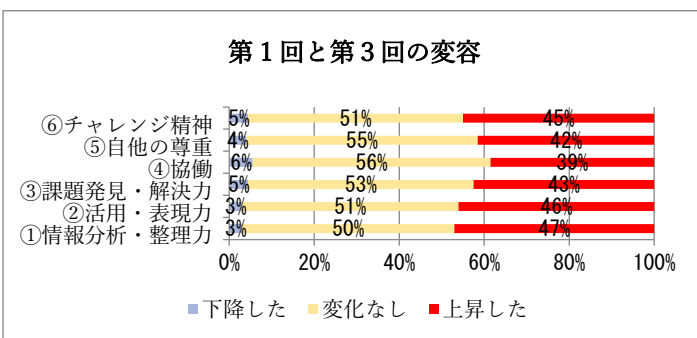
成果物「Hi-Hiふくやま 2019」は、1社あたり4ページで作成し、1000印刷。成果物は福山地区国公立高校28校に、各校1学年クラス数分を配付し、各校のキャリア教育・地域学習への活用を依頼する。また、地元商工会議所・商工会を通じて約300冊を、企業に配付し、本事業についての理解と次年度の協力を依頼する。

9 成果と課題

(1) 成果

① ルーブリック評価

資質・能力の向上について自己評価の変容をみるために、1学期と3学期において、ルーブリック評価を行った。「福山中高で育みたい資質・能力ルーブリック」については、4学年において下の①～⑥の項目について上昇した生徒の割合はどれもほぼ40%以上である。6つの資質・能力の合計で伸びた人は145名/189名中で77%だった。

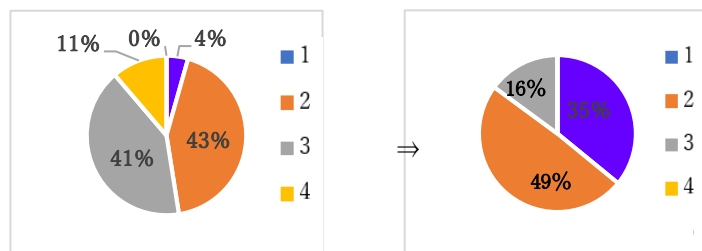


② 「福山市の企業」に関する関心度アンケート

事業の事前・事後に同一のアンケートを行った。

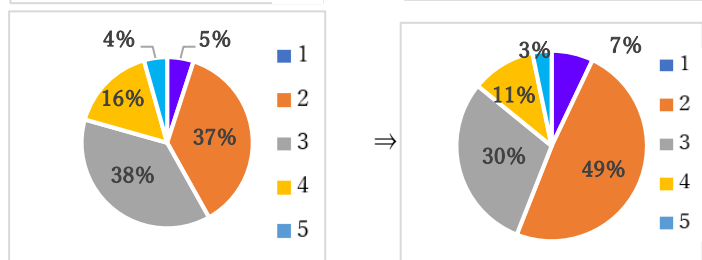
ア あなたは福山市にどんな企業があるか知っていますか。

- | | |
|---------------------|---------|
| 1 知っている(10社以上) | 4%→35% |
| 2 少し知っている(3社～9社) | 43%→49% |
| 3 あまり知らない(1社もしくは2社) | 41%→16% |
| 4 知らない(0社) | 11%→0% |



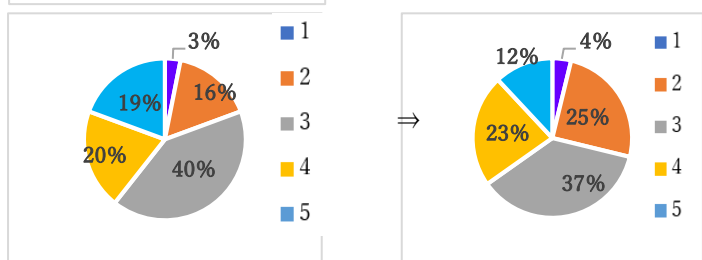
イ あなたは福山市の企業について興味がありますか。

- | | |
|---------|---------|
| 1 ある | 5%→3% |
| 2 少しある | 37%→49% |
| 3 あまりない | 38%→30% |
| 4 ない | 16%→11% |
| 5 わからない | 4%→3% |



ウ あなたは将来、福山市の企業に就職したいと思いますか。

- | | |
|-----------|---------|
| 1 思う | 3%→4% |
| 2 少し思う | 16%→25% |
| 3 あまり思わない | 40%→37% |
| 4 思わない | 20%→23% |
| 5 わからない | 19%→12% |



*他の職種(教員、医師等)希望者は、「(あまり)思わない」に含まれる。

(2) 課題

- ・グループ内の役割分担が適切に行われることで、グループとしての力を十分に発揮することができた。
- ・授業時間外での作業が多く、生徒にも担当教員にも負担となることもあった。

（５）【事業報告】グローバル人材育成事業（高１）③（令和４年）

文責 上山 晋平

- 1 学年・教科等 4年 総合的な探究の時間 「地元企業探究（グローバル人材育成事業）」
- 2 日時 2022年（令和4）4月～2023年（令和5）3月
- 3 担当者 西村礼二、西田 知佳、上山 晋平（教育研究部）
- 4 対象生徒等 生徒200名（4学年全員）と教員12名
- 5 本校ESDの観点 □国際課題解決プロジェクト ■地域課題解決プロジェクト ■在り方生き方探究プロジェクト
- 6 テーマ設定の背景・経緯・目的等

① 地元企業研究

ナンバーワン・オンリーワン企業の良さ・工夫点を知り、グローバルな資質・能力を身に付ける。

② 課題解決

探究に主体的・協働的・創造的に取り組むことを通して、他者と課題解決を図る。

③ 探究プロセス

上記①②を通して「課題の設定→情報の収集→整理・分析→まとめ・表現」の過程を身に付ける。

（目標）高校生のための福山の企業ガイド「Hi-Hi ふくやま 2022」を作成し、市内の高校生に発信する。

7 内容の具体・展開の流れ

- 4月 ●「総合的な探究の時間」ガイダンス（2時間）・企業企業アンケート
- 5月 ●福山市の現状についての講演（渡辺幸三様）
- 6月 ●ラーニングカフェの準備：協力企業13社
 ①JA福山市（ふくふく市） ②ナチュラルマーケット イコウ ③有限会社入江豊三郎本店
 ④山野峡大田ワイナリー ⑤FUKUYAMA MONO SHOP（天満屋）
 ⑥広島県立歴史博物館ふくやま草戸千軒ミュージアム ⑦福山八幡宮
 ⑧福山駅前シネマモード ⑨鞆の浦歴史民俗資料館 ⑩鞆鉄道株式会社
 ⑪アサヒタクシー株式会社 ⑫株式会社中国トラベル ⑬株式会社 sun crea（オリエンタルホテル）
- 7月 ●ラーニングカフェ・企業訪問準備
- 8月 ●企業訪問研修（7月下旬～8月上旬）
- 9月 ●ギャラリーウォーク準備
- 10月 ●ポスター掲示によるギャラリーウォーク・校内発表準備
- 11月 ●校内発表会（対象：生徒）
- 12月 ●成果発表会（企業訪問 or 校内発表）
- 1月 ●Hi-Hi ふくやま 2022 冊子掲載スライド（8枚）準備
- 2月 ●探究成果（校外）発表会@イチセトウチ（200名来場）
- 3月 ●「Hi-Hi ふくやま 2022」発行、配付



ラーニングカフェ



8 成果物「Hi-Hi ふくやま 2022」（例：JA福山市） ギャラリーウォーク

成果発表会（企業にて）

（JA福山市Webより）



【初の校外探究成果発表会の実施（イチセトウチでのイベント）】



(CHUGOKU ビジネス情報 2023 年 3 月 10 日号) *許可を得て掲載

9 成果と課題（イチセトウチでのイベントについて）

（1）イチセトウチイベントの成果（参加生徒アンケートより）

- 前例がないイベントだったので1から企画するのはとても難しかったと思うように進まなかったこともあったけれど
 どういう風に工夫したらお客さんが回りやすいか、どういうことをすればもっと探究を知ってもらえるかと試行錯誤して
 なんとかいいイベントを開催できたし、他の探究グループの活動内容も知れて良かったです。
- 接客業は難しいということが学べた。声をかけても無視されることはザラにあるし、だが高に声をかけていかないと
 商品は売れないし、忍耐力が必要かつ精神力の増強につながると思った。
- 学校の授業と違って、企業の方やお客さんと直接関わることができたのが良かったです。
 また活動の内容を発信できたのも良かったと思います。
- 見返りがなくても人に喜んでいただけるだけで、とても嬉しくなった。
- その企業でどんな物が売られているのか知れたり、パンフレットを通して福山のことも知れたから良かった。

（2）イチセトウチイベントの課題（来場者アンケートより）

- 生徒たちの声かけで、自分たちが何をやったのかアピールがあったら、もっとよかったです。
- 定期開催したらいいと思います！もっと福山の人にも知ってもらいたいですね。スタンプラリーがあるのがわかりにくか
 ったので、両方の入り口から回る順番などルートを決めてぐるっと全部まわれるようにするとよいと思う。
- せっかくのイベントだけど、周知が少なかったかとも思います。イチセトウチの web には top で乗っていたけれど、せつ
 かく素敵なイベントなので、まだまだ人が集まりそうなのでもったいない。（関係者）

4年生グローバル人材育成事業 探究活動の紹介

2023年度 グローバル人材育成事業 探究先

1	iti-SETOUCHI 福山電業株式会社	iti-SETOUCHI
2	JA福山市	JA福山市
3	JR西日本	JR西日本
4	株式会社 サン・クレア	SAN-KUREA
5	Wakai.Farm.my	Wakai.Farm.my
6	岡本亀太郎本店	岡本亀太郎本店
7	株式会社キャストム	CASTEM
8	株式会社中国トラベル	株式会社中国トラベル
9	二重稲荷神社	二重稲荷神社
10	徳原デキスタイル株式会社	SHINOTEX
11	伊賀土屋白牡丹株式会社	伊賀土屋白牡丹株式会社
12	山野越太田ワイナリー	山野越太田ワイナリー

「福山市グローバル人材育成事業」は、2017年から行っている福山高等学校1年生による地元探究活動です。地元企業や団体のSDGsにつながる取組を研究し、頂いた課題の解決を探る「探究的な学び」の活動です。この活動を通して備後地域の魅力と課題を発見し、地元の持続的発展に関わっていけたらと願っています。

* 探究の様子は、福山中・高等学校 HP 内の「グローバル」サイトで発信しています。

QRコード



JA福山市



JA福山市様からは、食をめぐるSDGsの観点から、フードロス対策という課題をいただいております。生産現場の実態を知り、特産農産物を使ったメニューを考え、商品化の道を探ります。今年のテーマは、カレーです。



Iti-SETOUCHI



エフビコRiMの1階がリノベーションされ、iti-SETOUCHIがつけられました。利用者が主体的に参加し行動するアイデアに満ちた場所を目指します。昨年、4年生がここでグローバルフェスを行いました。これを引き継ぎ、賑わいづくりを考え、提案実行していきます。



JR西日本（備後赤坂駅）



多くの生徒が3～6年間にわたってお世話になる備後赤坂駅は、無人駅です。そこを、単なる通過点として利用するのではなく、情報の発信基地や交流の場にしてみてもいい？全国の無人駅の活用例を探究しながら、私たちの備後赤坂駅を提案し、できることを探ります。



サン・クレア



駅前のアンカーホテルやオリエンタルホテルを運営されているサンクレア、単なる宿泊所だけでなく、地域産業とのつながりを大切にされています。地元食材を使ってフードロス対策としての朝食メニューを探ります。



Wakai farm.my



外国人向けの多種多様な野菜を栽培して日本中に出荷しています。ここは、単なる農場ではなく、多様性あふれる国際交流の場でもあり、近隣や、広島大学などから実習生や留学生も集まっています。農業体験や交流をしながら、農業のことや多文化共生のことなど、楽しく考え、一緒に新たな農園を創造していきます。



岡本亀太郎本店



ベリも飲んだという蕎麦の浦を代表する名産品の保命酒。岡本亀太郎本店の建物は、福山城の東にあった長屋門を移築した重要文化財です。今年は、ここをベースに、保命酒のこと、そして蕎麦の浦の魅力を探究しながら、歴史伝統と風景に合った広報を考え、製作していきます。



キャストム



精密製造部品を主軸とするグローバルなオンリーワン・ナンバーワン企業です。御幸町にある会社の門を見てもわかるように、遊び心のある製品を発信し、話題を提供しています。この技術を使って、ストーリー性のある商品を考え、提案します。

中国トラベル



福山市内や瀬戸内の自然や文化、産業などの魅力ある素材を活用したオリジナルなツーリズムを考え、提案します。

三蔵稲荷神社



お城の北西（良の方角）、二の丸に位置し、400年近く福山の文化を支えてきました。意外と知らない神社という日本独特の文化を探究し、様々な角度からその特色を発信します。また、お城を含め、神社付近の地域の歴史や魅力を再発見していきます。

篠原テキスタイル



福山特産であるデニム生地を生産を支えています。アップサイクル商品としてのSHINOTEXというブランドも発信しています。デニムの魅力や備後地域との関係を探り、デニム生地を使った商品を提案製作し、販売を目指します。

修復工房白牡丹



本通に靴の修復工房、白牡丹があります。思い入れある靴などの革製品を蘇らせてきました。この伝統技術を使って、どのようなことができるか考えていきます。また、このお店がある本通という商店街も探究していきます。過去の本通を知り、現在を歩いて交流して体験し、未来の姿を提案していきます。

山野峡大田ワイナリー



ワイナリーをベースに、四季折々の耕作放棄地でのブドウの栽培を追いつつ、豊かな自然を楽しみながら活動、交流していきます。山野町という福山郊外の里山里地の魅力とSDGsのための課題解決策も考え、関係人口を増やすためのACTIONを起こしていきます。



(6)【事業報告】グローバル人材育成事業(高1)④(令和6年)

令和6年度は、ご協力いただいた関連企業と、そこでのフィールドワークの様子を以下、ご報告する。

福山市グローバル人材育成事業は、2017年から行っている福山中・高等学校4年生(高校1年生)による地元探究活動です。地元企業や団体のSDGsにつながる取組を研究し、頂いた課題の解決を探る「探究的な学び」の活動です。この活動を通して備後地域の魅力と課題を発見し、地元の持続的発展に関わっていただくと願っています。

2024年度 4年生グローバル人材育成事業探究先



グループ名(仮)	協力企業・団体	ロゴ	内容
1 商店街を元気にし隊	umbrella		福山市商店街振興会、協賛企業から「よりよい」街を創出するために、2024年にアーケード整備計画、商店街の活性化を図るための取組として、ここに協賛企業umbrellaは、この取り組みに賛同し、商店街の活性化に貢献する。umbrellaは、地域の魅力と課題を発見し、地元の持続的発展に関わっていただくと願っています。
2 福山駅前を面白くし隊	iti SETOUCHI		iti SETOUCHIは、iti(iti)とSetouchi(瀬戸内)の組み合わせで、iti SETOUCHIは、iti SETOUCHIのロゴをデザインしています。iti SETOUCHIは、iti SETOUCHIのロゴをデザインしています。
3 ものづくりの楽しさを極め隊	株式会社キャスト		株式会社キャストは、iti SETOUCHIのロゴをデザインしています。iti SETOUCHIは、iti SETOUCHIのロゴをデザインしています。
4 フードロスをなくし隊	株式会社 ダイエツクック サプライ		株式会社ダイエツクック サプライは、iti SETOUCHIのロゴをデザインしています。iti SETOUCHIは、iti SETOUCHIのロゴをデザインしています。
5 古墳を見つけ隊	御領の古代ロマンを蘇らせる会		御領の古代ロマンを蘇らせる会は、iti SETOUCHIのロゴをデザインしています。iti SETOUCHIは、iti SETOUCHIのロゴをデザインしています。
6 福山デニムの魅力を広め隊	篠原テキスタイル株式会社		篠原テキスタイル株式会社は、iti SETOUCHIのロゴをデザインしています。iti SETOUCHIは、iti SETOUCHIのロゴをデザインしています。
7 バスでワクワクし隊	株式会社中国バス		株式会社中国バスは、iti SETOUCHIのロゴをデザインしています。iti SETOUCHIは、iti SETOUCHIのロゴをデザインしています。
8 福山の魅力を広め隊	福山観光コンベンション協会		福山観光コンベンション協会は、iti SETOUCHIのロゴをデザインしています。iti SETOUCHIは、iti SETOUCHIのロゴをデザインしています。
9 大学でのまちづくりに繋がり隊	福山市立大学 都市経営学部		福山市立大学 都市経営学部は、iti SETOUCHIのロゴをデザインしています。iti SETOUCHIは、iti SETOUCHIのロゴをデザインしています。
10 瀬戸内海の恵みを守り隊	マルコ水産 有限会社		マルコ水産 有限会社は、iti SETOUCHIのロゴをデザインしています。iti SETOUCHIは、iti SETOUCHIのロゴをデザインしています。
11 里山の魅力を伝え隊	山野峡大田ワイナリー		山野峡大田ワイナリーは、iti SETOUCHIのロゴをデザインしています。iti SETOUCHIは、iti SETOUCHIのロゴをデザインしています。
12 農業で国際交流し隊	ワカイファーマー		ワカイファーマーは、iti SETOUCHIのロゴをデザインしています。iti SETOUCHIは、iti SETOUCHIのロゴをデザインしています。

2024(R6) 年度 4 年生探究活動（グローバル人材育成事業）フィールドワークの様子



(7)【事業報告】夢チャレ「市立大学との高大連携事業」(高2)①(平成29年度)

文責 川高佐知子

- 1 学年・教科等 5年「夢チャレ」 福山市立大学との高大連携事業
「地元高校生が考える福山駅前再生計画!」
- 2 日時 2017年(平成29年)5月～11月
- 3 担当者、招聘講師等 川高佐知子(福山高校)・太田尚孝講師(福山市立大学都市経営学部)
- 4 対象生徒等 生徒23名(5学年希望者)
- 5 本校ESDの観点 ☐国際課題解決プロジェクト ☒地域課題解決プロジェクト ☒在り方生き方探究プロジェクト

6 テーマ設定の背景・経緯・目的等

福山市の将来を担う福山市立の高校生が、福山市や福山市立大学の教員・大学生から、今後のまちづくりに必要な考え方やスキルを学び、高校生目線でのまちづくり提案を行う。(5学年の「総合的な学習の時間」において、『夢チャレ』と名付けたプログラムを立ち上げた。これは、生徒個人個人が学校の枠組みを超えた活動に挑戦し、その体験を報告し合うことで、人間力を高め合うというもの。その一環として福山市立大学との高大連携事業「地元高校生が考える福山駅前再生計画!」にも取り組ませていただいた。)

7 内容の具体・展開の流れ

- (1) 5月26日(金)17:00～18:00 @福山市立高等学校:出前講座
太田先生による出前講座(30分程度):本事業の概要とスケジュールの説明
「(仮称)まちづくりは面白い!~まちづくりを行うための3つの視点~」
- (2) 5月末 参加者の確定
- (3) 6月9日(金)17:00～18:00 @福山市立高等学校:太田先生とゼミ学生来校
大学での学び・まちづくりデザインゲーム
- (4) 7月14日(金)16:30～18:00 @福山市立大学:大学訪問
大学内キャンパスツアー・RESAS/WEB GISの演習
- (5) 7月28日(金)9:00～16:00 @福山駅前・ローズコム:まち歩き&WS
福山市職員とまち歩き・ゼミ学生とWS
- (6) 8月3日(木)4日(金)9:00～16:00 @ローズコム:まちづくりWS・中間発表
- (7) 9月～10月上旬 校内で提案に関するブラッシュアップ
- (8) 10月13日(金)17:00～18:00 @福山市立高等学校:太田先生とゼミ学生来校
最終発表に向けた作戦会議
- (9) 10月30日(月)17:00～18:00 @福山市立大学:大学訪問
最終発表会リハーサルと最終確認
- (10) 11月11日(土)の午後@福山市立大学:学園祭で最終発表会
大学学園祭の企画として、高校生によるまちづくり提案発表会を実施。
高校・大学・市関係者を審査員として、投票により最優秀賞、優秀賞の決定

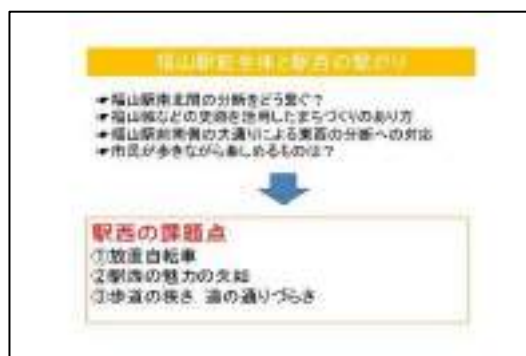
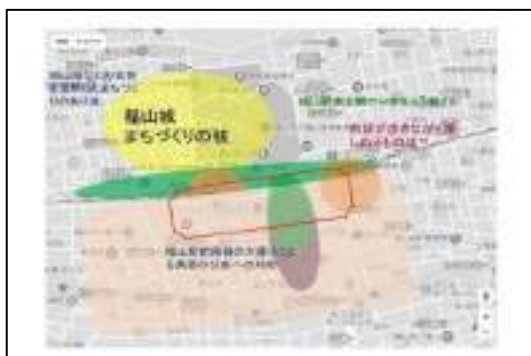
8 生徒の評価(感想等)

- 町とのつながりなどいろんな視点で福山を見ることによって何が足りないか、どのようにするともっと発展するのかなど考えて、大変だったけどとても楽しかったです。自分の将来の夢は建築業なのでいろんなことが学べて良かったと思います。また、市立大学の都市経営学部の方たち、先生などに関わり、多くのことを知りました。工学だけでなくあらゆる学問のことを学べていいなと思います。

9 成果と課題

- (成果)まちづくり意識・街を見る目の獲得・プレゼンテーションについては相手意識など参加生徒の様々な側面での成長が感じられた。生徒にとっては大学が身近に感じられ、大学進学についての認識が具体化し、大学での学びについて学問分野的な理解や、地域と大学の関わりについての理解も進んだ。
- (課題)次年度、大学側で担当する指導者が変わってしまいそうなので、今年度のノウハウや、良かった点をいかに継承するか、または、全く新しい取組として始めるべきか、検討する必要がある。

●駅西[家族が安心して歩ける街]チーム プレゼンスライド（作成中）



(8)【事業報告】夢チャレ「市立大学との高大連携事業」(高2)②(平成30年度)

文責 和佐田知子

- 1 学年・教科等 5年「夢チャレ」 福山市立大学との高大連携事業
「地元高校生が考える郊外団地(幕山台)のまちづくり」
- 2 日時 平成30年5月～12月
- 3 担当者、招聘講師等 和佐田知子(福山高校)・渡邊 一成教授(福山市立大学都市経営学部)
- 4 対象生徒等 生徒20名程度(5学年希望者)
- 5 本校ESDの観点 ☐国際課題解決プロジェクト ☒地域課題解決プロジェクト ☒在り方生き方探究プロジェクト
- 6 テーマ設定の背景・経緯・目的等

福山市の将来を担う福山市立の高校生が、福山市や福山市立大学の教員・大学生から、高齢化が進む郊外団地における今後のまちづくりに必要な考え方やスキルを学び、高校生目線でのまちづくり提案を行う。

7 内容の具体・展開の流れ

- (1) 6月19日(火) 17:00～18:00 場所: 福山市立福山高等学校
スタートアップ授業
- (2) 7月21日(土)・22日(日) 場所: 福山市立大学
オープンキャンパス GIS授業
- (3) 7月23日(月) 17:00～18:00 場所: 福山市立福山高等学校
現地視察の事前説明
- (4) 8月7日(火) 9:00～16:00 研修場所: 福山市東部支所 幕山台学区の説明、提案発表作成
～ ワークショップ ～
- (5) 8月10日(金) 9:00～16:00 研修場所: 福山市東部支所 幕山台
～ ワークショップ ～ ミニ講義、提案発表作成
- (6) 10月9日(火) 15:00～17:30 場所: 福山市立大学
～ ワークショップ ～ 提案発表まとめ
- (7) 10月23日(火) 14:50～17:30 場所: 福山市立大学
～ ワークショップ ～ 提案発表まとめ＋リハーサル
- (8) 11月4日(日) 10:40～ 幕山台学区文化祭にて開催
提案発表(発表は2グループ)
- (9) 11月17日(土) 11:00～12:00 場所: 福山市立大学(大学祭にて開催)
最終提案発表
- (10) 12月7日(金) 16:00～17:00 場所: 福山市立福山高等学校
振り返り、意見集約



8 生徒の評価(感想等)

- 僕たちのような若い世代がこのような活動に参加することにすごく意味があると感じました。大学生の課題に対するアプローチの仕方はとても参考になりました。たくさんの方々が関わってできた事業だと思うので、感謝するとともに、この活動が意味のあるものになってほしいと思いました。
- 大学ではより専門的な知識を勉強することがわかりました。また、実際に目で見て回ること、表などからはわからない発見をすることができました。坂に何か工夫をすることで改善できると考えていましたが、幕山台に住む方の年齢や地域の特色などを考慮して、現実可能な解決策を考えることは想像以上に大変でした。

9 成果と課題

- (成果) 幕山台学区や東部支所の方々等の協力を得て、大学教授のご指導のもと、大学生とともに高齢化する町の活性化について考えて提案することで、大学進学後の専門的な学問について理解を深め、思考力・判断力・表現力や学びに向かう力を伸ばすことができました。また、高1でのグローバル事業に続き、学びをプレゼンする形だったため、昨年度の経験を生かして、パワーポイント作りや提案発表を行うことができました。
- (課題) 本校での担当者が毎年代わるため、次年度への引き継ぎを徹底することが必要である。前年度の学びをいかに活かすかを考えて取り組んでいく。



1



2



3



4



5



6



7



8



9



10



11



12



13



14

(9)【事業報告】夢チャレ「市立大学との高大連携事業」(高2)③(令和元年度)

文責 西村礼志

- 1 学年・教科等 5年「夢チャレ」 福山市立大学との高大連携事業
「若者が考える地域公共交通のありかた」
- 2 日時 令和元年5月～11月
- 3 担当者、招聘講師等 西村礼志(福山高校)・大門 創准教授(福山市立大学都市経営学部)
- 4 対象生徒等 生徒13名(5学年希望者)
- 5 本校ESDの観点 ☐国際課題解決プロジェクト ☒地域課題解決プロジェクト ☒在り方生き方探究プロジェクト
- 6 テーマ設定の背景・経緯・目的等

高大連携事業とは、「大学が教育施設や教育研究機能・資源などを提供し、高校生と大学生が連携・協力して取り組む教育活動」のことである。高校生にとっては、大学における学習に対する目標意識や将来に対する意識の向上を図ろうとするものである。また大学生にとっては、テクニカルスキル(事業遂行能力)、ヒューマンスキル(対人関係能力)、コンセプチュアルスキル(概念化能力)を身につける貴重な機会になる。

福山市立福山高校と福山市立大学による高大連携事業は2017年度から実施しており、今年度で3年目となる。

7 内容の具体・展開の流れ

- (1) 6月5日(水) 16:30～18:00 場所: 福山市立大学
スタートアップ授業
- (2) 7月10日(水) 16:30～18:00 場所: 福山市立大学
演習 GIS JSTAT Map
- (3) 7月24日(水) 16:30～18:00 場所: 福山市立福山高等学校
グループワーク(課題設定)
- (4) 9月21日(土) 10:00～17:00 場所: 福山市立大学
グループワーク(解決策検討)
- (5) 10月30日(水) 16:30～18:00 場所: 福山市立大学
中間発表(資料作成)
- (6) 11月6日(水) 16:30～18:00 場所: 福山市立大学
グループワーク(資料作成)
- (7) 11月16日(土) 11:00～12:00 場所: 福山市立大学(大学祭にて開催)
最終提案発表



8 生徒の評価(感想等)

- グループワークを通して、答えのない問題を自分たちなりの解決方法を探ることができた。説得力のある理由を考えるために、資料や自分自身の経験を活用することができた。これまでは論理的思考力に基づいた左脳の発想をしていたが、今回自由でクリエイティブな直観的で右脳の発想でアイデアを出すことができた。

9 成果と課題

- (成果) 数ある情報の中から必要と思われるものを選ぶ力、それらの情報を伝えるためにまとめる力、伝えたい相手に分かりやすく表現する力を培うことに役立った。答えのない問題に向き合い、解決していこうとする経験と興味・関心・意欲を身につける生徒が多かった。メリットとデメリットを同時に考えるなど、物事を多面的に思考する力も身につけた。また、福山市をよりよい町にしていきたいという気持ちを育てることができた。大学でさらに学びを深めたいと思える研修でもあった。
- (課題) ひとえに大学関係者の方のおかげでよい経験を積ませていただくことができた。しかし大学の先生方・学生の負担は大きなものがあり、来年度の活動自体を根本的に見直してはどうかという提案をいただいている。3年間を一区切りとして、総合的な時間の在りようとともに再検討することが必要と考える。



2. 自動車と公共交通(自動車の維持管理費用)

4

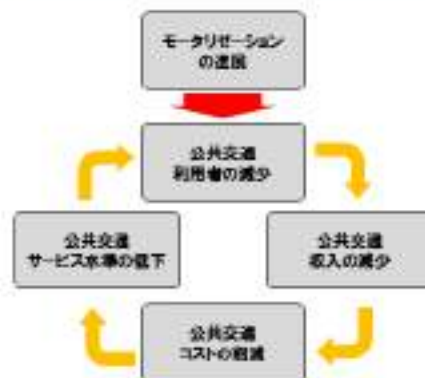
- ・クルマは、もっているだけで約1,000円/日
 - ・クルマは、普通に使うと約2,000円/日
 - － タクシーで毎日約7km走行分に相当
 - ・もう少しいい車、事故、罰金含めると、3,000～5,000円/日
 - － タクシーで毎日約11～18km走行分に相当
 - ・クルマは所有したらタダで移動できると思いがち・・・
- タクシーで7km、11km、18kmつてどれくらいの範囲？

費用	年間費用	費用	年間費用
保険(自賠責・任意)	18万円/年	ガソリン代	12万円/年
税金(自動車税・自動車重量税・自動車取得税)	7万円/年	高速・駐車場など	6万円/年
車検	6万円/年	車両	12万円/年
駐車場(自宅or通勤先)	12万円/年		
小計	42万円/年	小計	30万円/年

→1日 あたり11.15万円 →1日 あたり10万円

2. 自動車と公共交通(公共交通の現状)

3



2. 自動車と公共交通(自動車の利用状況)

5

- ・乗用車稼働率は4.2%
 - － 自動車を持っていても、24時間中1時間程度しか利用していない
 - － 24時間中23時間は、自宅車庫や駐車場に眠っている・・・
- ・平均乗車人員は1.3人
 - － 座席は5～7席あっても、ほとんどは1人しか乗っていない・・・
- ・平均走行距離は3km未満が44%、5km未満が69%
 - － 多くは自転車で行ける範囲内でのみ利用していない
- ・あなたは、それでもクルマを置きたいですか？
- ・地方はクルマがないと生活していけない！本当ですか？

(日本国土交通省「平成27年度全国自動車利用調査」より)



3. 検討状況(対象地域のバス系統の基本情報)

8

	バス	バス	バス	バス	バス
	バス	バス	バス	バス	バス
1. 路線別乗降人員	12,000人	12,000人	12,000人	12,000人	12,000人
2. 路線別乗降人員(1日)	12,000人	12,000人	12,000人	12,000人	12,000人
3. 路線別乗降人員(1週間)	84,000人	84,000人	84,000人	84,000人	84,000人
4. 路線別乗降人員(1ヶ月)	360,000人	360,000人	360,000人	360,000人	360,000人
5. 路線別乗降人員(1年)	4,320,000人	4,320,000人	4,320,000人	4,320,000人	4,320,000人
6. 路線別乗降人員(1週間)	84,000人	84,000人	84,000人	84,000人	84,000人
7. 路線別乗降人員(1ヶ月)	360,000人	360,000人	360,000人	360,000人	360,000人
8. 路線別乗降人員(1年)	4,320,000人	4,320,000人	4,320,000人	4,320,000人	4,320,000人
9. 路線別乗降人員(1週間)	84,000人	84,000人	84,000人	84,000人	84,000人
10. 路線別乗降人員(1ヶ月)	360,000人	360,000人	360,000人	360,000人	360,000人
11. 路線別乗降人員(1年)	4,320,000人	4,320,000人	4,320,000人	4,320,000人	4,320,000人
12. 路線別乗降人員(1週間)	84,000人	84,000人	84,000人	84,000人	84,000人
13. 路線別乗降人員(1ヶ月)	360,000人	360,000人	360,000人	360,000人	360,000人
14. 路線別乗降人員(1年)	4,320,000人	4,320,000人	4,320,000人	4,320,000人	4,320,000人
15. 路線別乗降人員(1週間)	84,000人	84,000人	84,000人	84,000人	84,000人
16. 路線別乗降人員(1ヶ月)	360,000人	360,000人	360,000人	360,000人	360,000人
17. 路線別乗降人員(1年)	4,320,000人	4,320,000人	4,320,000人	4,320,000人	4,320,000人
18. 路線別乗降人員(1週間)	84,000人	84,000人	84,000人	84,000人	84,000人
19. 路線別乗降人員(1ヶ月)	360,000人	360,000人	360,000人	360,000人	360,000人
20. 路線別乗降人員(1年)	4,320,000人	4,320,000人	4,320,000人	4,320,000人	4,320,000人

福山市立大学都市経営学 大門 創准教授 提供資料より抜粋

(10)【事業報告】夢プロ「市立大学との高大連携事業」(高2)④(令和2年度)

文責 藤田憲弘

- 1 学年・教科等 4・5年総合的な探究 「山野町の魅力発見・地域活性化」
- 2 日時 2021年(令和3年)4月～2022年(令和4年)3月(現在継続中)
- 3 担当者 藤田憲弘
- 4 対象生徒等 生徒29名(4学年19名・5学年3名・美術部7名)
- 5 本校ESDの観点 ■地域課題解決プロジェクト
- 6 テーマ設定の背景・経緯・目的等

福山市山野町は、福山市最北部に位置する自然豊かな山間地域である。しかし、人口は約550人で高齢者が55%を占める限界集落でもある。この地域に耕作放棄地を利用して、ワイナリーを営んでいるのが、「山野峡大田ワイナリー」だ。ほとんどの生徒は、山野町に行ったこともないし、知らない生徒も多い(5年生アンケートによると約4分の3の生徒)が、ワイナリーの活動に関わることで、山間地域の魅力を発見してもらえたらと、探究グループを立ち上げた。「日常を発掘して、地域を元気にするデザインを提案してください」というのが、ワイナリーから当初いただいた課題だった。この山野町では、以前から、福山市立大学都市経営学部岡田教授(現副学長)が古民家を借りて家屋を再生したり、周辺で蕎麦の栽培をしたりと、大学生と様々な取組をされている。本校生徒も、可能なところでその活動を共に参加しながら、山野町での体験型探究活動を楽しむことができた。10月の収穫シーズンには、生徒の手でプチフェスティバル(秋祭り)を行い、地域の盛り上がりに一瞬の貢献をすることもできた。この高大連携事業は、本校ブログやホームページだけでなく、福山市立大学のホームページでも、その都度紹介されている。

7 内容の具体・展開の流れ

(1) 春季「山野との出会い」

- 4月25日(5年生)
 - ・山野峡大田ワイナリーを訪れ、山野町を初体験する。
 - ・ブドウ畑の様子や、ワインづくりの概略を醸造長の案内で把握する。
- 5月2日(4年生数名・5年生・ALT)
 - ・山野町で春秋に開かれる「いろどり市」に参加し、山野町に関係する人たちと出会う。
 - ・岡田教授の古民家も訪れ、その取組みについてレクチャーを受ける。
- 5月29日(5年生・ALT)
 - ・ブドウ栽培の「芽かき」を体験する。
 - ・学校の廃校など、山野町の課題について、大田社長からお話を伺う。
 - ・ワイナリー周辺以外の山野町の名所を訪れ、山野町の地理的環境を把握する。



(2) 夏季「山野をめぐる高大連携のスタート」

- 7月21日(4・5年生)
 - ・福山市立大学で山野峡について探究している大学4年生を学校に招き、探究している内容を紹介してもらい、情報交換を行う。
- 8月1日(4年生数名・5年生・ALT)
 - ・岡田教授の古民家周辺で、大学生と蕎麦の種まきを行う。
- 8月5日・6日(美術部)
 - ・「アートで地域おこし」を校内で提案し、賛同してくれた美術部7名が大学生1名と合宿を行う。・山野の自然を水彩画にするとともに、古民家での大田さんとのBBQ、川遊びなどを体験し、山野峡の魅力に触れる。
- 8月21日・28日(教員のみ)
 - ・ブドウの収穫を近隣から集まったボランティアと行い、情報交換を行う。
 - ・収穫後、山野の産物を扱う市内店舗の方から、食品をめぐる問題について大学生とお話を伺う。



(3) 秋季「プチフェスティバル開催に向けて」

- 9月19日(5年生)
 - ・秋に自分たちで行う予定のプチフェスについて、大田社長や町内で染色をされている方からアドバイスをいただく。



● 10月3日・10日（4年生数名・5年生）

- ・岡辺教授の古民家周辺の蕎麦の収穫と脱穀を大学生と行う。
- ・脱穀は、地元の方の指導の下、昔ながらの唐箕を使って体験する。

● 10月17日（5年生）

- ・ポスター、材料集めなど、プチフェスに向けての準備を現地で行う。
- ・町内で木彫りをされている方から、材料の提供と御指導をいただく。

● 10月31日（5年生 ＊助っ人2名）

- ・通常の日曜朝市にコラボレーションして、プチフェスを大学生とともに開催する。・アンケートを含むクイズ、石こアート、リースづくり、蕎麦がき、ライブコンサートを行い、山野町内や近郊から来た人と触れ合う。



(4) 冬季「探究のまとめ」と「これから」

● 1月26日（4年史全員・5年生）

- ・学校に山野ワイナリーの方3名をお招きし、4年生、5年生、大学生がそれぞれ探究成果を発表する。
- ・カナダに帰国したALTや岡辺教授からビデオメッセージを頂き、最後に大田社長から講評をいただく。

● 3月26日（5年生）

- ・山野峡大田ワイナリー主催の「山野から未来を考える」というプログラムに参加し、山野中学校において、参加者に自分たちが行ってきたことのプレゼンを行う。

8 生徒の評価（感想等）

- イベントができたことは達成感があったが、当初めざした山野町の認知度を上げることについては、まだ不十分だ。まだまだ私たちにできることはたくさんあると思うので、それぞれの関わり方で、これからも魅力あふれる山野町の探究活動を続けていきたい。

- 4月のブドウ畑見学から始まって、ワイナリーを中心に、山野町をめぐる様々な方たちと出会い、助けていただくことができた。ベースキャンプとしてのワイナリーの活動や山野峡での魅力あるアクティビティー、情報発信の仕方など、まだまだ考え続けていきたい。

9 成果と課題

コロナ禍もあり、「探究活動」が、今年度から各自がもつ端末を駆使して、ネット空間だけで「探究」し、課題への空想を提案して終わりがちになる傾向がある。年度当初、岡辺教授は、学生たちに「この人たちは、外からいろんなアイデアを言われてきた。言うだけじゃなくて、何でもいから自分たちでやってみてください」とアドバイスされた。しかし、日に1本しかないバスに高い運賃を払って現地に入ることを高校生に要求するのも酷である。そのような中、5年生の「山野ガールズ（と、校内で呼んでいる）」たちは、自分たちで「フェスをやる」と無謀な目標を掲げ、現地へ足を運びながら、山野峡ワイナリーの大田さん御夫妻や峯松醸造長、木彫り細工の安田様など、様々な方たちの御協力を得て、大学生とともに、それをやり切ってしまった。4年生は、山野町との関わり方を4つのレベルに分けた。「レベル1は、SNS等で情報に触れる、2は、市内中心部でのイベントに参加する、3は、現地へ行く、そして4は、住む」。様々なイベントが中止になるなか、4年生の多くは、レベル1で終わってしまったかもしれない。しかし、5年生の背中を見て、第2、第3の「山野ガールズ&ボーイズ」が出てくることを期待している。今回は不十分だったレベル4の方たちの話にも耳を傾ける機会があればと思う。そのための入り口を用意していくことをワイナリーや大学などと連携しつつ、教員も一緒に楽しみながら持続していきたい。

* プチフェスの様子



(11)【事業報告】癒やしの羊「もふお」がやってきて笑顔が増えた【令和2年度】

文責 上山晋平

- 1 学年・教科等 全学年
- 2 日時 令和2年～3年3月
- 3 担当者、招聘講師等 小林純子さん（スクール・サポート・スタッフ） ＊帯広畜産大卒の学習支援員
- 4 対象生徒等 全校生徒（生き物役：生徒有志 60名）
- 5 本校 ESD の観点 ☐国際課題解決プロジェクト ☒地域課題解決プロジェクト ☒在り方生き方探究プロジェクト
- 6 テーマ設定の背景・経緯・目的等

コロナ禍における令和2年7月の1カ月間に保健室を利用した生徒は141人で、これは前年同月の79人から倍増となる。コロナ禍で生活環境が変化し、不安を訴える生徒が目立つ。学校生活に新たな潤いや癒しをもたらすために、管理職が羊を飼うことを企画。広島県北広島町の牧場に交渉して、実現した。

本校は「ハッピースクール」プロジェクトの1校であり、学校をよりハッピーにする指標の1つに「精神の健全とストレス管理」があり、羊を導入することでこの部分の解決を図ろうとした取組である。

7 内容の具体・展開の流れ

- (1) 管理職が生徒のストレス軽減を目指して羊を飼うことを企画。
- (2) 北広島町の牧場と交渉する。(令和3年3月までのレンタル)
- (3) 市教委等関係部署と必要な調整を行う。
- (4) 学習支援員が羊の主な世話を担うこととする。
- (5) 本校卒業生（同窓生）に小屋を制作していただく。
- (6) 生徒会が、「生き物係」や「名前」「小屋」等の募集をする。
＊60名程度の有志が集まる。
- (7) 生き物係が朝や休憩中、放課後に散歩などの世話をを行う。

【生徒会作成】



＊生徒会作成(名前、生き物係、小屋のデザインの募集)



8 生徒の評価（感想等） ＊新聞取材より

- （高3）「(コロナで) 楽しい学校行事がなくなり、受験勉強だけで息苦しかった。愛嬌ある「もふお」と、最後の思い出をつくりたい」
- （高2）「もふおの性格はツンデレで癒されます」
- （学習支援員）「もふおはさみしがり屋で人がいなくなると鳴く。地域住民からも愛されている。最近のはかわいがられすぎてわがままにふるまう愛嬌もある」

9 成果と課題

- 「生徒の笑顔が増え、予想以上の反響。教員には見えにくいストレスを抱える生徒もいる。明るい話題が増えるきっかけになれば」(山口教頭) ＊中国新聞取材
- 生徒1～5学年の690人中、「もふおが来てよかった」は641名で93%。「もふおが来て変わったこと」を尋ねると(複数回答)、「学校に癒しができた」が301名(44%)、「動物への理解が深まった」は156名(23%)、「学校に行くのが楽しみになった」75名(10%)である。「特になし」は44%。

[illegible]

【対策】学校に羊がやってきた！大人気！

山口県萩市の山口中興「羊教室」で、羊と触れ合う子供たちの笑顔が溢れる。羊教室は、羊と触れ合うことで、羊の生態や飼育方法について学ぶだけでなく、羊の毛を刈る体験も行う。羊教室は、羊と触れ合うことで、羊の生態や飼育方法について学ぶだけでなく、羊の毛を刈る体験も行う。

羊教室では、羊と触れ合うだけでなく、羊の毛を刈る体験も行う。羊教室は、羊と触れ合うことで、羊の生態や飼育方法について学ぶだけでなく、羊の毛を刈る体験も行う。

【まんまん】でコロナ禍のストレス解消 広島・岡山中興で飼育のキッズ

まんまん（まんま）でコロナ禍のストレス解消 広島・岡山中興で飼育のキッズ。まんまは、羊の生態や飼育方法について学ぶだけでなく、羊の毛を刈る体験も行う。まんまは、羊と触れ合うことで、羊の生態や飼育方法について学ぶだけでなく、羊の毛を刈る体験も行う。

まんまは、羊の生態や飼育方法について学ぶだけでなく、羊の毛を刈る体験も行う。まんまは、羊と触れ合うことで、羊の生態や飼育方法について学ぶだけでなく、羊の毛を刈る体験も行う。

まんまは、羊の生態や飼育方法について学ぶだけでなく、羊の毛を刈る体験も行う。まんまは、羊と触れ合うことで、羊の生態や飼育方法について学ぶだけでなく、羊の毛を刈る体験も行う。

(毎日新聞) 2020 年 12 月 16 日

* 変化の例



- (要望) これからもずっといてほしい / 洗って綺麗にしてあげたい / アルバムを作ってほしい
毛を刈ってほしい / 他の動物も飼いたい / 学校にいなくなってもまた定期的に会いたい

(12)【講演】地域の課題解決に取り組む卒業生から学ぶ【令和5年度】

文責 上山晋平

- 1 学年・教科等 5 学年・探究
2 日時 令和5年6月21日
3 担当者、招聘講師等 藤本悠太さん（福山大学4年） ＊本校卒業生
4 対象生徒等 5 年生生徒・教職員（約200名）
5 本校 ESD の観点 ☐国際課題解決プロジェクト ☒地域課題解決プロジェクト ☒在り方生き方探究プロジェクト
6 テーマ設定の背景・経緯・目的等

5 年夢プロを進めるにあたって、「課題の発見と解決」を目指す活動をより具体的なイメージを持ってもらおうと、本校卒業生で地域課題解決の活動を進め、全国のプレゼン大会で1位にもなっている先輩を招き、講演会を実施する。

7 内容の具体・展開の流れ

- (1) 事前に講師を紹介する用紙を作成し、事前情報を入れておく。
- (2) 講師から活動の様子を伺う（講師によるプレゼンテーション）。
- (3) 生徒と質疑応答をする。
- (4) 生徒は感想を Forms に入力する。
- (5) 感想をまとめて講師に届ける。本校 HP にもアップする。

8 生徒の評価（感想等） ＊新聞取材より

- 課題を見つけてから、すぐにアイデアを出すのではなく、まずその街の事を知り、たくさんもの解決アイデアの中から1つを実行するというのがすごいなと思いました。
- 地域のダメなところを直すために探究するのではなく、活用したら光りそうな原石を利用して解決アイデアを考える。
- 一定期間そこで暮らし、体験して課題や学びを得るという課題発見の方法の素晴らしさに胸を打たれた。
- 私は、自分達だけで課題解決アイデアを考えようとしていたけれど、藤本さんのお話を聞いて、地域の特徴を考えて実際に地域の人に話を聞いて解決アイデアを立てることが大切だと思った。
- 藤本さんは、事業を考えると、解決策を30～40個も考えられていた。今まで1つの問題に1つの解決策だと思っていたので、驚いた。
- 「現場で体験して学びや課題を得る」というのは是非とも取り入れたい。そこで得た気づきについて、いかにして人、資源、コストのような面を横断的かつ効果的に表現できる解決策を生み出せるかというのは、非常に困難や苦悩のあることだと思うが、大変価値が大きく努力してみたい。
- 自分が夢プロで考えている課題はかなり大きかったので、1つの地域に絞るなどする事でより深く考えて実行できるようにする。
- 地域の特徴を考えて地域の人に実際に話を聞いたりして地域の人と一緒に解決アイデアを考えること。藤本さんはまず三次市甲奴町という所に1ヶ月間住んでみていたので、それは私にはできないけれど、それを参考にしてまずは地域の人にインタビューしてみる。
- 私はお米を使ったレシピを考案しようと思っているので、その他の廃棄されやすい食物にも目を向けてみたい。
- とても為になる講演をありがとうございました。この講演で初めて REBORN SAUNA について知りました。私もこのプロジェクトのように自分の探究を深めて実行していきたいです。
- お忙しい中ありがとうございました。たくさん学べた事も多く、自分にはない探究の進め方をつかめたとても良い機会でした。貴重なお話が聞けて良かったです。アイデアをアイデアのままにせず、課題だと思ったことを行動に移したり、常に課題意識を持って過ごしたりしたいと思いました。



9 成果と課題

- 上の生徒の感想を見ると、先輩から大変刺激を受けたことが分かる。講演を受けて、今後自分に取り入れたいことを聞いたら、右のようになった。

(探究) 本校卒業生(藤本悠太さん)による探究講演



6月21日(水)に、本校卒業生である藤本悠太さんが探究講演会の講師を務めてくださいました。対象は、5年生の生徒および教職員の約200名です。

藤本悠太さんは現在、福山大学に在学中で、「社会人基礎力育成グランプリ」に出場し、大賞(=全国1位)を受賞されるなど、目覚ましい活躍をされています(福山大学のCMにもご出演中です)。

彼は福山大学の3人で、三次市甲奴町を中心に、「過疎化の進む中山間地域の課題を解決したい」という思いで、プロジェクト「REBORN」を立ち上げました。その一環として、廃棄される作物や雑木などの未利用資源を活用し、その地域ならではの「REBORN SAUNA(リボーン サウナ)」という活動を展開されています。福山城でも、400年記念イベントでサウナを実施されました。

彼らの活動の目的は「地域の活性化」です。地域の未利用資源を活用し、地域経済の活性化につなげたり、サウナを通じて地域コミュニティを形成したり、地域の課題を解決することを目指しています。

彼らの活動は多くのニュースや雑誌(ウィングなど)でも取り上げられており、ご覧になった方もいらっしゃるかもしれません。

生徒の少し年上の先輩が、本当に地域の課題解決を目指して、実践的な活動を行っていることを、向井(前)校長先生から伺いました。現在「夢プロ」という探究活動を行っている5年生に、課題解決の事例を知ってもらおうとこの企画を立ち上げました。

以下(左ページ)に参加した5年生からの感想をいくつか紹介します。先輩から、探究のヒントとなるさまざまな刺激を受け取れたようです。

地域や社会の課題解決に向けて活動している先輩(卒業生)は多いと思います。「こういう面白い取組をしているよ」「きっと生徒の探究活動に参考になるのでは」という事例がありましたら、何かの機会に学校まで情報をお寄せいただけると幸いです。

II 国際課題解決プロジェクト

(1)【事業報告】姉妹校との国際交流(希望者、課外活動)①ダウンロード(平成29年度)

文責 元岡早苗

- 1 学年・教科等 中3～高2 希望者
2 日時 2017年(平成29年)7月24日(月)～8月7日(月)
3 担当者、招聘講師等 引率教員 2名(元岡早苗・瀧元美菜子)
4 対象生徒等 中3 女子2名、高1 男子2名・女子11名、高2 女子7名 計22名
5 本校ESDの観点 ■国際課題解決プロジェクト □地域課題解決プロジェクト □在り方生き方探究プロジェクト

6 テーマ設定の背景・経緯・目的等

本研修の目的は、次の2点である。

- ①オーストラリア人家庭にホームステイをし、姉妹校であるオーストラリアの中・高校に短期留学することで、オーストラリアの人々の生活や文化に触れ、異文化、さらには自国の文化に対する理解を深める。
②生活のなかで英語を使うことで、英語によるコミュニケーション能力の基礎を養う。
以上の目的を達成するために、次のような研修方法を採用した。
①生徒に希望を取りながら姉妹校と連携し、ホストファミリーを決定する。
②現地校においては、約2週間にわたり、現地の生徒と同じ授業を受ける。
③一般家庭にホームステイし、家族の一員として生活する。

7 内容の具体・展開の流れ

- 7月24日(月) 関西空港出発
7月25日(火) ケアンズ経由トゥーンバ着
ダウンロードカレッジ校にてホストファミリーと対面
各家庭に移動
7月26日(水)～8月4日(木) 現地での学校生活とホームステイ体験
8月5日(金) トゥーンバ出発ケアンズ到着
8月7日(月) ケアンズ出発・帰国

8 生徒の評価(感想など)

- 最初、短期留学が決まった時は、本当に嬉しいのか、わかりませんでした。でも2週間を過ごして帰国し、今考えてみると絶対行ってよかったと思います。
●2週間は本当にあっという間に終わりました。毎日内容が濃すぎて疲れたけどそれ以上に楽しかったです。ホストファミリーの方がとても快く迎え入れて下さり、いろいろな経験をさせてくれました。BBQ、カヤック、流れ星を見たり、テレビを見たり、お菓子を一緒に作ったり全部英語で初めて体験したことも多かったです。
●私がダウンロードで過ごした2週間は、私の心だけでなく、私の考え方や意志の伝え方まで成長させてくれるものでした。
●今回の研修を通して1番学んだことは、コミュニケーション能力の大切さです。私は英語で話すことが苦手だったけれど身振り手振りで自分の意思を伝えました。また、いつも笑顔でいることも大切だと思いました。
●授業でもイギリス英語とアメリカ英語の発音の違いを勉強するけれど、オーストラリアで実際の生活の中で違いに興味を持って聞いた時の喜びで自然に頭に入りました。
●私のバディが来年日本予定なので、その子が私に頑張って日本語で伝えようとしてくれた分、今年話したことより深いことが英語で話せるように英語の勉強を頑張ります。
●向こうで学んだのは英語だけでなく、すごく良い体験ができました。この体験ができたのは先生や友達や何より家族のおかげなので、みんなに感謝して、この経験を忘れずにこれから活かしていけるように頑張ります。

9 成果と課題

- 【成果】このプログラムは毎年実施し改善されているので、現地でのプログラムが大変濃いものであった
【課題】本校と該当校での中心教員に頼って実施できているプログラムになっており、一部への負担が大きい。少しずつ仕事の適切な割り振りなどを考えていく時期に来ている。

●生徒の活動の様子



ホストファミリーのお迎え



ランチタイム



アダムス先生の授業



日本語選択の生徒との授業



バディーと一緒に授業へ



毎朝提出のしおり



いよいよお別れ



さよならトゥーンバ

(1)【事業報告】姉妹校との国際交流（希望者、課外活動）②ダウンロード（令和6年度）

- 1 学年・教科等 高1・高2 希望者
2 日時 2024年（令和6年）7月21日（日）～8月4日（日）
3 担当者、招聘講師等 引率教員 2名（中野誠也・金尾千恵美）
4 対象生徒等 高1 男子2名・女子3名、高2 男子2名・女子5名 計12名
5 本校ESDの観点 ■国際課題解決プロジェクト □地域課題解決プロジェクト □在り方生き方探究プロジェクト

6 テーマ設定の背景・経緯・目的等

本研修の目的は、次の2点である。

- (1) オーストラリアでホームステイを探検し、姉妹校であるオーストラリアの中・高校に短期留学することで、オーストラリアの人々の生活や文化に触れ、異文化、さらには自国文化に対する理解を深める。
- (2) 生活のなかで英語を使うことで、英語によるコミュニケーション能力の基礎を養う。

以上の目的を達成するために、次のような研修方法を採用した。

- ①生徒に希望を取りながら姉妹校と連携し、ホストファミリーを決定する。
- ②現地校においては、約2週間にわたり、現地の生徒と同じ授業を受ける。
- ③一般家庭にホームステイし、家族の一員として生活する。

7 内容の具体・展開の流れ

- 7月21日（日） 関西空港出発
7月22日（月） ブリスベン空港着 午後トゥーンバ着
ダウンロードカレッジ校にてホストファミリーと対面
各家庭に移動
7月23日（水）～8月1日（木） 現地での学校生活とホームステイ体験
8月2日（金） トゥーンバ出発ゴールドコースト着 ゴールドコースト市内研修
8月3日（土） ゴールドコースト出発ブリスベン着 ブリスベン市内研修
8月4日（日） ブリスベン空港出発→帰国

8 生徒の評価（感想など）

- 最初はとても緊張しましたが、ホストファミリーをはじめ、交流する人たちが皆とてもフレンドリーだったので、徐々に慣れることができました。全校生徒の前でソーラン節を披露したり、アボリジニのダンスを学んだり、他にもいろいろとチャレンジできたことは、自分にとって良い経験になりました。
- ホームステイをして、オーストラリアと日本の生活様式の違いを知ることができました。学校生活においても、オーストラリアではランチタイムが2回あったり、休憩時間が短かったりと、日本の学校とは違うことを知り、他国の文化を知ること大切だと思いました。
- アダム先生がわかりやすい授業をしてくださり、英語で考えたり話したりして毎日楽しく受けることができました。
- この研修に参加し異なる文化の人たちと交流して、日本人が持っている常識が標準ではないということに気づきました。勇気を出して研修の参加を希望して良かったです。
- 英語力にあまり自信がなく話すことが恥ずかしかったけれど、思い切って話してみるとホストファミリーも学校の人たちも助けてくれて、徐々にたくさん話をするできるようになりました。

9 成果と課題

- 2週間の滞在で、生徒が英語を話すことに積極的になり、コミュニケーション能力や主体的に行動する力の変容が見られた。
- オーストラリアの人々の時間の使い方や家族との過ごし方、生活様式や文化の違いを知ることで、改めて日本での生活や文化を見直す態度が生徒たちのなかに生まれていた。異文化を理解することは、生徒たちの今後の進路やキャリア選択時に少なからず影響を及ぼすと思われる。
- △生徒たちが研修に参加して経験したことや得たことを、周囲の生徒に効果的に波及できていない。例えば授業で報告会を設けるなどして、グローバル意識を全体に広めるアクションが必要であると思われる。
- △研修終了後、生徒が決めた「行動プラン」の達成度を明確に確認できていないので、教員がフォローアップしてその後の状況を聞き取り、意識の維持・向上をサポートする必要がある。

●生徒の活動の様子



ダウンスカレッジ



アダム先生による授業



日本語クラスに参加



全校集会でソーラン節を披露



ランチタイム



学校近隣の施設で歴史と伝統を学習



小・中学生と交流



ホストファミリーとの別れ

1 学年・組 第5学年 理系地理選択者 33名＋ダウンランズ校生徒 25名（社会科教室）

2 単元名 地球の課題を考える～SDGs（持続可能な開発目標）について～

3 本時の展開 （＊9月21日（水） 4限）

（1）本時の目標

- ①日本とオーストラリアの社会について比較検討する。
- ②自分たちが社会で活躍する15年後に向け、地球上で解決すべき課題について他国の生徒と考える。

（2）授業参加者に見てもらいたいポイント

- ①他国の生徒と英語を使って、積極的にコミュニケーションをとりながら、課題解決に向けた行動を取っているか。
- ②視聴覚を使った教材や発問などは、日豪の生徒の思考を促し、関心意欲を喚起するものになっているか。
- ③生徒は、達成感を持って終わることができたか。

（3）本時の学習展開 【記号】△基礎・基本の定着 ◆AL（主体的・対話的で深い学び） □ESD（人間性・他との関連）

学 習 活 動	形態	指 導 上 の 留 意 点	3要素	評価規準
1 グループでリーダーを決める。 （自己紹介含めて、話し合いの時間は5分以内）	グループ	◆□決め方は、各グループに任せる。	協働性	
2 日本とオーストラリアの各種統計を通して、お互いの社会・生活を比較する。 （12～13分）	グループ	◆□経済や国民生活など、幅広い分野での統計を用意するが、問いが多くなならないよう、後の展開にもヒントになるような分野にしばる。解答に対し、補足すべきところは、補足する。 ・オーストラリアの生徒にもわかるよう教師もダウンランズの先生と協働する。	思考力 協働性	日本とオーストラリアの社会の違いについて比較・検討している。 （ワークシート）
3 SDGsについての概要を知り、この時間のテーマについて確認する。 （5分程度）	一斉	△映像を使ってSDGsについて確認させ、本時、日豪の生徒でともに考えることを押さえる。	知・技	
4 これからの世界が解決すべき目標について考え、互いに意見を出し合う。 （12～13分程度）	グループ	◆□文字やイラスト表現で、お互いの意見を出し合い、グループとしてまとめさせる。 ・各グループを回り、フォローする。	思考力 表現力 協働性	地球上で解決すべき課題について積極的に検討している。（観察）
5 グループの意見を発表する。 （7分程度）	一斉	◆イラスト掲示を通じて、各班で考えた課題を3つ以上発表させる。背景を問い、発表の相違点にも気付かせる。	表現力 知・技	
6 国連で確認されている目標を知り、自分たちの考えたことと比較する。 （7分程度）	一斉	△□視聴覚教材でSDGsの内容を確認させ、自分たちの思考を振り返らせる。 ・それぞれにこれからの世界、そのなかでの自分のあり方についての課題意識を持たせて、終わらせたい。	主体性	

4 生徒用資料（各生徒に配付）



5 グループの発表したSDGs

リサイクル 教育（6） きれいな水 栄養のある食べ物 戦争を減らす（2）
 医療（4） スポーツでつながる 大気をきれいに 絶滅危惧種を守る
 再生エネルギー（2） 協力 言論の自由 男女平等

6 生徒の評価・感想等

①授業のなかで、オーストラリア生徒とコミュニケーションがとれたか？

・充分にとれた 6% ・ほぼとれた 68% ・あまりとれなかった 31% ・全くとれなかった 0%

②グループの意見は、どうやって決めましたか？

・みんなで話し合った 7チーム
 ・オーストラリア生徒が適当に決めた 1チーム

③感想

・楽しかった、とても楽しかった。
 ・環境問題は、世界的なものなので、みんなでいろんな意見を出せてよかった。
 ・また来て交流できたらいい。



7 成果と課題

- ・日本とオーストラリアの統計比較では、お互いに、自分の国のことや相手国のことを知らないことがわかり、盛り上がった。知識レベルは、同程度ということであろうか。
- ・準備した視聴覚教材は、両国の生徒とも、よく反応してくれたので、適切であったと思う。
- ・グループでの意見交流は、少しテーマが難しかったことと、時間的制約があつて、まとめきれてないようだったし、お互いの意見検証に時間を取ることができなかった。内容的に2時間あつてもよかった。
- ・オーストラリアの引率教諭にうまく訳してもらいながら進行することができ、両国の生徒は、内容についてくることができたと思う。ぶっつけ本番であつたが、こうした授業は、ALTの先生とうまく協働すれば、日常の授業でも仕掛けていけるのではないかな。

8 授業風景



(1)【事業報告】姉妹校との国際交流（希望者、課外活動）マウイ（平成 29 年度）

文責 原朋代

- 1 学年・教科等 希望者
- 2 日時 2017 年（平成 29 年）3 月 13 日（月）～17 日（金）
- 3 担当者、招聘講師等 引率教員 2 名（原朋代、石井康代）
- 4 対象生徒等 高校 1 年生男子 6 名 女子 12 名 計 18 名
- 5 本校 ESD の観点 ■国際課題解決プロジェクト □地域課題解決プロジェクト □在り方生き方探究プロジェクト

6 テーマ設定の背景・経緯・目的等

本研修の目的は、次の 3 点である。

- ①福山市の友好都市マウイの家庭にホームステイをし、現地の高校に短期留学することで、ハワイの人々の生活や歴史文化に触れ、異文化、さらには自国の歴史文化に対する理解を深める。
- ②生活の中で英語を使うことで、英語によるコミュニケーション能力の基礎を養う。
- ③海外語学研修を希望する多数のニーズに応えるため、夏季研修だけではまかないきれない現状のなか、研修機会を提供する。

以上の目的を達成するために、次のような研修方法を採用した。

- ①福山市市民相談課と連携しながら、交流校およびホストファミリーを決定する。
- ②現地校においては、1 週間にわたり、現地の生徒と同じ授業を受ける。
- ③一般家庭にホームステイし、家族の一員として生活する。

7 内容の具体・展開の流れ

- | | |
|-------------|---|
| 3 月 13 日（月） | ハワイマウイ大学キャンパスツアーおよび大学総長会見
キングケカウリケ高校ジャズバンド訪問 |
| 3 月 14 日（火） | マウイ高校にて” A Day at School” |
| 3 月 15 日（水） | マウイ高校にて” Cultural Presentations” |
| 3 月 16 日（木） | マウイ郡長・郡議会表敬訪問 / マウイオーシャンセンター観光 |
| 3 月 17 日（金） | ハレアカラ山・ラハイナ観光 / マウイ高校にてお別れのアロハディナー |

8 生徒の評価（感想など）

- 今回の研修で一番楽しかったのはマウイ高校で体験授業をしたことだ。マウイ高校には日本の普通科の高校にはない授業があった。それは photo class だ。授業中に教室の外に出て本格的なカメラで好きなところを撮る授業だった。初めての体験だったのでとても楽しかった。マウイにはきれいな景色がたくさんあって、たくさん写真を撮った。マウイ高校ではステッカーを作ったり T シャツや消しゴムのハンコを作ったり、体験授業をしたり、外国のゲームをしたり、太鼓をたたいたりたくさんさんのことを体験できてとても楽しかった。
- マウイ大学で英語の授業を受けました。発音をもう少し頑張らないといけなかったと思いました。特に R と L。夜にお父さん（ホストファーザー）と発音の練習をしました。L と R、TH など色々例を出してもらいました。walk と work はすごく難しかったです。write と right の発音は同じだと教えてもらいました。日本で学ぶよりもうすぐ発音もよくて身につくのが早いような気がしました。
- 今日はホストファミリーと過ごす最後の日。朝一番に習字をしました。ママとパパの名前を漢字に換えて書いてあげました。二人ともすごく喜んでくれました。ママも好きな日本語を書いたりしてとても楽しんでもらえたので良かったです。
- 今回の研修ではわりとコミュニケーションが取れたのがうれしかった。正直、文法はゴチャゴチャな時もあったが、中学レベルの英語でけっこうできたのでうれしかった。相手が言うことも、正確に一言一句とは言わないが、大体の意味は分かったのが良かった。これからもこういう海外語学研修に行きたいと思った。
- 初の海外で英語がうまく伝わるのか、海外でちゃんと生活してけるのかなど初めは心配だったけど、いざ行ってみると英語でコミュニケーションを取ることができたし、ホストファミリーもやさしくて心配はなくなりました。進路もこの研修に行ったことである程度決めることができました。

9 成果と課題

- 【成果】本プログラムを通して、英語学習に対する生徒の姿勢が積極的になり、目的意識をもつようになった。
- 【課題】同様の研修を継続して実施するためには、コーディネーターの確保等、課題が残る。

●生徒の活動の様子



マウイ到着 ホストファミリーのお出迎え



ハワイマウイ大学の壁画 カメハメハ大王



自分でデザイン・プリントしたTシャツを着て



マウイ高生に和太鼓を指南してもらう



はっぴを着て福の山音頭を披露



お別れ会でのゲーム じゃんけん列車



マウイ校ジャパニーズクラブの皆さんと



マウイ郡庁舎 福山市から贈られたバラの花

（１）【事業報告】姉妹校との国際交流（希望者、課外活動）ポハン①（平成 29 年度）

文責 矢幡愛

- 1 学年・教科等 希望者
- 2 日時 2017 年（平成 29 年）10 月 14 日（土）～17 日（火）
- 3 担当者、招聘講師等 引率教員 2 名（向井勝也、矢幡愛）
- 4 対象生徒等 中学校 1～3 年生 23 名
- 5 本校 ESD の観点 ☒ 国際課題解決プロジェクト ☐ 地域課題解決プロジェクト ☐ 在り方生き方探究プロジェクト

6 テーマ設定の背景・経緯・目的等

本研修の目的は、次の 3 点である。

- ①福山市の友好都市浦項市の家庭にホームステイをすることで、韓国の人々の生活や歴史文化に触れ、異文化、さらには自国の歴史文化に対する理解を深める。
 - ②生活の中で英語を使うことで、英語によるコミュニケーション能力の基礎を養う。
 - ③中学生に国際交流のための海外研修の機会をもうける。
- 以上の目的を達成するために、次のような研修方法を採用した。
- ①生徒に希望を取りながら大東中と連携し、ホストファミリーを決定する。
 - ②大東中において 1 日授業を受ける。
 - ③一般家庭にホームステイし、家族の一員として生活する。

7 内容の具体・展開の流れ

- | | |
|--------------|---------------------------------------|
| 10 月 14 日（土） | 大東中においてホストファミリーと対面
ホストファミリー宅で終日過ごす |
| 10 月 15 日（日） | 慶州石窟庵・仏国寺見学後ホストファミリーと過ごす |
| 10 月 16 日（月） | 大東中で授業・部活動に参加 |
| 10 月 17 日（火） | 浦項・九龍浦見学 |

8 生徒の評価（感想など）

- とにかくみんな優しくかった。みんな歓迎してくれてうれしかった。でも、自分がバディーになった時は、こんなに話しかけたり、優しくしたりというのができなかったの、申し訳なくなった。もし次に日本に来てくれた時は、部活をいっしょにしたいなと思う。わからない言葉ばかりだったけど、先生も生徒もみんなが通訳のアプリをスマホに入れて会話してくれたので、私はそれに英語で答えるだけで良かった。でも次に会うときは少しでも韓国語ができるようになったらいいなと思う。
- 言葉が通じにくいなかでも、みんな笑顔で優しく接してくれてとても楽しかった。英語の時間では、とくに自分の英語力のなさを感じた。自分は英語が苦手、英文も早く読めないし単語も覚えにくいのもっと勉強するべきだなと思った。大東中の人はオーバーに気持ちを表現してくれるので楽しんでくれていることがよくわかった。自分も気持ちをうまく表現できるようになりたいと思った。
- 一番強く思ったことは英語力の違いだ。同じ 1 年生なのに、向こうは少し考えながらもスラスラ話せていた。それなのに自分は声も自信がなくて小さかったし英語の文も多分ぐちゃぐちゃで…。伝えたいことがちゃんと伝えられないもどかしさを感じた。それと同時に自分が話そうとするのを優しく見守ってくれる優しさもたくさん感じた。母国語ではない 1 つの言語を介して話すのはとても難しいということを改めて感じさせられた。この経験を生かしてこれからの学校の授業に生かしていきたい。
- 今回の研修で、人は好きなことや嫌いなことが同じときにコミュニケーションをとることができ、友達になれるということも学びました。家に帰って、韓国での話をたくさんしました。辛い物を食べられるようになったし、洗濯も自分でできるようになったので母に「ちょっと成長した気がする」と言われて嬉しかったです。
- 今回の研修で学んだことは、まだまだ自分の力が足りないということだ。自分の目標は「世界で活躍する人になること」。しかし、英語でのコミュニケーションで難しいところもあったし、初めて会った時から積極的に話すことができなかった。いろいろな人たちのおかげでよい経験ができた。このことを生活で生かしていく。

9 成果と課題

- 【成果】本研修を通して生徒も教員も国際交流の重要性を感じることができている。
- 【課題】本年度以降の交流体制についてはどのようにするのか、検討していく必要がある。

●生徒の活動の様子



大東中でのホストファミリーとの対面



慶州石窟庵・仏国寺見学



大東中での授業に参加している様子



大東中での授業に参加している様子



大東中の音楽コンサートを見ている様子



カフェテリアにて



九龍浦で韓国の歴史を学ぶ様子



釜山にて韓国での最後の食事

ポハン生徒本校受け入れ授業例①（中学・理科）

文責 山下一朗太

- 1 学年・教科等 2年 理科
2 日時 2017年（平成29年）5月22日（月） 1、2、3限
3 担当者 山下 一朗太
4 対象生徒等 2-3 39名（+デドン中5名） 2-2 39名（+デドン中5名） 2-1 38名（+デドン中6名）
5 本校 ESD の観点 ■国際課題解決プロジェクト □地域課題解決プロジェクト □在り方生き方探究プロジェクト

6 テーマ設定の背景・経緯・目的等

本時の目的は、「モデルや化学式を用いた課題に韓国人留学生と協働して取り組むことで、国際課題解決に必要な積極性を養うことができる」である。2学年は理科の授業において、原子・分子をモデルで表すことや、世界共通である化学式について学習したばかりである。そこで、言語でのコミュニケーションが取りづらい韓国人留学生と、モデルや式を用いた課題に取り組みせ、英語以外にもコミュニケーションを取る手段があると伝えたいと考えた。

7 内容の具体・展開の流れ （授業は基本的に英語で行う）

- （1）導入（15分）自己紹介
①座席決めを行う（5班に分ける）
②両国がコミュニケーションをとる手段として、英語、ボディーランゲージ、図などがあることを確認する
③お互いに自己紹介をする
（2）展開①（17分）絵描き伝言ゲーム（No.1 台風）
①絵描き伝言ゲームのやり方を理解する（班別対抗で連帯意識を高める）
・ゲームをする ・各自がどんな絵を描いたかを班内で共有する
・どんな絵を描いたかを教室全体で共有し、一つの事象を表すにもいろいろな表し方があることに気付く
（3）展開②（12分）クイズ（No.2 気体）
・ゲームをする ・各自がどんな絵を描いたかを班内で共有する
・どんな絵を描いたかを教室全体で共有し、粒子モデルの有用性に気付く
○言葉で伝える以外の方法があることに気付かせる声掛けを行う
○化学式が出てきた場合には、化学式が世界共通であることに触れる
・No.1 水素、酸素、二酸化炭素を韓国語に翻訳せよ
・No.2 용해（溶解）を日本語に翻訳せよ
（4）まとめ○今日の感想を記述する
（写真は、용해（溶解）という用語を日訳するために、デドン中生が福山中生に説明をしている様子。）



8 生徒の評価（感想等）

- （福山中）絵などを使って楽しく交流できたと思います。クイズでは、身ぶり手ぶりで答えを書けていました。言語が違って、コミュニケーションがとれるんだと感じました。
（福山中）様々な視点から考え、伝えよう、伝えてくれようとしていて、楽しかったのと、団結できました。
（福山中）韓国の人も日本の人も分かるような世界共通なものがあるってすごいと思いました。
（デドン中）韓国での授業は、教科書を読んだりテストを受けたりすることが多いので、今日やった活動はとても面白かったです。また、日本の生徒は絵を使って説明するのがとても上手であることを学びました。

9 成果及び課題・改善策

- 成果① 通訳をお願いすることはなく、授業者も生徒も英語を用いた。英語を使わなければ課題が解決できないという状況の中で、多少の文法間違いは気にせずとにかく英語を使ってみようとする生徒が増えていった。
- 成果② 両国の生徒が協力をしなければ解けない問題を解く中で、「言いたいことを伝えたい」という思いが大きくなり、授業後半には、身振り手振りを使って主体的にコミュニケーションを取ろうとする生徒がみられた。
- 課題・改善策① 授業冒頭で自己紹介（自分のことをどのような呼んでほしいかや特技など）をワークシートに記入し班内で交流したが、ワークシートを読み上げるだけの活動となってしまった。
- 課題・改善策② デドン中の生徒は、中1から中3までいたようで、韓国の中1にとっては「溶解」という概念が未習ということになってしまった。韓国の生徒の既習内容を把握しておく必要がある。

- 1 学年・教科等 3年 総合的な学習の時間
- 2 日時 2017年（平成29年）5月22日（月） 5～6限
- 3 担当者、招聘講師等 前田卓巳 高橋毅 山田健司 松枝美貴子 石川玲弥
- 4 対象生徒等 生徒119名（3クラス合同）とデドン中学校の生徒16名
- 5 本校ESDの観点 ☐国際課題解決プロジェクト ☐地域課題解決プロジェクト ☒在り方生き方探究プロジェクト

6 テーマ設定の背景・経緯・目的等

めあては、「国際交流を円滑に行う」である。大東中の生徒と授業をする中で、お互いの言葉を越えて、交流できるのではないかと考えたからである。また、3学年として体育大会、修学旅行などの行事を控え、今回のこの機会を通して、リーダーの育成、他者とのつながりを育てていきたいと考えた。

7 内容の具体・展開の流れ

1. 開会行事
2. ジェスチャーゲーム
3. 借り人競争
4. ドッジボール
5. 閉会行事



8 生徒の評価（感想等）

- 今日の5、6時間目到大東中学校の生徒と交流しました。特にジェスチャーゲームが心に残っています。言語が通じなくても、ジェスチャーだけで通じることが分かりました。みんなで楽しむことができて思い出に残る授業でした。
- 今日の5、6時間目到大東中学校の生徒と交流会がありました。僕はバディーだったので色々大東中学校の生徒と話そうと思っていたけれど、何から話せばよいのか全く分かりませんでした。途中からは話せるようになったけれど、笑顔や身振り、手振りなどできないことがたくさんありました。今日のこの時間はコミュニケーションの大切さについて知らされました。
- 浦項の大東中学校とのレクリエーションは、忘れられない体験になりました。用意した英語を丸ごと使えなかったのですが、不慣れで不手際だったなりに臨機応変に対応できたし、困っている大東中学校の人や頑張っていた人とコミュニケーションがとれて、とても嬉しかったです。オーストラリア研修にもつながる、そして、修学旅行にもつながる「リーダー」という大きな役目をさせていただいて本当に嬉しく思います。また、応援も声がガラガラになるまで大東中学校の人も一緒に歌ったり円陣を組んだりできて、お互いの絆が深まりました。

9 成果と課題

- 成果は2点ある。1点目は国際理解、2点目はリーダーの育成である。国際理解については、競技を一緒に行ったり応援を行ったりするため、大東中の生徒と本校の生徒が交流する機会が多くあり、国際交流の観点からも多くのことを生徒たちは学ぶことができた。
2点目のリーダーの育成については、この授業を行うにあたって、代議委員や生徒会などの今まで決まっていたリーダーではなく、3年生全体からリーダーやバディーを募集した。この選び方により、普段リーダーをやったことがない生徒もリーダーをやることができ、集団づくりの良い機会となった。リーダーたちが企画、運営を行う中で臨機応変に対応する態度や、リーダーの指示を受け行動する生徒たちにも自治、自律の力が身についた。
- 課題として、「積極的なコミュニケーション」が挙げられる。バディーだけではなく他の生徒たちの積極的な交流がもっとできて良かった。ドッジボールにおいては本校の生徒が自分たちが楽しむことに重点が置かれ、本来の趣旨である「おもてなし」の心遣いが足りなかった。
- 改善策
国際交流を行う前の事前学習をもっと行っておくべきであった。「おもてなし」の心遣いはもちろんのこと、言語や文化の違いなど、十分な知識を伝えておかねばならないと感じた。



(1)【事業報告】姉妹校との国際交流（希望者、課外活動）ポハン②（令和元年度）

文責 橋本 賀代

- 1 学年・教科等 希望者
- 2 日時 令和 元 年 10 月 19 日（土）～22 日（火）
- 3 担当者 引率教員 3 名（高田芳幸、山口裕三、橋本賀代）
- 4 対象生徒等 中学校 2～3 年生 28 名
- 5 本校 ESD の観点 ■国際課題解決プロジェクト □地域課題解決プロジェクト □在り方生き方探究プロジェクト

6 テーマ設定の背景・経緯・目的等

本研修の目的は、次の 3 点である。

- ①福山市の友好都市浦項市の家庭にホームステイをすることで、韓国の人々の生活や歴史文化に触れ、異文化、さらには自国の歴史文化に対する理解を深める。
- ②生活の中で英語を使うことで、英語によるコミュニケーション能力の基礎を養う。
- ③中学生に国際交流のための海外研修の機会をもうける。

以上の目的を達成するために、次のような研修方法を採用した。

- 生徒に希望を取りながら大東中と連携し、ホストファミリーを決定する。
- 大東中において 1 日授業を受ける。
- 一般家庭にホームステイし、家族の一員として生活する。

7 内容の具体・展開の流れ

- 10 月 19 日（土） 大東中においてホストファミリーと対面 ホストファミリー宅で終日過ごす
- 10 月 20 日（日） 引き続き、ホストファミリーと過ごす
- 10 月 21 日（月） 大東中で授業・部活動に参加
- 10 月 22 日（火） 浦項・九龍浦見学

8 生徒の評価（感想など）

- 今回、韓国との関係もあまりよくない中訪問させてもらって、行ってきてよかったと素直に感じました。訪問を終えて特に印象に残っているのは、どこのお店へ行ってもどこの人とかかわっても、私たち日本人へきちんと対応してくださったということです。気遣って日本語を使って話してくださる方もいました。今回の訪問で学んだことは、外国の人との関わりを持つことは、これからの社会にも、日常生活でも重要になってくる、ということです。私はこれからも海外へ行く機会を増やし、たくさんの人とコミュニケーションをとって関わりを持ち、自分自身をもっと成長させられるように努力を続けていきたいです。
 - 日本と韓国は、国の位置的には近いけれど、違うところがたくさんあるんだなと感じた。（言語、食べ物、街並み等）。韓国の男の子はみんな紳士的で優しかった。また、日本と韓国の間で色々問題があるけれど、あくまで国と国との問題で、民間レベルでは何もなかった。正直、韓国に行く前はテレビの報道を見てとても心配だったし、行くのをやめようかとも思ったけど、本当に行ってよかったなと思ったし、自分の目で見て、実際に体験することはとても大切なことなんだと改めて実感した。コミュニケーションは言葉だけでなく、心と心もつなげてくれるんだなと思った。
 - 今回の韓国訪問を通して、英語でコミュニケーションをとる楽しさを実感することができた。日本の授業などは英語であっても日本語は使うから、わからなかったら日本語にしとけ、みたいな感じだったしかし韓国での家族との会話の時は、日本語が通じないため英語だけになる。伝えたいけどどういかわからない場面があったが、自分の持っている知識の単語や、身ぶり手ぶりでなんとか伝えようとしたところ、EUN くんに伝わった。また英語での会話でも笑いが起きたこともあった。そんな時の達成感はとてもとても大きいものだった。
- 大東中での授業中や休憩時間なども英語を使ってコミュニケーションをとったが、日本と変わらないくらい楽しい学校生活だった。日本に帰ってきた僕は、これからも英語を頑張って、世界の人たちと笑って会話できるくらいに成長したい、と思った。

9 成果と課題

- 【成果】本研修を通して生徒も教員も、実際に体験する国際交流の重要性を感じることができている。
- 【課題】持続可能な交流体制の在り方を、検討していく必要がある。

●生徒の活動の様子



来年度の再会を約束して



(1)【事業報告】姉妹校との国際交流（希望者、課外活動）マレーシア①（H29、ディスカッション）

文責 上山晋平

- 1 学年・教科等 5 年修学旅行「マレーシア高校生とのプレゼン&ディスカッション」(Haze)
2 日時 2017 年（平成 29 年）10 月 2 日（月）午前
3 担当者、招聘講師等 高橋俊光（物理）・上山晋平（英語）
4 対象生徒等 生徒 6 名
5 本校 ESD の観点 ■国際課題解決プロジェクト □地域課題解決プロジェクト □在り方生き方探究プロジェクト

6 テーマ設定の背景・経緯・目的等

5 学年の修学旅行ではシンガポール・マレーシアに行く。マレーシアの高校では、シンガポールとマレーシア両国で問題になっている煙害（Haze）について、現地の高校生とプレゼンテーションやディスカッションを行う。この取組を通して、生徒は課題解決力、英語での表現力を養い、さらには交流にとどまらずに「アクション」に踏み込む一歩進んだ国際交流となることをねらいとする。

7 内容の具体・展開の流れ

- (1) 4 月～5 月に 5 学年の実施する「夢チャレ」の活動の一端として、参加希望者を募る。
- (2) 参加確定者（6 名）と担当教員（2 名）でミーティングをしてねらいや今後の動きを確認する。
- (3) 生徒が Haze について「日本語」で情報収集をする（担当：高橋教諭）。
- (4) 8 月に、名古屋国際中学校（サステイナブルスクール）との実践交流で Haze についてプレゼンを行う。
- (5) 修学旅行前（9 月）に、5 学年生徒と教員（約 200 名）の前で、Haze について 20 分間のプレゼンを行い、修学旅行でのディスカッション（全員参加）に備えて、Haze についての情報提供を行う。
- (6) マレーシアの高校とやりとりをして、当日の流れを決定する（プレゼン 5 分、ディスカッション 15 分）。
- (7) 9 月に、修学旅行での「英語」プレゼンに向けて生徒が英語版のスライドを作成する。
本校 ALT の前で英語で Haze についてプレゼンとディスカッションを行い、英語表記等の修正を行う。
- (8) 当日全員が全員参加できるよう、「定義」や「関連公害等」について英語でまとめる用紙を配布する。
- (9) マレーシアの高校生と、英語でプレゼンとディスカッションを行う。
(流れ) ①両国プレゼン（各 5 分）→②全員でディスカッション（20 分）→③両国まとめ（各 3 分）



（6 名によるプレゼン）



（代表生徒のディスカッション）



（参加生徒同士のディスカッション）

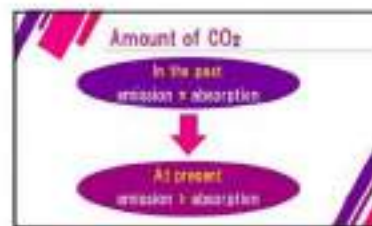
8 生徒の評価（感想等）

- 修学旅行を通して一番英語を使ったのが、学校交流でのディスカッションだった。英語の即興力が必要とされ、最初は緊張したが、プレゼンをすることで普段通りに英語でコミュニケーションを取ることができた。
- 主に Haze のディスカッションが修学旅行の中でも印象的だった。「伝える」ということに関しては、文法が正しくなくても例えばジェスチャーを使ったり、自分の知っている単語をうまく伝えてみたり、工夫することで会話は続けることができた。また、自分が意見をまとめて発言したときには、なかなか即興での話は難しいなあと改めて感じた。特に「わかりやすく伝える」ということが難しかった。わかりやすく、かつ頭に残してほしいスピーチにする中で、すでに出ていた解決先を交えることができたのはよかった。

9 成果と課題

生徒から次のような成果と課題が出された。成果としては、「マレーシアの生徒と英語でのプレゼンが落ち着いてできたこと」、「楽しくコミュニケーションが取れたこと」であり、反省点としては、「ディスカッションの時に、もっと日本らしい日本の立場を強く反映したアイデアを準備しておけばよかったこと」と「発音やリスニングなどを鍛えてどんな英語にも対応できるようにすること」である。

●マレーシアの高校のプレゼンテーションで使ったスライドの例（生徒作成）



In Malaysia

- Some games or traditions can be solved
- Infants can die



Measures Towards Companies

- Do not buy products made by companies developing peat soil
- Do not invest in companies developing peat soil



APP's Policy of Conserving Forests

- Orders not to fell natural forests
- Conserve peat soil
- Relationships with communities
- Purchase materials from third-party companies
- Plans of maintaining forests
- Assist in making renewable fuel

Conditions in Singapore

2021 Report of the National Environment Agency (NEA)

Category	2021	2020	2019
Overall	4.5	4.4	4.3
Category 1	4.5	4.4	4.3
Category 2	4.5	4.4	4.3
Category 3	4.5	4.4	4.3
Category 4	4.5	4.4	4.3
Category 5	4.5	4.4	4.3
Category 6	4.5	4.4	4.3
Category 7	4.5	4.4	4.3
Category 8	4.5	4.4	4.3
Category 9	4.5	4.4	4.3
Category 10	4.5	4.4	4.3
Category 11	4.5	4.4	4.3
Category 12	4.5	4.4	4.3
Category 13	4.5	4.4	4.3
Category 14	4.5	4.4	4.3
Category 15	4.5	4.4	4.3
Category 16	4.5	4.4	4.3
Category 17	4.5	4.4	4.3
Category 18	4.5	4.4	4.3
Category 19	4.5	4.4	4.3
Category 20	4.5	4.4	4.3
Category 21	4.5	4.4	4.3
Category 22	4.5	4.4	4.3
Category 23	4.5	4.4	4.3
Category 24	4.5	4.4	4.3
Category 25	4.5	4.4	4.3
Category 26	4.5	4.4	4.3
Category 27	4.5	4.4	4.3
Category 28	4.5	4.4	4.3
Category 29	4.5	4.4	4.3
Category 30	4.5	4.4	4.3
Category 31	4.5	4.4	4.3
Category 32	4.5	4.4	4.3
Category 33	4.5	4.4	4.3
Category 34	4.5	4.4	4.3
Category 35	4.5	4.4	4.3
Category 36	4.5	4.4	4.3
Category 37	4.5	4.4	4.3
Category 38	4.5	4.4	4.3
Category 39	4.5	4.4	4.3
Category 40	4.5	4.4	4.3
Category 41	4.5	4.4	4.3
Category 42	4.5	4.4	4.3
Category 43	4.5	4.4	4.3
Category 44	4.5	4.4	4.3
Category 45	4.5	4.4	4.3
Category 46	4.5	4.4	4.3
Category 47	4.5	4.4	4.3
Category 48	4.5	4.4	4.3
Category 49	4.5	4.4	4.3
Category 50	4.5	4.4	4.3

Discussion Points

- What are environmental problems in your country?
- What can you do for the environment?

(1)【事業報告】姉妹校との国際交流(希望者、課外活動)マレーシア②(H30、ディスカッション)

文責 柳浦達宏

- 1 学年・教科等 5 年修学旅行「マレーシア高校生・大学生とのプレゼン&ディスカッション」
テーマ 「エビ養殖による東南アジアのマングローブ林・熱帯雨林の破壊と日本」
- 2 日時 2018 年(平成 30 年)10 月 2 日(火)午前
- 3 担当者、招聘講師等 柳浦達宏(地歴公民)
- 4 対象生徒等 生徒 11 名
- 5 本校 ESD の観点 ☒国際課題解決プロジェクト ☐地域課題解決プロジェクト ☐在り方生き方探究プロジェクト

6 テーマ設定の背景・経緯・目的等

5 学年の修学旅行先はシンガポール・マレーシアである。マレーシアの大学・高校では、シンガポールとマレーシア両国を含む東南アジア全域で問題になっている「マングローブ林・熱帯雨林の破壊」について、現地の大学生・高校生と英語でプレゼンテーションやディスカッションを行う。この取組を通して、生徒は国際課題解決力や英語での表現力を養い、さらには交流にとどまらずに「アクション」に踏み込む一歩進んだ国際交流となることをねらいとする。

7 内容の具体・展開の流れ

- (1) 4 月～5 月に 5 学年の実施する「夢チャレ」の活動の一端として、参加希望者を募る。
 - (2) 参加確定者(11 名)と担当教員でミーティングをしてねらいや今後の動きを確認する。
 - (3) 生徒が「エビ養殖」「マングローブ林・熱帯雨林の破壊」について「日本語」で情報収集をする。
 - (4) 修学旅行前(9 月)に、5 学年全員の前で、「エビ養殖とマングローブ林・熱帯雨林の破壊」について 20 分間のプレゼンを行い、修学旅行でのディスカッション(全員参加)に備えて情報提供を行う。
 - (5) マレーシアの高校とやりとりをして、当日の流れを決定する(プレゼン 5 分、ディスカッション 15 分)。
 - (6) 9 月に、修学旅行での「英語」プレゼンに向けて生徒が英語版のスライドを作成する。本校 ALT の前で英語でプレゼンとディスカッションを行い、英語表記等の修正を行う。
 - (7) マレーシアの高校生と、英語でプレゼンとディスカッションを行う。
- (流れ) ①両国プレゼン(各 10 分)→②全員でディスカッション(20 分)→③両国まとめ(各 10 分)



8 生徒の評価(感想等)

- とても充実した活動ができたと思う。修学旅行を終えてもっと前に進みたいような思いがある。英語をどうしても使わなければならない状況になって、意外に英語を使うことに抵抗がなく取り組めた。国内での日本語を使った活動なら、こうした思いはもてなかっただろう。
- 今回のテーマで研究ができたのはとてもよかったと思います。私たちの日常生活に欠かすことができないエビやパームオイルが東南アジア諸国の、いや世界にとってとても貴重な熱帯雨林を破壊しながら生産されていることに初めて気づくことができました。そして、そうした環境破壊に対して、環境に優しく安全な食品を生み出そうと努力する企業や大学が身近にあることを知ることができ、自分ももっと頑張って社会の役に立つようにならなければいけないという気持ちになりました。

9 成果と課題

生徒から次のような成果と課題が出された。成果としては、ディスカッションの場では多くの生徒が大学生や高校生と英語を介してコミュニケーションがとれていたこと。反省点としては、まだまだ、コミュニケーション力が十分ではなかったということ。日頃の学習にもっと積極的に取り組まねばならないこと。

●マレーシアの高校のプレゼンテーションで使用したスライドの例（生徒作成）

Destruction of Mangrove Forests

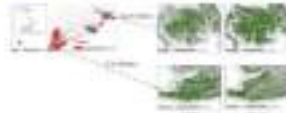


The Present Circumstance of Mangrove

- World demand more than 1341999-19999
- India lost forest decreased 2% about hundred thousand hectares (2000-2012)
- Thailand decreased 40% (1970-1980)
- Thailand decreased 40% (21 century)
- Malaysia decreased 12% (1990-1994) and decreasing about 4% per year



The Variety of Mangrove Forests in Vietnam



RICOH.co.LTD's Project

- The preserving project in Kuala Selangor (2011)



PARCIC・PIFWA's Activity

- They started planting activity from 2000



Planting mangrove

What are Destroying Mangroves?

Aqua farming
Oil palm plantations
Rice cultivation

Mangrove live in both of land and sea.

2 kinds of Aquaculture

1. Extensive aquaculture

It's a traditional method of aquaculture. We can use ponds effectively.



2. Intensive aquaculture

A lot of shrimp has raised in one pond. Shoppers add chemicals in their feed. It made soil bad and we can't use the pond forever.

Result

- In Thailand, 100 million hectares of mangrove forests are destroyed.
- In Southeast Asia, 30-50% of mangrove forests are destroyed.

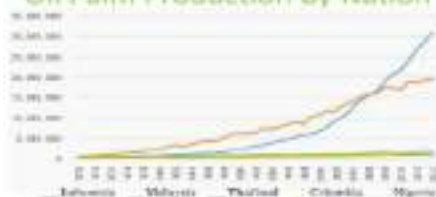


Oil Palm Plantation



Food (chocolate, snacks, ice cream, and so on)
Others (soap, paint, cosmetic, and so on)

Oil Palm Production by Nation



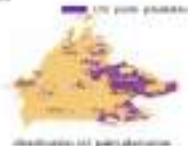
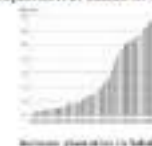
Damage of Oil Palm Plantations

Oil palm plantations are built in the areas where mangroves were cut. 2 million hectares of tropical rain forest were cut in 30 years after 1990.



Expansion of Oil Palm Plantations

- Expansion at Sabah in Malaysia



The More We Eat Seafood, The More We Come to Depend On Aquaculture



World

Consumption of shrimp is increasing
Background: many people interested in fish dishes
Technology for importing fish developed

(the main countries)

1. China



2. America



3. Japan



Indoor Shrimp Farm



It is environment-friendly.

MSC・ASC



RSPO: Roundtable on Sustainable Oil

Producer of oil palm

market

Supply chain

Consumer of oil palm



Oil company + trader company

Supply chain

Consumer of oil palm

Supply chain



(1)【事業報告】姉妹校との国際交流（希望者、課外活動）マレーシア③（ディスカッション）

文責 高尾香織

- 1 学年・教科等 5年 「夢チャレ」（修学旅行「マレーシア高校生・大学生とのプレゼン&ディスカッション」）
- 2 テーマ 「What individuals can do to diversity ?」
- 3 日時 2019年（令和元年）10月7日（火）午前
- 4 担当者 高尾香織（国語）
- 5 対象生徒等 生徒11名
- 6 本校ESDの観点 ■国際課題解決プロジェクト □地域課題解決プロジェクト □在り方生き方探究プロジェクト
- 7 テーマ設定の背景・経緯・目的等

5学年の修学旅行ではシンガポール・マレーシアに行く。マレーシアの大学・高校では「多様性」をテーマに、多民族国家であるマレーシアにもある問題点や、将来外国籍の人が増えていくはずの日本が目指すべき方向性について、現地の大学生・高校生とプレゼンテーションやディスカッションを行う。この取組を通して、生徒は課題解決力、英語での表現力を養い、さらには交流にとどまらずに「アクション」に踏み込む一歩進んだ国際交流となることをねらいとする。

8 内容の具体・展開の流れ

- (1) 4月～5月に5学年の実施する「夢チャレ」の活動の一端として、参加希望者を募る。
- (2) 7月に参加確定者（11名）と担当教員でミーティングをしてねらいや今後の動きを確認する。
- (3) 8月に生徒が「多文化共生」「多様性」について情報収集をする。一部の生徒は外国籍の小学生を対象にした「日本語ボランティア」に参加する。
- (4) 9月上旬に、「やさしい日本語」についてレポートを提出する。5年生全員に「多様性」に関するアンケートを実施。
- (5) マレーシアの高校・大学と当日の流れを決定する（プレゼン5分、ディスカッション15分）。
- (6) 9月下旬に、修学旅行での「英語」プレゼンに向けて生徒が英語版のスライドを作成する。本校ALTの添削を受けて、英語表記等の修正を行う。
- (7) マレーシアの高校生・大学生と、英語でプレゼンとディスカッションを行う。
（流れ）①両国プレゼン（各10分）→②全員でディスカッション（20分）→③両国まとめ（各10分）



9 生徒の評価（感想等）

- 日本の「多様性」の問題の一つに外国人と日本人との間にある「言語の壁」があげられます。総務省は将来に向けて「やさしい日本語」を全国に広げていく取組を行っています。言語の壁には外国人と日本人のお互いの積極性が足りないために出来てしまうものだと感じました。日本で「多様性」が実現するためには、私たちの世代が外国人とコミュニケーションをとっていくことが大切だと改めて感じる事ができました。
- 「多様性」を実現するためには、いろいろな視点から人と人との関係について見なければいけないことを学びました。また、人と関係を築く中で言語能力以上に積極的な態度が大切ということも学びました。大学の先生の講義の後、「実際にどのように接することが良いのか」についてテーブルごとに話しました。私たちは音楽やスポーツなどを通じてコミュニケーションを取ると言う意見を出しました。言語が通じなくても心を通わせることができることを考えると、相手と関わりを持つきっかけを作ることはとても大切だと思いました。姿勢や態度は、自分たちの意識ですぐに実践できることだと思います。

10 成果と課題

- 成果 ①決められたテーマの中から問題や課題を発見し、解決策を探究する力がついたこと
②積極的に発言していくことで発表する内容が深まり、問題点を明らかにできたこと。
- 課題 ①語学力と表現力を磨くこと。 ②日本語のプレゼンテーションの質を上げること。

●マレーシアの高校・大学のプレゼンテーションで使ったスライドの例（生徒作成）

What can individuals do to diversity?

What's diversity?

- race
- gender
- language
- custom
- nationality
- ideology
- religion
- etc...

The present condition of Fukushima

cultural exchange
Relaxing places for people from abroad

Shingu cafe ↑

The result of the survey from Fukushima high school students

1. Did you come up with something about diversity?

After test lesson: global, culture, society, language, personality, world, creature and religion

2. Can you accept other cultures?

YES: I want to have localized in the local ways. To search the other culture. Cultural exchange. I want to.

NO: I don't have confidence that I can accept all of the culture. I don't know what they do to us. I can't speak English. I don't know.

3. Do you want to communicate with people from abroad actively?

YES: I want to have localized in the local ways. To search the other culture. Cultural exchange. I want to.

NO: I don't have confidence that I can accept all of the culture. I don't know what they do to us. I can't speak English. I don't know.

To improve communicative skills

To accept other culture is one thing, to speak another language is another.

"Let's listen, find, and think as your own problem!"

Yasasi (Easy and Kind) Japanese

+ Easy and Kind Japanese is easier than normal Japanese for people from abroad to understand.

for example:

遅く にくる
↑
Easy to understand

Easy and Kind Japanese

Easy and Kind Japanese

...the attitude for communication and consideration

POINT

Be polite even if you can't make yourself understood.

- Use easy words.
- Be considerate of your expressions.
- Show yourself with a positive attitude

Can you understand these Japanese sentences?

Please explain what situation you use them in?

①非常口はどこですか？

②気分が悪いです。

What we can do and what we should do as Japanese people

① More Japanese people should learn "Easy and Kind Japanese".

② Get used to communicating with people from abroad.

③ Understand the importance of connection with people from abroad.

（２）【事業報告】海外ボランティア活動（SYD、課外活動）

文責 上山晋平

- 1 学年・教科等 4・5年 総合的な学習の時間及び生徒の自主的な活動
(SYD と連携した「国際交流・国際貢献」活動)
- 2 日時 通年実施 (ボランティア・アクション in フィリピンは 2017 年 (平成 29 年) 8 月実施)
- 3 担当者、招聘講師等 上山晋平 (教育研究部)
- 4 対象生徒等 生徒 4 名 (講演会は学年全員参加)
- 5 本校 ESD の観点 ■国際課題解決プロジェクト □地域課題解決プロジェクト □在り方生き方探究プロジェクト
- 6 テーマ設定の背景・経緯・目的等

本校では、ESD の 3 プロジェクトの一つに「国際課題解決プロジェクト」を設定し、総合的な学習の時間や生徒の自主的な活動として、文科省所管の社会教育団体・SYD と連携して、国際課題の解決に係る事業を実施している。主な事業は以下の 5 つである。①SYD の講師によるフィリピンでの支援活動に関する講演を聞く。②生徒同士で可能なアクションを考える。③文化祭で支援物資の呼びかけ及び SYD 活動内容の発表をする (有志)。④代表生徒が SYD のボランティア・アクション in フィリピンに参加し、支援物資を届ける。⑤学年集会や市主催のイベントで活動を発表する。なお本校からは、フィリピンでの活動に 4 年連続で参加している。

7 内容の具体・展開の流れ

- (1) SYD の講師によるフィリピンでの支援活動に関する講演を聞く

4 年生は 2 月の総合的な学習の時間で、SYD の青木講師から、フィリピンの貧困地区における支援活動について講話を聞き、「国際交流」と「国際貢献」(ボランティア活動)について考え、生徒がアクションを起こすきっかけとする。世界の貧困について知るだけでなく、考え、自分たちにできることを「行動する」ことにつなげる。

- (2) 生徒同士で可能なアクションを考える

生徒は講演後に感想文を書き、さらに自分なりに何ができるのかを付箋に書き出しクラスでまとめた (画像参照)。

- (3) 有志が文化祭で支援物資の呼びかけ及び SYD 活動内容の発表をする

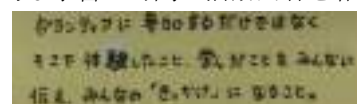
6 月の文化祭では、ボランティア部や有志が中心となって、SYD の活動を紹介するポスター掲示を行ったり、フィリピンに届ける支援物資を学校全体から回収したりする取組を行った (次項参照)。

- (4) 代表生徒が SYD のボランティアアクション in フィリピンに参加し、支援物資を届ける (次項参照)

8 月には SYD が全国から募集し実施するボランティア・アクション in フィリピンに、本校生徒 4 名が応募し、選ばれる。学校全体で回収した物資を支援物資に入れて届けたり、現地の子どもたちと交流したりした。

- (5) 学年集会や福山市主催の人権・平和フェスタで活動内容を発表する。

フィリピンでのボランティア活動に参加した生徒が、学年全員の前で総合的な学習の時間で活動内容を報告した。さらに、市から依頼で、人権後援会でも取組を発表した。



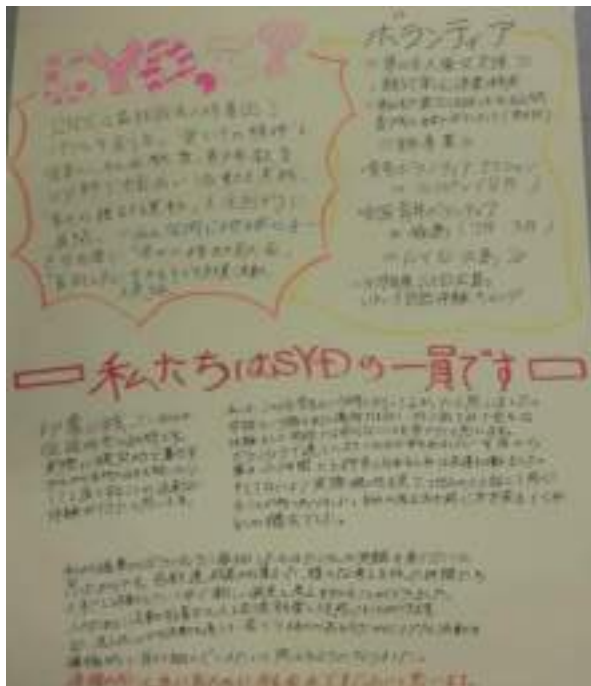
8 生徒の評価 (感想等)

- 私が考えたこともないような暮らしをしている人々が世界にはたくさんいる。私は今日、この事実を改めて知りました。ストリートチルドレン、死を待つ人の家、ゴミ捨て場で働く子どもたち、どれも衝撃的でした。正直「かわいそう」という気持ちが大きすぎてつらかったです。でも、この子どもたちは必死で生きています。そんな立派な彼らの姿を見て、自分が情けなく恥ずかしいとさえ思いました。●●さんの発表で、●●さんが言っていた「ボランティアの目的はボランティアがなくなること」という言葉、これが私の心に響きました。一人一人が協力して、みんなが助け合おうという気持ちになったら、全員に未来が訪れるのではないかなと思います。

9 成果と課題

- 世界の状況は「知る」ことがまず必要である。その意味では、SYD 講師による心に響く講演と参加生徒による体験談がとても大きな影響を与えた。しかし、聞くだけでは時間と共に記憶は風化する。そこで「生徒が動く」につなげるために、「ボランティア部」や ESD の取組と関連させて、できることを全員が考える取組を行った。付箋は全クラス及び図書館に掲示し、全校生徒での支援物資の回収行動につながった。
- 5 学年の「夢チャレ」の取組もあり、フィリピンや福島でのボランティア、広島や小豆島での小学生キャンプリーダーなどのイベントにも多くの生徒が参加し、体験的に学びを深めている。

(1) 文化祭での生徒作成ポスター



(2) ボランティア・アクション in フィリピン (参加生徒感想文) ～「私が泣いた理由」

私は、8月終わりの一週間をフィリピンで過ごした。その一週間は、今までの私の人生の中で、一番楽しくて刺激的だった一週間であり、一番後悔して悔しい思いをした一週間になった。

私は毎日、日本から一緒に来た仲間たちと一緒に、フィリピンのいろいろな所へ行って、家や学校などを訪問し、現地の方々や子どもたちと交流したり、物資や食べ物を配ったりした。ナボタス、ハッピーランド、サンマテヨ、旧スモーキーマウンテン、パヤタス、そしてマザーテレサの施設。フィリピンの人たちは皆優しく、どこへ行っても歓迎してもらえた。特に子どもたちは、どの子も皆笑顔で寄ってきてくれたり、遠くからでも私たちに手を振ったりしてくれた。子どもたちと交流するときは、英語が話せない子が多かったので、言葉を使う以外の方法でコミュニケーションをとらなければならなかった。だから、何を伝えたいのか正確に理解してあげることは出来なかったが、一緒に遊んで一緒に楽しむことは出来た。抱っこしてあげたり、ハイタッチしたり、鬼ごっこをしたり。子どもたちは、言葉の通じない私たちにもキラキラまぶしい笑顔で笑って、全力で遊んでくれた。全身で楽しんでいることを伝えてくれた。言葉がなくても仲良くなれたことを実感した時は、とてもうれしかった。子どもたちと笑いあうことに幸せを感じていた。

でも、5日目。パヤタスに住む女の子たちと一緒に遊園地で遊んだ時のことだった。帰りの集合時刻が迫ってきている頃、私は一緒に遊んだ1人の女の子に、「楽しかった？」と聞いてみた。私は、今までの子がそうであったように、きっと「楽しかったよ!」と言ってもらえると思っていた。でも、その女の子は笑顔で「NO!」と言った。私はすごくショックだった。彼女は笑顔で答えたので、もしかしたら、私の英語が拙くて、他のことを聞いたように聞こえたのかもしれない。もしかしたら、イタズラ心で思っていることと逆のことを言っているのかもしれない。けれど、もし「NO!」が本心だったらと思うと、怖くて「NO!」と答えた理由を聞くことは出来なかった。

その日の夜、私はフィリピンに来てから毎日つけてきた日記を読み返してみた。すると、日記の終わりにには必ず「明日はもっと頑張ろう」といった内容が書いてあることに気づいた。私はもっと頑張れたのではないだろうか。そうしていたら、もっと何かしてあげることが出来たのではないだろうか。もっと行動を変えていけば、「YES!」と言ってもらえたのかな。もし他の子も心の底では「楽しくなかったな」と思っていたら。私は一緒にいる子たちをどのくらい幸せにしてあげられただろう。考えれば考えるほど不安になったし、1日中一緒にいた子すら幸せにしてあげられなかったのかもしれないと思うとすごく悔しくて、自分がとても情けなく感じた。

次の日の夜は、評価会があった。1人1人前に出て感じたこと、思ったことを発表していった。多くの人が、幸せについての自分の意見や、誰かを笑顔に、幸せに出来た体験などを語った。私はそんな皆をとても羨ましく思った。私もフィリピンの人たちからたくさんの幸せをもらったけれど、2倍以上のもの、そもそももらった分の幸せを返せたか…自信がもてなかったからだ。とても、とても悔しかった。だから私は、自分の番が回ってきて、皆の前に立って話したとき、今までの記憶とそれらの思いが頭の中でごちゃまぜになってしまって、涙がボロボロ出てきた。

私は「幸せ」とは何か、「愛」とは何か、まだわからない。知らないものは怖いから、早く答えを見つけたいけれど、私は、焦らずゆっくり自分の長い人生の中で、「これだ!」と思う答えを探していく。誰かの受け売りじゃなく、一番納得のいく自分の言葉で。

そして、私はいつかもう一度あの女の子と一緒に遊園地に行きたい。今度こそ「楽しかった!」と言ってもらうために!

(3)【事業報告】 模擬国連 (ICC 等有志、特別活動)

文責 藤田憲弘

- 1 学年・教科等 高校生 希望者
- 2 日時 夏休み前後～11 月
- 3 担当者、招聘講師等 藤田 憲弘
- 4 対象生徒等 希望者及び情報収集サポーター（2～4 名程度）
- 5 本校 ESD の観点 ■国際課題解決プロジェクト □地域課題解決プロジェクト □在り方生き方探究プロジェクト

6 テーマ設定の背景・経緯・目的等

模擬国連は、世界の様々な課題に対し生徒が国連大使を演じながら、参加国での合意形成をめざしていくプログラムで、そこでは、課題に対する分析力や、合意形成にいたる交渉力、英語力など多くの力が必要とされる。本校では、国連大学（東京）で行われる全日本高校模擬国連大会に、第 11 回大会を含めて 4 回出場しており、この大会出場を核に、様々な取組を行ってきた。

7 内容の具体・展開の流れ【参加した全日本高校模擬国連大会】

- 第 6 回 全日本高校模擬国連大会（担当国：インド／テーマ：核軍縮に向けて）
- 第 9 回 全日本高校模擬国連大会（担当国：アルゼンチン／テーマ：移民問題）
- 第 10 回 全日本高校模擬国連大会（担当国：キューバ／テーマ：サイバースペースのルールづくり）
- 第 11 回 全日本高校模擬国連大会（担当国：マレーシア／テーマ：ジェンダーフリー）

8 生徒の評価（感想など）

- 模擬国連の取組の中で最も変わったのは、「授業を聴いていても単なる受け身でなく、反論したいという気持ち がわくようになった」ことです。（湯崎知事とのチャレンジトークにて）

9 成果と課題

模擬国連の取組は膨大で、時間がない中で成果を挙げるには多くの工夫が必要となる。いくつか記す。

(1) 模擬国連活動の広がりに向けて

①出場者だけでなくサポーターの募集

- ・大会に向けて膨大な資料収集が要求される。そこでサポーター生徒を募集し、資料作りに参加させる。サポーター生徒は、下の学年にも呼びかけ、本大会へも見学者として連れて行くことで、取組を持続させる。

②校内模擬国連の開催

- ・本校には、大学での模擬国連活動で活躍した OB もいて、その方の指導の下、文化祭で校内模擬国連を過去 2 回行った。中高校生に加え近隣の大学生にも呼びかけ、模擬国連活動の普及活動を行った。

③核となる部活動の設置

- ・「英語研究部」は、英語によるコミュニケーションだけでなく、国際問題への取組や多文化理解などを含めた部にすべく、平成 29 年度から ICC に変更し、国際問題に興味を抱く広い人材を集めようとしてきた。

＊●I:Ichiritsu International ●C:Communication Cross Culture Cooperation ●C:Club

④全日本大会以外の模擬国連への参加

- ・今年度は、8 月に東京で希望者を対象とした教育模擬国連が行われた。本校 5 学年生徒 10 名も、OB による事前指導等を受けて、この大会に参加し、そのなかから全日本大会への出場者も出すことができた。
- ・広島県内でも、様々な模擬国連が開かれており、ICC を中心に希望生徒が広島での各種大会に参加している。

(2) 校外とのつながり

①大学とのつながり

- ・第 6 回大会：担当国の専門である広島大学大学院の吉田修教授から、事前学習会で数度指導いただいた。
- ・第 9 回大会：OB のつながりから、関西の大学での模擬国連研修に参加しアドバイスをいただいた。
- ・第 10 回大会：福山市立大学の上別府隆男教授から指導いただいた（資料収集、大学生の校内模擬国連参加）。

②他の高校とのつながり

- ・第 10 回大会から、灘高校での勉強会に参加させていただいた。その後も生徒は SNS で交流している。

③その他の機関とのつながり

- ・第 9 回大会では、担当国であるアルゼンチン大使館へ連絡し、メールで情報のやりとりを行うとともに、大会出場前日には、大使館を訪問し、領事の方から 2 時間にわたる英語でのレクチャーを受けることができた。

第 10 回全日本高校模擬国連大会

昨年に続き、3 回目の出場となりました。

今年は、事前に灘高校での研修会にも招待され、毎夜、資料と格闘して臨みました。

今回のテーマは、サイバースペースにおける安全保障問題でした。キューバ大使を演じ、公式スピーチでは、各国が内向きにならないよう交渉の門を開くことの重要性を訴えました。

予選を勝ち抜いて出場したのは、5 年生 1 組の田林佳純さんと宮崎美風さんです。2 日間にわたる延々とした会議を知力・体力とコミュニケーション力をフル活用して乗り切りました。

4 年生有志（4 組・松本和子さん 6 組・佐藤瑠楓さん）もオブザーバーとして参加し、来年度へ向けて研修を積みしました。



国連大学は、東京・青山にあります



キューバ国連大使



各大使 2 分の英語での
公式スピーチ



本校生徒作成：公式スピーチ（キューバ大使役）

Thank you (Honorable)、 chair.

Next year、 50 years will have passed since Che Guevara died. 57 years ago、 they did their best to make a peaceful and non-disparate society. Their dreams are not only legacies of the past; they are still the hopes of people in our country、 Cuba、 and the people of the world. Recently、 I saw the news that young people in Europe did a demonstration by hanging up the picture of Guevara. Their anger is about present day disparate societies.

And、 this gap exists in cyberspace as well. This gap must not be allowed to be used by technologically advanced countries to gain political or economic advantages over technologically developing countries.

(4)【事業報告】第10回全国高等学校観光選手権大会（観光甲子園、ICC 有志）

文責 新宮正一

- | | |
|--------------|---|
| 1 学年・教科等 | 5 年 「夢チャレ」 観光甲子園海外部門での発表 |
| 2 日時 | 2018 年（平成 30 年）8 月 23 日（木）午後 |
| 3 担当者、招聘講師等 | 新宮正一（地理歴史） |
| 4 対象生徒等 | 生徒 2 名 |
| 5 本校 ESD の観点 | ■国際課題解決プロジェクト □地域課題解決プロジェクト □在り方生き方探究プロジェクト |

6 テーマ設定の背景・経緯・目的等

「観光甲子園」は平成 30 年度で 10 度目をむかえる全国規模の大会である。従来は地域におけるインバウンドに対する観光プランの発表であったが、平成 30 年度から「ハワイ移民 150 年」を記念して海外部門が設立された。これはハワイに関するスピーチコンテストであり、優秀なスピーチ・プレゼンが全国大会へ参加できるというものである。

今回は、参加生徒の高祖父（祖父母の祖父）がハワイへ移民しており、残された高祖父の写真から高祖父や日本人移民の足跡を旅するというスタディツアーを企画することになった。この一連のスピーチ・プレゼンを作成する時に、様々な資料を収集し、関係各所にメールで問い合わせを行う必要がある。特に今回の場合は、ハワイが対象であったために「ワヒアナ広島県人会」や「ドールプランテーション農場」などに英語でメールを送って取材・写真などの使用許可をいただいた。これらの実践的な国際交流過程を通して、生徒は課題解決力や英語での表現力を養うことができた。

7 内容の具体・展開の流れ

- (1) 4 月～5 月に 5 学年が実施する「夢チャレ」の活動の一端として、参加希望者を募る。
- (2) 本事業担当者と参加者が今後の方針について話し合う。
- (3) 生徒がハワイの関係各地に「英語」で情報収集をする。
- (4) 6 月に「観光甲子園・海外部門」に応募する。
- (5) 7 月に「観光甲子園・海外部門」の本選出場が決定する。（場所：神戸）
- (6) スピーチ原稿・プレゼンテーション資料の作成を行う（プレゼンテーション 10 分間）。
- (7) 8 月 23 日 神戸ポートオアシスで第 10 回全国高等学校観光選手権大会が開催される。

海外部門で本選出場 3 組のうち最優秀としてグランプリを獲得する。



8 生徒の評価（感想等）

- ハワイの歴史について調べてみました。私の高祖父がハワイでパイナップル栽培をしていたので、「日系移民」をテーマとしてレポートを作成しました。今回の取組を振り返ってみて、今まで移民について少しは触れたことがあったけど、「日系移民」という絞られたターゲットについて調べるのはこれが初めてでした。私の高祖父の歴史について知ることが出来て良かったです。

9 成果と課題

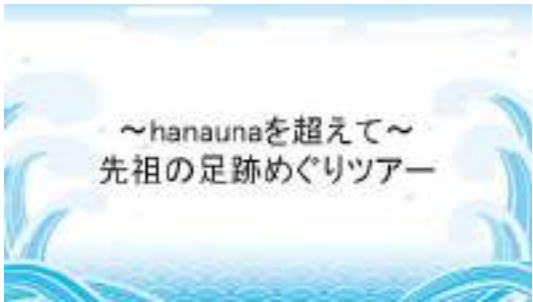
- （成果）成果としては、リサーチや取材を英語で行うことができたことが挙げられる。プレゼンテーション資料で使用する写真等の著作権関係に関しても学ぶことができたのはよかった。日系移民の歴史を生徒のファミリーヒストリーを通して学ぶことができ、共有できたのも非常に評価できる。
- （課題）一方で、こうした取組を一過的なものにしてはならない。今回は偶然に生徒の高祖父の話があって、一定の課題意識をもってリサーチ・プレゼンテーションを行うことができたが、こうした取組の裾野を拡大していくためには、もっと広く情報を提供していく必要があると感じる。

●観光甲子園のプレゼンテーションで使用したスライドの例（生徒作成）



広島県人会の方々から学んだこと

- ・ハワイまでは船で一週間、無料で行った。
- ・多くの労働者たちは、船や町、町、町などから支援を受けていた。
- ・農園労働者たちは、60セント〜1.5ドルまで一日で稼いだ。
- ・一月に20日働き、12時間工場働く。
- ・12時間労働で働いた。
- ・おれには儲けがなさすぎる、でもおれハワイで働き始められていま日本の定年がある。



- 1 学年・教科等 高校2年生の有志・希望者
2 日時 令和 元 年6月6日(木)～12月20日(金)
3 担当者 新宮正一
4 対象生徒等 高校2年生 3名
5 本校 ESD の観点 ☐国際課題解決プロジェクト ☒地域課題解決プロジェクト ☐在り方生き方探究プロジェクト

6 テーマ設定の背景・経緯・目的等

① テーマ設定

- ・地元神辺の地酒「天寶一」を外国人観光客に紹介し、地域の活性化をはかると同時に地域の伝統的なモノ作りを見直すことによって、伝統的なモノ作りに新しい価値を見出す。
- ・日本の伝統文化である酒造りを神事の面から訪日外国人観光客に紹介する
- ・田植体験を通して、自らが携わった酒米が地酒天寶一になるまでを SNS で発信し、製品となった天寶一を頒布する。
- ・一連の企画を通して最終的に神辺地域の活性化とモノ作りの町福山を海外に PR する。

② 経緯

昨年度応募した「全国高等学校観光選手権大会(観光甲子園)」に向けた取組であったが、48万人の人口を持つ中核都市福山は、地方の一都市に過ぎず、町おこしに特化している訳でもないため、観光としての福山市を前面に出して観光プランを作ることは難しいと感じていた。しかし、地域に残る伝統的なモノ作りにフォーカスすることで新しい観点でのインバウンドが期待できるのではないかと考えた。そのような中で、日本酒の女性ソムリエの方の記事を読んだことから、「伝統的な日本文化の象徴としての酒造り」と「ミスマッチな高校生と酒」をテーマとした本企画を考案した。

7 内容の具体・展開の流れ

- 6月 6日(木) 酒蔵天寶一へ取材依頼を行う
- 7月12日(金) 全国高等学校観光選手権大会書類審査通過
- 7月30日(火) 酒造米栽培農家 横山氏への取材
- 10月11日(金) 稲刈りの取材
- 10月17日(木) 天寶一の仕込み作業取材
- 11月23日(土) 岡山イノベーションコンテスト2019 ファイナル
- 12月20日(金) 全国高等学校観光選手権大会結果発表

8 生徒の評価(感想など)

- 今まで漠然としか進路のことを考えていなかったが、この活動を通してモノ作りに携わることもしてみたいと思えるようになった。
- 動画のコンテからプレゼンテーション用の資料まで色々と考えて作成できたことがよかった。それぞれが役割分担して取り組めたこともよかったと思う。
- 岡山イノベーションコンテストで自分たちの企画が評価されなかったのは悔しかったが、一つの企画に取り組めたことは楽しかった。

9 成果と課題

【成果】①全国高等学校観光選手権大会書類審査通過(参加企画2)

②岡山イノベーションコンテスト2019 ファイナル進出

③取材を通して多くの方と出会い、様々なお話を聞くことができた。自分たちの世界が広がった。

【課題】①全国高等学校観光選手権大会では、本選に選出されるために3分間の動画を作成する必要があったが、取材時の機材や編集ソフト等に不慣れで不十分なもののしか作成できなかった。今後、こうした

IT 機器の扱いを生徒と共に学んでいく必要がある。

②岡山イノベーションコンテストでは、バーチャルリアリティのキャラクターを使用した企画の方が高く評価されたが、これは反面本企画のテーマが分かりにくかったといえる。企画のブラッシュアップが必要である。

●生徒の活動の様子



酒造天寶一の取材の様子



酒の神様 松尾さんを祀る



岡山イノベーションコンテスト 2019 の様子



山陽新聞 2019年10月30日掲載

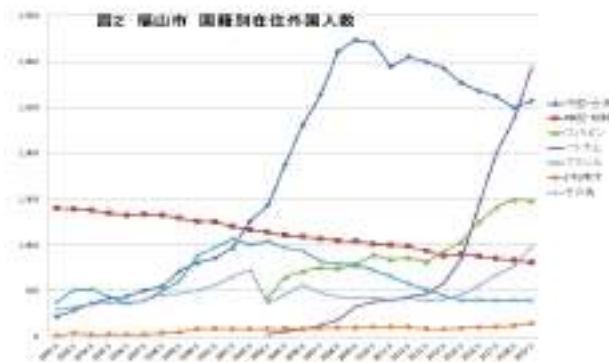
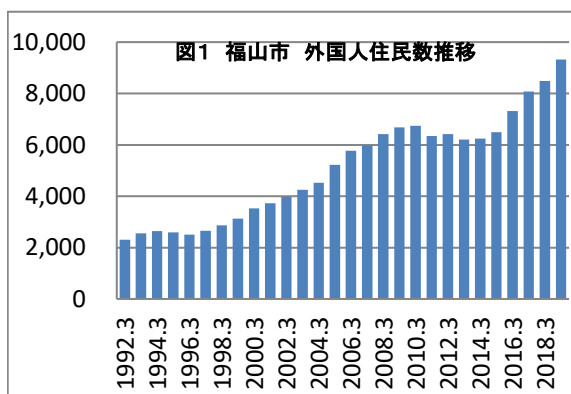


(6)【事業報告】外国にルーツを持つ児童・生徒への学習ボランティア（部活動）

文責 藤田憲弘

- 1 学年・教科等 ICC 部員および4・5年有志
- 2 テーマ 外国にルーツを持つ児童・生徒への学習支援（ふくやま国際交流協会およびNPOとの連携）
- 3 日時 2019年（令和元年）7月～
- 4 担当者 藤田憲弘
- 5 対象生徒等 ICC 部員生徒8名および4・5年生希望者
- 6 本校 ESD の観点 ☐国際課題解決プロジェクト ☒地域課題解決プロジェクト ☐生き方・在り方探究プロジェクト
- 7 テーマ設定の背景・経緯・目的等

2019年の7月、以前から連携を取っている福山市のふくやま国際交流協会（市民相談課）から、「夏休みを利用して、地域の外国人児童・生徒に、宿題をしながら日本語学習支援をしたいので、高校生が参加できないだろうか」という相談を頂いた。福山市内でもベトナム人を中心に、外国人居住者が増えており（図1・2参照）、地域における多文化共生について肌で考える良い機会と考え、参加させて頂いた。参加者は、ICC部員だけでなく、4・5年生にもHRを通じて公募したところ、国際交流のイメージや探究活動の一環として参加する生徒など、全体で15名前後の生徒が手を挙げた。また、ふくやま国際交流協会で設定された機会だけでなく、ここでの縁を広げて、地域での多文化共生に関するプログラムにも発展していった。



8 内容の具体・展開の流れ

- (1) 夏季および冬季休暇前にふくやま国際交流協会と連携してボランティアの内容と日程を確認する。
- (2) ICC 部員を含め、校内で参加者を募集し、事前レクチャーを行う。
- (3) ボランティア実施期間は、主催者である協会の方と生徒の活動を支援する。
- (4) 活動の様子を校内ブログで発信したり、紹介された新聞記事を掲示したりして、地域における課題を広く知ってもらう。
- (5) 協会の活動だけでなく、NPO 等での活動も紹介し、関心のある生徒が持続的に関われる場を提供する。

*活動実績

- 2019年夏季休暇中：7日間 参加者 17名（4年生1名 5年生16名）
 2019年冬季休暇中：3日間 参加者 19名（4年生12名 5年生6名 6年生1名）
 2020年夏季休暇中：5日間 参加者 13名（4年生7名 5年生6名）
 2020年冬季休暇中：3日間 参加者 6名（4年生2名 5年生4名）

9 生徒の評価（感想等）

- 僕は小学1年生の男の子を教えました。小学1年生なので日本語を話すことも、理解することも難しい様子だったので、教える側の僕も焦りました。詳しく説明しようすればするほど言葉が難しくなるので、言葉選びがとても大変でした。でも、相手の子が僕の言葉で理解してくれた時はとても嬉しかったです。
- 私は中学生の女の子を教えました。日本語なのに日本語で説明できないもどかしさを感じたり日本人なのに知らないことが多く恥ずかしくなりました。また、外国にルーツのある子どもが日本で暮らすことの難しさを感じるとともにその中で生きる力強さに感動しました。
- クリスマス文化の違いやキリスト教の考え方を知ることができ、改めて国際交流の面白さ、多文化共生の大切さを感じました。

10 成果と課題

成果 ①以前は、大人のボランティア活動に高校生も参加する形になったが、参加する児童や国際交流協会の方々からも信頼を得ることができ、本校のグローバルな活動として、継続定着している。

②地域で増加しつつある外国人と接することにより、多様な人が暮らす社会で、自分たちができることや共生社会のあり方を考える契機となった。特に、中学3年生を支援した生徒は、受験勉強から入学手続きまでを支援する中で、外国にルーツを持つ生徒が日本で進路を切り拓いていくことの困難さを痛感することができ、自分たちができる活動を見直し、チャレンジしていった。

課題 ①日本語で教えることで、日本語を客観視し、「やさしい日本語」の使い方について考える生徒は多かったが、外国人児童・生徒が抱える背景や課題にまで視野を広げていける生徒は限られていた。

②現在は、小学生がおもな対象であるが、この児童たちが中学・高校と進学するなかで、ボランティアのニーズは高まっていくし、既に潜在的に必要としている生徒は多い。ともに持続可能な地域社会を築いていくために、長い世代に渡って付き合っていくよう、ICCがそのベースキャンプに発展していければと思う。



2019.8.中国新聞



2020.2.中国新聞



2019.8.NHK

2020.12.朝日新聞

(7)【事業報告】コロナ禍におけるリモートでの国際交流（部活動）

文責 藤田憲弘

- 1 学年・教科等 ICC（部活動）4～5年
- 2 テーマ ZOOM カフェ（リモートでの国際交流）
- 3 日時 2020年（令和2年）6月1日～
- 4 担当者 藤田憲弘
- 5 対象生徒等 生徒8名
- 6 本校 ESD の観点 ■国際課題解決プロジェクト □地域課題解決プロジェクト □生き方・在り方探究プロジェクト
- 7 テーマ設定の背景・経緯・目的等

旧「英語部」である ICC (Ichiritsu International Communication Cross culture and Communication Club) の主な活動の一つに国際交流がある。例年は、各国・地域から本校を訪れる交流団の方々をバディとして支援することが中心だった。しかし、コロナ禍で対面交流が途絶えたため、ZOOM を使ったリモート交流を模索。本校に縁のある外国人や国際的に活動する卒業生に声をかけたところ、快く参加して下さり、例年以上に交流の幅が広がった。さらに、活動を報じた新聞記事を見た方が、「リモートもいいけど、やっぱりリアルで」と、地元ケニア人を紹介して下さるなど、新たな出会いにもつながった。

8 内容の具体・展開の流れ

- (1) 交流相手を様々なネットワークから探して依頼し、当日のテーマについて相談する。
- (2) 事前に学習が必要な場合は、グーグルクラスルームを使って、資料を提示する。
- (3) 学校全体に呼び掛けた方が良い場合は、ポスター等で全体に紹介する。
- (4) 特別教室に wifi 環境を設定し、パソコンやタブレットを数台用意して、3蜜を避ける状況をつくる。
- (5) ZOOM を使って、交流する。

* 交流実績（2020年6月～2020年11月）

- アフガニスタン在住のアマン・アタエイさん（カブール市公務員、JICA で来日時に本校生徒と交流）
テーマ「アフガニスタンの現状、民族文化」3回
- シアトル留学中の宮本一希先輩（大学3年生）テーマ「留学事情、最近のアメリカ事情」
- 神戸在住今春卒業した曾称メラティ先輩（大学1年生、ICC 前部長）
テーマ「難民問題サークルでの活動」
- 福山在住のケニア人、エリック・ムネネさん（留学生を支援する会前会長・小川久志様の紹介）
テーマ「ケニアについて知っていますか？」 *リアルカフェ
- ドイツ、フライブルク大学トバヤさん（カナダ人 ALT リースさんの友人）

9 生徒の評価（感想等）

- 海外におられる方とも気軽にトーキングができるので、とても楽しいし、良い経験になっています。卒業後も参加してみたいと思っています。
- 去年より、部活が ZOOM カフェで増えたのが嬉しかったです。部員以外の参加もあっていいと思います。
- コロナ禍でできることが限られる今、沢山の方と交流できたことはとても良い経験になったと思います。
ただ、英語での会話は意味がわからないこともあり、自分でもどうやって伝えたらいいのかが難しいです。
- 専門用語を英語で言われると、理解が難しいが、テーマをもとに話し合えるようにしたいです。

10 成果と課題

成果 ①リアルでの交流は、機会が限定される。対して、リモートでの交流は、相手を見つけることができれば、世界中で様々な背景を持った人たちと交流することができ、例年以上の出会いがあった。

②卒業生のネットワークからも交流できたことは、生徒にとっても身近に感じることであった。自分たちもあのように活躍したいと夢見ることができたのではないかな。

課題 ①会話を進めるための語学力がまだ充分でなく、アフガニスタンの方との通訳をシアトルにいる先輩がしてくれるという場面もあった。

②相手への質問内容が、食べ物や見所で終わりがちである。例えば、アフガニスタンの現状や歴史文化について、ある程度の基礎知識がないと会話が進まない。「質問するとき、相手に関して無知はだめ」と、社会学の先生から部員も学んでいたが、前もっての学習も必要である。



中国新聞での紹介記事と実施風景



リアルカフェの校内案内ポスター



ケニアについてのリアルカフェ



ALTのサポートでドイツと交流



国内外の複数拠点から参加



文化週間にて中学生も参加



大学の先生からアドバイス

Ⅲ 在り方生き方探究プロジェクト

(1)【事業報告】自分発見学習(中1、総合学習)

文責 矢幡愛

- 1 学年・教科等 1 年 総合的な学習の時間 「自分のよさをみつけよう」
2 日時 平成 29 年度 前期 (1 学期)
3 担当者、招聘講師等 1 学年教員 (矢幡愛、有本一哉、瀧元美菜子、妹尾進一、山下一朗太)
4 対象生徒等 1 学年生徒 120 名
5 本校 ESD の観点 ☐国際課題解決プロジェクト ☐地域課題解決プロジェクト ■在り方生き方探究プロジェクト

6 テーマ設定の背景・経緯・目的等

本単元は、本校中学校の開校当初から設定したものである。自分の得意なことを再発見し他の生徒に発表したり、クラスメイトがどんな良さを持っているのかを互いに知ったりすることを通して、生徒の自己肯定感や協働性を高めることをねらいとしている。福山市の様々な小学校から入学してきた生徒同士の関係づくりも視野に入れながら、個人やペア、グループ、クラス全体と授業形態をさまざまに取り入れながら学習を行った。また、教員同士のめざす生徒の共有化を図るため、単元を始める前に授業で毎時間使用するルーブリックを作成した。生徒にも配布できるよう簡単な言葉を使い、いつでも確認できるようにファイルさせた。これをもとに毎時間の目標設定や自己評価やふりかえりを実施した。

7 単元の流れ

- (1) オリエンテーション：1 年間の学習の流れ、本単元の流れの確認
(1 学年全体)
- (2) 自分が現在できることを書き友達と交流する。ルーブリックを使い、自己分析する。(グループ)
- (3) 究極のプレゼンを動画 (TED) で見る。(学年全体)
- (4) イメージマップで自分の新たな面を見つけ、交流する。(グループ)
- (5) 自分のよさ (得意なこと) を絞り、発表の大まかな構成を作り交流する。
(グループ)
- (6) 自分のよさ (得意なこと) を 1 枚の画用紙に表す。下書きの相互評価をする。(ペア)
- (7) 発表原稿をもとにプレ発表し、相互評価をする。(グループ)
→原稿の修正をする。
- (8) クラス内で発表を行い、相互評価をする。(全体)
- (9) 相互評価をもとにクラス内のベストプレゼンターを 3 名決め、発表する。
(学年全体)
- (10) 本単元のふりかえりをする。

生徒が書いたイメージマップ



8 生徒の評価 (感想等)

- 自分たちで単元の計画を立てたり、1 時間の目標を考えたりするのは難しかったけど、だんだん慣れてきてできるようになるんだなあと思いました。
- みんなの発表を見て、小さいころから頑張っていることとかあって、すごいと思いました。自分も良いところをたくさん見つけて頑張りたいです。
- ▲計画を立ててもうまくいかなかったです。時間配分に気がつくたいです。

総合係が授業を進めている様子



9 成果と課題

- ふりかえりにおいては、ほぼ全員が肯定的な感想を書いていた。
- 他の生徒の発表を見ることで、自分の発表の改善策を考えていた。
- ルーブリックの作成で、教員同士や教員と生徒の間での「つきたい力」の共有化が図れた。
- ルーブリックによって生徒に主体性が生まれた。
- ▲課題設定が少し弱かった。もう少し早い段階で単元の意味づけ (必要性) をしておくべきだった。
- ▲生徒が得意なことを自分の強みにしたいと思えるような展開にできなかった。

●ワークシートや実施要項等

ループリック

「自分のよさ（得意）を見つけよう」の単元での ICE モデルループリック

つきたい力	I (ideas)	C (connections)	E (extensions)
1. 活用・表現力	1-I 特技を発表するための適切な方法を知ることができる。	1-C プレゼン技術や友人からのアドバイスを自らのプレゼンに生かすことができる。	1-E 特技を最大限に発揮するための方法を選択し、効果的なプレゼンをすることができる。
2. 自他の尊重	2-I 自他の特技を知ることができる。	2-C 自他のよさ・改善点を見つけることができる。	2-E 友人から言われた改善すべき点を受け入れ、よりよいものを作ることができる。
3. チャレンジ精神	3-I やったことがなくても興味を持つことができる。	3-C 他者から新しい刺激（アイデア）を得ることができる。	3-E 自ら新しく挑戦することを見出し、提案できる。

計画表（一部抜粋）

2. 予定を立てよう（計画表の作成）

4/25（火）	①	生徒がここに計画を書き込む。
	②	
5/2（火）	①	
	②	
5/9（火）	①	
	②	
5/16（火）	①	
	②	
5/30（火）	①	
	②	
6/6（火） （予備）	①	
	②	
6/13（火） （予備）	①	
	②	

※一樹祭・・・6/16（金）・6/17（土）

（２）【事業報告】夢チャレ（高２、課外活動）①

文責 上山晋平

- 1 学年・教科等 5 年 総合的な学習の時間「夢チャレ」
- 2 日時 2017 年（平成 29 年）4 月～2018 年（平成 30 年）3 月
- 3 担当者、招聘講師等 上山晋平（教育研究部）ほか 5 学年所属教員
- 4 対象生徒等 生徒 178 名（5 学年生徒）
- 5 本校 ESD の観点 ■国際課題解決プロジェクト ■地域課題解決プロジェクト ■在り方生き方探究プロジェクト

6 テーマ設定の背景・経緯・目的等

5 学年が行っている「夢チャレ」とは、生徒それぞれが自分の夢を叶えるために（学校の枠組みを超えた活動に挑戦し、その体験や学びを報告し合うことで、今後大きく変化する時代（AI 時代）に必要とされる「学力+α」の力（資質・能力）を高め合うことを目的として行う活動である。「学力+α」の力とは、次を想定している（高大接続改革答申と次期学習指導要領より）。①知識・技能+②能力（思考力・判断力・表現力等）+③資質（学びに向かう力、人間性〔主体性・多様性・協働性等〕）

7 内容の具体・展開の流れ

（１）4 年次 3 学期

- プログラムの準備（プログラム内容、レポートの体裁の検討）
- 学校長による講話（変化の激しい社会に必要な資質・能力の育成について）

（２）5 年次 5 月

- 「夢チャレ」ガイダンス（なぜこのような活動が必要なのか）
- 「参加プログラム希望アンケート」 ●名称募集
- 「夢チャレ」の取組のポイント

- ①全員がこの 1 年間でいずれかのプログラムに参加する（進路に関係するものや強い動機があるもの）。
- ②以下のプログラム以外でも、自分が参加したいものへの参加は可能（むしろ強く奨励、自分で申し込む）。
- ③活動「終了後一月以内」にレポートを担当に提出する。（可能なら「夢チャレ」にも記録。入試で活用可。）
- ④学期に 1 回ずつ、それぞれが外で学んだことを学年集会等で発表して全体で学びを共有する。

（３）各自が必要な申込等を行い（学校が行うものもある）、プログラムに参加する。

（４）各自がレポートを担当に提出する（プログラム終了一月以内）。

（５）各学期で、夢チャレ成果発表会を行う（1 組 5～10 分程度で学びについてプレゼンする）。



8 生徒の評価（感想等）

- それぞれの活動で、いろいろ学べることもあるんだなと思いました。自分はすでに物理チャレンジの活動をしてきましたが、自分の視野を広げるために他の活動もしてみたいと思います。いろいろ探してみます。
- 外国では、異文化を学び、いろいろな体験を「夢チャレ」でできることがわかったので、海外修学旅行では実際に自分自身で異文化について学んでいきたいと思った。市立大学との高大連携事業やSYDの活動は、何をやるものなのか分かっていなかったから、今回の体験談を聞いてどのようなことをどのような目的で行っているのか理解することができた。また、これからの夢チャレの体験をしっかりと人に発信できるくらい自分から積極的に話を聞いたり活動したりしていきたい。
- 今まで外国に行ったり、ボランティアに参加したりすることはめんどくさくてやりたくないと思っていたが、今回いろんな人の体験談を聞いて、積極的にやってみようかなと思えました。

9 成果と課題

【成果】①学校設定の「資質・能力」の平均は全て向上（合計で伸びた人は 138 名／178 名中で 73.8%）している（詳細は別ページ参照）。

②活動履歴と学びの蓄積（レポート）がある程度できている。

③学びの発表会（プレゼン）が効果的に実施できている。

④夢チャレにより「身についた資質・能力」（生徒自由記述より）：チャレンジ精神、自他の尊重、注意力、奉仕、忍耐力、創造性（工夫）、社会の変化、視野の拡大、言葉遣い、表現力、積極性、導く力、思考力、協働性 等

【課題】①未体験者が 10 月末現在で 8 名いる（2 学期中に全員実施目標）。

②活動履歴や学びのデジタル化を進める。

③全活動での資質・能力の意識化が必要である。

(1)「夢チャレ」実施状況

プログラム	関連情報	1	2	計
⑬上記以外	●プログラム外(サマースクール13、看護体験9、寺子屋4、ローズボランティア4、神原病院4、歴史フォーラム4、ブレインアタックセミナー3、未来100人委員会、保育所、スターバックス、大学薬学部での講義、翻訳、昼制作講座、JICA、農業体験)	32	19	51
⑬コ・メディカル研修	●夏季休業期間中 ●福山市民病院 ●医療系の看護・医学科以外(臨床検査、リハビリ、放射線、言語聴覚士、医科栄養) *Dr 体験や看護体験を含む。	27	7	34
⑧ふれあいランドボランティア	●(保幼小希望者向け)夏祭り、サイエンススクール、ふれあいキャンプ等のボランティア ●学生ボランティア(小学校の自然体験活動のスタッフ)	19	8	27
①海外語学研修	●オーストラリア研修 ●マウイ研修 ●セブ島研修 ●中期留学	19	6	25
⑪SYD 関係プログラム	●文科省所管の社会教育団体 ●フィリピン・福島・広島・小豆島でのボランティア	11	12	23
⑨福山市立大学との高大連携事業	●ゼミの学生との研修会(まちづくりゲームとGIS) 8月 まちづくりワークショップ(駅周辺の再生策を高大で提案) ●11月 市立大学祭で発表	17	5	22
④福山バラ祭り	●福山バラ祭り(5月)のボランティア活動(ローズボランティア)	13	2	15
③高校模擬国連(教育模擬国連含む)	●国際理解のための模擬国連活動(研究・国際問題の理解又解決策の探究) ●全国高校教育模擬国連大会 8月7日(月)8日(火)&東京の大学OS2泊3日	8	5	13
⑫アジア少年少女国際交流事業 in 福山	●福山青年会議所主催行事 ●アジアと日本のこどもたちのコミュニケーションサポート(熱意があれば誰でも可)	10	2	12
②市高校生議会	●40人の高校生議員が7委員会に分かれ質問・提案を行い、市長・教育長から答弁	6	3	9
⑭マレーシア高校生との協議・提案	●5学年・海外修学旅行でマレーシアの高校を訪れ、マレーシアで問題になっている煙害について現地の高校生と英語でプレゼンやディスカッションを行う。	4	2	6
⑥広島県高等学校科学オリンピック	●理数系分野の知識と技能を競い合う「科学の甲子園全国大会」の県予選 ●物理・化学・生物・地学・数学・情報の筆記や実験、総合競技で知識と技能を競う	5	0	5
⑩教育ネットワーク中国の大学講座	●高校生が大学の高度な教育・研究に触れ、高校と大学の円滑な接続に資する(目的) ●福山市立大学・福山大学 ●単位認定が可能なケースもある	4	0	4
⑤広島大学GSC(グローバルサイエンスキャンパス)	●広島大学と連携して継続的に課題研究(年間継続) 2ヶ月に1回程度大学で講義、1年間かけて自由研究をして発表	3	0	3
⑱参加していない	●まだ参加していない。	7	1	8
合計		182	72	254

(2)「夢チャレ」前後の「資質・能力」の変化(成果と課題) *生徒アンケートによる

	①情報分析・整理力		②活用・表現力		③課題発見・解決力		④協働		⑤自他の尊重		⑥チャレンジ精神	
	5月	10月	5月	10月	5月	10月	5月	10月	5月	10月	5月	10月
平均値	2.1	2.5	2.1	2.4	1.9	2.3	2.3	2.6	2.1	2.5	2.0	2.4
中央値	2	3	2	2	2	2	2	3	2	2	2	2
最大値	4	5	5	5	4	5	5	5	5	5	5	5
伸びた人	80	42.8%	62	33.2%	63	33.7%	58	31.0%	61	32.6%	65	34.8%

【成果】

- ①資質・能力の平均は全て向上(合計で伸びた人は138名/178名中で73.8%)
- ②活動履歴と学びの蓄積(レポート)
- ③学びの発表会(プレゼン)
- ④身についた資質・能力(自由記述より):チャレンジ精神、自他の尊重、注意力、奉仕、忍耐力、創造性(工夫)、社会の変化、視野の拡大、言葉遣い、表現力、積極性、導く力、思考力、協働性 等

【課題】

- ①未体験者8名(10月現在、2学期中に全員実施目標)
- ②活動履歴や学びのデジタル化 ③全活動での資質・能力の意識化

①コ・メディカル研修

118

(3)【事業報告】夢チャレ(高2、課外活動)②

文責 教育研究部 5 学年

- 1 学年・教科等 5 年 総合的な学習の時間「夢チャレ」
- 2 日時 2019 年(平成 31 年) 4 月～2020 年(令和 2 年) 3 月
- 3 担当者 5 学年所属教員
- 4 対象生徒等 生徒 198 名(5 学年生徒)
- 5 本校 ESD の観点 ■国際課題解決プロジェクト ■地域課題解決プロジェクト ■在り方生き方探究プロジェクト

6 テーマ設定の背景・経緯・目的等

5 学年が行っている「夢チャレ」とは、生徒それぞれが自分の夢を叶えるために(学校の枠組みを超えた活動に挑戦し、その体験や学びを報告し合うことで、今後大きく変化する時代(AI 時代)に必要とされる「学力+α」の力(資質・能力)を高め合うことを目的として行う活動である。「学力+α」の力とは、次を想定している(高大接続改革答申と次期学習指導要領より)。**①知識・技能+②能力(思考力・判断力・表現力等)+③資質(学びに向かう力、人間性〔主体性・多様性・協働性等〕)**

7 内容の具体・展開の流れ

(1) 4 年次 3 学期

- 第 1 回「夢チャレ」ガイダンス(なぜこのような活動が必要なのか)

(2) 5 年次 4 月

- 第 2 回「夢チャレ」ガイダンス(昨年度の活動プログラムの紹介)
- 「参加プログラム希望アンケート」
- 「夢チャレ」の取組のポイント

- ①全員がこの 1 年間でいずれかのプログラムに参加する(進路に関係するものや強い動機があるもの)。
- ②紹介したプログラムには学校から案内したものと、先輩が個人で開拓したものの両方がある。案内されるもの以外でも、自分が参加したいものへの参加は可能(むしろ強く奨励、自分で申し込む)。
- ③活動をレポートにして記録を残す。(入試にも活用できる。)

(3) 各自が必要な申込等を行い(学校が行うものもある)、プログラムに参加する。

(4) 各自がレポートを担任に提出する(プログラム終了一月以内)。

(5) 学年で夢チャレ成果発表会を行う(1 組 5～10 分程度で学びについてプレゼンする)。

- 2 学期後半～3 学期にかけて 25 の活動の成果発表(学年全体へのプレゼンテーション)を実施。

8 生徒の評価(感想等)

- 誰かのために行動することは、自分のためになることがよくわかった。「情けは人のためならず」という、人のためにしたことが巡りめぐって自分のためになるということわざがあるが、本当にそうだと思う。私たちはボランティアをしに行った立場なのに、逆にたくさんのものをもらった。自分にできることに限りがあることは変えることができない。今できる精一杯のことをしようと思った。
- 今回の体験で責任感・空間把握能力・協調性について学んだ。これから大人になるに向かって持っておかなければならない力を少し身に着けることができたのではないかと考えている。それとともに、日々私たちのことを気にかけてくださっている両親や学校の先生方の大変さやありがたさを、身にしみて感じる事ができた。
- 同級生の発表を聞いて、みんながこの 1 年間国内外でいろんなところに行って交流して、夢につながる活動をしている中で、自分は何をしたのだろうと情けなくなった。

9 成果と課題

【成果】①学校設定の「資質・能力」の平均は全て向上(合計で伸びた人は 100 名/193 名中で 52%)している(詳細は別ページ参照)。②活動履歴の蓄積(レポート)がある程度できている。③学びの発表会(プレゼン)が効果的に実施できている。④夢チャレにより「身についた資質・能力」(生徒自由記述より): チャレンジ精神、自他の尊重、注意力、奉仕、忍耐力、創造性(工夫)、社会の変化、視野の拡大、言葉遣い、表現力、積極性、導く力、思考力、協働性 等

【課題】①学びの蓄積の質の向上が不十分 ②成果発表会の時期 ③活動履歴や学びのデジタル化

- ④全活動での資質・能力の意識化が必要



(1)「夢チャレ」実施状況

* 学期をまたぐ場合は活動が始まった学期でカウント

プログラム	関連情報	～1	2～	計
コ・メディカル研修	●夏季休業期間中 ●福山市民病院 ●医療系の看護・医学科以外(臨床検査、リハビリ、放射線、言語聴覚士、医科栄養) *Dr 体験や看護体験を含む	17		
地域医療体験	●公立みつぎ総合病院での医療体験	2		
ふれあい看護体験	●夏休みを中心として各自で病院と連絡をとり参加 看護体験	14		
保育所実習	●夏休み中に福山市内の保育所にて保育士の仕事を体験	12		
ふれあいランドボランティア	●(保幼小希望者向け)夏祭り、サイエンススクール、ふれあいキャンプ等のボランティア ●学生ボランティア(小学校の自然体験活動のスタッフ)		33	
海外語学研修	●オーストラリア研修 ●翔けジャパン ●カナダ短期留学	11		
SYD 関係プログラム	●文科省所管の社会教育団体 ●フィリピン・福島・広島・福山・小豆島でのボランティア・キャンプリーダー研修	12		
福山市立大学	●ゼミの学生との研修会 8月 ワークショップ ●11月市立大学祭で発表	13		
福山バラ祭り	●福山バラ祭り(5月)のボランティア活動(ローズボランティア)	11		
高校模擬国連 (教育模擬国連含む)	●国際理解のための模擬国連活動(研究・国際問題の理解又解決策の探究) ●全国高校教育模擬国連大会 8月&東京の大学 OS2泊3日	10		
災害福祉講座	●夏休み中に、福山平成大学で災害福祉講座を受講し、ゲームを通して災害福祉を学ぶ。	10		
アスペン古典セミナー	●日本アスペン研究所主催 ●特に哲学についての古典の文献を読み高校生が「対話」を通して学びを深める	3		
外国にルーツを持つ子どものための 日本語チャレンジ教室	●外国にルーツを持ち、日本語の理解や表現が苦手な小学生に対しての学習支援 ●夏休み&冬休み中	14		
福山市高校生議会	●24人の高校生議員が5委員会に分かれ質問・提案を行い、市長・教育長から答弁 ●本会議は10月	4		
マレーシアの大学生・高校生 との協議・提案	●5学年・海外修学旅行でマレーシアの大学・高校を訪れ、マレーシアで問題になっている多様性について現地の高校生と英語でプレゼンやディスカッションを行う ●「多様性」について		11	
広島県数学コンクール	●提示された数学の問題への解答を独創的な発想で競い合う ●県内のコンクールへの応募 ●講評会への参加	10	8	
教育ネットワーク中国	●高校生が大学の高度な教育・研究に触れ、高校と大学の円滑な接続に資する(目的)	6		
観光甲子園	●国内またはハワイの観光プランを提案	17	3	
岡山イノベーションコンテスト	●ビジネスアイデアを考案してプレゼンテーションを行う ●天保一プロジェクトを提案		3	
ビジネスコンテスト	●福山駅前再開発会議に参加	4	1	
その他	●イベント・大会ボランティア(尾道あかり祭り・広島県東部地区親善スポーツ大会・松永ゲタリンピック・演劇公演) ●スピーチコンテスト(英語・韓国語) ●未来の建築技術者育成イベント ●夏のリコチャレ 2019 ●尾道市民病院祭高校生医療体験プログラム ●高校生ドクター・メディカルスタッフ体験セミナー ●演劇ワークショップ ●歴史フォーラム	22	38	
合計		183	110	293

(2)「夢チャレ」前後の「資質・能力」の変化(成果と課題) * 生徒アンケートによる

	①情報分析・整理力		②活用・表現力		③課題発見・解決力		④協働		⑤自他の尊重		⑥チャレンジ精神	
	5月	2月	5月	2月	5月	2月	5月	2月	5月	2月	5月	2月
平均値	2.4	2.7	2.4	2.7	2.3	2.6	2.5	2.8	2.5	2.8	2.3	2.7
中央値	3	3	2	3	2	3	3	3	3	3	2	3
最大値	5	5	5	5	4	4	5	5	4	5	5	5
伸びた人	60	30%	55	28%	59	30%	56	28%	49	26%	61	31%

【成果】 ①資質・能力の平均は全て向上(合計で伸びた人は106名/198名中で53.5%)

②活動履歴と学びの蓄積(レポート)

③学びの発表会(プレゼン)

③身につけた資質・能力(自由記述より): チャレンジ精神、自他の尊重、注意力、奉仕、忍耐力、創造性(工夫)、視野の拡大、表現力、積極性、導く力、思考力、協働性 等

【課題】 ①学びの蓄積の質の向上 ②成果発表会の早期実施 ③記録のデジタル化 ④全活動での資質・能力の意識化

【(4)【事業報告】夢プロ(高2、総合的な探究の時間)① 【コロナ禍】】

文責 上山晋平

- 1 学年・教科等 5年 総合的な探究の時間「夢プロ」
- 2 日時 2020年(令和2年)4月～2021年(令和3年)3月
- 3 担当者 5学年教職員
- 4 対象生徒等 生徒187名(5学年生徒)
- 5 本校ESDの観点 ■国際課題解決プロジェクト ■地域課題解決プロジェクト ■在り方生き方探究プロジェクト

6 テーマ設定の背景・経緯・目的等

個々の夢や興味・関心に応じた地域や身の回り・社会の問題をテーマに調べて、課題解決策を考え、実行・検証する(探究型の)プロジェクト(PBL=Project-Based Learning)。

4年次にグループで行った探究プロセス(問題発見→課題設定→解決策→実行→振り返り)の経験を生かして、個人・または少人数でプロジェクトに取り組む。以下の3つを主な目的とする。

- ①「探究(課題解決)プロセス」を自分でまわせるようになる(課題設定→情報収集→解決策→実行→振り返り)。
- ②(課題解決を通して)AI時代に必要とされる「資質・能力」を身につける(特に課題解決力)。
「正解はない」「AIが仕事を奪う?」と言われる時代だからこそ、自ら課題を発見し解決する力を育む。
- ③(6学年年の)課題研究につなげる。
5学年の「夢プロ」の取組をまとめて、6学年で2000字の課題研究論文に仕上げる。
(別の課題に取り組むことも可能。)

*以上①～③を通して、④「社会の進歩に貢献する」。(未解決の問題を解決し他者・地域・社会に貢献する)

7 内容の具体・展開の流れ 【コロナ禍により当初の予定と大幅変更】

(1) 4月:「夢プロ」ガイダンス(ガイダンス冊子を用いて、「夢プロ」の条件・ポイント・やり方等の確認)

- ①「1人、もしくは少人数」で探究を行う。(4学年では「グループ」探究)
- ②(解決策の)実行・実施(アクション)を伴うものとする。
- ③発表はクラス発表に加え学年発表も行うことで、良い事例とモチベーションの共有を行う。
- ④6年次の「課題研究」につなげる。
- ⑤各自で課題を設定する。(4学年では企業から取り組むべき課題を頂戴していた。)

*新型コロナウイルスによる臨時休業に入ったため、基本的に生徒は各自で、「問題把握」、「課題設定」、「情報収集・問題点の整理」、「課題解決策立案」までを自宅で行うことになる。

*休業中の生徒にスタディサプリのアンケート機能で「取り組むSDGs」「設定した課題」を調査する。

(2) 6月(休業明け):「探究お助けシート」を配付し、課題設定がまだの生徒を支援する。

「課題設定シート」を提出(担当でチェック)「進捗状況の発表」(スケッチブック)

(3) 7月:探究モデル講演(企業の課題解決の事例)①中島基晴様(中島商店社長) ②大野圭司様(株式会社ジブノオト社長)

(4) 7月:「タスク管理表」により、夏休みに行くことを細かく計画する。

「探究実行希望用紙」提出(アンケートや校外活動を行う人が提出する)

(5) 8月:各自で探究を進める(実践・結果のまとめ・解決策の再検討を含む)

(6) 10月:探究発表資料作成 *タイトル、所属、SDGs、目的、問題点、課題解決に向けた実行・提案、今後の課題、参考文献

(7) 11月:探究発表(SDGs別に分かれて発表)

(8) 12月:探究振り返りシート記入

(9) 1月:「学年代表者」発表会

8 生徒の評価(感想等)

●5年の「夢プロ」では、個人の活動がメインだった。4年の「グローバル事業」ではグループで活動し、グループで発表という流れだったが、今年は一人だけですべてをやった。責任感や不安が多くあったが、自分のペースで、かつ、確実に取り組めたと思う。自分の「人任せ」なところが短所として分かりやすく現れたが、それを克服することができたと思う。

9 成果と課題

- 幅広い情報収集（校内アンケート等）を実施、動画等の作成物を作成、発表資料等を PC 作成、
 - △ 課題設定時に専門家と相談できていない、実行（実践）面が難しい（コロナ禍により特に）、開始の遅れ
- 【学年代表者発表会の様子】



【SDGs とリンクした探究課題（生徒作成）の例】

SDGsとリンクした探究課題(高2)①		
SDGs	人	探究課題の例(実行)
1貧困	3	貧困問題をなくすために高校生ができることは(他校とのプログラム参加)
2飢餓	16	どうしたらスーパーの食品ロスをなくせるか(企業連携)
3福祉	21	外国人にやさしい接客サービスするには(英語パンフ作成)
4教育	37	勉強の質を上げる筆記用具(鉛筆)とは(各種鉛筆で実験)戦争・平和教育をどうすべきか(小学校で平和学習授業実施)「やさしい日本語」を知ってもらうには?(日本語ボランティア)SDGsを自分事として捉えてもらうには?(SDGsカード活用)
5ジェンダー	3	1000人の人たちがより良い生活を送るために(アンケート)青いノイローゼを減らすには?(施設体験、ポスター作成)
6水と衛生	2	発展途上国の生活を良くするためにできることは?(カンボジアで実際に井戸掘り)
7エネルギー	2	電力消費削減のためにできることは(身近な解決策案)
8経済成長・雇用	22	持続的な観光客誘致のためにできることは(馬場、格山、三浦で調査し魅力を動画作成、観光モデル)
9産業と技術革新	5	スマホを落としたときに画面が下にならないためには(落下の計算、実験)

SDGsとリンクした探究課題(高2)②		
SDGs	人	探究課題の例
10不平等	9	SNSでの誹謗中傷をなくすには(防止を呼びかける動画作成)本日に必要な枚数とは(アンケート調査、生徒会・教員連携)
11まちづくり	32	人々がほしがれる日常でも使える防災グッズとは(調査・制作)子どもの交流、遊び場を作るには(小学校でレク実施)若年層に福山の郷土料理「うみ」を伝えるには(取材、動画)
12つくる責任、つかう責任	11	食品ロスを減らすためには(フードバンクでインタビュー)ビニール袋を使わず生活するには(紙袋での消費量実験)
13気候変動	2	換気と空調で効率的な省エネを実現するには(換気による気候変化や風通しを調査)
14海の豊かさ	3	海洋資源を活用する地元の活性化には(企業調査、イベント)
15陸の豊かさ	7	生物が減少した近くの川の水質は(水質調査→綺麗を提案)動物糞尿を減らすには(現状調査、ボランティア団体活動)
16平和と公正	8	いじめ問題を減らすには(調査)著作権は正しく伝わっているか(アンケート、予想外の現状)
17 パートナリシップ	0	なし

【生徒作成発表資料と発表用 PPT の一例】

(生徒探究) 平和教育を改善したい!

戦争・平和に関する教育を改善するためにできることは何?!

生徒作成ポスター(小学生対象)

小学生 平和教室 参加者募集!

みんなで考えてみるよ!

平和教室の目的

平和教室の意義

平和教室の活動

平和教室の成果

平和教室の感想

平和教室の未来

(生徒探究) 子どもたちの遊び場をふやしたい!

子ども達の遊び場を増やすためには

遊び場の現状

遊び場の課題

遊び場の改善

遊び場の未来

遊び場の感想

遊び場の未来

(5)【事業報告】夢プロ（高2、総合的な探究の時間）②

文責 上山晋平

- 1 学年・教科等 5年 総合的な探究の時間「夢プロ」
- 2 日時 2023年（令和5年）4月～2024年（令和6年）3月
- 3 担当者 5学年教職員
- 4 対象生徒等 生徒192名（5学年生徒）
- 5 本校ESDの観点 ■国際課題解決プロジェクト ■地域課題解決プロジェクト ■在り方生き方探究プロジェクト
- 6 テーマ設定の背景・経緯・目的等

個々の夢や興味・関心に応じた地域や身の回り・社会の問題をテーマに調べて、課題解決策を考え、実行・検証する（探究型の）プロジェクト（PBL=Project-Based Learning）。

4年次にグループで行った探究プロセス（問題発見→課題設定→解決策→実行→振り返り）の経験を生かして、個人・または少人数でプロジェクトに取り組む。以下の3つを主な目的とする。

- ①「探究（課題解決）プロセス」を自分でまわせるようになる（課題設定→情報収集→解決策→実行→振り返り）。
- ②（課題解決を通して）AI時代に必要とされる「資質・能力」を身につける（特に課題発見・解決力）。
「正解はない」「AIが仕事を奪う？」と言われる時代だからこそ、自ら課題を発見し解決する力を育む。
- ③（6学年年の）課題研究につなげる。
5学年の「夢プロ」の取組をまとめて、6学年で3000字の課題研究論文に仕上げる。

*以上①～③を通して、④「社会の進歩に貢献する」。（未解決の問題を解決し他者・地域・社会に貢献する）

7 内容の具体・展開の流れ

- (1) 4月：「夢プロ」ガイダンス（ガイダンス冊子を用いて、「夢プロ」の条件・ポイント・やり方等の確認）

- ①「1人、もしくは少人数」で探究を行う。（4学年では「グループ」探究）
- ②探究テーマ（分野）は、自分の「在り方生き方」に沿ったものとする（進路、興味・関心、適性等）
- ③探究課題は、以下の3つを踏まえて各自で設定する（4年次は、企業から課題を頂戴した）
 - ・「自分がこだわりたい問い」でかつ、「期限内に取り組める問い」にする。
 - ・「興味・関心」があり、「社会的な課題（SDGs）」であり、できるだけ「希望進路」と重なるものに。
- ④「情報収集」と「参考文献」は、次の2つの条件を満たすこと。
 - ・一次情報（オリジナルの情報源。日記、インタビュー、政府文書等）
 - ・二次情報（一次資料を基に解釈がなされた情報源。論文、書籍、新聞や雑誌）
- ⑤調べ学習だけでなく、（課題解決策の）「提案」と「（解決策の）実行・検証」までを行う。
- ⑥発表は3度以上行う。（中間発表、クラス発表、グループ別発表）＋学年代表者発表会
- ⑦夢プロの目標の一つは、生徒が「自走」できるようになること。
先生の役割：進捗確認、安全確認、一緒に悩む、外部連携の補助等
- ⑧成果が出たら、外部の大会に積極的に参加する。（自ら申し込めるコンテストは多数ある）

- (2) 6月：進捗状況のクラス中間発表（1人1分）

- (3) 9月：クラス発表（1人2分）

- (4) 11月：グループ別発表（1人3～5分）

- (5) 1月：学年代表者発表（1人3～4分）

8 生徒の評価（学年代表者発表会の感想等）

- どの人も、基本的に身近なところから課題を出していたところがいいと思った。身近な話題にすることで、解決策を実行しやすくなると思うので、参考にしたい。
- 環境問題は大きく変えることはすぐには難しいけど、ゴミを増やさないようにしたり洗剤を使いすぎないようにしたりなど身近なことから取り組んでいる。一人一人がこの世の中を変えたいと思って少しずつ取り組めば「チリ積」になり良くなっていくと思う。
- 身近なことに注目を寄せることが意外とSDGs達成の鍵を握っているのかもしれない。日々、当たり前疑問を持つべきだと思う。

- SDGs に関係ないようなことにも考え方によって、結果 SDGs に繋がると思ったので、身の回りのことから SDGs にどう繋がるかを考えることが第1歩だと思った。
- これからも SDGs に自ら積極的にとりこんでいきたい。今日学んだ内容から実行内容の改善などこれからに繋げていくことが必要だと思った。

9 成果と課題

- タブレットを使って情報収集、まとめなどはうまく進む生徒が多い。
- △ 課題解決策の実行（実践）ができていない生徒がいる。次を見据えて春休みに進めるよう促す。

【学年代表者発表会の様子】



【学年代表者発表資料（A4・1枚）】

水の注ぎ方を言語化するには？

福山市立福山中・高等学校

1. 関連SDGs・ターゲット

SDG 6 (水・衛生)
ターゲット6.2
2030年までに、安全な水と衛生の普及を達成し、水質改善を推進し、資源を有効に活用する。

2. 探究の目的・理由

「水」をテーマとして、調査、レポートを書く。
一見簡単、しかし、どのようにして調べたのか、調査方法が重要になる。
自分たちの力で解決策を見つける。

3. 現状分析・問題点

現状、問題点を洗い出し、解決策を提案する。
「水」の注ぎ方を言語化することの重要性を伝える。
「水」の注ぎ方を言語化することの重要性を伝える。
「水」の注ぎ方を言語化することの重要性を伝える。

4. 課題解決に向けた実行・提案

「水」の注ぎ方を言語化することの重要性を伝える。
「水」の注ぎ方を言語化することの重要性を伝える。
「水」の注ぎ方を言語化することの重要性を伝える。
「水」の注ぎ方を言語化することの重要性を伝える。

5. 今後の課題

「水」の注ぎ方を言語化することの重要性を伝える。
「水」の注ぎ方を言語化することの重要性を伝える。
「水」の注ぎ方を言語化することの重要性を伝える。
「水」の注ぎ方を言語化することの重要性を伝える。

食品ロスを減らすために

1. 関連SDGs・ターゲット

SDG 12 (つくる責任と消費)
ターゲット12.3
2030年までに、食品廃棄物の削減を達成し、資源を有効に活用する。

2. 探究の目的・理由

「食品ロス」をテーマとして、調査、レポートを書く。
一見簡単、しかし、どのようにして調べたのか、調査方法が重要になる。
自分たちの力で解決策を見つける。

3. 現状分析・問題点

現状、問題点を洗い出し、解決策を提案する。
「食品ロス」の注ぎ方を言語化することの重要性を伝える。
「食品ロス」の注ぎ方を言語化することの重要性を伝える。
「食品ロス」の注ぎ方を言語化することの重要性を伝える。

4. 課題解決に向けた実行・提案

「食品ロス」の注ぎ方を言語化することの重要性を伝える。
「食品ロス」の注ぎ方を言語化することの重要性を伝える。
「食品ロス」の注ぎ方を言語化することの重要性を伝える。
「食品ロス」の注ぎ方を言語化することの重要性を伝える。

5. 今後の課題

「食品ロス」の注ぎ方を言語化することの重要性を伝える。
「食品ロス」の注ぎ方を言語化することの重要性を伝える。
「食品ロス」の注ぎ方を言語化することの重要性を伝える。
「食品ロス」の注ぎ方を言語化することの重要性を伝える。

(5)【事業報告】(SDGsの観点を取り入れた)課題研究①(高3、総合学習)

文責 上山晋平

- 1 学年・教科等 6年 総合的な学習の時間「(SDGsの観点を取り入れた)課題研究」
2 日時 平成30年4月～平成30年9月
3 担当者、招聘講師等 上山晋平・西田知佳(教育研究部) 6学年所属教員
4 対象生徒等 生徒176名(6学年生徒)
5 本校ESDの観点 ■国際課題解決プロジェクト ■地域課題解決プロジェクト ■在り方生き方探究プロジェクト

6 テーマ設定の背景・経緯・目的等

自己の進路に関連する分野における問題点を調査し、その中から自分が取り組む課題を設定して、調査・研究・発表(グループ別・学年全体)をして、他者の課題解決に貢献する。その際、本校の研究課題である「SDGs」に関連させる。またできれば5年次に行った「夢チャレ」の活動に関連させることも推奨する。

〈課題研究を通して特に身につけたい力〉 (「福山中・高で育てたい6つの資質・能力」より)

能力	✓	①情報整理力	✓	②表現力	✓	③課題解決力
資質		④協働		⑤自他の尊重	✓	⑥チャレンジ精神

7 内容の具体・展開の流れ

- (1) ガイダンス・希望グループ調査(4/11): 課題研究とSDGsについての理解
- (2) 文献研究・まとめ(4/25、5/2): 「研究課題設定シート」に基づいた情報収集・整理等
- (3) レポート(2000字)作成(5/23、5/30): できるだけパソコンで作成(書式あり)
- (4) レジューメ作成・発表練習(6/6): 各自のグループ発表に備えてレジューメやパワポの作成
- (5) グループ別発表(2時間)(6/20): 1人3～5分間
- (6) 学年代表者発表(9/5): グループ代表者(各クラス1名以上)が200名の前で発表(1人5～8分)

8 生徒の評価(感想等)

- SDGsのことを考えていくうちに自分たちの仕事とつながっていき、これからの将来に向けて自分のことを考えるという良い機会にすることができたと思う。これからの社会は今までとは大きく変わっていくと思うので、自分の知識だけではなく、思考力や判断力をさらに向上させる努力をこれからする必要があることが分かった。
- 実際に第一線で活躍する人への聞き込みなどをしていて調べ方が具体的で、細かいことまで調べていました。発表もSDGsに関連させたり、今後の社会に向けて活かし方があったりするなど、すごく詳しくかったです。私は身近な問題を考えて、それも間違いではないけれど、世界規模に変えていける力の探究が必要だと思いました。
- Aくんの話す順番がとてもよかった。大きな問題から小さな身近な問題へ話や考えをうまく転換し、聞き手は身の回りのことで想像しやすく、実行に移しやすい。他の人の発表でも、自分に問題を転換させて、一人一人が考えることがおきな問題の解決につながると改めて思った。一人一人興味のあることや分野があって、発表を聴いただけで自分の世界が少し広がった気がする。私も興味のあることを全力でやって人生を駆け抜けた。
- (学年主任講評) 今回の発表会をもって、高校入学以来行ってきた「総合的な学習の時間」での課題解決・探究活動は、一区切りついたことになります。節目の時を迎え、非常に感慨深いものがあります。私たちが取り組んできたこの活動は、学校内での学びを学校外・卒業後につながり意義深いものでした。

自らの進路希望の実現に向けて受験生として過ごす時だからこそ、自分の勉強が、目前の入試を突破するためだけのもの、点数を効率よく得るためだけのものと捉えてしまいがちです。そうした気持ちを全面的に否定するつもりはありませんが、それだけのものでは決してないのです。私たちの学びは、未来に向けてのものです。自らの生き方を考え、社会の中で自分に何が出来るのか、その遠くの目標を見いだし、見据えるためのものです。この発表会で、自分の目線を修正し、また遠くを見つめて前に進むことが出来ると思います。そんな貴重な機会を産み出してくれた皆さん、ありがとうございました。お疲れ様でした。また、頑張りましょう。

9 成果と課題

- 【成果】①短期実践だったが(約2ヶ月)、発表者全員がSDGsを取り入れて意識できた。②著者に会いに行つてインターシップをして行動して情報を取り、課題解決につなげた人もいる。③ガイダンス資料が充実した。
- 【課題】①「課題(問い)」の立て方が難しい。学年では共通できていない。②調べ学習で終わらせないため、「アクションを入れる」という条件設定が良いかもしれない。③レジューメがある方が伝達量は増える。

■生徒作成発表用 PPT スライド

① 「アウトサイダーアート」をどう広げるか 山口 隆典 (2020) 会場：宮内庁資料館展示室 2020年 山形県立美術館	② 「アウトサイダー・アート」の具体例  山口 隆典 美術評論家 2017年 山形県立美術館	③ ■研究方法 「本を個人」・「精神の美」 「アウトサイダー」で生きていく ① 東京で有名な美術館に足を運ぶ ② インターネットにアクセスする ③ インターネットにアクセスする 
④ Q. 横野正正って？ A. 日本唯一の アウトサイダー・ キュレーター 「アート・テラス」 「ケン・テラス」の主 宰 横野正正  「こんな人なんだよ人です。」	⑤ 1. アウトサイダー・アートとは？ ・「外」に作られた芸術 ・「外」の芸術家を指している ・「外」の芸術家を指している ・「外」の芸術家を指している	⑥ 2. 新しいアウトサイダー・アートの定義 ・「アート」は「外」の芸術 ・「アート」は「外」の芸術 ・「アート」は「外」の芸術 ・「アート」は「外」の芸術 
⑦ 3. 美術の世界に入っていくまでの経緯 ① ギャラリーでの買い物が難しい ② カテゴリーの先入観 ③ 横野と美術は「本と画」 三作者が「本と画」であった場合 	⑧ ・「外」の芸術 「外」の芸術 「外」の芸術 「外」の芸術 一人の人生の歩みと生き方を表現している	⑨ 4. ケン・テラスでインターン 「ケン・テラス」でインターン 「ケン・テラス」でインターン 「ケン・テラス」でインターン 「ケン・テラス」でインターン
⑩ ・今回の作品 「本と画」(2020年) 	⑪ 5. 課題解決に向けて 1. 美術家紹介する機会を増やす 2. アウトサイダー・アート作品の 購入機会を増やす 3. メディアを通じて情報を伝える  	⑫ 6. 今後の課題について 1. アウトサイダー・アートという 先入観をなくすためには？ 2. アウトサイダー・アートを保護する 場所や人材を増やすには？ 
⑬ 参考文献 ・ 横野正正 (2020) 「本と画」 (2020年) ・ 横野正正 (2020) 「本と画」 (2020年) ・ 横野正正 (2020) 「本と画」 (2020年) ・ 横野正正 (2020) 「本と画」 (2020年)		

■ 6 学年 課題研究 テーマ・関連 SDGs 一覧表 (平成 30 年度)

6 学年 課題研究 テーマ・関連 SDGs 一覧表 (平成 30 年度)

No.	分野	課題研究テーマ	関連 SDGs	対応目標
1	文系	自己言で感動したものに感動する	3	目標
		自分言で感動したものに感動する	4	目標
		自分言で感動したものに感動する	7	目標
		自分言で感動したものに感動する	8	目標
		自分言で感動したものに感動する	9	目標
2	文系	自分言で感動したものに感動する	10	目標
		自分言で感動したものに感動する	11	目標
		自分言で感動したものに感動する	12	目標
		自分言で感動したものに感動する	13	目標
		自分言で感動したものに感動する	14	目標
3	文系	自分言で感動したものに感動する	15	目標
		自分言で感動したものに感動する	16	目標
		自分言で感動したものに感動する	17	目標
		自分言で感動したものに感動する	18	目標
		自分言で感動したものに感動する	19	目標
4	文系	自分言で感動したものに感動する	20	目標
		自分言で感動したものに感動する	21	目標
		自分言で感動したものに感動する	22	目標
		自分言で感動したものに感動する	23	目標
		自分言で感動したものに感動する	24	目標

No.	分野	課題研究テーマ	関連 SDGs	対応目標
1	文系	自己言で感動したものに感動する	3	目標
		自己言で感動したものに感動する	4	目標
		自己言で感動したものに感動する	7	目標
		自己言で感動したものに感動する	8	目標
		自己言で感動したものに感動する	9	目標
2	文系	自己言で感動したものに感動する	10	目標
		自己言で感動したものに感動する	11	目標
		自己言で感動したものに感動する	12	目標
		自己言で感動したものに感動する	13	目標
		自己言で感動したものに感動する	14	目標
3	文系	自己言で感動したものに感動する	15	目標
		自己言で感動したものに感動する	16	目標
		自己言で感動したものに感動する	17	目標
		自己言で感動したものに感動する	18	目標
		自己言で感動したものに感動する	19	目標
4	文系	自己言で感動したものに感動する	20	目標
		自己言で感動したものに感動する	21	目標
		自己言で感動したものに感動する	22	目標
		自己言で感動したものに感動する	23	目標
		自己言で感動したものに感動する	24	目標

(6)【事業報告】 (学部系統・SDGs 別) 課題研究② (高3、探究)

文責 上山晋平

- 1 学年・教科等 6 年 総合的な探究の時間「(SDGs の観点を取り入れた) 課題研究」
 2 日時 令和3年4月～令和3年7月
 3 担当者、招聘講師等 上山晋平・西田知佳 (教育研究部) 6 学年所属教員
 4 対象生徒等 生徒 176 名 (6 学年生徒)
 5 本校 ESD の観点 ■国際課題解決プロジェクト ■地域課題解決プロジェクト ■在り方生き方探究プロジェクト
 6 テーマ設定の背景・経緯・目的等

自己の「進路」に関連する、「興味・関心」のある分野で問題になっている点をいくつか出して、その中から自分が解決するためにすべきこと (課題) を設定し、調査・研究 (実践)・発表 (グループ別・学年全体) をすることで、「他者の課題解決」に貢献する。(その際、「SDGs」や「夢プロ」にできるだけ関連させること。)<課題研究を通して特に身につけたい力> (「福山中・高で育てたい6つの資質・能力」より)

①情報整理力	必要なデータや情報を収集・分析・整理・研究手法を身に付ける。
②表現力	まとめた内容を「分かりやすく」、「役立つように」まとめ、発表する。
③課題解決力	課題を発見して、最適解により近い解決策を提案する。
④チャレンジ精神	高い志を持ち、課題解決のために新しいことや困難なことに自ら挑戦する。
⑤キャリア能力★	自分の進路や進路で課題になっていることを自分で語れるようになる。 (「なぜこの進路を希望するのか」、「自分は何に興味を持って探究してきたのか」について (他者に) 自分の言葉で表現する必要性が増している (進学時の面接、自己表現作文等)。今回の課題研究の取組をその一助とする。

7 内容の具体・展開の流れ

- (1) ガイダンス (5 年 3 月): 課題研究ガイダンスを前年度末に実施 (6 年は短期間のため)
 (2) ガイダンス・グループ確定 (4/21): 希望グループアンケートはスタディサプリで実施
 (3) 論文調べ (Google Scholar)・実践・発表資料 (A4・1 枚) (6/16 まで): 期限厳守
 (4) 発表用 PPT 作成 (6/30 日まで)
 (5) グループ別発表 (2 時間) (7/14): 1 人 3～5 分間
 (6) 学年代表者発表 (7/21): グループ代表者 (各クラス 1 名以上) が文理に分かれて発表 (1 人 5～8 分)
 (7) 論文作成 (7 月末まで): 取組を 3000 字以上のミニ論文の形にまとめる (PC)

8 生徒の評価 (感想等)

- 5 年生の時は、課題を見つけること自体が大変で、実行もあまりうまくいかなかった。しかし、6 年生になって、進路もはっきり決まってきた中での課題発見・情報収集・解決策の提案はとても楽しく、満足のいくことばかりだった。探究するとはこのことだというのがやっと分かった気がした。

9 成果と課題

【成果】①進路に寄った探究にすることで夢に近づく機会となっている。②論文検索で深みが出た。③論文を書くことで大学の学びに近づけることができた。④論文検索・執筆とスキルの向上が見られた。
 【課題】①短期間 (1 学期)。②期末テスト時期と重なり受験生には大変。③コロナ禍での活動制限。

学部	%	探究課題の例
人文	5	図書館を利用した地域活性化のために何ができるか?
人科		著作権の理解度、認知度を上げるにはどうすればよいか/効果的な音声伝達の条件とは
教育	13	父親の育児参加による子への影響は / 芸術を通して障がいを持つ人の能力を引き出すために
法学	5	若年層の投票率が低下しているのはなぜか
経済	16	福山市に若者が訪れるにはどうしたらいいか? / キャッシュレス決済をどう広げていくか
社会	4	火星で安全に生活できるのか?
国際	1	災害時に、自治体や施設は在日外国人にどんな対応を / 日本の多文化共生教育を進めるには
理学	3	スマホを落とした際に画面が下になることを防ぐにはどうしたらよいか
工学	14	サステナブルなシューズとは / 循環型社会におけるエコな建築とは。
獣医	5	動物の殺処分がゼロになるためにどのようなことができるか
薬学	2	どうすれば子供の薬嫌いが改善されるのか / マスクの種類と飛沫の関係とは?
芸術	4	こころの病はアートでサポートできるのか / 学校ブログを使いやすくするためには

■生徒作成発表用 PPT スライド

学部別発表会（全員PPT作成） 例

総合的な探究の時間 在日外国人に対する災害支援



総合的な探究の時間
在日外国人に対する災害支援

内容・理由と探究方法



内容・理由と探究方法

内容・理由と探究方法

内容・理由と探究方法

50Gsとの関連

50Gsとの関連

現在の問題点

現在の問題点

アンケート方法・内容について

アンケート方法・内容について

アンケート調査結果



アンケート調査結果

アンケート調査結果



アンケート調査結果

アンケート結果から

アンケート結果から

実行内容(2回目)

実行内容(2回目)

合同避難訓練

合同避難訓練

終わりに

終わりに

■発表資料（A4・1枚）

「発表資料」(A4・1枚) 詳細

例① 著作権の理解度、認知度アップには？

例② 災害時に外国人への対応は？

著作権の理解度、認知度アップには？



著作権の理解度、認知度アップには？

災害時に外国人への対応は？



災害時に外国人への対応は？

著作権の理解度、認知度アップには？

著作権の理解度、認知度アップには？

災害時に外国人への対応は？

災害時に外国人への対応は？

(7)【事業報告】 (学部系統・SDGs 別) 課題研究③ (高3、探究)

文責 上山晋平

- 1 学年・教科等 6 年 総合的な探究の時間「(SDGs の観点を取り入れた) 課題研究」
 2 日時 令和 6 年 4 月～令和 3 年 7 月
 3 担当者、招聘講師等 上山晋平・赤澤尋樹 (教育研究部) 6 学年所属教員
 4 対象生徒等 生徒 194 名 (6 学年生徒)
 5 本校 ESD の観点 ■国際課題解決プロジェクト ■地域課題解決プロジェクト ■在り方生き方探究プロジェクト
 6 テーマ設定の背景・経緯・目的等

自己の「進路」に関連する、「興味・関心」のある分野で問題になっている点をいくつか出して、その中から自分が解決するためにすべきこと (課題) を設定し、調査・研究 (実践)・発表 (グループ別・学年全体) をすることで、「他者の課題解決」に貢献する。(その際、「SDGs」や「夢プロ」にできるだけ関連させること。)

〈課題研究を通して特に身につけたい力〉 (「福山中・高で育てたい 6 つの資質・能力」より)

*ちなみにエージェンシーを発揮するにはこの 6 つすべてが重要と考えています。

①探究心 (地域や社会に働きかけ、本質を探ろうとする)	✓	④コミュニケーション力 (互いの思い・考えを大切にしつつ協働する)	
②創造力 (新たな解決方法や価値を創造する)	✓	⑤協働 (多様性を認め合って協働する)	
③思考力 (広くて多角的な見方で見て考え、判断する)	✓	⑥チャレンジ精神 (困難に負けずに粘り強く挑戦する)	✓

7 内容の具体・展開の流れ

- (1) 5 年 2 月 ガイダンス①: 課題研究ガイダンスを前年度末に実施 (6 年は短期間のため)
 (2) 6 年 4 月 ガイダンス②・グループ確定
 (3) 5 月 1 日 発表準備 (5 つに取り組む)
 (4) 5 月 29 日 発表資料提出
 (5) 6 月 7 日 スライド提出締切
 (6) 6 月・7 月 グループ別発表 1・2
 (7) 7 月 3 日 論文提出
 (8) 7 月 10 日 学年発表 (大講義室)
 (9) 7 月 24 日 課題研究振り返り

8 生徒の評価 (感想等)

- 4、5 年の探究よりも自分の意思でアンケートやポスターなどの実行をすることが出来た。
- 6 年の探究活動が 1 番自分自身の学びが多かった。6 年では 5 年よりもさらに深く探究できたと思うし、きちんとした実行ができたのが 6 年の探究で、とても達成感があるから。課題設定を変えた時に 2 年間でやってきた情報収集や考察する力を活用してスムーズに進めていくことができたから。
- スライドや論文も気合いを入れて作ることができた。自分の将来に 1 番関係があり、1 番積極的にできたから。論文を書いたことがなかったので、自分で一から知りたいことについて探究して、論文にまとめるという大きな活動をしたことがなかったから。
- 自分の住んでいる地域に関わる探究課題で他人事ではなく自分事として考えることができた。自分が住んでいるから身近に感じることができ、楽しい活動ができた。
- 自分の将来について考え、その夢へより近づけるようにたくさんアイデアを出し、前よりもずっと関心が深まったから。
- 完全に自分の力で進められたし、やりたいこと、知りたいことをきちんとつき止めたから。自分の進路に関連した探究をしたので、三年間の中で最も意味のあることをしている感じがしたから。
- 今回の 3000 字の論文を書くことで、今までの集大成として行なってきたことや、今回多くあった学びをまとめることができたから。初めて 1 人で取り組んだ探究活動であったし、3000 文字の論文を書くためにはその分いろいろなことを調べたりまとめたりしないとイケなくて、大変だったけど、深い学びになったから。自分の将来が関係していて、興味のある内容であったから。

9 成果と課題

【成果】 4、5 年次に比べて、自分の意思や力で取り組めた生徒が増えた。これまでの集大成となった。

【課題】 期間が短いため、できることが限られている。5 年次の夢プロと内容を変えた生徒は大変そうだった。

■代表者発表のタイトル

【社科】国際交流に興味を持つ子供を増やすには、どうすればよいか

【芸術】 脳と心へ伝える届け方とは

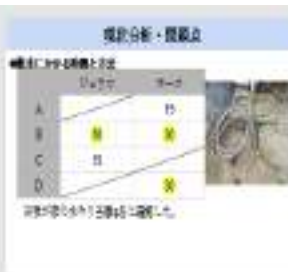
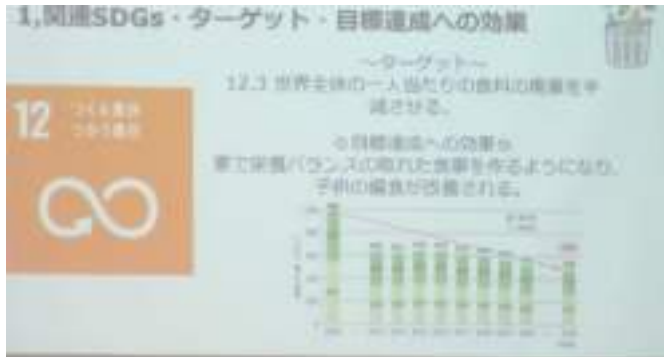
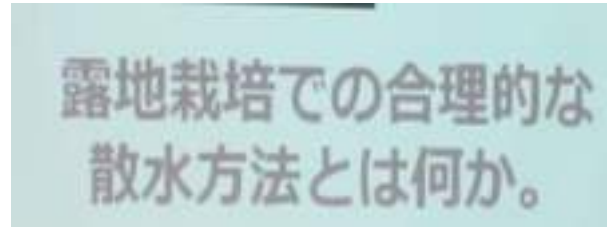
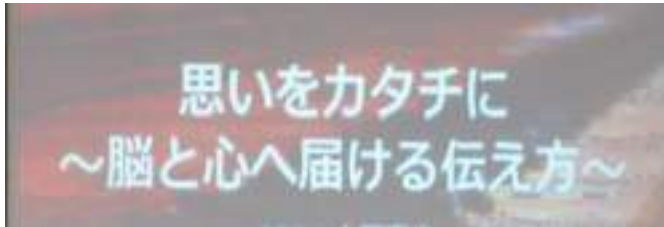
【総科】読み聞かせは子供にどのような効果があるのか

【人文・家政】 子供の偏食を減らすには

【医療】 どうしたら地域医療を改善できるか

【工学】 住みやすく、住み続けられる家を作るには

【環境・農】露地栽培での合理的な散水方法とは何か



(8)【事業報告】 個別最適な学び実証研究1年目(全学年総合)

文責 矢幡 愛

- 1 学年・教科等 中学全学年
- 2 日時 2020年(令和2年)4月～2022年(令和4年)3月予定 *2年間の実証事業
- 3 担当者 全学年教員
- 4 対象生徒等 1年生120名、2年生118名、3年生119名
- 5 本校ESDの観点 ☐国際課題解決プロジェクト ☒地域課題解決プロジェクト ☒在り方生き方探究プロジェクト
- 6 テーマ設定の背景・経緯・目的等

本事業の目的は、「こべたん」(「広島県個別最適な学び実証研究」の略)の仮説を検証し、自立した学習者を育成する優良モデルを構築することである。こべたんの仮説は、「多様な選択肢を提供することにより、一人一人が最適な学びをチョイス(=自己決定)できるようになる。それにより、できる喜び・学ぶ楽しさを知り、自己肯定感が向上し、主体的に学び続ける」というものである。全学年の総合的な学習の時間とこべたんを関連させ、生徒一人一人の個別最適な学びを実現させていく。

7 内容の具体・展開の流れ

【カリキュラムの進め方】

- ・基本的には、今までの総合のカリキュラムは白紙にし、総合を進めながら作成していく。
- ・チームこべたん(広島県教育委員会の方、アドバイザー等)からの提案
コアメンバーでざっくりしたカリキュラムの流れは作るが、基本的には生徒の声を聞きながら、他の先生方も巻きこんで、一緒に動きながら作っていくイメージで進める。5月のオリエンテーションで、生徒自身の福山中での学びの目標やゴール等の見える化を行う。1学期の間は、これから何をしていくか生徒とじっくり考える期間でも良いのではないかと提案を示していただいた。

【教員やチームこべたんの宿題(ミッション)】

- ・目的と2年後のゴールの言語化を行った。また、2年後のゴールは、教員の姿(こうなっていたい)と生徒の姿(こうなっていて欲しい)を共有した。
- 1. 学校としての目的、2年後のゴール(教員の姿と生徒の姿)を整理する。
- 2. そのために何をしていきたいか(ToDo)を整理する。

【実践内容】

- ・4・5月の休業中においては、オンライン授業・SHRの検討もチームこべたんと一緒にすすめた。
4/17、4/25 こべたん実証研究×福山中オンラインミーティング
また、EdTechとこべたんの動きの関連についても検討された。
- ・6月の授業再開後は、各学年の総合の導入では、アドバイザーとのオンライン授業を始め、探究とは何かについて考えた。以下は実施授業の大まかな内容である(全学年共通)。2学期以降は、1学期の企画書をもとに各自のタスク(すること)を実行した。外部機関と連携が必要な際も、生徒自身がアポを行った。

【1学期】	【2学期】
イントロダクション	2学期以降の目的等の共有
企画書作成、立ち位置確認・企画書深掘り	タスク実行(外部連携等)・ふりかえり
タスクを書き出そう	中間発表(2・3年生)、AiGrow測定
AiGrow(気質診断)測定他	2学期のふりかえり
特別セッション(特別講師を招聘・オンライン)	【3学期】
スケジュールに落とし込もう	タスク実行・ふりかえり
1学期のふりかえり	最終発表(2・3年生発表、1年生見学)
<夏休み>InspireHigh動画視聴 探究学習会(希望者)	1年間のふりかえり、AiGrow測定 来年度にむけて

【生徒のアンケートより】

- Q. これまでの「総合的な学習の時間」と比べて、「MY探究」を通じて「学ぶことは面白い」と感じるようになりましたか? *「そう思う」「少しそう思う」と答えた生徒の理由
- ・決められたテーマではなく、自分から主体的に学ぶことができるから。
 - ・自分の究めたいことを自分なりに調べることができたから。
 - ・今までは自分一人で物事を行うことが少なかったから、一人でやるからこそその難しさと楽しさを味わうことができたから。
 - ・自分の疑問ややりたいことを深めることができるから。
- *「あまりそう思わない」と答えた生徒の理由
- ・「MY探究」であり、「学ぶことが面白い」と感じたわけではないから。

- 資料チームこべたんと職員とのオンラインミーティングの資料（チームこべたん作成による）

こべたんプロジェクトの見通し（イメージ）

2020.7.3

区分	R3年度				R4年度	R5年度
	1学期	夏休み	2学期	3学期		
教員	R3年度の準備 【1学期・2学期】 企画書・基本文 作成・準備		できる 所から 実行		3月までに【こべたんプロ ジェクト実行・実行進捗 （1学期）を把握する （2学期）にシフト	継続 （強化）
			各学年の学びを教員間で共有し （できる）ところから			目途 （強化）
教員研修・対話（必要に応じて随時）						
児童	AR/VR等を用いて 評価基準を把握・ 定着させる ※各学年がプロジェクトを学ぶ		プロジェクト実行開始 AR/VR活用 学習とコミュニケーション 技術習得も実施		継続 （強化）	目途 （強化）
媒体 関係	DVD・1人1端末10台設置等		整備済み			
			Google Classroom活用			
			1人1台端末活用（活用計画あり）			
			委員会による学びの能力プロジェクト			

※令和2年度はチャレンジウィーク、令和3年度は標準年制を考慮した期間も盛り込む予定（他と区別できるように実施）

EduTech（Educate+Technology）を推進した学びのイメージ

■ 福山市全体の動向（2020.7.3現在）

区分	内 容	1学期	2学期	3学期	令和3年度
教員導入（計11）	① Classroom：授業配信・受け取り ② Forms：アンケート作成・結果分析 ③ Google sheet：表を共有・資料作成 ④ Mail：1人1台端末活用・メール活用 ⑤ Web：授業動画		計11人導入		全学年導入
児童と先生（計1,000）	Guided Educationソフトを活用した学習の推進 （1人1台）※2学期よりイメージが定着する予定あり			計1,000人導入（2学期）	全学年導入

■ 福山市こべたんの動き
～オンラインを活用したハイブリッド型の学び（授業と1人1台にゆだねる学び・通信教育の活用）～

区分	内 容	1学期	2学期	3学期	令和3年度
スタディ	家庭学習、インターネット活用 （1人1台活用）		導入		
ロイコノート （1人1台活用）	各学年1人1台、授業配信・受け取り、資料の共有 （1人1台）※2学期より活用・受け取り	1人1台導入	計1,000人導入		全学年導入
Integrate High （1人1台活用）	ネット授業等 （通信教育の活用）		全学年（1学期）導入（1人1台）		全学年導入（2学期）
AR/VR	家庭学習推進等（1人1台活用）※2学期より活用	導入	計1,000人導入	計1,000人導入	全学年導入
Zoom	オンラインでの授業、資料の共有等		導入		全学年導入
Canva	授業配信・受け取り、資料の共有・共有 （1人1台活用）※2学期より活用・共有	1人1台導入	全学年導入（2学期）		全学年導入

■生徒の様子



アドバイザーのオンライン授業



中間発表のようす



お菓子の製作・販売



音楽の楽しさを伝える



野菜作り



学校を美しくする（ドアの色塗り）



福山市内のホテルと商品開発



AiGrow 診断 (BYOD)



探究の交流

(8)【事業報告】 個別最適な学び実証研究2年目（全学年総合）

文責 矢幡 愛

- 1 学年・教科等 中学全学年
- 2 日時 2020 年（令和 2 年）4 月～2022 年（令和 4 年）3 月 ＊2 年間の実証事業
- 3 担当者 全学年教員
- 4 対象生徒等 今年度 1 年生 120 名、2 年生 120 名、3 年生 118 名
- 5 本校 ESD の観点 □国際課題解決プロジェクト ■地域課題解決プロジェクト ■在り方生き方探究プロジェクト
- 6 テーマ設定の背景・経緯・目的等

本事業の目的は、「こべたん」（「広島県個別最適な学び実証研究」の略）の仮説を検証し、自立した学習者を育成する優良モデルを構築することである。こべたんの仮説は、「多様な選択肢を提供することにより、一人一人が最適な学びをチョイス（＝自己決定）できるようになる。それにより、できる喜び・学ぶ楽しさを知り、自己肯定感が向上し、主体的に学び続ける」というものである。全学年の総合的な学習の時間とこべたんを関連させ、生徒一人一人の個別最適な学びを実現させていく。今年度は事業の2年目にあたり、アドバイザーの意見を取り入れつつ、My 探究を自走する1年であった。

7 内容の具体・展開の流れ

【カリキュラムの進め方】

- ・基本的な進め方は1年目と同じである。
- ・各学年1名がチームこべたん（広島県教育委員会の方、アドバイザー等）と話し合いながら進める。
- ・グーグルクラスルームにアドバイザーからの資料や意見が投稿され、教員はそれを参考にする。
- ・今年もゼミ制を続け、ゼミの目的に共感した生徒はメンバーに入る。教員はヒントを投げかける等で基本的には生徒が課題設定を行う。
- ・生徒自らもゼミを立ち上げ、メンバー募集を行った。

【実践内容】

【1学期】	【2学期】
イントロダクション、新しいゼミの紹介	2 学期以降の目的等の共有
企画書作成、企画書深掘り	タスク実行（外部連携等）・ふりかえり
タスクを書き出そう	AiGrow 測定
AiGrow（気質診断）測定他	2 学期のふりかえり
タスク実行	【3 学期】
1 学期のふりかえり	タスク実行・ふりかえり
夏休み タスクの実行 自分のテーマに合った地域・企業につながる	共有会（1～3 年生合同・テーマ別） 1 年間のふりかえり・来年度にむけて

【学校評価アンケートより】

アンケート項目	肯定的評価（9 月）	肯定的評価（1 月）
1. あなたは、総合的な学習の時間に主体的に取り組んでいる。	92%	87%
2. あなたは、総合的な学習の時間や教科の学びによって、自分自身の考えを表現する力がのびた。	88%	85%
3. あなたは、総合的な学習の時間や教科の学びの中で、自分の課題や問題を見つけて取り組む姿勢が身についた。	88%	88%

・アンケートの結果を見ると、1 と 2 について評価が下がっている。これは途中で My 探究のテーマを変更し、まだタスクを考えている生徒も多く実行に移せていないことも影響しているのではないかと分析した。3 を見ると同じであるため、総合だけでなく教科においても、深く考える姿勢が身に付いてきていると考える。

○グローバルゼミ

○サンクレアゼミ○生徒が立ち上げたゼミ

Ⅳ 他校との実践交流

(1)【事業報告】名古屋国際中学校との実践交流①

文責 石川玲弥

- 1 学年・教科等 (中学) 2・3年生、(高校) 5年生 夏休み
2 日時 2017年(平成29年)8月2日(火) 14:00~16:00
3 担当者、招聘講師等 矢幡愛 高山奈緒子 松枝美貴子 石川玲弥(以上中学) 高橋俊光 上山晋平(高校)
4 対象生徒等 2~3年生(17名) 5年生(4名) 名古屋国際中学校2年生(7名)
5 本校ESDの観点 ■国際課題解決プロジェクト ■地域課題解決プロジェクト □在り方生き方探究プロジェクト

6 テーマ設定の背景・経緯・目的等

今回のサステナブルスクール同士の交流会は、名古屋国際中学からの提案により行うことになった。本校での目的は、交流を通して本校の活動の幅を広げることである。他校の取組を知り、活発に意見を交換することで、本校の活動の改善点や新たな活動の糸口を見つけることができるのではないかと考えた。そのために、1学年次に総合的な学習の時間で行った「誰もが暮らしやすい福山の街づくり」と、3学年次に行った「国際調べ」の内容をまとめ直し、発表した。5学年はマレーシアやシンガポールで問題になっている「煙害(ヘイズ)」と日本の関わりについて調べ、発表をした。2学年、3学年、5学年の発表を行うことで、総合的な学習の時間が、自分たちの地域のことを知り、解決策を考える学習から、世界の現状を知り解決に導くための学習へとつながっているのだということを生徒にも意識させることができたと思う。交流会の準備・運営を中学生が中心に行うことで、マネジメント能力の向上も図った。

7 内容の具体・展開の流れ

- (1) 14:00~14:05 開会のセレモニー
(2) 14:05~14:25 学校紹介(福山中学校→名古屋国際中学校)
(3) 14:25~14:30 質疑応答
(4) 14:30~14:50 5年生のプレゼン
(5) 14:50~14:55 質疑応答
(6) 14:55~15:10 2年生のプレゼン
(7) 15:10~15:20 3年生のプレゼン
(8) 15:20~15:30 3年生のプレゼン
(9) 15:30~15:35 質疑応答
(10) 15:35~15:45 名古屋国際中学校のプレゼン
(11) 15:45~15:55 自由交流(グループに分け、自由に交流を行う)
(12) 15:55~16:00 閉会のセレモニー 記念撮影 解散



8 生徒の評価(感想など)

- 名古屋国際中学校の生徒は、自分たちでしっかりと考え、調べた上で活動を行っていました。「主体的な活動」を自分たちも目指しているつもりでしたが、まだまだだと思いました。
- ユネスコ憲章を全て実践するという目標のもと、平和学習や環境保全の活動を行っていると聞き、素晴らしいと思いました。私たちも、学校全体で共通した目的を持ち、「〇〇までにこうしたいから、この活動をしよう」という風にしていかなければならないと思いました。これはサステナブルの活動以外にも、生かせることだと思いました。
- 違う学年の発表を見て、こんなことをしているんだと新鮮に思いました。特に、5年生の先輩の発表を見て高校になったらこんな発表をするんだと思って興味深かったです。自分たちの学習していることが、こんな風につながっていくんだなと思いました。

9 成果と課題

- 生徒が積極的に交流に臨んでいた。今回の活動が今後の活動につながっていくのではないと思う。
- 各学年ではそれぞれ素晴らしい取組をしながらも、それをお互いに知る機会があまりないと思った。中学生が高校生の活動内容を知ることが、自分たちの活動の意義を知ることにもつながる。もっと交流する場や共通した発表の場があっても良いと思った。
- 名古屋国際中学校の取組は、学校全体で共通した意識を持ち、明確な目標を持って行われていた。本校の取組は、まだ一部のもので終わっていると感じた。改善していく必要があると思う。

● 3 学年発表のシナリオ

タイトル	これから国際交流の発表を行います。私たちの学校はオーストラリアのダウンランズや韓国のポハンにある大東中学校と交流があります。
目的	国際交流を行う目的は2つあります。1つめは「グローバル社会に対応できる人材を育てる」ため、2つめは「英語やコミュニケーションで学んでいることを実践し身に付ける」ためです。
内容	国際交流は、中高合同で行っているものと、高等学校で行っているものがあります。
集合写真	これは、オーストラリアのダウンランズから交流に来てくれた写真です。ダウンランズの皆さんは、2年に1度福山中学校に来てくれます。
自己紹介	ダウンランズの皆さんが自己紹介をしている写真です。ダウンランズの方には、各クラスに分かれて入ってもらいます。
お弁当	クラスで一緒にお弁当を食べている写真です。みんな笑顔で楽しそうですね。
琴	ダウンランズの皆さんに琴を教えているところです。日本の伝統文化に触れてもらいました。ちなみに、琴は私たち福山の名産でもあります。
家庭研究	家庭研究部によるおもてなしも行われます。ここで家庭研究部の部長である坂上（さかうえ）さんにお話を聞いてみたいと思います。
縄跳び	授業だけでなく、スポーツなどのレクリエーションでも交流します。交流内容は生徒が中心になって考えます。当日の交流も生徒が運営します。 校内では、バディが一人一人についてサポートします。実際にバディを体験したボーグさんに話を聞いてみましょう。
ポハン集合	次は、ポハンの大東中学校との交流についてです。大東中学校からは毎年交流に来てくれます。今年は10月に本校からも交流しに行く予定です。
習字	大東中学校の皆さんに「習字」を体験してもらっているところです。福山中学校の生徒がひらがなやカタカナを教えています。大東中学校の生徒は「ハングル」を教えてくれるので、お互いに楽しみながら交流できます。
理科	これは理科の授業風景です。大東中学校の生徒も福山中学校の生徒も、答えが分かったのか、とても良い笑顔です。分かったときの嬉しさは世界共通ですね！
スポーツ	スポーツを通じた交流も行います。この時も、生徒が企画・運営を行います。実際に実行委員をしてくれた二人に話を聞いてみましょう。
身に付いている力	国際交流を通して身に付いている力は、相手の立場に立って考えたり理解しようとしたりする力や積極的にコミュニケーションをとろうとする力、学んだ英語や文化を活用し自分の思いを表現しようとする力です。
夢の実現	これらの力は、私たちのスローガンである「夢の実現」にもつながるものです。これからも、これらの力を伸ばしていきたいです。ご清聴ありがとうございました。

(2)【事業報告】名古屋国際中・高等学校との実践交流②

文責 新宮 正一

1 学年・教科等 希望者

2 日時 令和 元 年8月1日(木)

3 担当者 引率教員 新宮正一・森上智広

4 対象生徒等 本校演劇部希望者(中高) 15名

5 本校 ESD の観点 ☒国際課題解決プロジェクト ☐地域課題解決プロジェクト ☐在り方生き方探究プロジェクト

6 テーマ設定の背景・経緯・目的等

① 目的

本研修の目的は、以下の通りである。

同じユネスコスクールとして、以前より交流のある名古屋国際中学・高等学校の来校を受けて、両校の取組紹介やディスカッションを行うことで交流を深める。

② 経緯

3年前に名古屋国際中学・高等学校が本校に来校されて学校間交流を持って以来、交流が続いている。一昨年度には、名古屋国際中学・高等学校で行われた研究報告会にも本校職員が参加するなど、生徒・職員の間で積極的な交流が行われている。

7 内容の具体・展開の流れ

8月1日(木) 名古屋国際中学・高等学校 生徒5名来校(引率 黒宮祥男教諭)

- ① 自己紹介と学校紹介
- ② 本校生徒による「天寶一 Project」の紹介
- ③ 名古屋国際中学・高等学校生徒による取組の紹介
- ④ 生徒間交流(牡鹿中学校の実践事例を参考に)
- ⑤ 学校施設見学

8 生徒の評価(感想など)

- 初めは緊張したけど、慣れてきて色々な話ができてよかった。
- 何を話してよいかわからなかったけど、そのうちに少しずつ話ができるようになったのがよかった。
- 共同でSDGsの取組図を作成して、色々なことを考えていることに刺激を受けた。もっと色々なことにチャレンジしたいと思った。

9 成果と課題

【成果】普段、交流を持つことのない遠隔地の生徒と交流が持てたことは評価できる。またこちらの指示がなくても、生徒間で交流できていたのが大きな成果である。

【課題】

- ・一部だけの生徒の関りではなく、全体を巻き込む必要があるのではないか。
- ・夏季休業中だけでなく、日常的な交流が持てるとさらに関係が深まると考えられる。

●生徒の活動の様子



幾つかのチームに分かれての生徒間交流



生徒間交流後の発表



成果物

成果物と共に記念撮影

(3)【事業報告】WWL(ワールド・ワイド・ラーニング)① 1年目(令和2年度)

文責 上山晋平

- 1 学年・教科等 WWL
- 2 日時 2020年(令和2年)4月～2021年(令和3年)3月
- 3 担当者 上山晋平
- 4 対象生徒等 生徒10名(5学年生徒のうち希望者)
- 5 本校ESDの観点 ■国際課題解決プロジェクト □地域課題解決プロジェクト □在り方生き方探究プロジェクト

6 テーマ設定の背景・経緯・目的等

WWL事業とは、文科省の取組で、将来、世界で活躍できるイノベティブなグローバル人材を育成するために、高等学校等と国内外の大学、企業、国際機関等が協働し、テーマを通じた高校生会議の開催等、高校生へ高度な学びを提供する仕組みの形成を目指す取組がねらい。

期間は3年間で、広島大学附属高等学校を中心に、県内では福山誠之館高校、福山市立福山高校、広島市立舟入高校の3校、県外では、鹿児島県立甲南高校、大分県立上野丘高校、福岡県立小倉高校が参加する。

(特徴的なSSHやユネスコスクールと連携している)

7 内容の具体・展開の流れ 【コロナ禍により当初の予定と大幅変更】

- (1) 7月(ALネットワーク運営会議) *コロナ禍のため4月開始予定が、7月に延期となった。

【ア 広島大学 WWL 事業のポイント】

- ①課題研究を組織的に進める体制を構築する
- ②求められる資質・能力の育成を目指すカリキュラムを開発する
- ③地域を超えた課題研究のグループワークネットワークを構築する
- ④アドバンストプレイスメントを同運輸うする
- ⑤成果発表会(2020、2021年)と国際会議(2022年)を実施する

【イ 3年間のプログラム】

- ①1年目(2020):グループワークの試行、成果発表会
- ②2年目(2021):グループワークの充実、世界発表会
- ③3年目(2022):海外とも協働するグループワーク、国際会議 *予定

【ウ 広島大学との連携プログラム】

- ①広島大学の国費留学生と国際問題での協議・発表(10名) ②広島大学のオンライン授業受講(1名)
- (2) 生徒を募集する(各クラスに回り、募集要項とともに上山が生徒に呼びかけ、10名が参加を表明する)
- (3) 国費留学生との連携プログラム

*全て時間は、13:30～16:00に実施。使用言語は「英語」とする。テーマは、「環境」「平和」「教育」

- ①10月24日(土) 留学生が大学院での研究内容について英語でプレゼン、生徒と質疑応答、グループワーク
- ②11月7日(土) 同上
- ③11月14日(土) 生徒がグループ別にプレゼン
- ④12月19日(土) 同上
- ⑤1月9日(土) 広島大学で全体プレゼン(福山高校はオンライン参加)
- ⑥3月中 リーデンローズにて広大附属高校の校内発表会(連携校からの参加希望はナシ)

8 生徒の評価(感想等)

- 回を重ねるごとに自分からより積極的に発言できるようになり、プレゼンについてしっかりと深められるようになり、より楽しくなっている。この成長を最後の広島大学での発表に繋げ、最後気持ちよく終わることができるようしっかりと練習して集大成とする。指摘をもらった部分も改善してより良い発表にする。疑問に思ったことを自分の中で解決しようと思わずに、気楽に何でも質問すると、より盛り上がるのが分かり、怖がらずにバンバン質問しようと思った。(第4回感想より)

9 成果と課題

- 英語プレゼン・グループワークの経験、教員負担は大きくない(クラスルーム活用・引率も最小限)
- △ 連携校との連絡・やり取り・提出などが月に数回ある(英語科以外の担当者でも可能と思う)

英語を使って学校の生活と学びたい課題研究してみたい人 大募集！

この問題について

岡山県は今年から、国語の教科とハイレベル学習を創設しています（文部科学省「国語教育方針」）。この新単体の名称は WPT（ワイルドポイント）¹⁾ といって、ターボエンジンが燃へるのと同じ、燃え体は燃えと燃えて一線に見えるものです。それによって、これらの社会で必要とされる1冊の教科書に燃えと燃えて一線に見えることを目指すつもりです。

英語を聞いたら、「僕が全然聞きえない。英語圏の出身じゃない人！ 英語が何年習ったんだ？」
と聞いて、「特にオーストラリアです」。

乙 藤北枝

以下のように、江尾西内の学校と九州の各所の代官校で学び習います。(凡そ所からはゼンタイン参加)

①(和歌) 広大新築岡山、誠之館、彦京福山

[illegible]

（九折的优惠价）是见功的甲寅。人觉得一甲子，却因是乙未而

(広島大学) 広島大学総合科学部国際社会科学研究科の教育学系

● どの学校にもある「SH (Study)」は、その名の通り「学校」

③ 今年的中國大陸

スル一ツア一チ（四月一）日までの全5回、児童高良会

4. [Tutor 4](#)

《1》 京都大学大学院人間社会科学研究科の国際留学生会

は3歳、教育、平利についてダル・ノーザで議論する。活動は50歳で行う。

(2) 学校理屈で機軸をつくろ、P&Pの着置も可能。

(4) 第1回 10月24日(土) 13:30~16:00 中邑県立図書館1階特別室

一 比入附帯は20名、内定と選定の割合は4-3名（人数割加=1）。

[illegible]

一、大學生が「マニ」を好む理由。その理由として、調査結果は次の通りである。

一結果に、自ラニーブの遺囑内容を確認する。

(4) 第2回 11月7日(土) 13:30~18:40)

(5) 第3期 7月14日(土) 晴

(4) 第4圖 2010年11月 10日

11/9/11 (11/11)

1997

・留学生は、由かりやれ、財で英語プレゼンをしてくれ。また、男前にはお茶をくれるので、

揮毫筆を高く掲げて顔白ことがやまる。(安心)

16日、17日、18日の3日間、東京、神奈川、千葉、埼玉、茨城、栃木、群馬、山梨、長野、岐阜、愛知、三重、滋賀、京都、大阪、兵庫、奈良、和歌山、徳島、高松、香川、岡山、広島、山口、福岡、佐賀、大分、熊本、鹿儿岛、沖縄の各都府県を巡回し、計100回、約10万人の聴衆に演説した。

6. 2003

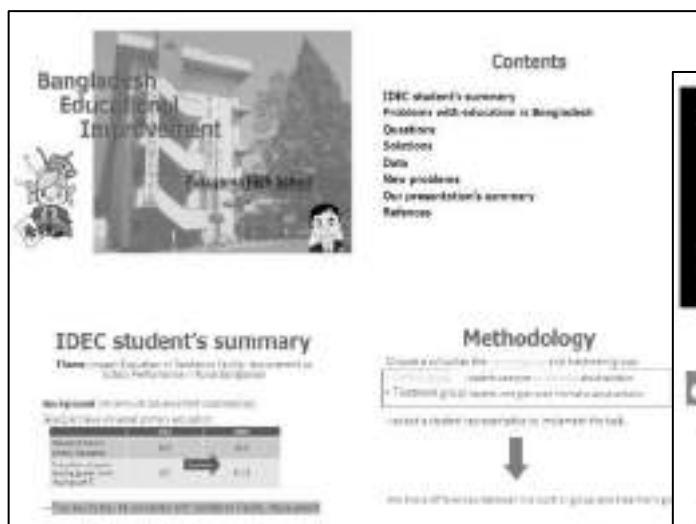
→ 御用の方を大は、この方々の支持を博ち得て御恩者と御恩者です。

「より詳しく話を聞きたい人、相談したい人は山本まで。19日曜日(金)まで」

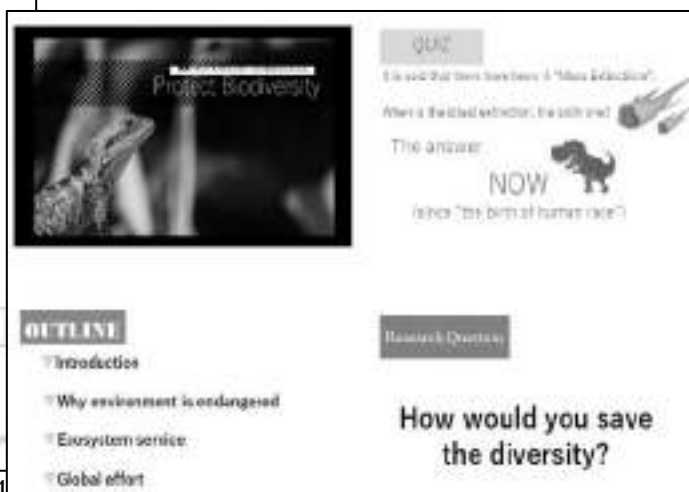
A photograph of four students in a classroom. They are all wearing white face masks and making peace signs with their hands. They are seated at wooden desks. In the foreground, a student on the left is wearing a dark sweater over a white collared shirt. Next to her is another student in a dark sweater. To the right, a student in a dark sweater and tie is also making a peace sign. In the background, a student in a dark sweater is visible. The classroom has a bulletin board with a map and other papers on the wall.



(教育于一ム)



(環境子一ム)



(4)【事業報告】WWL(ワールド・ワイド・ラーニング)② 2年目(令和3年度)

文責 中野誠也

- 1 学年・教科等 WWL(ワールド・ワイド・ラーニング)連携校としての取組
- 2 日時 2021年(令和3年)4月～2022年(令和4年)3月
- 3 担当者 中野誠也
- 4 対象生徒等 希望生徒8名(5学年生徒)
- 5 本校ESDの観点 ■国際課題解決プロジェクト □地域課題解決プロジェクト □生き方・在り方探究プロジェクト
- 6 テーマ設定の背景・経緯・目的等

WWL事業とは、文科省の取組で、将来、世界で活躍できるイノベティブなグローバル人材を育成するために、高等学校等と国内外の大学、企業、国際機関等が協働し、テーマを通じた高校生会議の開催等、高校生へ高度な学びを提供する仕組みの形成を目指す取組をねらいとしている。

期間は3年間で、広島大学附属高等学校を中心に、県内では福山誠之館高等学校、福山市立福山高等学校、広島市立舟入高等学校の3校、県外では、鹿児島県立甲南高等学校、大分県立上野丘高等学校、福岡県立小倉高等学校が参加している。(特徴的なSSHやユネスコハイスクールと連携している)

7 内容の具体・展開の流れ

- (1) 5月 AL(アドバンスト・ラーニング)ネットワーク運営会議への参加

【ア 広島大学 WWL 事業のポイント】

- ①課題研究を組織的に進める体制を構築する
- ②グローバルな社会課題の解決に向けた探究的な学びを実現するカリキュラムを開発する
- ③オンライン環境を駆使したカリキュラムを開発する
- ④大学等と連携し、大学教育の先取り履修をする
- ⑤成果発表会(2020年、2021年)と国際会議(2022年)を実施する

【イ 3年間のプログラム】

- ①1年目(2020年):グループワークの試行、成果発表会
- ②2年目(2021年)【今年度】:グループワークの充実、成果発表会
- ③3年目(2022年):海外留学・他校とのグループワーク 国際会議

【ウ 広島大学との連携プログラム】

- ①IDEC-IGSプログラム(広島大学の国費留学生と国際問題についての協議・発表)*本校生徒はこれに参加
- ②広島大学名講義100選の視聴及びオンラインディスカッション(平日の放課後を利用し大学教育を体験)

- (2) 6月 IDEC-IGSプログラムへの参加者募集

募集要項を掲示した上で、各クラスを回り、生徒に参加を呼びかけた(8名の生徒が参加表明)

- (3) 6月～ IDEC-IGSプログラムへ参加 *使用言語は「英語」。研究テーマは「環境」「教育」「平和」。

【1年間の流れ】

- ①6月19日(土):留学生が大学院での研究内容について英語でプレゼン、質疑応答・協議を行う
- ②7月17日(土):同上
- ③8月4・5日(水・木)(夏休み中):宿泊合宿 他校の生徒と研究課題の設定、協議・プレゼンを行う
- ④11月6日(土):研究課題について協議・プレゼンを行う、留学生も議論に加わり、助言する
- ⑤11月20日(土):同上
- ⑥12月18日(土):研究課題についての最終発表 @広島大学

- (4) 令和4年度 WWL(3年目)について *国際会議を予定

【ア 概要】

決められたテーマについて、「ある立場」になりきって、政府へ政策提言・要求を行うつもりで研究を行う。

各校1グループ（最大5名）が出場する。

【イ 年間の流れ（予定）】

①令和3年度3月中：参加生徒を募集する ②令和4年度4月・5月：各校で探究学習、発表準備を行う ③6月：国際会議プレ大会開催 ④7月30・31日（土・日）：準備・本番

8 生徒の評価（感想等）

- 留学生の方々の発表は自分にはない視点が多く、日本に住んでいる自分には知ることができなかった課題や、日本では問題視されてないが、他の国では問題視されていることについて知ることができた。（第1回感想）
- 前回と同様に、自分がこれまで着目したことのない視点から物事を見ることの重要性和面白さを学んだ。例えば、厳島神社では潮の満ち引きと鳥居について問題視されていることはよく知っていたが、その理由や対策について意識したことが全くなかったのもっと多くのことに興味を持つようにしたいと思った。（第2回感想）
- 広島大学の教授とオンラインで対話するという貴重な機会をいただけたことがよかったと感じた。今後の研究方法を見直すきっかけになった。（夏合宿感想）

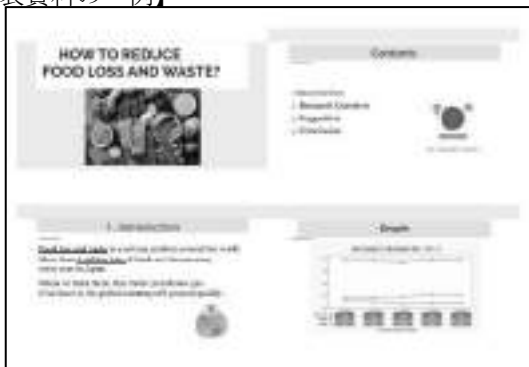
9 成果と課題

- コロナ禍において、留学生と生の英語で交流する機会を得られたこと。生徒たちは、学校生活ではなかなか味わうことのできない言葉の壁や、挫折感を感じることができたと思う。
- 他校の生徒たちと交流する機会を得られたこと。休憩時間に、他校の生徒と勉強方法などについて話をする様子が見られた。どの学校の生徒も、探究活動や日頃の学習に熱心に取り組んでいる生徒たちばかりなので、そのような生徒たちと交流することは、大きな刺激になったと思う。
- △自校の生徒をどのようにファシリテートするのかということ。グループ内に他校の生徒も所属していたということもあり、生徒に対して課題の進捗管理や助言を行わなかった。裏を返せば、生徒が主体的に研究を完成させたということにはなるが、彼らが1年間を通じて高いモチベーションを持っていたかという疑問が残る（締切間近に急造で資料を完成させたことも…。連携校の先生方に任せきりになるのではなく、定期的に生徒を集め、進捗状況を共有させるなどの必要があったと思う。

【夏合宿 発表準備の様子 @福山附属】



【発表資料の一例】



【最終発表を終えて集合写真 @広島大学】



【学習成果発表会の様子 @広島大学】



(5)【事業報告】WWL③ 5年目(令和5年度)

文責 中野誠也

- 1 学年・教科等 WWL (ワールド・ワイド・ラーニング) 連携校としての取組
- 2 日時 2024 年 (令和 5 年) 4 月～2025 年 (令和 6 年) 3 月
- 3 担当者 中野誠也
- 4 対象生徒等 希望生徒 6 名 (5 学年生徒)
- 5 本校 ESD の観点 ☒ 国際課題解決プロジェクト ☐ 地域課題解決プロジェクト ☐ 生き方・在り方探究プロジェクト
- 6 テーマ設定の背景・経緯・目的等

WWL 事業とは、文科省の取組で、将来、世界で活躍できるイノベティブなグローバル人材を育成するために、高等学校等と国内外の大学、企業、国際機関等が協働し、テーマを通じた高校生会議の開催等、高校生へ高度な学びを提供する仕組みの形成を目指す取組をねらいとしている。

期間は 3 年間で、広島大学付属高等学校を中心に、県内では福山誠之館高等学校、福山市立福山高等学校、広島市立舟入高等学校の 3 校、県外では、鹿児島県立甲南高等学校、大分県立上野丘高等学校、福岡県立小倉高等学校が参加している。(特徴的な SSH やユネスコハイスクールと連携している)

7 内容の具体・展開の流れ

- (1) 5 月 AL (アドバンスド・ラーニング) ネットワーク運営会議への参加

【ア 広島大学 WWL 事業のポイント】

- ①課題研究を組織的に進める体制を構築する
- ②グローバルな社会課題の解決に向けた探究的な学びを実現するカリキュラムを開発する
- ③オンライン環境を駆使したカリキュラムを開発する
- ④大学等と連携し、大学教育の先取り履修をする

【イ 広島大学との連携プログラム】

- ①IDEC-IGS プログラム (広島大学の国費留学生と国際問題についての協議・発表) *本校生徒はこれに参加
- ②広島大学名講義 100 選の視聴及びオンラインディスカッション (平日の放課後を利用し大学教育を体験)

- (2) 6 月 IDEC-IGS プログラムへの参加者募集

募集要項を掲示した上で、各クラスを回り、生徒に参加を呼びかけた (6 名の生徒が参加表明)

- (3) 6 月～ IDEC-IGS プログラムへ参加 *使用言語は「英語」。研究テーマは「環境」「教育」「平和」「交通」。

【1 年間の流れ】

- ① 6 月 15 日 (土): 留学生が大学院での研究内容について英語でプレゼン、質疑応答・協議を行う
- ② 7 月 13 日 (土): 同上
- ③ 8 月 3・4 日 (土・日) (夏休み中): 宿泊合宿 他校の生徒と研究課題の設定、協議・プレゼンを行う
- ④ 10 月 26 日 (土): 研究課題について協議・プレゼンを行う、留学生も議論に加わり、助言する
- ⑤ 11 月 16 日 (土): 同上
- ⑥ 12 月 15 日 (土): 研究課題についての最終発表 @広島大学
- ⑦ 3 月 14 日 (金): 広島大学付属高等学校の成果発表会、代表 3 グループがプレゼン (本校生徒 2 名参加)

【校内研修報告事項】

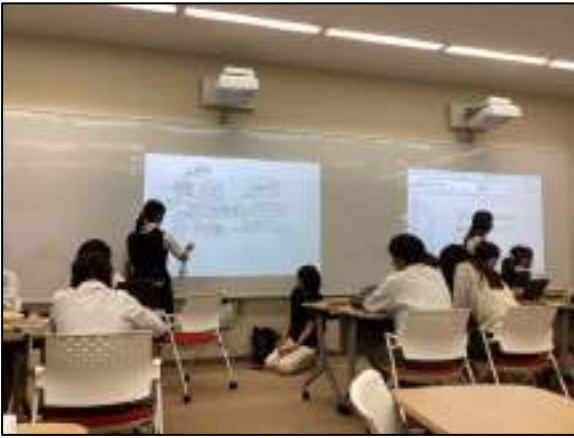
- (1) WWL について (文科省の事業)

- World Wide Learning (グローバル人材育成のため、高校の中では体験できない高度な学びを提供)
(他校の生徒と協働しながら、広島大学の留学生からアドバイスをもらいながら、英語を使って探究する。)
- 生徒の反応「他校の生徒や留学生と交流することで、視野が広がった!」「英語力の向上 or 焦りを感じた!」「大学で求められるレベルを知れた!」「自分一人では到達できないレベルまで、探究を深めることができた!」

- (2) 参加生徒のその後

- 参加生徒 24 名中 20 名が国公立大学へ進学 (京都 2、大阪 4、一橋 1、名古屋 1、神戸 1、岡山 3 など)
*英語の継続的な学習につながった? 推薦入試で国際性をアピールすることができた?

【夏合宿 発表準備の様子 @福山附属】



【最終発表 @広島大学】



【校内用研修資料の一部】

1. WWLとは

World Wide Learning(ワールドラーニング)の略称

将来世界で活躍できる**グローバル人材を育成**するために、高等学校と国内外の大学・企業・国際機関等が協働し、**高校生へ高度な学びを提供する仕組みの形成**をねらいとした、**文科省の事業**

2. WWLの活動内容

	5年 夢プロ	⇄	WWL
実施形態	個人で		他校の生徒と複数人で
ファシリテーター	教員		広島大学の留学生
使用言語	日本語		英語
探究テーマ	各自でテーマを設定		決められたテーマの中で取り組みたい課題を設定

3. 参加生徒の反応

- ・他校の生徒や留学生と交流することで、視野が広がった
- ・英語力の向上 or 焦りを感じた
- ・大学で求められるレベルを知ることができた
- ・自分一人では到達できないレベルまで、探究を深めることができた

4. 参加生徒のその後

参加生徒 24名中20名 が国公立大学へ進学
京都2 大阪4 一橋1 名古屋1 神戸1 岡山3 etc...



英語の継続的な学習に繋がった？
推薦入試で国際性をアピールすることができた？

（６）【事業報告】みろくの里日本語学校との交流事業（高１・２、令和３年度）

文責 藤田憲弘

- 1 学年・教科等 4・5年総合的な探究
- 2 日時 2021年（令和３年）４月～2022年（令和４年）３月
- 3 担当者 藤田憲弘 中原正人
- 4 対象生徒等 生徒 27名（４学年 16名・ICC 部員 11名）
- 5 本校 ESD の観点 ■地域課題解決プロジェクト
- 6 テーマ設定の背景・経緯・目的等

「国際交流」といえば、海外への研修や、海外からの生徒受入れがイメージされやすいが、コロナ禍でそれが不可能となってしまった。しかし、目を市内に向ければ、約1万人の外国人が暮らし、街角で自転車に乗っての移動やスーパーで働く姿を見かけることは多い。だが、生徒達には、それは風景として映っているだけで、彼ら彼女らとの接点は、ほぼない。同じ街で暮らす若者としてリアルな出会いを持つことで、日本で暮らす外国人のことや外国人を送り出す国、受け入れる国それぞれのお互いの国の背景や課題を考えさせることができればと願い、市内にある日本人学校に交流の声かけをした。それに対して、弥勒の里日本語学校が手を挙げてくださり、留学生 20 名と探究活動で日本語学校を選んだ生徒および ICC 部員との交流が始まった。双方とも初めての試みなので、担当者同士で綿密に連絡を取りながら、できることを探っていく。

弥勒の里日本語学校もコロナの影響で留学生の流入が止まっているが、6か国から来た留学生が寮生活をしながら、お弁当屋さんでのアルバイトと学校生活を行っている。国籍は、以下の通りである。
（パキスタン、バングラデシュ、ミャンマー、インドネシア、ベトナム、中国）

7 内容の具体・展開の流れ

（１）「出会い」

- 5月26日（４年生・ICC）
 - ・リモートで、お互いの自己紹介を行う。
 - ・留学生は、出身国ごとに国の紹介を行い、本校生徒は、それぞれの簡単な自己紹介を行う。
- 7月14日（４年生・ICC）
 - ・日本語学校の先生お二人をお招きし、日本の留学生事情や弥勒の里日本語学校の特色、日本語教師について、レクチャーを受ける。
- 7月16日（４年生・ICC・家庭研究部・中学３年生）
 - ・本校に留学生 20 名が来校し、対面での交流を行う。
 - ・それぞれの留学生にバディをつけ、校内ツアーや茶道体験を行う。
 - ・中学３年生全員ともグループに分けて、日本の遊びを通して交流する。
 - ・放課後、部活動紹介として、少林寺拳法部演武を観ていただく。



（２）「交流の深まり」

- 8月3日（４年生・ICC）
 - ・本校生徒が日本語学校を訪問し、第２回目の対面交流を行う。
 - ・日本語の授業に留学生と参加し、その後、グループ別にお互いの質問をぶつけ合って、全体で発表する。
- 10月27日（４年生・ICC）
 - ・大学出張講座において、多文化共生について研究されている吉田先生（フェリス女学院大学）をお招きし、日本における外国人をめぐる課題について、レクチャーを受ける。
- 11月5日（４年生・ICC・書道部・中学２年生）
 - ・本校文化週間に留学生 20 名が来校し、第３回目の対面交流を行う。
 - ・バディとの中庭コンサートに参加した後、書道部の指導で、書道体験を行う。
 - ・中学２年生全員ともグループに分けて、ゲームを通して交流する。
 - ・福山市立大学の上別府教授のゼミ生や、福山市の留学生を支援する会の方も参加し、連携を約束する。



（３）「まとめと更なる交流」



- 12月15日（4年生・ICC・家庭研究部）
 - ・4年生が行ってきた交流活動を通して探究した成果発表会に留学生を招き、発表を聴いていただき、意見交流を行う。
 - ・家庭研究部の指導の下で、バディと生け花体験を行う。
- 1月初旬（4年生・ICC）：留学生それぞれに年賀状を送る。
- 2月17日（4年生・ICC）
 - ・留学生の探究成果発表会にリモートで参加し、それぞれのグループの発表について、感想を送る。
- 3月4日：日本語学校の卒業式に、お祝いのポスターを送る。
- 3月5日：弥勒の里日本語学校の3月末閉校が新聞で報道される。



8 生徒の評価（感想等）

- 日本語学校について知ったこと
 - ・日本語を教えながら、日本のマナー、ルールなどの生活習慣の教育にも力を入れている。
 - ・先生方は、日本語力に加え、判断力、考える力を身につけて欲しいという思いで接している。
 - ・アジアを中心に、様々な国からそれぞれの夢を抱いて来ている。
- 私たちのあり方について考えたこと
 - ・ステレオタイプの固定概念にとらわれない。
 - ・まずは、相手や母国のことをよく知り関心を持つことから。
 - ・私たちの「あたり前」を疑い、日本の考え方を押し付けない。
 - ・「やさしい日本語」を使い、広める。
 - ・同じ地域に暮らす者として、接点を持てたら。



9 成果と課題

年度当初、探究グループに集まって来た生徒の反応は、暗かった。彼ら、彼女らの頭にある「留学生」とは、英語を話す欧米系の外国人であつたらしい。バングラデシュがどこにあるのかも知らず、ミャンマーで何が起きているのかも知らない生徒たちが交流を楽しむことができるのか、不安であつた。しかし、その心配は、最初のリモート交流で無用となった。リモートながら、お互いの顔が見える交流によって、生徒の表情が変わったのを実感した。交流は、7月以降のバディとしての出会いによって加速し、近い世代どうし、「やさしい日本語」を使いながら、コミュニケーションを深めていった。

残念ながら、コロナの影響で、弥勒の里日本語学校は閉校となり、交流を持続発展させることはできなくなった。この経験は、単なる良い思い出で終わる生徒が多いかもしれないし、中には、自分の進路として活かす生徒もいるかもしれない。しかし、ミャンマーやインドネシアなどのニュースを見ると、自分のバディの顔を思い浮かべながらその国で起きていることを想像してほしいし、福山市内で出会う外国人に声をかけることはできなくても、その人たちが抱えていることを想像しようとするきっかけづくりとなれたことを願う。今後も、福山市立大学とも連携しながら、ローカルな国際交流に目を向けていきたい。

2021年・対面交流の様子

7/16 留学生、本校訪問
（授業交流・茶道体験・少林寺拳法見学）



8/3 本校生徒、日本語学校訪問（授業体験・グループ討論）



11/15 留学生、本校文化週間参加（コンサート、書道体験、授業交流）



12/15 留学生、本校訪問（成果発表会・生け花体験）



2022年2月には、リモートで、留学生の卒業発表会に参加

(7)【事業報告】Happy Schools 関係でシンガポールから先生が来校（令和5年度）

文責 上山 晋平

【学校訪問についての事前資料より】

- 1 概要 ジェーン副校長先生の勤務校は、「ポジティブ・エデュケーション」の推進校である。
福山中高がユネスコ・ハッピースクールプロジェクトに関わったことを知り、視察を希望された。

【ポジティブ・エデュケーションとは？】

教育の中に「ポジティブ心理学」の要素を組み込む。「ポジティブ心理学」とは、人間の良い面や強みに焦点を当て、人々がどう幸福感や満足感を得られるかを研究する心理学の一分野。

目的は、生徒が自身の強みを認識し、それを活用した学習への取組を促すこと。また、その過程で生徒の幸福感を高め、レジリエンス（困難な状況から立ち直る力）を育てる。

（具体的な教育手法）

①強みに基づく学習：生徒が自身の強みを理解し、それを活用して学習に取り組む。

②感謝の実践：感謝の感情を表現し、ポジティブな感情を育て、社会的なつながりを強化する。

③マインドフルネス：瞑想やリラクゼーションを通じて、生徒が感情や思考に気づく。

④目標設定：生徒が学習や人生の目標を設定し、それに向けて努力する能力を育てる。

*ジェーン先生の話す言語：中国語（マンダリン）と英語 *交流のために翻訳アプリを持参

- 2 日時 2024 年（令和5年）7月10日（月）～12日（水）の3日間（この後に京都の嵯峨野高校へ）

- 3 目的（1）先方の目的

①本校がHappy Schoolとして、どのような具体的な取組をしているのかを知りたい。

（登下校の様子、授業の様子、課外活動の様子などを観察したい）

②ESD 大賞受賞高としての活動を知りたい。

③先生・生徒と教育について話したい。（シンガポールの学校についても紹介される）

（2）本校の目的（案）

①グローバルに触れる（授業や放課後の活動を通して、希望する生徒が参加できる集いの企画）

②本校の活動を進める（ESD や Happy Schools Project をさらに推進する機会とする）

③（可能なら）先方の学校と将来的に生徒間交流（学校訪問）を行う（校長先生との対話）

- 4 日程 現時点での概要（以下は予定。滞在中は柔軟に活動される予定）。

今回は、先方のご配慮（訪問校にできるだけ迷惑をかけたくない）で、柔軟なスケジュールとなっています。

よって、お時間あるときや、校内で出会われたり困ったりされれば、積極的に声をかけて、授業や部活等に受け入れていただけると嬉しいです。よい思い出を持って次に向かっていただけるよう、よろしくお願いします。

■7月10日（月）

7:46 福山駅発 7:51 備後赤坂駅着 8:00 福山高校到着・校長室（予定）

8:15 職員朝会で教職員にあいさつ（予定）

校内散策（各授業自由参観） ★授業参観等が可能であればおしえてください。

学校紹介（Happy Schools Project や ESD/Positive Education の取組紹介）

【3限 5-4 英語実技テスト 5限 中2国語短歌参観 7限 家庭研究部お茶会・着物体験】

■7月11日（火）

午後（午前になるかも）を中心に校内散策（授業・部活動の参観）

夜 懇親会（先方と相談中）

■7月12日（水）

午後を中心に校内散策（希望生徒との交流会）

*放課後：希望する生徒・教員と交流会（学校紹介・話・質疑応答など）

- 5 交通 福山駅付近のホテルに夫婦で滞在されJRで学校に。

福山駅～（JR）～備後赤坂駅～（徒歩）～本校

シンガポールからジェーン先生（副校長先生）来校（7月10日）



7月10日（月）から13日（木）にかけて、シンガポールのジェーン副校長先生が福山中・高等学校にお越しになりました。なぜシンガポールの学校から私たちの学校に視察に来られたのでしょうか？

ジェーン副校長先生が所属する学校では、「ポジティブ・エデュケーション」を推進しています。これは、「生徒が自分の良い面や強みを認識し、それを活用した学びを通じて生徒の幸福度を高める教育」を指しています。

ジェーン先生が私たちの学校に興味を持たれた理由は、本校が「ハッピースクール・プロジェクト」に関わっているからです。「ハッピースクール・プロジェクト」とは、ユネスコ（バンコク）や ACCU（アジア・ユネスコ文化センター）が主導する取り組みで、私たちの学校も実施しています。これは、学校がよりハッピー（身体的・精神的・社会的に良い状態＝ウェルビーイング）になるための改善策を考え、それを実践し続ける活動です。

学校が「授業」や「補習」、「テスト」ばかりに集中し、勉強だけを強いる環境は息苦しさを感じる人もいます。そこで私たちは、生徒や教職員、そして保護者や地域の方々にとって、学校をより魅力的な場所にするための取り組みを推進しています。このような動きは全世界の学校で見られ、その具体的な要素としては、「良好な人間関係の構築」、「他者に対するポジティブな態度」、「さまざまな人と協働する教育」、「課題解決を目指す探究活動」、「グループやチームでの学び」、「適切な学習量の維持」、「自然に恵まれた環境での学習」、「単なる暗記ではない実践的な教育」、「学校のビジョンの明確化」などがあります。

ジェーン先生は4日間で以下のような体験をされました（学校外での活動も含む）。

7月10日（月）：中学校の国語授業観覧（和歌）、中学校の給食・掃除の参観

高校の英語パフォーマンステストの参観・コメント提供、家庭研究部によるティー・セレモニー体験

7月11日（火）：稲の浦や尾道の観光

7月12日（水）：宮島観光、教職員との交流

7月13日（木）：学校交流についての協議、生徒との交流（シンガポールの学校紹介）

ジェーン先生は、「素晴らしい思い出と新たな友情をいただいたことに心から感謝しています。多くの先生方、そして生徒の皆さんが、温かく接してくださったことに対し、深く感謝申し上げます」と感慨深げに述べられました。これからはジェーン先生とその学校との交流が続けられればと考えています。

そして、福山中高では今後も国内外を問わず、さまざまな学校との交流を深め、互いに学び、成長し、持続可能な社会の創り手が育つ「ハッピースクール」を目指していきたいと思ひます。

■第4章 関係資料

(1) 認定証 (サステイナブルスクール/ユネスコスクール)

①サステイナブルスクール

平成 28 年 9 月 8 日に、「文部科学省委託 平成 28 年度日本/ユネスコパートナーシップ事業『ESD 重点校形成事業』」において、サステイナブルスクールとして認定されました。全国 24 校中の 1 校です。



②ユネスコスクール

ユネスコ本部より、本校のユネスコスクール加盟が 2018 年 7 月 27 日付で承認され、承認証が発行されました。

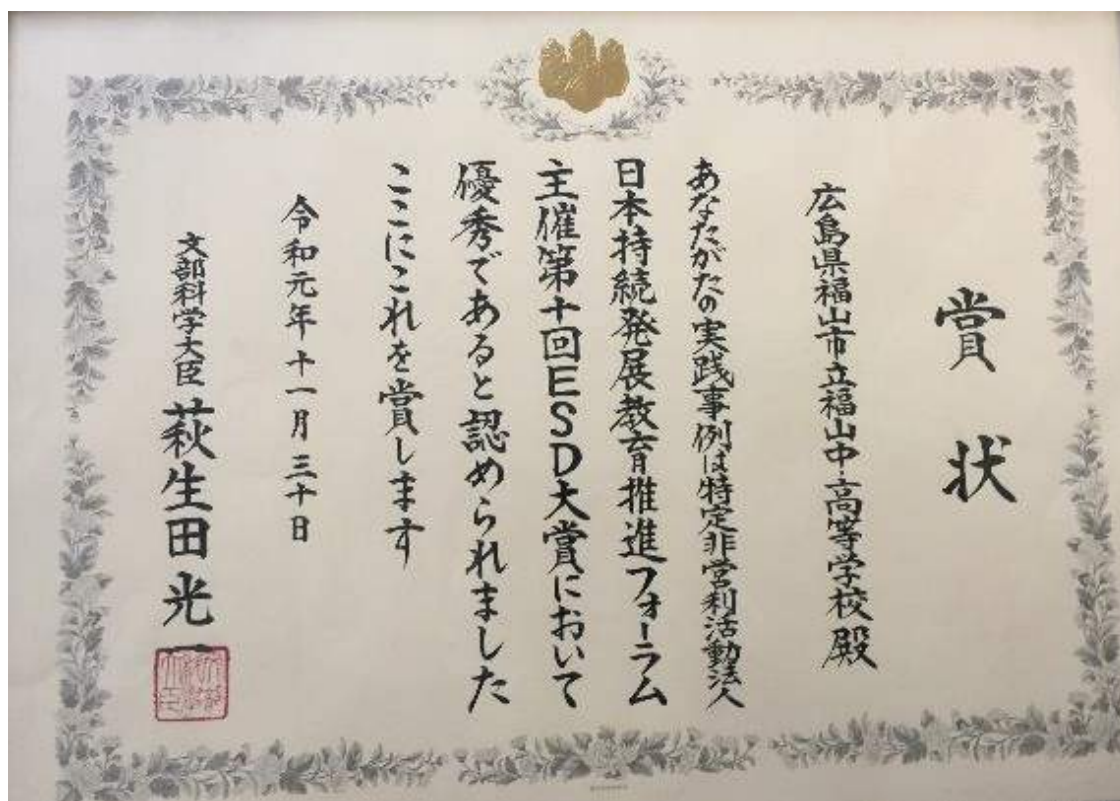


③ハッピースクール (Happy Schools Project)

ユネスコ・バンコクより、本校が 2020 年度のハッピースクールの 1 校に指定されました。日本全国で 5 校、世界では、タイ、日本、ラオスの 3 か国がパイロット国として取組を進めます。



④第 11 回 ESD 大賞の最高賞である文部科学大臣賞を受賞 (2019.11.30)





同校と福山市内各高校に配布する。同校生徒の学習成果として、アピールするとともに、高校生が地元企業を理解するきっかけや就職に関心を高めてもらう。今回の地元企業研究は、福山市「グローバル人材育成事業」の一環。3年計画で予定されており、今年度は1年目。初年度は福山商工会議所などに協力依頼し18

福山市立高生が作成

企業研究冊子「Hi-Hiふくやま」

福山市内の各高校に配布

福山市立福山中・高等学校（福山市赤坂町赤坂910、向井勝也校長）は12月20日、福山市立福山高校第1学年が4月から取り組んだ、地元企業研究の成果発表会を同校大望館ホールで行った。学習の成果はA4判76ページの冊子「Hi-Hiふくやま」として千部印刷し、

社が協力した。協力企業は次の通り。
青山商事(株) 湊田糖化工業(株) 占部建設工業(株) 神原工業(株) 神栄工社(株) エフビコ(株) エププライ(株) サンエス(株) プレひまわり(株) ベッセル(株) 坂本アニメ(株) タカオ(株) 日東製網(株) 早川ゴム(株) 広島化成(株) ホーコス(株) マナック(株) 南神原銘板製作所



発表会の様子



福山市立福山高校（同市赤坂町九一〇、向井勝也校長）の一年生生徒が、市内に本社を置きつつグローバルな事業展開をしている企業一八社についての学習結果を発表する「成果発表会」が12月20日、同校で行われた。

福山市から「グローバル人材育成事業」の指定を受け、4月から一九八人の生徒が一八の班に分かれて担当する地元企業を取材。事業内容や技術力、戦略などを学んだ。

発表は一五五分で、各社の業績や強みを紹介した1分、また「他企業になかった発想で業界トップになった」「創

福山市立高1年生 地元18社取材し成果発表 事業内容や強みなど



業以来、正社員数・店舗数、売上高が右肩上がり」などの特長も述べた。学習を通じて「チームワークや人のために働くことの大切さを教わった」と感想を語る班もあった。学習結果をまとめた冊子も作成。市内の全高校に配布し、地元企業を知る足掛かりとする。同事業は今年度から三年間行われ、来年度と再来年度も一年生が同様の学習に取り組む。

対象となった企業は次の通り（順不同）。青山商事(株) 湊田糖化工業(株) 占部建設工

業(株) 神原工業(株) 神栄工社(株) エフビコ(株) エププライ(株) サンエス(株) プレひまわり(株) ベッセル(株) 坂本アニメ(株) タカオ(株) 日東製網(株) 早川ゴム(株) 広島化成(株) ホーコス(株) マナック(株) 南神原銘板製作所

福山高生 冊子作り向け学ぶ

(15)は「知らなかったが聞いた」と話した。生徒は夏休みにグループレッスンで企業を訪問し、12月に冊子を完成させる。千部発行し、市内の高校に配る。地元企



（吉原健太郎）

始めた。

で、同校は昨年

育成事業の一環

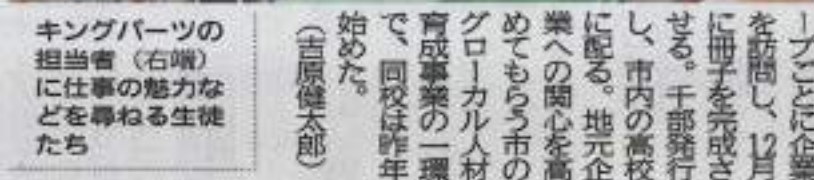
グローバル人材

めてもらおう市の

業への関心を高



キングパーツの
担当者（右端）
に仕事の魅力な
どを尋ねる生徒
たち



〔吉原健太郎〕

キングパーツの
担当者（右端）
に仕事の魅力な
どを尋ねる生徒
たち

福山 中学生物主張大会

事實

西谷 彰香さん



福山を市民が誇れる街にするために

[illegible]

酒造りテーマ動画制作

目指せ観光甲子園グランプリ

先日の東京での講演で、私は東京から「東京のまちづくり」のテーマで、日本各地からの聴衆に呼びかけ、各地でまちづくり、まちを創るの大切さを話した。多くの聴衆が、日本のまちづくり、日本のまちを創るの大切さを話した。多くの聴衆が、日本のまちづくり、日本のまちを創るの大切さを話した。

インバウンド部門挑戦

[illegible]



地元企業の魅力を調査

福山高校 1 年生は、11 月 10 日、地元にあるグローバル企業について調べた。調査は、福山高校のグローバル人材育成事業の一環で、地元企業への関心を高めるための取り組みである。生徒らは、事前に調査票を配布し、各企業が持つ魅力を調査した。その結果、多くの企業が、地元への貢献や、従業員の育成に力を入れていることが分かった。生徒らは、この調査を通じて、地元企業への理解を深め、将来の就職活動に活かすことを目指している。

地元17社を研究し発表

課題解決の提案も

福山市立福山高1年生は、11月20日、地元にある17社を研究し、課題解決の提案を発表した。この取り組みは、福山高校のグローバル人材育成事業の一環で、生徒らは、事前に調査票を配布し、各企業が持つ魅力を調査した。その結果、多くの企業が、地元への貢献や、従業員の育成に力を入れていることが分かった。生徒らは、この調査を通じて、地元企業への理解を深め、将来の就職活動に活かすことを目指している。



度の高さが課題。対しては、全社に生かす商品の新規開発の未だ未だ、企業には、内閣に設置すること。月11、18日には、業に報告を行う。協力企業は、次子グループ、食料、繊維、アパレル、美容、健康、IT、エネルギー、環境、社会福祉、文化、スポーツ、観光、教育、医療、福祉、金融、不動産、建設、運輸、通信、サービス、その他。年度内に学習、発表する予定。

企業やSDGs探究

福山市立福山高(余部)12グループに分かれ、「(一文字町)、和菓子坂町赤坂」の1年生は、地域に軸足を置きながらグローバルな視点で行動できる「グローバル」な企業やSDGs(持続可能な開発目標)をテーマに探究活動に取り組み、24日、福高体育館で発表会を開いた。

活動は5年前から地元企業の魅力やSDGsについて学ぼうと、総合的な探究の時間」で実施。本年度は約200人が1グループ15〜20人の計

パワーポイントで探究活動の成果を発表する生徒たち

野町)など市内の企業12社について取り組んだ。

発表会では、グループごとにパワーポイントを使って説明した。ポンプ・ファン製

同グループの岡崎大和さん(16)は「企業の製品の特徴を理解することが難しかったが、良い活用を考えられた」と話した。

生徒は本年度までに学習の成果を冊子にまとめ、市内の公的機関に配布する予定。(地面美里)

インターネット
山陽新聞社ホームページ
<https://www.sanyonews.jp/>

株式会社大原組

福山県福山市南宮島新田139-2
☎086-259-5970

地元企業訪ね課題解決

福山高で授業発表会
バス利用促進策など提案



福山高等学校の生徒が、地元企業を訪ね、課題解決のための提案を行った。発表会では、バス利用促進策などについて、企業代表と意見交換が行われた。

世界パワースポット大会 推進室を市長直轄へ

福山市長は、世界パワースポット大会の推進室を市長直轄とした。大会の開催地である福山は、パワースポットとして全国的に知られている。推進室の設置により、大会の開催に向けた取り組みが加速される見込みだ。

小さくても、勝てる

ジョー・ロサンフェル先生 佐藤 寿人さん

「小さくても、勝てる」というテーマで講演した。人生の成功は、小さなことから始めることにあると語り、聴衆を魅了した。

失敗積み重ね成功の糧に

佐藤 寿人さん

成功の秘訣は、失敗を積み重ねることにある。失敗は成功への道筋を示す貴重な経験だと語り、聴衆を勇気づけた。

優秀安全運転事業所 NX 備通が最高賞

福山警察署が主催する優秀安全運転事業所コンテストで、NX 備通が最高賞を受賞した。安全運転の推進に貢献したと評価された。

福山高生がワークショップ

福山高等学校の生徒が、ワークショップに参加した。課題解決のためのアイデアを出し合い、チームワークを鍛えた。



福山高生がワークショップに参加。課題解決のためのアイデアを出し合い、チームワークを鍛えた。

福山高生がワークショップ

福山高等学校の生徒が、ワークショップに参加した。課題解決のためのアイデアを出し合い、チームワークを鍛えた。

福山高生がワークショップ

福山高等学校の生徒が、ワークショップに参加した。課題解決のためのアイデアを出し合い、チームワークを鍛えた。

福山高生がワークショップ

福山高等学校の生徒が、ワークショップに参加した。課題解決のためのアイデアを出し合い、チームワークを鍛えた。

飼育の羊毛小物に变身

福山高の生徒 イベント開催



福山市赤坂町の市立福山高の生徒が、校内で飼うヒツジの毛を使った小物作りの体験イベントを、アンカーホテル福山（福山市城見町）で開いた。地元事業者と協力して新たなビジネスを考える「探究活動」の一環として企画。収益はヒツジの餌代に充てる予定だ。

1年生9人が洗って乾かした毛を持参。綿子通れや固形染料の染料に染めた後、金銀を取り付けて「イヤリング」や「キーホルダー」に仕上げた。

生徒はホテルを運営するサン・クレア（同）の担当者や、集客地のアイデアを話し合っ中だ。校内で2020年から飼育するヒツジの毛の活用を思い立った。参加者から300円を集め、収益で餌を買いこむことにした。

田中千穂さん（16）は「新型コロナウイルス禍でホテルの利用が減ったと聞いた。たくさんの方が楽しめる催しにできようと思った。同社の東郷真さん（43）は「施設ホテルに立ち寄る機会が少ない地元住民にも来てもらえた」と喜ぶ。

探究活動は2017年度から毎年1年生が続けてきた。本年度は計約200人が、旅行や観光関連の調査、博物館など、事業所に分かれて取り組んでいる。

（村上和生）

とれたて TOPICS



規格外農産物の活用やフードロス削減のアイデアを発表する生徒

福山高校1年生が探究活動で 規格外農産物の活用策を提案

福山市立福山高等学校の1年生が1月11日、「食と農の交流館」でJA福山市への「探究活動報告会」を行いました。

この活動は、福山市の重点事業「グローバル人材育成事業」の一環で、高校生が地域で地元企業の果たす役割を発見し、企業について探究するものです。生徒は企業から与えられた課題に対し、取材活動を通じて、解決策を考えて提案します。

当JAからの課題は、
①販売所で販売可能な農産物加工品の提案（規格外農産物の活用・フードロス対策）、
②管内の農産物を活用したレシピの提案。

生徒は、生産者や「FUKUYAMA Aふくふく市」、選果場で情報収集に取り組み、議論を重ねて解決策を検討しました。報告会では、廃棄されるアスパラガスを活用したふりかけやジェラートなど、10品以上を写真付きで提案。試作品として、トマトのカップケーキを提供するなど、多種多様なアイデアを発表しました。





福山高校の探究学習「地産地消」の取り組み

福山高校の探究学習「地産地消」の取り組み。生徒たちは、地産地消の推進に貢献するため、地産食材を活用した商品の開発に取り組んでいる。この取り組みは、地域の活性化と持続可能な社会の実現を目指すものである。

特集



福山高校の探究学習「地産地消」の取り組み。生徒たちは、地産地消の推進に貢献するため、地産食材を活用した商品の開発に取り組んでいる。この取り組みは、地域の活性化と持続可能な社会の実現を目指すものである。



福山高校の探究学習「地産地消」の取り組み。生徒たちは、地産地消の推進に貢献するため、地産食材を活用した商品の開発に取り組んでいる。この取り組みは、地域の活性化と持続可能な社会の実現を目指すものである。



福山高校の探究学習「地産地消」の取り組み。生徒たちは、地産地消の推進に貢献するため、地産食材を活用した商品の開発に取り組んでいる。この取り組みは、地域の活性化と持続可能な社会の実現を目指すものである。

地域を救う? 「産学連携」⑤

福山高1年、探究先の地場企業を催して支援



福山高校の探究学習「地産地消」の取り組み。生徒たちは、地産地消の推進に貢献するため、地産食材を活用した商品の開発に取り組んでいる。この取り組みは、地域の活性化と持続可能な社会の実現を目指すものである。

福山高校の探究学習「地産地消」の取り組み。生徒たちは、地産地消の推進に貢献するため、地産食材を活用した商品の開発に取り組んでいる。この取り組みは、地域の活性化と持続可能な社会の実現を目指すものである。



福山高校の探究学習「地産地消」の取り組み

福山高校の探究学習「地産地消」の取り組み。生徒たちは、地産地消の推進に貢献するため、地産食材を活用した商品の開発に取り組んでいる。この取り組みは、地域の活性化と持続可能な社会の実現を目指すものである。

特集

福山高校の探究学習「地産地消」の取り組み。生徒たちは、地産地消の推進に貢献するため、地産食材を活用した商品の開発に取り組んでいる。この取り組みは、地域の活性化と持続可能な社会の実現を目指すものである。



福山高校の探究学習「地産地消」の取り組み。生徒たちは、地産地消の推進に貢献するため、地産食材を活用した商品の開発に取り組んでいる。この取り組みは、地域の活性化と持続可能な社会の実現を目指すものである。

福山高校の探究学習「地産地消」の取り組み。生徒たちは、地産地消の推進に貢献するため、地産食材を活用した商品の開発に取り組んでいる。この取り組みは、地域の活性化と持続可能な社会の実現を目指すものである。

地域を救う? 「産学連携」⑧

ばら祭彩った地産食材のケーキやバラ酵母の酒

福山高校の探究学習「地産地消」の取り組み。生徒たちは、地産地消の推進に貢献するため、地産食材を活用した商品の開発に取り組んでいる。この取り組みは、地域の活性化と持続可能な社会の実現を目指すものである。

福山高校の探究学習「地産地消」の取り組み。生徒たちは、地産地消の推進に貢献するため、地産食材を活用した商品の開発に取り組んでいる。この取り組みは、地域の活性化と持続可能な社会の実現を目指すものである。



グなど日常使いできる小物の販売を提案。同社がその中からブックカバーを製品化した。

啓文社では年末まで販売する。同社は国際交流で来訪するカナダ、オーストラリアの姉妹校生徒らにも土産として贈る予定。

メンバーの校長室に話を。【地産地消】

福山デニム 書籍カバーに

地元高校生と企業コラボ



福山デニムのブックカバーをPRする松山さん（左）ら

地元の産業振興に貢献。福山市立福山高校（同市赤坂町赤坂）の2年生グループが、地元のデニムメーカーの福山デニム（同市駅前中島）とコラボレーションし、生産量日本一を誇る福山デニムのブックカバーを製作した。市内の啓文社4店舗で販売している。A6判の書籍が収まるサイズで、日記帳や

お菓子入れにも使用できる。使い込むほどデニムの質感や色合いが柔らくなり、味わい深くなるという。1個千円。

同校生徒は1年の総合学習で地元の企業や団体を調べ、事業提案をしている。昨年、藤原デニムスタイルを担当した17人は、福山デニムを身近に感じられるようコースター、パッ

福山

福山市立福山中高の運動場造成工事で発生

工事現場の古紙トイレ紙に再生

福山中高に寄贈



福山市立福山中高などに寄贈されたりサイクルトイレ紙ペーパー
＝福山市赤坂町で

した古紙をリサイクルして作ったトイレ紙ペーパーが、工事を担当した建設会社から学校などに寄贈された。

三谷建設が現場で出た古紙を静岡県のリサイクル製紙会社に送って製造を依頼。トイレ紙ペーパーの包み紙には造成工事前後の空撮写真を印刷し、静岡の障がい者就労支援施設が包装作業を担当した。

【関係者語】

1600個作ったり1000個を福山中高に、500個を市立赤坂小に、100個を赤坂交流館に贈った。

福山中高を訪れた三谷建設社長（60）は「資源循環や雇用創出などいろいろな形で地域貢献に取り組んでいきたい」と話し、高田芳幸校長は「生徒に紹介して大事に使いたい」と応じた。

福山中高生

御領古墳群の魅力発信

ツアー、冊子制作企画



横穴式石室に入り大きさを体感する生徒ら

福山市立福山中高

(同市赤坂町赤坂)の生徒が、同市神辺町御領地区に広がる古墳群の魅力発信に向けた活動に取り組んでいる。体験型の模擬ツアー企画、パンフレット作りなどを進め、神辺町や井原市の歴史愛好家をつくる保存・調査団体に提案する。

高校1年に当たる4

年生18人が「総合的な探究」の授業を活用し、5月から活動。今秋までに2回、「御領の古代ロマンを蘇らせる会」(端本てる子代表)の案内で現地を訪れ、

古墳時代後期(6〜7世紀)に築かれたとみられる横穴式石室の数基を見学した。

一帯の古墳は文化財に指定されておらず、生徒は内部に入って石棺を納める「玄室」の広々とした空間に驚き、壁や天井を構成し幅数にもなる石の大きさを実感。端本代表らから「入り口の石の配置から、有力者を祭ったと考えられる」と解説を受けた。

生徒は、体験を生かし「触って入れる」メニューを盛り込んだツアーを考案中。御領地区でも発見されている前方後円墳をかたどったパンフレットや動画

制作も企画しており、11月の校内発表会で併せて構想を披露した。2025年の早期に同会に成果を示す計画で、毛利美諭さん(16)

は「身近な場所にありながら、古墳群はまだまだ知られていない。高校生目線で楽しさを伝えたい」と話す。

御領古墳群は、国道313号北側の丘陵で、置記録などを行っている。(金尾雅広)

福山

2024年(令和6年)12月20日(金曜日)

東 地

福山高生がXマスマーケット

21日 本通商店街とコラボ



イベントのチラシを手に「当日は老若男女に訪れてほしい」と話す生徒

福山市赤坂町の市立福山高の生徒有志が21日午後4時から、市中心部の福山本通商店街振興組合とコラボした「クリスマスマーケット」を同商店街で開く。「老若男女が

訪れるイベントにし、人通りを増やしたい」と意気込む。2年生6人が交流施設「アンブレラ」周辺でポトフやワッフル、ココアのほか、クリスマスにち

なんだ手芸品を販売。午後5時半からは同組合がイルミネーションの点灯式をし、サンタクロースとの記念撮影コーナーも設ける。

昨秋、授業の一環で商店街のイベントを手伝った生徒が中心となり、同組合に持ちかけた。岡田未緒穂さん(17)は「緑もありきれいな通りなのに、人通りが少ない。にぎわいを生みたい」と話す。

生徒は販売する飲食物の仕入れや価格設定にも挑戦し、ポトフの野菜は



農家のクラスメートから募った。会場を飾り付け、商店主にはイベント日の夜間も営業するよう依頼した。松岡紗世さん(17)は「老舗も多いエリア。各店の魅力を知ってもら

い、にぎやかな雰囲気を感じてほしい」と来場を呼びかける。(原末緒)

②「地域課題解決プロジェクト」：福山市立大学との高大連携事業

■2017年（平成29年）5月23日 山陽新聞

JR福山駅前再生計画

福山駅前再生計画は、福山市立福山（赤坂）の半世紀、魅力や活力に満ちたJR福山駅前の再生に向けたアイデアをまとめる取り組みを26日からスタートさせる。市立大（福山）が人材や施設の提供などで協力。生徒は駅周辺でのまち歩きやワークショップなどを経て、11月に成果を発表する。

高校生視点でアイデア

26日スタート
2年生20人
11月に発表会

人材や施設 市立大協力

市立大に求めるのは、まず「まち歩き」のサポート。市立大の学生が、駅周辺を歩き、まち歩きを支援する。また、市立大の施設を、ワークショップの会場として活用する。市立大は、駅周辺の再生計画を、市立大の学生が、まち歩きを支援する。また、市立大の施設を、ワークショップの会場として活用する。

■2017年（平成29年）5月27日 中国新聞

再生アイデア 高校生発信へ

市立福山で開演

福山市立大（赤坂）は、26日市立福山（赤坂）の半世紀、魅力や活力に満ちたJR福山駅前の再生に向けたアイデアをまとめる取り組みを26日からスタートさせる。市立大（福山）が人材や施設の提供などで協力。生徒は駅周辺でのまち歩きやワークショップなどを経て、11月に成果を発表する。

再生アイデア 高校生発信へ

市立福山で開演

福山市立大（赤坂）は、26日市立福山（赤坂）の半世紀、魅力や活力に満ちたJR福山駅前の再生に向けたアイデアをまとめる取り組みを26日からスタートさせる。市立大（福山）が人材や施設の提供などで協力。生徒は駅周辺でのまち歩きやワークショップなどを経て、11月に成果を発表する。

■2017年（平成29年）5月30日 山陽新聞

福山駅前活性化を

福山駅でまちづくりを考える

福山市立福山（赤坂）は、26日市立福山（赤坂）の半世紀、魅力や活力に満ちたJR福山駅前の再生に向けたアイデアをまとめる取り組みを26日からスタートさせる。市立大（福山）が人材や施設の提供などで協力。生徒は駅周辺でのまち歩きやワークショップなどを経て、11月に成果を発表する。

福山駅前活性化を

福山駅でまちづくりを考える

福山市立福山（赤坂）は、26日市立福山（赤坂）の半世紀、魅力や活力に満ちたJR福山駅前の再生に向けたアイデアをまとめる取り組みを26日からスタートさせる。市立大（福山）が人材や施設の提供などで協力。生徒は駅周辺でのまち歩きやワークショップなどを経て、11月に成果を発表する。



再始動 福山駅前

福山市立大（瀬田町）と市立福山高（赤坂町）の学生が28日、丁良福山駅前辺りを歩き、にぎわいづくりのための課題を探った。ワークショップ（WS）で改善点を議論した。

同高2年21人と、同大都市経営学部4年の8人が参加し、市職員や教員と福山城や伏見町の賑わい、生徒は歩道の幅や駐輪場の状況を気にしつつ、広場や尾道など、他市の中心部との違いも考えながら歩いていた。

瀬田町のまなびの館ロースコムでのWSでは、エリアを5つに分け議論。「アーケードがある場所やガード下

街の改善点歩いて発見 市立大生ら

「古い建物が多く、リノベーションを取り入れたまちづくりを」などと話した。同大が関与する福山駅「地元高校生が考える福山駅前再生計画」の一環、11月に成果発表する。同高の募集した。福山駅前は「空室アナン」が多く、印象が悪くなると気付いた。活気があふれる街になるよう意見を出した。と話し、（高本友子）

駅周辺を歩いて改善点を探る生徒たち

福山駅前再生 学生ら計画

「地域の発展」テーマ 市立大・高校連携



福山市の賑わいの街内を歩いて福山駅前を調査する高校生や大学生ら一団。市立大の学生らも参加する。

人通りなど調査、11月に発表

福山市立大が、市立福山高校と連携して、福山駅前の再生計画に力を入れている。市立大が今年から始めた「まちづくり調査」の一環、28日には学生らと地元の人々が福山駅前の人通りや建物などの状況を歩いて調査。11月に再生計画を発表する予定だ。

「まちづくり調査」は、市立大がテーマに、福山駅を再生計画の中心に据えている。市立大は、市立福山高校と連携して、福山駅前の再生計画に力を入れている。市立大が今年から始めた「まちづくり調査」の一環、28日には学生らと地元の人々が福山駅前の人通りや建物などの状況を歩いて調査。11月に再生計画を発表する予定だ。

市立大の学生らも参加する。市立大は、市立福山高校と連携して、福山駅前の再生計画に力を入れている。市立大が今年から始めた「まちづくり調査」の一環、28日には学生らと地元の人々が福山駅前の人通りや建物などの状況を歩いて調査。11月に再生計画を発表する予定だ。



まちづくりについて意見を発表する福山高校生ら

③「国際課題解決プロジェクト」：マウイ生徒との交流

■2017年（平成29年）6月3日 山陽新聞

[illegible]

■2017年（平成29年）10月2日 山陽新聞



■2017 年（平成 29 年）5 月 23 日 中国新聞







紅葉を撮影するハイキング高2日経市で

韓国訪問「みんな優しかった」



高崎市で交流した福山市立福山中と私立大連中の生徒ら
＝福山沖田科



校広道神市長（左）に感謝を報告する福山中の生徒
＝福山市報館で

福山中 枝広市長に報告

福山市と高崎市との交流事業で、現地を訪れていた福山市立福山中（赤坂町）の生徒らが韓国・市役所で訪問第3日、枝広道神市長に感謝を報告した。

福山中と私立大連中は2017年から、交流の機会をもち、今年が3年連続で韓国を訪れた。生徒らは「みんな優しかった」と、とてもいい経験になった。と語った。

枝広市長は「素晴らしい時間を過ごしてよかったのが、何よりの成果。行

旅の思い出として、生徒が写真を見ながら話している。今年10月15日、20日の日程で福山中2、3年の38人が韓国を訪ね、大連中の生徒と数々の交流を楽しんだ。ホームステイ先の家族と史跡などを観光したりした。

日韓関係の悪化で中止の可能性もあったが、枝広市長が安全配慮を求め、韓国を訪問した。福山中の担当も積極的に交渉し、安全を確保し、今年再び実現することになったという。

市役所には生徒3人が詰め、市長を慕った。3年の生田悠希さん（16）は「現地の人たちはみんな優しくしてくれて、とてもいい経験になった」と語った。

⑥「国際課題解決プロジェクト」：模擬国連



秋山 潤子
(福山高生)

「国際課題解決プロジェクト」は、模擬国連の活動を通じて、国際社会の課題を解決するための取り組みです。生徒たちは、模擬国連の活動を通じて、国際社会の課題を解決するための取り組みです。生徒たちは、模擬国連の活動を通じて、国際社会の課題を解決するための取り組みです。

初心者向け講座で 「普通」の生徒の一步が希望

「国際課題解決プロジェクト」は、模擬国連の活動を通じて、国際社会の課題を解決するための取り組みです。生徒たちは、模擬国連の活動を通じて、国際社会の課題を解決するための取り組みです。生徒たちは、模擬国連の活動を通じて、国際社会の課題を解決するための取り組みです。

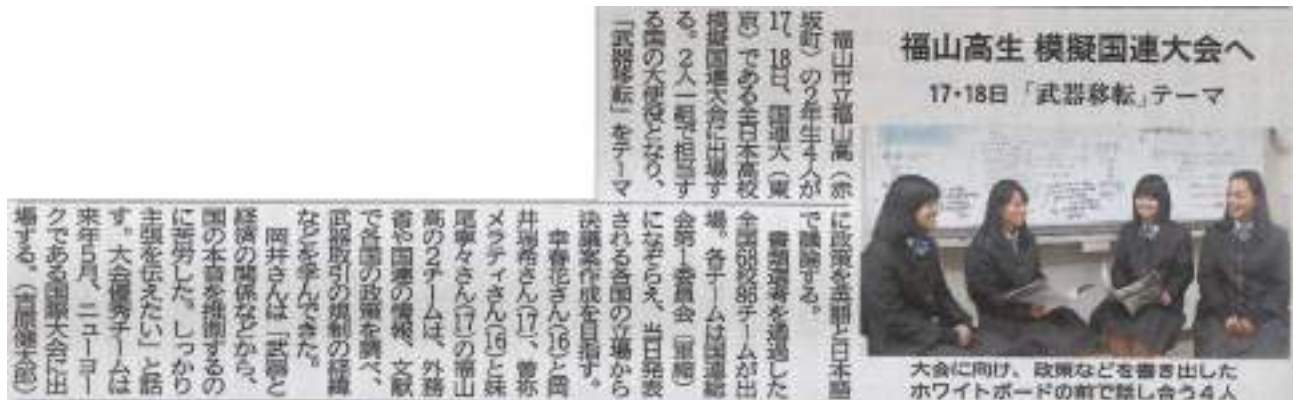
17、18日 東京

市福山高生が 模擬国連出場



「積極発言したい」
高崎で開かれた「模擬国連」に出場した福山高生は、積極的に発言し、国際社会の課題を解決するための取り組みをアピールした。

■2018 年（平成 30 年）11 月 16 日 中国新聞



⑦「国際課題解決プロジェクト」：観光甲子園

■2018 年（平成 30 年）8 月 25 日 産経新聞

■2018 年（平成 30 年）9 月 19 日 中国新聞



■2018 年（平成 30 年）9 月 1 日 山陽新聞



⑧「国際課題解決プロジェクト」：外国にルーツを持つ児童・生徒への学習ボランティア

■2019 年（令和元年）8 月 中国新聞

外国人児童の宿題を手助け

福山で高校生ら

福山で外国人の子と、ボランティアが日本語を教える。宿題の手助けをする。福山で外国人の子と、ボランティアが日本語を教える。宿題の手助けをする。



（中国新聞）

■2020 年（令和 2 年）2 月 19 日 中国新聞

異国で受験 心強い味方

福山の高校生が「先生」

福山の高校生が「先生」異国で受験 心強い味方。福山の高校生が「先生」異国で受験 心強い味方。



（中国新聞）

■2020 年（令和 2 年）12 月 朝日新聞

外国ルーツの子 冬休み宿題教室

福山でボランティアがサポート

外国にルーツのある子どもたちが、冬休みの宿題を手助けする。福山でボランティアがサポート。



子どもの学習を支える高校生（右）＝福山市松永町

（朝日新聞）



⑩「国際課題解決プロジェクト」：高校生平和大使

■2020年（令和2年）8月1日 中国新聞

中国新聞

平和の願い 世界中に

高校生大使 広島代表3人誓う

国内外で核兵器廃絶を訴へられた県内の3人が31日、える本年度の高校生平和大使と広島市役所で記者会見し、大使の広島地区代表に選んだ。新型コロナウイルスの影響で8月にスイス・ジュネーブの国連欧州本部へ署名を届けるのは断念したが、署名活動などを通じて平和の願いを発信すると誓った。

修道高2年橋原生さん（16）＝東区、広島大付属高2年柚木優里奈さん（16）＝安佐南区、福山高2年桐原百穂さん（16）＝福山市。8月10日午前11時から平和記念公園で署名活動をする。9月上旬には、16都道府県の28人が広島市内で結団式を聞く予定でいる。

橋さんは、亡くなった祖父が入市被爆者。「被爆体験を直接聞くことはできなかったが、祖母や母親から核兵器の恐ろしさを伝え聞

高校生平和大使としての意気込みを語る
左から橋さん、柚木さん、桐原さん

■2020年（令和2年）11月10日
中国新聞

年 月 日 中 国 新聞

中高大学生が 戦争遺跡案内

福山城公園周辺でツアー

福山市の中高生たちが戦争遺跡を案内して回るツアーが8日、同市丸之内の福山城公園周辺であった。毎年11月に開くスタンプラリーが新型コロナウイルスの影響で中止となったため、代わりに企画した。市人権平和資料館の平和学習連携講座「ふくやまピース・ラボ」メンバーの中高大学生計11人が親子連れたち23人を案内した。

福山城公園の石垣前では「空襲による火災で石が赤く変色し角が丸くなっている」と解説。旧市街地の約8割を焼失して355人が犠牲となった福山城の被害を伝えた。

父と弟と参加した福山小3年高橋志緒さん（9）は「戦争でこんなに攻撃を受けていたんだと恐ろしくなった」と語った。中学3年から講座に参加する市立福山高2年橋原百穂さん（16）は「真剣に話を聞いてもらえてうれしかった。自分たちができる平和活動が続けたい」と語った。

（富田真入）

福山城公園の石垣前では「空襲による火災で石が赤く変色し角が丸くなっている」と解説。旧市街地の約8割を焼失して355人が犠牲となった福山城の被害を伝えた。

父と弟と参加した福山小3年高橋志緒さん（9）は「戦争でこんなに攻撃を受けていたんだと恐ろしくなった」と語った。中学3年から講座に参加する市立福山高2年橋原百穂さん（16）は「真剣に話を聞いてもらえてうれしかった。自分たちができる平和活動が続けたい」と語った。

（富田真入）

■2023 年（令和 5 年）3 月 14 日 中国新聞

きは、環境面で「プラス」といった意見も出た。

市は昨年6月から福山市立大（藤町）や福山平成大（御幸町）の学生たちと地域の魅力を生かしたまちづくりの方策を検討。学生がら提案されるバラを作品作りに生かさないかと提案があった。デニムとのコラボに目を向け、市が関係者に参加を呼びかけた。

2025年にある世界バラ会議福山大会に向けた種付けを学んだ。ばらのまちの歴史や2025年の世界バラ会議福山大会のPRに向けて英語による発表の練習もした。

渡米団リーダーの2年土肥邦代さん（17）は「米国の同年代と語り合うのが楽しみ。広島県民として平和についても話したい」と意気込む。ニューヨーク市では同じプロジェクトに参加する広島女学院高（広島市中区）の生徒と交流し、現地の高校生と交流する。国連本部や日本総領事館も訪問する。（菊股修平）

福山高生 北米訪れ交流へ

あすから「二上りおどり」披露も

二上りおどりを市職員（左端）から教わる生徒

福山市の市立福山高（赤坂町）の生徒が15日から米ニューヨーク市を訪れ、北米地域の若者との相互交流を目的にした外務省の「カケハシ・プロジェクト」に参加する。21日まで滞在し、現地の高校生と交流。県の無形民俗文化財の「二上りおどり」やばらのまち福山の魅力もPRする。

参加するのは1、2年生計1人。7日は同校で市職員の二上りおどりの振り付けを学んだ。ばらのまちの歴史や2025年の世界バラ会議福山大会のPRに向けて英語による発表の練習もした。

渡米団リーダーの2年土肥邦代さん（17）は「米国の同年代と語り合うのが楽しみ。広島県民として平和についても話したい」と意気込む。ニューヨーク市では同じプロジェクトに参加する広島女学院高（広島市中区）の生徒と交流し、現地の高校生と交流する。国連本部や日本総領事館も訪問する。（菊股修平）

八田原・三川ダ

貯水率42% 農業

芦田川流域の市町なでつくる治水調整協議会は13日、八田原ダム（府中市、世羅町）と三川ダム（同町）の合計貯水率が基準を下回

⑪「在り方生き方探究プロジェクト」：もふお（羊）飼育（よりハッピーなスクールへ）

■2020年（令和2年）11月4日 中国新聞

福山市赤坂町の福山中高が、羊1頭を飼い始めた。新型コロナウイルスの影響でストレスを抱える生徒が増えているとして、動物との触れ合いで心を癒やすアニマルセラピーの効果を期待する。牧場から来月3月末まで借り受けた。

同校では、ことし7月の1カ月間で保健室を利用した生徒は141人で、昨年同月の79人から倍増。コロナ禍で生活環境が変化し、不安を訴える生徒が目立つという。学校生活に新たな潤いをもたらそうと、山口裕三教頭が羊を飼うことを企画。北広島町の牧場に交渉し、実現した。

同校で半年間暮らすのは、2月に生まれた若い雄。毛量が多く、名前は事前に校内公募して「もふお」に決まった。休憩時間に多くの生徒が集まり「温かい」「かわいい」と触れていた。小屋造りには、近くで木工製作所を営む卒業

羊を飼育 コロナ禍の癒やし 福山中高



生が協力した。高3の小寺涼音さん(18)は「楽しい学校行事がなくなり、受験勉強だけで息苦しかった。愛情あるもふおと、最後の思い出をつくりたい」と喜んだ。

世話は、帯広畜産大卒の学習支援員と生徒有志60人が受け持つ。山口教頭は「生徒の笑顔が増え、予想以上の反響。教員には見えにくいストレスを抱える生徒もいる。明るい話題が増えるきっかけになれば」と話す。（瀬根梨奈）

■2020年（令和2年）12月16日 毎日新聞オンライン

「もふお」でコロナ禍のストレス撃退 広島・福山中高で飼育のヒツジ

毎日新聞 2020年12月16日 17時42分（最終更新 12月16日 17時43分）

社会一般 > 動物 > 広島県 > タイフ > 連載 > 社会



昼休みに「もふお」と触れあう生徒＝広島県福山市の市立福山中高で2020年12月16日、関東青島撮影

広島県福山市赤坂町の市立福山中高で、ヒツジが飼育されている。北広島町の牧場から借りたオスの「もふお」で、新型コロナウイルスの流行からストレスの増大が懸念される生徒たちへの癒やし効果が期待されている。2021年3月末まで生徒たちが世話を続ける。

コロナ禍で保健室を利用する生徒が前年から倍増し、中学の山口裕三教頭が牧場の協力を得て学校の一員となった。校内公募で名前を決めたもふおは5月に生まれたばかりで、有志の生徒たち約60人が交代で餌やりと小屋の掃除を担当。もふおはさあしがり屋で人がいなくなると鳴くという、地域住民からも愛されるようになった。

飼育を担当する豊田楓さん(17)＝高2＝は「もふおの性格は“ツンデレ”で癒やされます」。任用職員の小林純子さん(29)は「最近では可愛がられすぎてわがままに振る舞う愛嬌(あいきょう)もある」と笑顔で話した。【関東日報】

■2021 年（令和 3 年）11 月 7 日 毎日新聞

天守防御の「鉄板」煎餅に

福山城
400
年

中学生考案 地元企業とコラボ

福山城の天守北壁の防御のために張られていたとみられる鉄板を模した「鉄板煎りせんべい」が商品化された。企画したのは福山市立福山中学3年の中島英嗣さん14。2022年の築城400年を記念する初めての食品土産となった。

【関東新聞社】

中島さんは中学2年時の総合学習で築城400年をテーマに選り「22年に向けて自分ごとで関われるか」を考えてきた。今春、市民から市に鉄板の板が寄贈されたニュースを見て「煎餅みたい」と思ったという。自宅には、地元の煎餅屋「ねほけ堂」（福山市多良木町4）の素朴な優しい煎餅があった。

中島さんの父基嗣さん（54）は、福山の特産品を活用した商品開発を手がける「めまぐま工房」を経営する。中島さんは基嗣さんに「煎餅を売って築城400年に際したい」と相談。ねほけ堂を紹介してもらい商品化を目指した。

夢工房は以前、小学生の企画で商品開発した実績もある。基嗣さんが市に問い合わせてたところ、築城400年関連グッズの中に食料品はなかった。基嗣さんは「いいものができれば勝算がある」と考えた。と振り返る。

商品開発は試行錯誤だった。鉄板の黒色を出すために焦く焼いたり、黒くまを塗り込んだりしたが、思うような味と色にならなかった。約半年かかって思いついたのが、中島さんも親しんでいた「マルコ水産」（同

試行錯誤半年…鍵は田島ノリ

市内海町の田島ノリだった。小麦に落花生を練り込んだ餅20粒、細切りの煎餅に板ノリを塗っただけだが、厚みなど似た白は鉄板そのもの。味も煎餅とノリの両方の甘みを感じる意外なおいしさだった。基嗣さんは「米でなく小麦の煎餅にノリを合わせることは奇抜なアイデアだったが面白いと思った」という。

中島さんは「すべての食材を地元企業の協力で実現でき、ことがうれしい。食



「鉄板煎りせんべい」を手にする中島英嗣さん。福山市役所で

品にするまで多くの人に土産として手に取ってもらえる。福山城が全国で唯一、鉄板煎りだったことも多くの人に知ってもらいたい」と話した。

2枚入りで780円。400年にちなみ400セットを11月1日から、ねほけ堂で販売している。中島さんは、売り上げの一部を企画料として受け取り、市の記念事業に寄付する。問い合わせは夢工房（084・382・4870）へ。



食品ロスを削減し、地域の活性化を目指す。市立福山中の生徒

国連が提唱する「持続可能な開発目標」（SDGs）を学校教育に取り入れる動きが加速している。福山市では2019年度から市立学校全校がSDGsの目標を少なくとも一つ設定し取り組む。今年4月にリニューアルした地域学習用の冊子では、SDGsに絡む市内企業の活動も紹介。身近な地域の話題などを入り口に、学びを深めている。（吉原健太郎）

学びにSDGs 福山で広がる

市立福山中は、総合的な学習の時間として3年生が取り組む「食品ロスの削減を推進しよう」というテーマで、家庭や地域と連携しながら、SDGsの目標12「持続可能な消費と生産」の達成を目指している。授業で学んだことを、校内の掲示や、地域の企業への訪問などで実践している。今年4月にリニューアルした地域学習用の冊子では、SDGsに絡む市内企業の活動も紹介。身近な地域の話題などを入り口に、学びを深めている。

市立福山中は、総合的な学習の時間として3年生が取り組む「食品ロスの削減を推進しよう」というテーマで、家庭や地域と連携しながら、SDGsの目標12「持続可能な消費と生産」の達成を目指している。授業で学んだことを、校内の掲示や、地域の企業への訪問などで実践している。今年4月にリニューアルした地域学習用の冊子では、SDGsに絡む市内企業の活動も紹介。身近な地域の話題などを入り口に、学びを深めている。

食品ロス削減など実践 地域企業の活動も紹介

市立福山中は、総合的な学習の時間として3年生が取り組む「食品ロスの削減を推進しよう」というテーマで、家庭や地域と連携しながら、SDGsの目標12「持続可能な消費と生産」の達成を目指している。授業で学んだことを、校内の掲示や、地域の企業への訪問などで実践している。今年4月にリニューアルした地域学習用の冊子では、SDGsに絡む市内企業の活動も紹介。身近な地域の話題などを入り口に、学びを深めている。

市立福山中は、総合的な学習の時間として3年生が取り組む「食品ロスの削減を推進しよう」というテーマで、家庭や地域と連携しながら、SDGsの目標12「持続可能な消費と生産」の達成を目指している。授業で学んだことを、校内の掲示や、地域の企業への訪問などで実践している。今年4月にリニューアルした地域学習用の冊子では、SDGsに絡む市内企業の活動も紹介。身近な地域の話題などを入り口に、学びを深めている。

SDGsは、国連が2015年に採択した持続可能な開発目標。総数17項目があり、それぞれが世界に共通の目標として掲げられている。福山市では、SDGsの目標12「持続可能な消費と生産」の達成を目指している。今年4月にリニューアルした地域学習用の冊子では、SDGsに絡む市内企業の活動も紹介。身近な地域の話題などを入り口に、学びを深めている。

育てた野菜で「トナカイ」 市立福山中 ホットドッグ販売



ホットドッグの出来栄を確かめる生徒

福山市赤松町の市立福山中の生徒が、校内で栽培したパジルとトマトを使ったホットドッグの販売を始めた。アンカーホテル福山（同市福見町）で12日まで提供される。売り上げの一部は同校で今後進める野菜栽培活動に充てられる。

ホットドッグは、校内で栽培したパジルとトマトを使った。アンカーホテル福山（同市福見町）で12日まで提供される。売り上げの一部は同校で今後進める野菜栽培活動に充てられる。

■2023年（令和5年）1月19日 中国新聞

福山市の市立福山高2年杉田誠佳さん（17）が28日午後、不登校の中高生や保護者が集う会を同市伏見町のカフェで開く。中学時代に不登校となり、同じ悩みを抱える友人たちとの触れ合いに救われた経験を活かす。「家や学校以外に癒やされる場が必要。気軽に参加してほしい」と呼びかけている。

不登校の悩み 分かち合おう



会場で配る冊子のデザインを手にも「不登校に訪れ、独りじゃないと感じてほしい」と話す杉田さん

28日 福山の高2杉田さん「集う会」

ようと自分を殺していた。ある日「学校にはもう行きたくない」との気持ちになった」と振り返る。気分が落ち込み「消えたい」と思う日も。別室登校や校外フリースクールで友人や指導員と会話を重ねるうちに少しずつ心が軽くなるのを感じたという。

「同じ苦しみを抱える不登校の中高生が癒やされる場所をもつと必要」。そう考えていたところ、高校生向け就活雑誌を発行する第一エージェンシー（同市西町）の若者の夢を応援する企画を知り、応募。同社の協力を得てクラウドファンディング（CF）で資金を募り、準備を進めてきた。

会場はカフェ「Freeman bake store」で午後1時から5時まで。杉田さんが伝えたいことや杉田さんの母から保護者に向けたメッセージも載せた冊子を配る。入退室自由。保護者だけでも参加でき、菓子や飲み物は無料提供する。CFの受け付けは20日まで。URLは<https://camp-fire.jp/projects/view/642233>（原末緒）

⑭「他校との交流」：みろくの里日本語学校との交流

■2021年（令和3年）7月21日 中国新聞

コロナ禍でも国際交流の機会を…

地元留学生と対面トーク

福山中・高校内を案内

福山市赤坂町の市立福山中・高が、同市沼隈町の日本語学校「みろくの里国際文化学院」の留学生を迎え、学校案内や部活動体験で交流した。新型コロナウイルス感染で減った国際交流の機会を広げようと企画した。インドネシア、ベトナムなどから来学する留学生20人が同校を訪ね、授業で多文化共生などを学ぶ高校1年生やI・C・C（国際交流部）の部員たち30人が案内を務めた。茶道の体験や中学3年生とのレクリエーションもあった。

同中・高は海外での語学研修や国際交流に力を入れてきたが、新型コロナウイルスの影響で、

学校案内の最中、図書館で談笑する留学生と生徒。

書でウェブ会議システムを通じた交流に切り替えていた。地元で暮らす若い世代の外国人と触れ合い、理解を深めようと企画した。8月には同学院を訪ねる。

インドネシアからの留学生ノルマ・フィトリアナさん(28)は「新型コロナウイルスで外出も控えがちな中、多くの生徒と話せて楽しかった。高校2年下江田さん(16)は「相手の母国の文化や祭りについて知ることができ、貴重な体験になった」と話した。(吉原健太郎)





「創造的な知性と豊かな心の調和的な発達を図り、国際社会に貢献できる人間を育成すること」を教育目標に掲げる福山市立福山中・高等学校（広島県福山市）。令和元年11月30日に開催された「第11回ユネスコスクール全国大会」では、ESD大賞の最高賞である文部科学大臣賞を受賞した。ここでは、ESD推進や「総合的な探究の時間」における活動に注目する。

「ホールスクールアプローチ」は、学校外でもSDGsに意識をグローバルかつ地域社会で活躍する資質・能力を持った人材の育成を目的として、ESD（持続可能な開発のための教育）に積極的に関与する福山中・高校。総合的な学習や探究の時間だけでなく、中学1年次から高校3年次の6年間を通して、学校・地域あらゆる側面からSDGsに意識を向ける「ホールスクールアプローチ」を行っている。同校はESDを「E（環境）」「S（社会）」「D（経済）」の3つのプロジェクトに取り組み、特に「E」に力を入れている。高校1年次は地元企業のリサーチ・インターンシップの協力のもと「福山市クロールカル人材育成事業」に取り組む。2年次には、個々の夢や興味・関心、SDGsに応じた身近な社会問題をテーマにした探究活動を個人もしくは少人数で考え、実行・検証する「夢プロ」を実施。3年次では、これまでの活動を振り返り、自己の進路に関連する分野やSDGsに

「持続可能な社会の創り手」として、調査・研究の結果をレポートにまとめ発表する。活動を通して、グローバルな資質・能力と協働的な課題解決力の育成を行うと共に、将来設計の中に地元企業を意識するグローバル人材の育成が目的だ。同校は福山市で唯一の市立高校であり、市を担う人材の育成としても、ESDの活動の中では地域と連携した取り組みを重視している。企業からは、商品の考案や知名度を向上させるための手

機会になっているようだ。また、資料を作成する力や、プレゼンテーション能力の向上にもつながっている。これらの取り組みを冊子にまとめた『Hi-Hiふくやま』は、県東部の高等学校・市内事業所・公的機関等に配付しており、地元企業や同校の取り組みを広く紹介している。近隣に在住・通学する高校生にも地元企業の良さを発見してもらい、将来設計に地元企業を組み込んでもらいたいという期待が込められている。

が変化しており、それに対して教育改革や高大接続改革が進行中です。学校も対応していかなければなりません。座学だけでは活動能力や協調性を育むことが困難です。その意識を共有し生徒はもちろんです。教員や企業に協力してもらってほしい」と、指導者側の意識統一を念頭に置き、企業、生徒に対して目的共有のシートやガイドブックを用いた説明を行う。特に生徒に「問題」と「課題」の違いや英語のように定められた答えがあるわけではなく、自分なりの考えや答えを見つけていく時間だ。生徒に対する教員の指導も困難な場面がある。

3年間を通して行う「総合的な探究の時間」を進める上で、生徒や教員、企業にも探究の目的や目指すものを定める同校の教育研究部は、生徒に対する効果的な指導方法を教員にアドバイスしていく。「入試にとまらず社会

学び、指導のコツを吸収している。教育研究部に所属する西田知佳教諭は「目標を明確にし、自分なりの考えや最善な答えを導き出すように数多くの教授がいる程で、情報整理力や表現力・課題解決力を蓄えていくことが重要です。成果物があると力がついたことをより実感できるのではないのでしょうか。結果より過程を重視し、教科だけでなく学習を経験させてあげたいと思います」と、探究の指導に当たり意識していることを話した。加えて、ESDやSDGsの意識統一を念頭に置き、企業、生徒に対して目的共有のシートやガイドブックを用いた説明を行う。特に生徒に「問題」と「課題」の違いや英語のように定められた答えがあるわけではなく、自分なりの考えや答えを見つけていく時間だ。生徒に対する教員の指導も困難な場面がある。

「最大限のサポートを行う」6年間を通して、さまざまな取り組みを行う福山中・高校プロジェクトを進めている。生徒は少しずつ進路



生徒の活躍に期待を込める楠幸浩教諭と上山晋平教諭

段々、実際に抱えている課題が提供され、生徒たちはそれらに対して企業の強みや特長を研究し、解決策を提案する。例えば、青果市場をさらに活性化させていきたいという課題に対して、市場の食べ物を利用した新商品の開発やSNSを活用した宣伝など、高校生ならではの斬新なアイデアを提案した。

成果発表会ではパワーポイントを用いてプレゼンテーションを行い、企業の担当者からフィードバックを受ける。鋭い指摘を受けることもあるが、さまざまな考え方を学び、社会の厳しさを知る良い機会になっている。

「総合的な探究の時間」や「総合的な学習の時間」を通じて、生徒は探究の目的や目指すものを定める同校の教育研究部は、生徒に対する効果的な指導方法を教員にアドバイスしていく。「入試にとまらず社会

に対する意識を高めている。生徒の興味・関心のある分野に進学するのが最も大切なと語るのは進路指導主事の楠幸浩教諭。学びたい分野が不明瞭な生徒には、幅広く学ぶように数多くの教授がいる大い大学への進学を勧め、大学入学後のミスマッチを防ぐため、教員側はさまざまな進学の情報を提供し、生徒一人ひとりが自身の希望に沿った進学を実現できるようサポートしている。

楠教諭は、「4年後にこの大学に通って良かったと思ってもらえるような進路指導を心がけています」と、生徒一人ひとりに向き合った指導で生徒の進路を支えている。

『大学新聞』第186号(令和2年12月10日発行)掲載

❖ 学校基本情報 ❖

所在地 〒720-0843 広島県福山市赤坂町赤坂910

URL <http://www.edu.city.fukuyama.hiroshima.jp/kou-ichifuku/>

交通 JR[備後赤坂]駅より徒歩約12分

学校長 高田 芳幸

生徒数 944人

ユネスコ提出申請資料 (和文)

Application for Participation

*Associated Schools Project (ASP)
for Promoting International Education*

Outline of the way the Project(s) will be implemented in the institution

(please use extra sheets if necessary)

■Description of the Project (プロジェクトの概説)

本校は、広島県東部の人口 47 万人の中核都市、福山市に位置している。2004 年に中学校を併設し、2017 年に開校 14 年目を迎える公立の中高一貫教育校である。

本校は、学校教育目標「創造的な知性と豊かな心の調和的な発達を図り、国際社会に貢献できる人間を育成する」に基づいて設定した「生徒に付けたい三つの力」(「21 世紀に必要なコミュニケーション能力と探究能力」, 「進路希望を実現する確かな学力」, 「自己を高め社会に貢献する意欲・態度」) を踏まえ、地域社会とグローバル社会で活躍する人づくりを目指して地域と国際社会を支える人材の育成に取り組んできた。

ユネスコスクールとしては、これまでの取組をさらに発展させ、各生徒に持続可能な社会の担い手として必要な知識、能力、態度、価値観を身につけさせることを目的として、「地域課題解決プロジェクト」「国際課題解決プロジェクト」および「在り方生き方探究プロジェクト」の 3 つを、総合的な学習の時間を中心に他教科や特別活動と関連づけながら中・高等学校の全学年で実施する。

「地域課題解決プロジェクト」では、福山市全校で取り組んでいる「ふるさと学習」や本校独自の「誰もが暮らしやすい福山の街づくり」などの実地見聞を伴う体験的な学習を通して、身近な地域を知り、課題解決に取り組む基礎を育成する。「国際課題解決プロジェクト」では、各国の調査・発表を行い、海外修学旅行先や姉妹校と国際交流を行う。さらに、海外の中高生と共通課題について思考し解決策を英語で提案(提言)するアクション型の交流活動を行う。「(個人としての) 在り方生き方探究プロジェクト」では、自分自身の長所や魅力を発見し自尊心を高め、講演や特別活動での学びを活かしてライフプランを設定し、大学や社会でのよりよい「在り方生き方」を考える。

■Objectives of the Project (プロジェクトの目的)

「地域課題解決プロジェクト」「国際課題解決プロジェクト」および「在り方生き方探究プロジェクト」の 3 つのプロジェクトにより、身近な地域社会の持続可能性の向上に取り組むとともに、地球的諸課題の解決を図ることで、個人としての在り方生き方を含めた資質・能力の向上に取り組む。

これらのプロジェクトによって、各生徒に持続可能な社会の担い手として必要な以下の資質・能力を身につけさせることを目的とする。

(能力面)

- ①データや情報を分析・整理する力
- ②知識・技能を創造的・探究的に活用・表現する力
- ③地域や国際社会などにおける課題を発見し、解決する力

(資質面)

- ④他者と協働する態度
- ⑤個人的・社会的責任を重んじ、自他を尊重する態度
- ⑥新しいことや困難なことに対するチャレンジ精神

このうち、各プロジェクトの目的の重点を次のように設定する。

	能力面			資質面		
	①情報	②活用	③解決	④協働	⑤尊重	⑥挑戦
地域課題解決プロジェクト	○	○	○	○		
国際課題解決プロジェクト	○	○	○			○
在り方生き方探究プロジェクト		○			○	○

■Execution（プロジェクトの実施）

(e.g. through a specially designed course, through an existing course(s) or as an extracurricular activity)

以下、プロジェクトごとに、活動の内容・方法、学年、時期、連携・交流対象などを示す。

（１）地域課題解決プロジェクト

地域について知り、発見した課題を解決する方策を考え、提言・改善の実行につなげる。

①ふるさと学習（中学１年、１学期、２０時間、総合的な学習の時間）

福山の歴史や資源、人々の営みについて、副読本を活用したり地域に出かけたりしながら学習を深める。体験的な学習により、ふるさとへの愛着と誇りを育てることで、将来、福山で、日本で、世界で自分の夢を実現させながら、たくましく生きる拠り所をつくる。

②誰もが暮らしやすい福山の街づくり（中学１年、２～３学期、４０時間、総合的な学習の時間）

各自の出身地域を中心に「誰もが暮らしやすい福山の街づくり」を考える。地域を訪れ、長所や課題を検討し解決策を提案する。情報はまとめて市役所などの公的機関に提供する。

③職場体験学習（中学２年、４～１２月、８０時間、総合的な学習の時間）

将来就きたい仕事を N2 法で探り、特色、魅力、資格、進学先などを調査する。保育所やスーパーなどでの職場体験学習の前には、電話のかけ方や挨拶文やレポートの書き方などのマナー学習を行う。５日間の職場体験後には、レポートにまとめ冊子化し（体験先に届ける）発表会を行う。

④高校版「ふるさと学習」（高校１年１～２学期、２０時間、総合的な学習の時間）

福山市企画政策課「次期人材育成プロジェクト」との共同事業。地元の企業研究を行い、将来、福山市に就労し地元へ貢献できる人材を育成するプログラムを実施する。企業人を招聘し「ラーニングカフェ」の実施、企業訪問研修、企業研究発表会等を実施する。地元企業の認知・理解、事業・仕事への関心、地元産業の課題と解決策について思考を深め、地元へ貢献する生き方についての意欲と態度を育成する。

⑤夏休みの課外活動や研究活動に挑戦（高校１～２年、夏休み、課外活動）

夏休みの課題として、各種団体が実施する高校生議会や未来探究プロジェクト、ボランティア活動などに自主参加する。生徒は「今ログ」等のサイトを活用し学びを蓄積する。

（２）国際課題解決プロジェクト

世界を知り、発見した課題を解決する方策を考え、交流・提言・改善の実行につなげる。

①国際理解（中学３年、４～９月、２０時間、総合的な学習の時間）

世界各国の歴史や文化を学び、異なる価値観と共生する態度を学ぶ。調査国（地域）を決定し、衣装や発表用ポスターを使ってポスターセッション形式で発表を行う。中高一貫校の特設教科「コミュニケーション」の授業と社会科の学習と関連づけて実施する。

②海外修学旅行（高校２年、８～１１月、２０時間、総合的な学習の時間）

修学旅行先のシンガポールとマレーシアに関する研修課題テーマを設定する。事前に調査した内容をレポートにして冊子化しクラス発表を行う。現地では研修テーマを体験的に検証する。英語科の授業で会話やディスカッション等にも取り組む。

③姉妹校との国際交流（希望者、8月、3月頃、課外活動）

夏休みに2週間、希望者がオーストラリアの姉妹校に通いホームステイをする（毎年20名）。3月にはマウイで語学研修を行う。福山市の親善友好都市・韓国ポハンからは毎年、オーストラリアからは2年に一度生徒を受け入れ、各授業や部活動で交流を継続する。異文化交流に加え共通テーマで思考、提案したり、ウェブ会議システムを活用したりする。

④海外ボランティア活動（希望者、8月、課外活動）

夏休みに生徒1名が、文科省所管の社会教育団体SYDのプログラムに応募し、フィリピンのゴミ山で暮らすスカベンジャーと呼ばれる子どもたちを訪問する。現地での体験を招聘したSYD講師とともに学年発表する。その後、具体的なアクションを考え、実行する。

⑤模擬国連（希望者、9～11月、特別活動）

国連会議をはじめとする国際会議のシミュレーションを行う。有志を募り夏休みから議題に関する調査活動を始め大学教授を招聘して高度な学習を行う。体験者は学年で発表し、文化祭等でも体験プログラムを提供する。なお、本校はここ5年間で3度の模擬国連全国大会出場を果たしている。

（3）在り方生き方探究プロジェクト

自らの長所や魅力を発見し自尊心を高め、ライフプラン設定過程を通して在り方生き方を考える。

①自分発見学習（中学1年、4～5月、12時間、総合的な学習の時間）

自分自身の特徴を見つける学習。小学校までの学習や活動（写真、賞状、認定書）から自分の魅力を発見し、パーソナルポートフォリオにファイルする。資料をもとに魅力に関する自他の発表から、考え方や行動を変えるなどし、将来の目標をより具体化する。

②進路研究Ⅰ「キャリア学習」（中学3年、10～2月、50時間、総合的な学習の時間）

中学3年次の東京修学旅行を生徒の力だけで運営するための取組。東京を10の地域に分けて調査地域を確定する。経済や教育、環境など研修テーマを設定し、現地調査と検証を目標にコース編成する。現地での学びをレポートやポスターにまとめ、パワーポイント等を用いてプレゼンテーションを行い、キャリア教育（自己理解と進路研究）につなげる。

③進路研究Ⅱ「ライフプラン」（高校1年、11～1月、8時間、総合的な学習の時間）

同窓会の協力を得て社会人講演会を実施し、夏季休暇中には地域の人に「仕事インタビュー」を行う。家庭科の学習と関連づけて将来の夢や目標・方法を考えライフプランを設計する。クラスで冊子にして、保護者に配付するとともに学級、学年で発表して学び合う。

④進路研究Ⅲ「課題研究」（高校2年11月～3年、40時間、総合的な学習の時間）

自己の進路に合わせて、興味・関心を持った事柄、現代社会での問題、あるいは特定の学問分野に関して、自ら課題を設定し調査研究を行う。高校2年次の「ミニ課題研究」を踏まえ、3年次ではさらに深い調査研究を行い、レポートにまとめて発表する。

■Type of materials to be used（使用する教材）

各プロジェクトで使用する教材・教具や資料の中から、特徴的なものを以下に示す。

①教材・教具

●コンピュータ、タブレット型端末、キャリアノート、ポスター用紙、パワーポイント

②書籍

- 『大好き！福山～ふるさと学習～《上下巻》』福山市教育委員会，非売品，2015
- 『未来をひらく ESD の授業づくり』藤井浩樹・川田力監修，ミネルヴァ書房，2012
- 『未来をつくる教育 ESD のすすめ』多田孝志他，日本標準，2008
- 『今，求められる力を高める総合的な学習の時間の展開』文部科学省，2017

③ウェブサイト

- ユネスコスクール公式ウェブサイト：<http://www.unesco-school.mext.go.jp/>
- SYD 公式ウェブサイト：<http://www.syd.or.jp/>
- 今ログ（学び挑戦している今を記録に残そう）：<https://shikoku.applyjapan.com/>

■Is there any type of evaluation to examine the effects of the project on students' comprehension and attitudes? (プロジェクトに対する生徒の理解と姿勢の評価方法)

(1) 評価の材料

- 調査レポート，振り返りシート，プレゼンテーション・発表内容，製作物
- 各活動への取組姿勢・態度，協働姿勢

(2) 評価の方法

- 「プロジェクトの目的」(p.2) で記した「資質・能力」の観点に沿った評価のルーブリックを作成し，生徒の自己評価と教員を含めた外部評価に活用する（評価の整合性）。
- 職場体験学習では，職場の方から活動評価を実施し，評価コメントとして生徒に伝える。
- 課外活動や研究活動に挑戦，姉妹校との交流，海外ボランティア活動は，参加した生徒のレポートをもとに，評価コメントとして生徒に伝える。
- 上記以外は，調査レポート，プレゼンテーション・発表内容，協議等の内容や取組姿勢・参加協力態度を教員が観察・評価し，5段階評価の評点と評価コメントを生徒に伝える。

(3) 評価の時期

各活動の終了時および学期末・学年末に実施する。取組は常時観察する。

(4) 評価の観点

- ①データや情報を多角的・総合的に分析・整理・活用する力が身についたか。（プロジェクトの目的①②と対応）
- ②地域や海外の方と積極的にコミュニケーションを図り，発見した課題を創造的，協働的に解決しようとする態度が養われているか。（プロジェクトの目的①②③④と対応）
- ③個人的・社会的責任を重んじ，自分自身だけでなく他者や自然を尊重しようとする価値観が育まれているか。（プロジェクトの目的⑤と対応）
- ④新しいことや困難なことに対するチャレンジ精神が育まれているか。（プロジェクトの目的⑥と対応）

On behalf of my institution, I apply for participation in the UNESCO Associated Schools Project and give the assurance that this institution will make an active contribution to the Project, as outlined above, for a minimum period of two years. At the end of every year, I shall submit a report of the Project to the ASP National Co-ordinator of my country.

（本学校を代表して，ユネスコASPの参加申請をし，少なくとも2年間は上記概要にそってASPに貢献する活動を行うことを確約します。また，毎年ASPコーディネーター（※日本の場合は日本ユネスコ国内委員会）に活動のレポートを提出します。）

Date (日付)

Principal's name (校長名 (※直筆))

Position, (役職)

Institution's name (学校名)

(4) ユネスコスクール申請資料 (英文)

ユネスコ提出申請資料 (英文)

Application for Participation

*Associated Schools Project (ASP)
for Promoting International Education*

Outline of the way the Project(s) will be implemented in the institution

(please use extra sheets if necessary)

■Description of the Project (プロジェクトの概説)

Our school was founded in 1899, and is located in Fukuyama, a city of 470,000 people in the eastern part of Hiroshima prefecture. 2017 will mark the 14th anniversary of combining our junior and senior high schools together.

Our school's stated educational goal is to "foster deep intelligence and harmony of heart and mind while nurturing students to contribute to the international community." Based on this, we established 3 abilities we wish to give each of our students: To have the communication and investigative skills essential in the 21st century, to have the academic abilities necessary to realize their desired careers, and to have the ability and desire to contribute to society. We have strived to raise students who are willing and capable of contributing to regional and international communities.

As a UNESCO Associated School, we would aim to further develop our efforts so that each student can acquire the knowledge, ability, attitude and values necessary to be a member of a sustainable society. Three projects we have already implemented are the "Regional Problem Solving Project," the "International Problem Solving Project," and the "Ways of Life Project." Each project is related to the period for Integrated Studies that all grades of our junior and senior high school must attend, as well as other classes and school activities.

The "Regional Problem Solving Project" is part of the greater "Hometown Learning Objective" that all Fukuyama city schools participate in. Specifically, our school began a project called "Making Fukuyama a Better Place Where Everyone Can Comfortably Live." Through experiential learning, such as field trips to the surrounding areas, students are developing the foundations of problem solving. For the "International Problem Solving Project," students conduct surveys and give presentations on various countries as well as participate in overseas school trips and international exchanges with sister schools. In addition, we conduct activities to think about shared problems with overseas junior and senior high school students, and propose solutions in English with the goal of putting them into action. In the "Ways of Life Project," students discover their own strengths and charms, increasing self-esteem. Making use of lectures and special activities, students think about their career and life goals.

■Project Objectives (プロジェクトの目的)

The "Regional Problem Solving Project," "International Problem Solving Project," and the "Ways of Life Project" will work in harmony to improve the sustainability of local and international communities. By working on improving the sustainability of local communities and trying to solve global issues, participants will also work to improve their own individual qualities and abilities, including their ways of life.

With these projects, we aim to help each student acquire the following qualities and abilities necessary to be members of a sustainable society.

(Abilities)

- ①Ability to analyze and organize data and information
- ②Ability to utilize and express their knowledge and skills creatively
- ③Ability to recognize and solve problems such as in regional and international societies and so on.

(Qualities)

- ④Cooperative attitude and skills needed to work well with others
- ⑤Attitude that respects personal and social responsibilities and respects others
- ⑥Readiness to overcome new and difficult things with a spirit of challenge

The priorities and purposes of each project are as follows:

	Abilities			Qualities		
	① Research	② Utilization	③ Solutions	④ Cooperation	⑤ Respect	⑥ Challenge
Domestic Problem Solving Project	○	○	○	○		
International Problem Solving Project	○	○	○			○
Ways of Life and Inquiry Project		○			○	○

■Execution (プロジェクトの実施)

(e.g. through a specially designed course, through an existing course(s) or as an extracurricular activity)

Below, for each project, we show the contents and method of activities, grading, timing, cooperation / interaction targets, etc.

(1) Regional Problem Solving Project

Learn about the surrounding area, consider ways to solve the discovered issues, and find ways to implement the recommendations and improvements.

①Junior High School Version: Hometown Learning Objective (1st Year Junior High School, 1st Semester, 20 Class Hours, Period for Integrated Studies)

Students deepen their knowledge of Fukuyama's history, resources, careers and lifestyles by taking excursions to the surrounding areas and through auxiliary reading. Experiential learning will foster a sense of attachment and pride in Fukuyama, and encourage students to realize their dreams while making Fukuyama, Japan, and the whole world better places to live.

②Making Fukuyama a Better Place Where Everyone Can Comfortably Live (1st Year Junior High School, 2nd & 3rd Semesters, 40 Class Hours, Period for Integrated Studies)

Focusing on the surrounding area and how to make a "Fukuyama where everyone can live comfortably," students will visit the surrounding area, consider its advantages and challenges and propose improvements. Information will be organized and provided to public agencies, such as city hall.

③Workplace Experience Learning (2nd Year Junior High School, April-December, 80 Class Hours, Period for Integrated Studies)

Students will explore their desired career paths by utilizing the N2 method (a thinking tool) and investigating the features, charms, qualifications, university choices, and so on. Before beginning workplace experience at places like daycares and supermarkets, students will learn workplace manners such as greetings, phone calls, and how to write reports. After 5 days of workplace experience, students compile a summarizing booklet, which will be provided to their workplace, and give a presentation on their experiences to the other students.

④Senior High School Version: Hometown Learning Objective (1st Year Senior High School, 1st & 2nd Semesters, 20 Class Hours, Period for Integrated Studies)

This is a joint project with the Fukuyama City Planning Policy Division called "Raising the Next Leaders." We conduct research on local companies to develop and implement a plan that will raise people capable of working in Fukuyama city and contribute to the local area in the future. Our school invites business people to implement a "world café" with corporate visit training, corporate research presentations, and so on. This will allow students to deepen their thinking about local business, concerns of businesses, issues and solutions in local industry, and foster the motivation and attitude to contribute locally.

⑤Summer Vacation Extracurricular Activities and Research Challenge (1st and 2nd Years Senior High School, Summer Vacation, Extra Curricular Activities)

During summer vacation, students voluntarily participate in high school student councils, plan various future research projects, perform volunteer work, and participate in other activities planned by various organizations. Students accumulate and report what they have learned on “Now Log,” a reflection journal website for students, supported by universities who utilize the journals during admissions.

(2) International Problem Solving Project

Students discover the world, think about strategies to solve international problems they have learned about, interact, give and receive suggestions for improvements, and implement them.

①International Understanding (3rd Year Junior High School, April – September, 20 Class Hours, Period for Integrated Studies)

Students will learn about the histories and cultures of countries around the world and learn different values and the attitude to coexist. Students will determine a country or region to research, followed by a poster presentation utilizing props or clothing. This is carried out in conjunction with Social Studies and the special subject, “Communication Class.”

②Overseas School Excursion (2nd Year Senior High School, August - November, 20 Class Hours, Period for Integrated Studies)

Students select problem solving projects about Singapore or Malaysia. Before the excursion, students must research, write reports and make booklets, all to be presented to their classmates. Students can then verify what they have learned through actual on-site experience. Students can practice discussions in English class.

③International Interaction with Sister Schools (Open to Applicants, Around August or March, Extracurricular Activities)

Each year, for two weeks during summer vacation, twenty applicants attend our sister school in Australia and participate in a home-stay. In March, applicants study English in Maui.

Every year, our school welcomes exchange students from our “friendship city,” Pohang, Korea, and once every two years from Australia. These students partake in all classes and extracurricular club activities. In addition to intercultural exchanges, students think of global issues and, utilizing the web conference system, propose their ideas to international schools.

④Volunteer Work Abroad (Open to Applicants, August, Extracurricular Activities)

During the summer, one applicant will be chosen to participate in a volunteer program supported by the Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology (MEXT). This student will visit children called “scavengers” living on the mountain of garbage in the Philippines and present their experiences at our school with the lecturer they worked with. Finally, they will make an action plan and execute.

⑤Model United Nations (Applicants, September – November, Extracurricular Activities)

After a selection process, students will participate in simulated international assemblies, such as the United Nations Conference. Students conduct preliminary research, invite university professors to our school, and (during summer break) begin to research specific subjects on the agenda. After the event, participants will give a presentation at our school about their experiences and what they have learned. They will also be offered some related activities at our school’s culture festival. Our school has participated in three of the last five All Japan Model UN competitions.

(3) Ways of Life Project

Students discover their own strengths and charms, increase self-esteem, and plan their ideal lives.

①Self Discovery Learning (1st Year Junior High School, April – May, 12 Class Hours, Period for Integrated Studies)

Students learn to find their own characteristics. Using photos, awards, and certificates earned in elementary school, students discover their own charms and create a “personal portfolio.” Using the

materials to create a presentation, students change their behavior, the way that they think about themselves, and make more specific goals for the future.

②Course Study I “Career Learning” (3rd Year Junior High School, October – February, 50 Class Hours, Period for Integrated Studies)

Entirely on their own, junior high school students manage the school excursion to Tokyo.-Tokyo is divided into 10 sections to determine what students will research. Students research various themes, such as economics, education, and the environment. They also organize the course in ways aimed to deepen their knowledge through field survey and verification. Information/experiences learned on site will be summarized in reports, poster boards, and PowerPoint presentations, and will be used for career education (understanding self and future career).

③Course Study II “Life Plan” (1st Year Senior High School, November – January, 8 Class Hours, Period for Integrated Studies)

In partnership with the alumni association, business people come to our school to give a lecture, and during summer vacation students interview local people about their careers. Working with the home economics department, students design a life plan considering future dreams, goals, and methods to achieve them. They also make brochures in class, distribute them to parents, give a presentation to their classmates, and learn together.

④Course Study III “Research Issues” (2nd Year Senior High School, November – 3rd year, September, 40 Class Hours, Period for Integrated Studies)

In accordance with his/her career path, students determine issues in the field, conduct research on matters of interest, problems in modern society, or specific academic fields. Based on their “mini-issue” research in the second year of high school, students in their third year will conduct further research and summarize what they have learned in reports and presentations.

■Type of materials to be used (使用する教材)

Listed below are the tools and materials needed for each project.

①Teaching tools and materials

- Computers, tablets, carrier notes, poster paper, PowerPoint

②Books

- “I Love It! Fukuyama Hometown Learning (Top to Bottom)” Fukuyama Board of Education, Not for sale, 2015
- “Creating ESD Classes That Open the Future” Hiroki Fujii, Supervised by Kawada Takeshi, Minerva Shobo, 2012
- “Making the Future of Education, ESD Recommendations” Takashi Tada and others, Japan Standard, 2008
- “Expansion of Integrated Learning to Raise the Skills in Demand Now” Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology (MEXT), 2017

③Websites

- UNESCO School Official Website : <http://www.unesco-school.mext.go.jp/>
- SYD Official Website : <http://www.syd.or.jp/>
- Now Log (Let’s Keep Records of Learning & Challenges) : <https://shikoku.applyjapan.com/>

■Is there any type of evaluation to examine the effects of the project on students’ comprehension and attitudes? (プロジェクトに対する生徒の理解と姿勢の評価方法)

(1) Evaluation Materials

- Survey reports, review sheets, presentation content, performances, and portfolios
- Efforts and attitudes toward each activity, cooperative attitudes

(2) Evaluation Method

- Create an evaluation rubric in accordance with the viewpoint of “Qualities and Abilities” described in the “Project Objectives” (p.2) and use it for student self-evaluation and external evaluation

including teachers.

- For workplace experience learning, conduct an activity evaluation with the workplace, and share the results and comments with the students.
- For extracurricular challenge activities, sister school exchanges, and overseas volunteer activities, students will be given descriptive evaluations based on their reports.
- Other than the above, the faculty observes, evaluates, and notifies the students on their scores for the content of the survey report, presentation content and performance, consultation, attitude toward participating, and cooperation.

(3) Evaluation Time

Each activity will be evaluated in sync with the finish of the semester/school year.

(4) Evaluation Perspective

- ① Did students gain the ability to analyze, organize and utilize the data and information diversely and comprehensively? (Corresponds to Project Objectives ①②)
- ② Did students actively communicate with local and international people, and were positive attitudes towards creative and collaborative resolutions of the discovered issues being cultivated? (Corresponds to Project Objectives ①②③④)
- ③ Do students value their personal and social responsibilities, and have they developed values that try to respect not only themselves but also others and nature? (Corresponds to Project Objective ⑤)
- ④ Did students approach new and difficult things with a spirit of challenge? (Corresponds to Project Objective ⑥)

On behalf of my institution, I apply for participation in the UNESCO Associated Schools Project and give the assurance that this institution will make an active contribution to the Project, as outlined above, for a minimum period of two years. At the end of every year, I shall submit a report of the Project to the ASP National Co-ordinator of my country.

(本学校を代表して、ユネスコASPの参加申請をし、少なくとも2年間は上記概要にそってASPに貢献する活動を行うことを確約します。また、毎年ASPコーディネーター(※日本の場合は日本ユネスコ国内委員会)に活動のレポートを提出します。)

Date (日付)

Principal's name (校長名 (※直筆))

Position, (役職)

Institution's name (学校名)

「グローバルな社会・地域社会で活躍する資質・能力は、どうすれば育成できるのか」

1 はじめに

本校は人口約 47 万人の広島県福山市にある。福山市では、地元企業や豊かな自然環境とのつながりを特色として、市内の全小・中学校でユネスコスクールへの加盟を積極的に進めている。

本校は、高校創立 1899 年で、2004 年に中学校を併設した、公立の併設型中高一貫教育校である。学校の教育目標は、「創造的な知性と豊かな心の調和的な発達を図り、国際社会に貢献できる人間を育成する」。学校の特徴は「国際交流」（海外姉妹校交流）と「ESD」（持続可能な開発のための教育）で、ユネスコ・スクール（UNESCO）、サステナブル・スクール（文科省委託事業）、ハッピースクール（UNESCO）指定など、ESD を軸に学校づくりを進めている。



2 本校 ESD のねらい

総合的な学習（探究）の時間を中心に、教科や特別活動と関連づけた 3 つのプロジェクト（地域課題解決、国際課題解決、在り方生き方探究）を通して、持続可能でグローバルな社会・地域社会で活躍する資質・能力をもった生徒を育成する。

3 本校 ESD のキーワード

・ホールスクールアプローチ ・学校づくり ・3 プロジェクト（ローカル、グローカル、キャリア）

4 ESD 実践の特徴

本校の ESD 実践の特徴は次の 3 点である。

- ① ESD を中心とした「ホールスクールアプローチ」で「学校の特色づくり」を行う。
- ② 新規事業開発中心でなく、既存の取組を ESD の観点で整理する（「働き方改革」にも配慮）。
- ③ 生徒は中高 6 年間で 3 つのプロジェクトに取り組み、「資質・能力」を向上させる。

これらの詳細は、後で述べる。

5 研究課題

本校の研究課題（問い）は、「グローバルな社会・地域社会で活躍する資質・能力は、どうすれば育成できるのか」で、副題は、「ESD の推進は、学校の教育改革推進につながる！」である。

新学習指導要領に対応した学校改革を模索する学校は全国に多いと思う。本校も同様で、中高一貫校となって国公立大学進学率などの開校時目標を達成したことで、次の教育の方向性を模索した。

その際、広島県および福山市が示した今後の教育の方向性に則り、本校の実践を整理・構造化するとともに、「次代に必要な資質・能力」を育む教育内容を研究・実践する方法を校内で議論した結果、ESD が最もふさわしいとの結論に達し、本格的に ESD を軸とした研究を推進している。

学校全体での ESD 推進を通して、生徒の資質・能力を育むとともに、教育内容の改善など学校改革の推進につながることがわかってきた。

6 地域や関係機関と連携した ESD の推進

主に次の機関と連携して ESD を推進している。

- 福山市役所（企画政策課・産業振興課・青少年課・市民相談課）、市民参画センター
- 福山市立大学 都市経営学部
- 福山商工会議所、青年会議所、地元企業
- アジア・ユネスコ文化センター（ACCU）

7 実践内容

本校の特徴は、「ホールスクールアプローチでの持続可能な学校デザイン」にある。そこで、以下 10 ステップに分けて本校の取組をご紹介しますことで、これから「ESD の観点で学校づくり」を進められる学校の参考になればと思う。

ステップ① 「今後の学校教育の方向性」や「育てたい生徒像」は？

まずは学校が今後どのような姿を目指したいのか、ビジョンを考えることが第 1 ステップである。本校は、「新たに創りすぎず、これまでの実践を活用する」と「次代に求められる資質・能力を育む」という 2 つの観点で教育内容を検討し、ESD を本校教育改革の軸に推進することに決めた。

ESD は、「持続可能な社会の創り手を育む」と記された新学習指導要領との親和性が高い。本校は、教育目標に照らして学校全体で育てたい生徒像を「グローバル人材」と定めた。(p.5 参照)

ステップ② 本校で育てたい力は何か？

(生徒に身につけさせたい 6 つの資質・能力)

続いてステップ 1 で設定した「学校で育てたい生徒像」が備える(であろう)資質・能力はどのようなものなのかを考える。生徒に身につけさせたい資質・能力を考える際に本校が特に参照したのは、次である。

- ・ 自校教育の強み・弱み(生徒、保護者、地域の方の思いやアンケート結果など参照)
- ・ 国立教育政策研究所の示す「7 つの能力・態度」(批判的に考える力や他者と協力する態度など)
- ・ 高大接続改革答申の「学力の 3 要素」(思考力・判断力・表現力・主体性・多様性・協働性など)

これらを参考に自校の課題を整理する。例えば本校は、「情報整理力」、「表現力」、「課題解決力」の 3 つの能力と、「協働」、「自他の尊重」、「チャレンジ精神」の 3 つの資質に整理した。

ステップ③ 自校の取組をどう構造化するか？

続いて、ESD の教育内容を考える。このときは、次の国立教育政策研究所の文言が参考になる。

- ・ ESD で取り上げる内容は必ずしも新しいものである必要はない。
- ・ 教育を ESD の視点で捉え直し、「持続可能な社会の構築」という共通目的を与えるものである。
- ・ 取組を結びつけることにより、既存の取組の一層の充実発展を図ることを可能にする。

これらを受け本校でも、「現状を生かして新たな負担を少なくする」方向性を定めた。これは、働き方改革を考えても、多くの人の同意を得るためにも大切な視点である。まさにサステイナブルな実践である。負担が大きすぎる実践は続かない。続かないと変容は生まれない。

この結果、本校ではそれまで多種多様に行われてきた中高 6 年間の教育活動を、以下の 3 つのプロジェクトに分類することができた。

- ・ 地域課題解決プロジェクト(ローカル)
- ・ 国際課題解決プロジェクト(グローバル)
- ・ 在り方生き方探究プロジェクト(キャリア)

ステップ④ 「評価」はどうするか？

次に、自校で設定した資質・能力をどう評価するのかを検討する。本校では管理職、教育研究部、各部主任が集まって何度も熟議を重ね、ルーブリックを作成した【添付資料参照】。

ポイントは以下の 3 点である。

- ・ 評価のレベルは 5 段階で、レベル 5 は最難関である。(困難な目標を示し生徒の挑戦を促す。)
- ・ 年に 3 度(春、秋、冬)測定し、進捗度を測る。(中高ともに 3 年間で同一用紙を使用する)
- ・ 評価で 4 と 5 を選んだ生徒には、その根拠(伸ばした活動)を記述する。

ステップ⑤ 「実践のまとめ」はどうするか？

学校づくりを進めるうえでは、「実践のまとめ」(実践記録)の作成も考えたい。指導の工夫や感想が残り、次年度の改善に役立つ。さらに他校に渡すと喜んでいただける。本校は報告書の詳細を ESD 実践前に定めた(1 活動 2 ページの様式、目次、作成担当者)。本校実践資料(約 80 ページ)は本校ウェブサイトからダウンロードできる(ESD 関係→報告書)。

ステップ⑥ 3 つのプロジェクトの実践

実際に各学年の教育活動を実践する段階である。本校では、先述したように、すべての活動を以下の 3 つのプロジェクトに収束して、活動同士が学年を越えて関連して深まるよう仕組むようにした。

- (1) 地域課題解決プロジェクト
「ふるさと学習」(中1), 「地元企業ガイドブック作成」(高1), 「夢チャレ」(高2), 「高大連携事業」(高2) 等
- (2) 国際課題解決プロジェクト
国際理解(中3), 海外修学旅行でマレーシアの高校生と SDGs プレゼン・ディスカッション(高2), 模擬国連(有志) 等
- (3) 在り方生き方探究プロジェクト
「自分発見学習」(中1), 「職場体験」(中2), 「ライフプラン」(高1), 「課題研究」(高3)

ステップ⑦ 学校ビジョンに ESD を反映

育てたい資質・能力やそれを育てる中心的な活動が定まると「学校の方向性」が明確になる。その姿はぜひ学校ビジョンにも反映させておきたい。ESD の取組が複数年となり、より持続的になる。

本校では次のように ESD を反映したビジョンを取り入れた(3つのビジョンのうちの1つ)。

- 3) 地域課題・国際課題について探究し、持続可能な社会の担い手となる生徒を育てる。

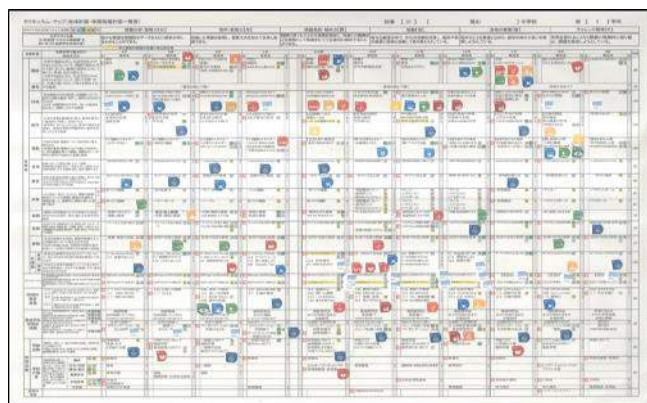
ステップ ESD の推進⑧ 保護者にも周知

学校全体が進む方向性が明らかになると、PTA 総会などを通して、学校長から次のような内容を保護者にも周知し、理解と協力を仰ぎたい。

- ・社会の変化とそれによる求められる力の変化に伴い、大学入試も本校の教育も変わっている。
- ・本校で生徒に育みたい資質・能力は～で、具体的な活動(プロジェクトなど)は～である。
- ・生徒は校内外の活動に積極的に参加している。

ステップ⑨ 各教科と ESD の関わりは？

ESD 開始時は、実践の中心が総合(探究)学習や特別活動であることが多い。ある程度進むと ESD の観点における教科実践の充実も考えたい。各教科の実践を「見える化」するのに有効なのが、「ESD カレンダー」である。広島県福山市では「カリキュラムマップ」として「資質・能力」と「全教科の単元」を A3 判 1 枚で作成している。本校はそれに SDGs シールを教科会で貼る作業を通して、共通項目の把握に努めた(拡大したものは本校実践資料参照)。



ステップ ESD の推進⑩ 教科での ESD は？

各教科のつながりが把握できたら、教科での ESD の実践を進める。「全教科で SDGs を実践しよう」と取り組むと、ESD 実施率と各教員の ESD 理解度が高まる。

たとえば本校では、SDGs に関する授業を全員が実施し「SDGs 授業実践集」を作成した。全教職員(約 80 名)が 1 人 2 ページ(記名入り)の実践レポートを作り、冊子にまとめ、公開研究会で校内外の人と学び合った。SDGs のよさは、他教科からも学び合えることである。



8 成果と課題

(1) 成果

学校全体の成果は、次の 3 点である。

- ① ESD を中心としたホールスクールアプローチで学校の特色づくりに成功する。

ESD 実践前は、(狭義の) 学力重視の地域の進学校が、それに加えて「国際交流」と「ESD」を特色とする学校に変容を遂げた。学校教育目標、学校ビジョン、授業内外の学び、地域・国外連携まで幅広く ESD の視点で教育活動を整理し実践できた (ホールスクールアプローチ)。

②新規事業開発中心でなく、既存の取組を ESD の観点で整理する。

ESD 導入により、育みたい資質・能力と教育活動が構造化できた。新規事業導入で負担を過度に増やさず、現状を活かして特色づくりに成功した意味で、働き方改革に配慮した取組といえる。

③生徒は 6 年間で 3 つのプロジェクトに取り組み、スパイラルに資質・能力を向上させる。

生徒は中高 6 年間で、上述した 3 プロジェクトに取り組み、「地球・地域の持続可能性の向上」と「個人としての資質・能力の向上」に励む。

その結果、中高 6 学年の資質・能力の平均 (ルーブリック評価) は、第 1 回 (春) 2.0 から第 3 回 (冬) 2.8 と、全学年で成長した。ESD を 2 年間実施した学年の平均は 0.9 伸び、1 年間の学年では 0.7 である。ESD は長期間実施した方が資質・能力が伸びることが明らかになった。

また、ESD 導入で生徒が校外活動に積極的に参加するようになっている。国際プログラム参加者は増加し (2016 年 : 40 人→2019 年 : 65 人)、全国規模で活躍する生徒も増えている (観光甲子園グランプリ、全日本高校模擬国連 4 年連続 5 度出場、フィリピン国際ボランティアなど)。

(2) 課題

課題と今後の展望は以下の通りである。

- ①各授業に ESD のアプローチをさらに取り入れる。(課題解決・探究的な学びの推進)
- ②生徒主体の ESD 活動を一層推進する。(生徒が取組を提案し実践)
- ③資質・能力ルーブリック評価追跡を長期的に行う。(資質・能力の育成に資する)
- ④市や企業と連携し SDGs に関連する地域の課題解決に力を注ぐ。(地域連携型)
- ⑤他校 (国内外) との実践交流を無理なく増やす (学びと刺激の共有)。

9 おわりに

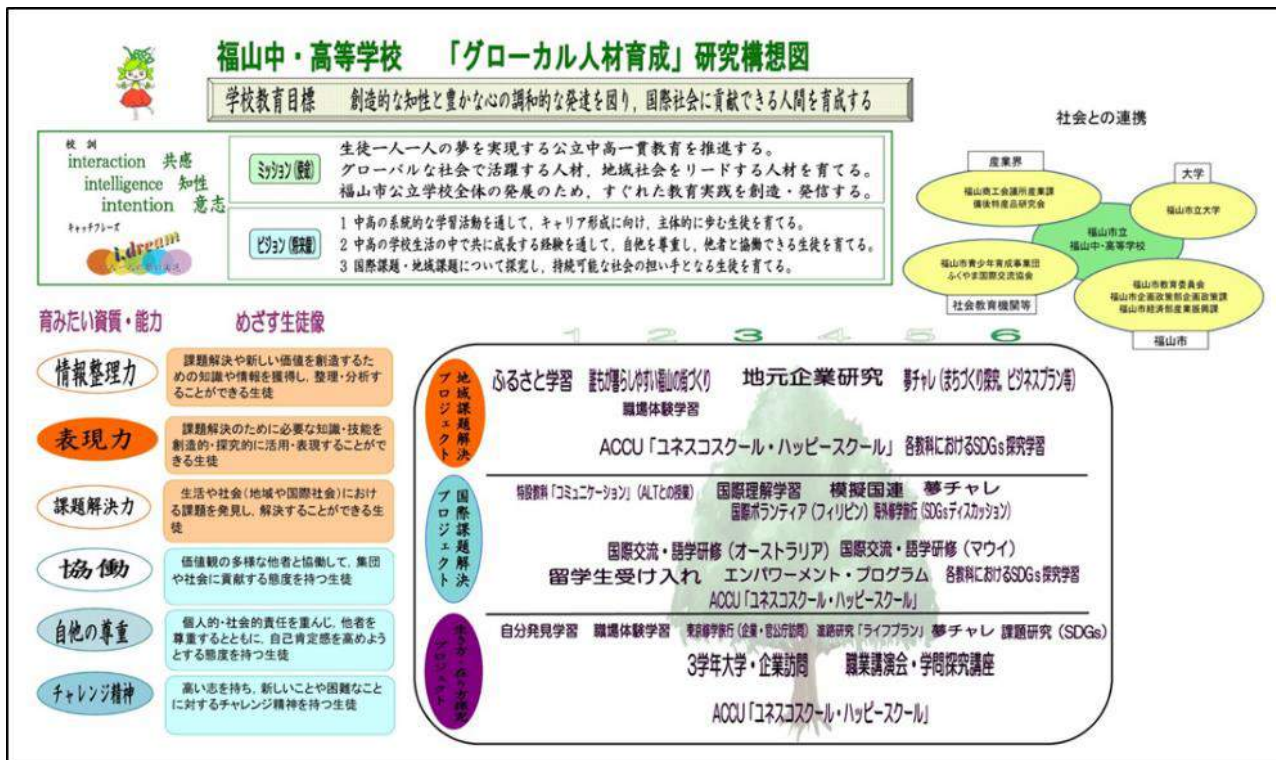
2019 年 11 月 30 日に行われた第 10 回 ESD 全国大会では、本校生徒 (高校 1 年生) がパネルディスカッションに登壇し、広島県教委主催の「ワールドピースゲーム」で学んだことを報告した。(※国の代表の役割を担って、地球温暖化や領土などの様々な国際課題の解決に挑み、平和な世界を築くシミュレーションゲームのこと。)

彼は、「国際問題や地元企業の課題の解決に向けて、学校の授業と学校外の活動の両方に意欲的に取り組んでいきたい」と述べている。

本校は、今後も ESD を軸にした学校づくりを進めることで、「持続可能な社会づくり」と、生徒個々の「資質・能力の向上」、さらに学校の「教育改革推進」を三位一体で進めたいと思う。



●添付資料① 「グローバル人材育成」研究構想図



●添付資料② 「福山中・高ではぐくみたい資質・能力ルーブリック」(目標達成度の評価表)

[illegible]

▲【ループリック参考】岡山県立倉敷南高等学校「21世紀型能力」ループリック／三宅なほみ（監訳）ほか『21世紀型スキル』北大路書房

(6) 文科省「ESD 推進の手引」における本校事例の紹介

『ESD（持続可能な開発のための教育）推進の手引』

（令和3年5月改訂）

本校事例紹介 p. 39

ESD（持続可能な開発のための教育）
推進の手引

令和3年5月改訂
平成30年6月改訂
平成29年3月改訂
文部科学省国際教育課
日本ユネスコ協会の委員会

◆校外機関との連携で「学び」を充実させ「よりよい社会の創り手」を育む事例◆

【ポイント】学校外の様々な主体と連携しながら ESD を推進している点。

広島県福山市立福山中・高等学校では、「地域社会・国際社会に貢献する生徒を育成する」という学校教育目標のもと、学校ビジョンに「地域課題・国際課題について探究し、持続可能な社会の創り手を育む」を設定して、地域や大学・企業・社会教育施設等と連携する取組を行っています。

①市、商工会議所、地元企業との連携

探究学習の一環で「グローバル人材育成事業」を実施し、成果を冊子にまとめ他校や公的機関に配付しています。生徒の資質・能力の向上に加え、地元企業の知名度向上とともに、本活動の周知とそれによる次年度以降の連携先の募集につながっています。また、市役所の各課の若者向け事業に積極的に本校生が参加しており、生徒の学びの向上とともに市に対する貢献ともなっています。

②大学との連携

大学とは、「地元高校生が考える駅前再生計画」などの、まちづくりに係る高大連携プロジェクトを行っています。また、探究学習の基礎講座や発表会における講師派遣などで力を借りています。

③NGO・NPO との連携

ボランティア活動や講演会の実施や、プロジェクトやコンテストへの参加などで協力を得ています。

④他の組織・機関との連携

オーストラリア、アメリカ、韓国、マレーシアなどの姉妹校と、生徒同士の短期留学や語学研修、ホームステイを実施しています。SDGs に基づいたプレゼンテーションやディスカッションなどの取組みは生徒に刺激を与えています。

同校では、こうした校外機関と連携した取組みをする際に、「よりよい学校教育を通じて、よりよい社会を創る」という国全体が目指す目標や、「本校が育てようとしている資質・能力」をシートにまとめ、先方と共有することで、地域や社会の方との連携・協働を通して目標が実現するように努めています。また、作業を分担することによって、負担感を軽減させることにも留意しています。